

---

# Knight's & Magic

天酒之瓢

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Knight's & Magic

### 【Nコード】

N35560

### 【作者名】

天酒之瓢

### 【あらすじ】

メカヲタ社会人が異世界に転生。

その世界に存在する巨大な魔道兵器の乗り手となるべく、彼は情熱と怨念と執念で全力疾走を開始する…。

## #1 別れと出会い

給料日。

それは社会で働く者にとって一ヶ月で最も重要で、嬉しかったり悲しかったりフリーダムだったりする日。

京都の1企業に勤める“倉田翼”（28歳独身、プログラマー）にとってもそれは例外ではなく、仕事が終わるや否や早速ATMでおろした給料を片手に走り出した。

彼の目的地はヨド シカメラ。

給料日の帰りには自分へのご褒美として、新作のプラモデルがゲームを買いに行くのが働き始めてからの彼の慣わしだった。

「今月はダブルー関連の新作がもつとりとでとるしなー。どれにしようかなー」

稼いだ金で趣味に生きる、彼にとっては至福の瞬間である。

2

1時間ほど後、彼はヨドバ カメラの紙袋に入ったプラモデル片手に、今にもスキップせんばかりの上機嫌で帰り道を急いでいた。

「（サフの補充も買ったし週末はゆっくりとプラモ三昧やなあ）」

人気の少ない、深夜の住宅街。

彼は正面から近づいてくる、車のヘッドライトの光に気づいた。射し込むハイビームの眩しさに、彼は目を細めつつ道路の端に寄る。

多少浮かれていたためもあるが正面からのヘッドライトに目が眩み、彼は異変に気付くのが遅れた。

この車が、真正面から、彼を避けようともせず、しかも全く減速せずに走っているということに。

気付いたときには既に避けようの無い距離だった。

「は？　つちよっ居眠り運転かよ！」

彼にできたことは我が身を守るように腕を交差させるだけ。

無駄な足掻き、というよりは反射的な行動だった。

衝突の瞬間、体の芯から嫌な音がする。

あっさりと彼の体は宙を舞う。

意識が激痛に耐えかねて失われるまでのほんの刹那の間、彼の脳裏を駆け巡ったのは事故に対する恨み言でも、人生を振り返る走馬灯でもなく

「（ああ、積みプラモも積みゲームも全く消化できへんかったなあ）

」

遺されたプラモデル、ゲームのタイトルの数々だった。

\*\*\*\*\*

そこから、長い時間がたった気がする。

夢の中のような、理不尽で、しかしそれに疑問も抱かずにいる奇妙な感覚。

目の前の光景の、その意味を彼は正確には把握していない。

ただ、今まで見た事もないような、極彩色で目くるめく光景。

その中を時折過ぎる、揺らめく何ものかの影。影から聞こえる心地よい旋律。

彼はそう感じていた。  
そして何とも言い難い浮遊感に包まれたまま、彼の意識は何処かに着地した。

\*\*\*\*\*

此処ではないどこか、遙か遠い世界。

大陸の中央からやや東よりに位置するフレメヴィーラ王国。

大陸の東側に広がるボキューズ大森海<sup>だいしんかい</sup>と国境を接し、そこからやってくる魔獣達との戦いの最前線となっている国である。

いつ何時戦闘になるとも知れない故に強力な騎士団を擁し、西方諸国の盾としての誇りを持つ、曰く“騎士の国”。

その王都、カンカネン。

そこからやや郊外に進んだところにライヒアラ騎操士学園がある。

“騎士の国”を自負するだけあり、この国において国家の、そして人類の盾であり剣である騎士は非常に人気の高い職業である。

また、その性質上それなりの人数を必要とし、後続の育成は欠かせないため騎操士学校はかなりの規模を誇る。

その敷地内にある広大な演習場で、今二人の騎士が向かい合っていた。

試合の最中と見え、互いに剣を向け慎重に間合いを測っている。

その二人が一步足を踏み出すごとに重量物が落ちるような音が周囲へ響く。

重々しいのもむべなるかな、周囲にいる見物人とおぼしき人影より、その二人は遙かに巨大だった。

シルエットナイト  
幻晶騎士

それは人の持つ魔道技術の結晶にして、人が手にしうる最強の力。全高およそ10m、インナースケルトン金属の骨格と結晶質の筋肉を持ち、マナ魔力を動力として動く魔道兵器。

二体のシルエットナイト幻晶騎士が戦う様子を、一際鋭い視線で眺める人影があった。

マティアス・エチエバルリア戦闘指導教官。

30を超えたばかりで、鍛え上げた肉体は歴戦の勇士を思い起こさせる。

その鋭い眼差しは模擬戦を行っている教え子たちの動きを一つも見逃すまいと引き絞られていた。

「うあう〜おぼとおぼとうねえ〜」

意味不明の声にふと横を見やれば、可憐な女性が赤ん坊を胸に抱いて立っていた。

やや紫がかった絹糸のような銀髪を腰よりやや短いロングのストリートにしている。

それが微かな風に煽られて、日の光の下に煌く様な銀の流れを描く。

その下には優しげな目元に蒼い瞳、透き通るような白い肌。

その風貌は若々しく、10台後半くらいに見えるがれっきとした赤ん坊の母親だ。

そしてその腕に抱かれている赤ん坊は母譲りの紫がかった銀髪をオカッパにそろえ、その下にはこれまた母の顔をそのまま幼くしたような卵型の顔にパッチリとした蒼い瞳をしていた。

唯一目元が母親のそれとは違って見え、父譲りを思わせた。

マティアスは目を細めて彼の妻セレスティナと1歳になる息子、エルネステイを見た。

彼の息子は母の腕の中で、小さな手足を振り回しながら目の前の光景に興奮している様子だった。

「エルも男の子なのね、幻晶騎士が好きなのかしら」

「まだ1歳だ、何が起こってるのか理解してはいないんじゃないか？」

「あら、そんな事ないわ。ちゃんとわかってるものね？ エル」  
「ん、あかてりよ！」

舌つ足らずで、十分に発音がなっていないもののはっきりと理解した様子で返答を返す息子にマティアスは苦笑する。

「……この子は大物に育ちそうだな……」

両親の気も知らず、エルネステイは心の中で快哉を挙げた。

「（うっほほほは、マジもんや、マジもんの巨大ロボットが動いとる！」

騎士か！ フームグイドか！ F Sか！ ガイ レフか！

生後1年にして彼の人生はクライマックスを迎えていた。

「（一時はどうなる事か思ったけど、こいつは、こいつはたまんねえ！  
いよっしゃ、乗ったるで巨大ロボット！」

いやほんと最初はどないしょーか思ったしなあ……）」

\*\*\*\*\*

倉田翼は混乱していた。

どうしようもなく混乱した時、関西人が取るべき行動は一つである。

「(なんでやねん)」

28年生きてきて 実際はついさつき死んだのだが とにかく彼の人生の中でこれほど全力で突っ込んだことは無いかもしれない。

彼の記憶では、自分は車に跳ねられたはずなのだ。病院のベッドで気がついて奇跡の生還を喜ぶとか、どこかの河岸で死んだじいちゃんに呼ばれるのなら兎も角、全く見知らぬ外人の女性に抱えられて喜ばれるとか何が起こったのか。

そもそも彼の体格は一般的な成人男性の水準にある。それを軽々と抱きかかえ、こちらを覗き込むこの女性は一体何者なのか。

さすが外人、マッスルなの？ ジャイアントなの？

そんな下らない事を考えたところでふと気付く。

視界の端に見える己の小さな手脚。首は据わっていないし起き上がることも出来ない。

しかも先ほどからそれは元気に大絶賛泣き叫び中だ。

「(んなアホな！ 俺赤ん坊なつとんのかい!?)」

彼の渾身の突っ込みはやはり誰にも届くことはなかった。

赤ん坊の腕では彼が得意とした裏拳ツッコミが出来ないことが惜



しくてならない。

母親の腕の中でもぞもぞと動く赤ん坊を見て、家族全員が優しく微笑んでいることなど露知らず、翼は心の中で人生で使ったことのあるツツコミを総復習していたのだった。

### 輪廻転生。

死んであの世に還った靈魂（魂）が、この世に何度も生まれ変わってくる、という考え方。

日本人なら、信じてはいなくともその考え方自体は誰でも知っているのではないだろうか。

翼も勿論知ってはいたが信じてはいなかった。まさかそれを自身が体験するとは、彼は予想すらしていなかった。

その上、所謂前世の記憶がばっちりと残っている。ずいぶん滑らかに来世に来てしまったものである。

精神的には30近いおっさんだったが、体は赤ん坊である。

ちよつと起きて食事をしては寝る、そんな日々を送る間に彼は現状について考えていた。

詰まるところ自分が生まれ変わり、現在は赤ん坊であることは間違えようも変えようも無い。

ならばあとは楽しむしかないではないかと。むしろこれは所謂“おいしい”状況なのではないかと。

関西人とはげに因果な生き物だった。

多少開き直りであることは本人も否定できない。

「(ほんま何でこんなことなってるんやろ。有り得へんやろ……)」  
どうやら言語が違うらしく、最初は何を言っているのか解らなかつた家族の言葉も、時間と共になんとなく理解できるようになってきた。

いつも話し掛けられる内容から、彼の新しい名前は“エルネステイ”である事がわかった。

いつもは“エル”と呼ばれている。

言葉が理解できると、何とか喋ろうとまだ回らない口でもごもごと何かを話した。

斯様な摩訶不思議体験をしているというのに突っ込みの一つも出ないなどというのは彼の魂が許さない。

不断の努力の結果、1歳になる頃には無駄に話せるようになっていた。

そしてある時、母と散歩に出た彼は、第二の人生の全てを賭すことになる衝撃の出会いを果たしたのであった。

\*\*\*\*\*

赤ん坊を抱えた若い女性が学園からの家路を歩いていた。

「エルは将来騎士になるのかしら。」

「んー、きいなりよ！ おぼとうごーすよ！」

「あら、頼もしいわ。だったらもうちょっと大きくなったらお父さんに稽古をつけてもらいましょうか」

「あいまむー！」

お父さんみたいに立派な騎士になってね、と微笑む母親の腕の中、赤ん坊は中々テンションが下がらない様子で騒いでいるのだった。

## # 1 別れと出会い（後書き）

純粹に趣味の赴くままに書き始めました。

小説を書くのは初めてのため、拙い部分も多々あるとは思いますが  
どうぞよろしく願っています。

ご意見、ご指摘、ご批判などありましたら感想、もしくはメッセージ  
ジへお願いいたします。

1 1 / 1 / 1 6 表現、内容微修正。

1 1 / 2 / 2 7 表現微修正。

## #2 魔法を使おう

エルネステイの前世である“倉田翼”は、所謂ヲタクであった。ジャンルはメカもの。毎月ホージャパンをチエックし、毎週フア通でメカゲーを探す、それがかつての彼の生き方だった。どちらかというのだらしない方に属する性格だったが、趣味に関しては情熱……というより執念を感じるほどのやる気を出す。それでもさすがに戦車にのるために自衛隊にいく、というほどアグレッシヴな生き方はしていなかったが、今生は物が違った。

巨大ロボット

シルエットナイト  
幻晶騎士の存在。

彼は最初、プラモデルもゲームもない世界での第二の人生に失望の色を隠せなかったが、その存在を知ってからはむしろこの世界に転生させてくれた何者かに感謝した。

何せ冗談でもなんでもなく全高10mものサイズの人型兵器が存在するのである。

メカヲタクを自認する彼にとって、幻晶騎士との邂逅は自身の天命を悟るに十分な衝撃を持っていた。

僅か1歳にしてエルネステイは早速人生プランの構築に取り掛かった。

巨大ロボット 幻晶騎士に乗るためには、騎士になることが必要であるらしい。

騎士といえば地球のそれを思い出すが、この世界でもその在り方に大差はないようだ。

ならばやることは一つ、自力英才教育である。

それは他の人よりも先んじると言うよりは、彼自身が一刻も早く

騎士……ひいては巨大ロボットに辿り着くための決意だった。  
それでもさすがに僅か1歳の幼児に出来る事などほとんどなく。  
逸る気持ちを抑えつつ、母親に絵本を読んでもらって文字を覚えたりしながらしばしの時を過ごす事になる。

「父様、少しよろしいでしょうか」

自宅で休憩していたマティアス・エチエバルリアは息子に呼ばれ振り返った。

彼の息子、エルネステイは今年で3歳になる。

母親であるセレスティナ（ティナ）と同じ紫銀に輝く髪を顎の辺りで切りそろえて、母親譲りの容姿をもつその姿は非常に愛らしく、普段は鬼教官でならずマティアスも今は相好を崩している。

「どうしたんだい？ エル」

「父様にお願ひしたい事があります」

エルネステイは年の割りに非常に明瞭に喋る。

そもそも何故かはわからないが、1歳を過ぎるころにはそれなりに喋れるようになっていたのである。

それを喜んだティナにより色々な会話の特訓を受けた結果、一期言葉遣いが混乱していたが3歳となった今では丁寧な話し言葉に落ち着いていた。

「（十分に話せるようにもなったし、ええ頃合やろ）」

しかしエルの内面は前世たる“倉田翼”から変わっていない。

“地球”の言葉で思考しながら“この世界”の言葉で会話を行う。

多少奇妙な状態だったが、異なる2つの世界に生まれついた彼にとっては自然なことであった。

そして今もかつての世界の言葉で思考しながら、この世界の言葉で願いを口にする。

「父様、僕は騎士になりたいのです。僕に剣を教えてください」

マティアスは困った。

息子が騎士を目指すのは良い。本人にやる気があるのは素晴らしい事だ。

だが如何せんその息子は3歳……剣を教えるにもまだ早い。

もう少し体が出来上がってからでないと逆効果だ。

その上息子は年々妻に似た可憐な面差しを見せてゆき、身長もやや小柄だった。

我が子ながら十分に剣を振り回せるか、少し躊躇を感じるのも本音だった。

それでも無下にする事はせず、焦らずにまずは体力作りから始める事、剣術以外にも魔法の知識が有効でありそちらを学ぶ事を勧めた。

「魔法……わかりました父様、そのうち剣も教えてくださいね」

少し悩んだ風を見せた後、決意に眉をつりあげて言う息子に押され、マティアスは6歳になったら練習を始める事を約束したのだった。

急いで事は仕損じる、エルは剣術を一旦保留にせずはできることから始めた。

## “魔法”

前世にはなかったその技術に惹かれた事もある。

メカものを専門にしていたエルではあるが、RPGもそれなりにプレイしていた事もあり、魔法も十分に魅力的な存在だった。

エルの母親、セレスティナの父親はライヒアラ騎操士学校の現学長、ラウリ・エチエバルリアその人である。

そのコネを最大限利用し、エルは母親に頼み込んで魔法についての教本をそろえたのだった。

体力作りについては、最初は全く体力がなかったため家の周りをマラソンし、いくらか腹筋腕立てを行っていた。

それと並行して魔法についての学習をすすめる。

エルはまだ3歳ではあるが、その中身の精神は30年以上を経た大人のそれである。

文字さえ理解できれば、内容を読むのは全く苦ではなかった。

むしろ物が物だけに単なる“勉強”より楽しめ、ある種の遊びの感覚だったと言うのも大きな理由である。

子供特有の柔軟な学習能力と併せて、恐るべき速度で内容を理解してゆく。

この世界で魔法と呼ばれているのは、魔力<sup>マナ</sup>を現象へと転換する技術である。

大気中に存在する“エーテル”を体内に取り込み、精製する事で魔力<sup>マナ</sup>としてその身に貯める事ができる。

これは、この世界の意味ある生物なら全て可能な機能である。

そして、魔力<sup>マナ</sup>を燃料として、魔法術式<sup>スクリプト</sup>により現象の内容を決定し、



触媒を介す事により世界に現象として発現させる。

これが魔法の基本的なプロセスであり、この触媒の有無によって魔法が使える生物と使えない生物が分かれる。

魔法が使える生物（この世界では魔物、魔獣などと呼ばれる）は、体内にこの触媒にあたる結晶を持っている。

それにより、例えばドラゴンは魔法でブレスを吐くのである。

元々この世界の人間は体内に触媒をもたない、魔法の使えない種族であった。

それを、知恵により魔法術式を解き明かし、触媒を外部に用意する事で魔法を使用可能となったのだった。

それがこの世界では弱小の位置に甘んじていた人間が一定の勢力を得るきっかけであり、遙かな研鑽の末に魔法の力で動く巨大兵器シルエットナイト……幻晶騎士を作り上げるに至って、有力な種族としてのし上がった。

幻晶騎士の力で大陸全てを制覇できないのかとも思ったが、結局は一時領土を広げてもそこを維持できない事が原因のようだ。

幻晶騎士であれば勝つことは出来ても生身の人間の手には余る魔獣も多く、突出した後ろが危険にさらされることもしばしばだったと言っ。

また、幻晶騎士はその製造、維持にかなりのコストが必要な戦略兵器の一種であり、大陸全てを平定するだけの兵力を集めるのは事実上不可能であった。

徐々に領土を広げた結果が今の半分までであり、この状態で数百年は膠着状態となっているようだった。

話を魔法に戻す。

さて、魔法術式の構築は、脳内にあるマジクス・サーキット魔術演算領域に式を展開す

る事により行われる。

魔術演算領域はこの世界の意思ある生物なら備えている機能だ。

元地球人であるエルにはこれがスムーズに使えるのか不安もあったが、今の体は問題無くこの世界の生き物であり、その感覚に馴染むのにさほどの手間は必要なかった。

魔法術式には基本的な現象を発現する基礎式と、アーキテクトそれらをつなげて使用するための制御式が存在する。

それぞれは特定の図形のイメージで記され、それぞれを合わせて一個の魔法と成すと、丁度魔方陣に近い図形を構成する形となる。

本来、初めて魔法を学ぶ人間が躓く事が多いのが魔法術式の構成である。

基礎式の使用程度ならすぐに実行できるが、魔法の規模を大きくするために魔法術式を拡大しようとすると、その理解に慣れが必要になる。

元々人間は魔法を使えないため高度な術式の構築には経験が必要であり、個人の資質が問われる部分であった。

しかし、ここでエルの理解を助けたのが前世の職業であるプログラマーの経験だった。

エルにとっては魔術演算領域は脳内に仮想的にパソコンがあるようなものであり、魔法術式はそのものプログラム言語と理解していた。

文法を飲み込んだ後は教本から“読み込んだ”基礎式、制御式を思考上のエディタで編集する。

さすがに経験者であっても余りに規模のでかいソースを思考だけで組み上げる事は出来ないが、魔術演算領域というPCがあるためエルは特に疑問に思うでもなく次々に術式を構築しソースを組み上げてゆく。

エルはこの世界の人間がどれくらい魔法を使えるか、そういった

知識、常識を持たないが故に気付かなかった。

極めて複雑な構文を構築し、制御しうる自分の演算能力が如何に異常かを。

パシユツ

軽い音をたててエルが手にもつた石から火線が飛び、標的のど真ん中に焦げ目を残した。

「まあ、基礎式とはいえこんなにすぐに魔法を使えるなんて。エルはすごいわ」

「母様、本には基礎式は基礎中の基礎と書かれていましたが」

「そうね。でも、今みたいに的の真ん中へ真っ直ぐ飛ばすには練習が必要なのよ」

「（ほんまか？ プログラム的には“Hello, World”並にベタやねんけど）」

座学だけでは机上の空論、エルはティナに用意してもらった触媒を使って魔法の実技を行っていた。

エルは色々な基礎式を試し、実際に魔法を使う感覚を養っていた。幾らかの魔法を放ったところで、エルは全身に疲労感を感じ始めた。

体力の消耗とは違う感覚に戸惑ったが、これが魔力を消耗したと言ふ事なのだろう。

周囲のエネルギーを吸入し、魔力を少しでも補おうと、呼吸が荒くなる。

「（……こないに疲れるもんなんか。こらごっつい魔法使うのなん

何時になるんかわからんなあ」

その様子を見たティナは優しく微笑みながら息子の頭をなでる。

「……情けないです。少し使っただけで疲れてしまっ」

「そんなことはないわ。エルはまだ小さいもの、魔力だって少なくて当然なのよ？」

「体が大きくなれば、魔力も増えますか？」

「うーん、そうね。体力と同じようなものと思えばいいわ」

「わかりました。だったらこれから魔力トレーニングも始めます！」

意気込むエルにティナはやや苦笑しながら彼の頭を撫で続けた。

「まあ、エルは本当に頑張りやさんね。でもあんまり焦っては駄目よ。無理は良いものではないのだから。」

エルも確かに3歳児の思考としては異常極まるなと思い、同時にあまり母を心配させる物ではないかと反省する。

「はい、できるところから少しずつ進めていきます、母様」

先々を考えて、まずは体力と魔力の底上げを重点的に行うこととした。

術式の構築に関してはPC相当の存在がある以上、前世のスキルに物を言わせばなんとかなる。

後はそれを扱う自分自身のキャパの問題になる。

「（つまり目指せガン ムファイターな生き方な訳やな）」

そこでエルが目をつけたのが身体強化の魔法であった。フィジカルブースト

身体強化は、その名の通り使用者に筋力の強化、耐久性の向上、動作速度の向上の効果を与える魔法である。

普段の体力づくりにこの身体強化を併用することで魔力を消費し、それぞれを効果的に鍛えようと思いついたのだ。

しかし、この身体強化という魔法は上級魔法。それも魔法、身体能力共に相当な修練を積んだ末に使用可能となる奥義のような代物であり、簡単に使えるものではなかった。

何故かと言えば、それは魔法を発動させる手順に由来する。

魔法の効果を決めるのは魔法術式の構成である。

それは、基礎式に近い単純なものほど制御が容易で、制御する対象が増え変数が多くなればなるほどその構築・制御が困難となり上級の魔法となる。

一口に身体強化と言ってもその内容は筋肉の……の一つ一つの性能強化、反動に耐えるための骨格への強化、同じく表皮の耐久性向上を含む高度な複合魔法であり、その構成は複雑極まりないものとなる。

さらには自身の体の動作状態により刻一刻と変化する制御対象、その上効果を発揮するためには継続して魔法術式を維持・発動させ続けねばならない。

止めに戦闘中に使用するためには戦いながらそれだけの制御を行わなければならないのだ。

如何に大規模でも一発放てば終わる遠距離系の魔法に比べ、この手の制御系の魔法が上級といわれる所以である。

しかしエルはそれをあつさりと解決する能力を持っていた。

身体強化の術式構成を見直し、関数化や隠蔽により構成を圧縮。

可能な限り制御対象の変数を減らし、その上で自身の状態をなか

ば自動的に取得するサブ関数を作成、構成さえ組めばあとは勝手に制御を行えるようにし、負担を軽減する。

「（ほんまにこれ上級魔法なんか？なんかロジックに無駄が多くて扱いにくいだけなんちゃうか？これまで誰も改良せんかったんかなあ）」

そんな器用なことはそうそう誰にも出来ないのだが、そんなことは露知らずさくつと魔法の改良：それも恐ろしいほど劇的な改良を行う。

それでもまだまだ制御の難しい魔法のはずだが、彼の異様とも言える高い演算能力はそれを全く苦にしなかった。

触媒を片手に満を持って身体強化を発動し、いざ往かん日課のマラソンを、と意気込んだエルを直後に悲劇が襲った。

強化された肉体の強烈な手ごたえに感動する暇も有らばこそ、ほんの数メートルを走ったところで魔力不足を起こして倒れ伏すはめになったのだ。

さすがは上級魔法、必要魔力も上級だった。<sup>コスト</sup>

そんな基本的なところをすっぱり見落としたエルは落胆を隠せぬまま、しばらくは基礎魔術の使用で鍛錬を行うのだった。

弛まぬ努力により彼が身体強化をそれなりの時間発動させられるようになるまで、それから2年の時間が必要となる。

そんなこんなでエルは子供の憧れで済ますには異常なほどの熱意を持って日々目的に向かって邁進するのだった。

## #2 魔法を使おう(後書き)

1 1 / 1 / 1 6 表現、内容微修正。

1 1 / 1 / 2 5 内容修正。

1 1 / 2 / 2 7 表現微修正。

### #3 旅には道連れ

ライヒアラ騎操士学園。

その周辺には学生の宿舎や幻晶騎士のための鍛冶屋などが集まり町を形成している。

学校の名をとりライヒアラ学園街と呼ばれるその街にエルネステイは住んでいた。

日が落ち、闇に包まれるライヒアラ学園街。

連なり、通りを形成する建物の屋根の上を疾走する小さな影があった。

その人影は、全体的に真っ黒な日が落ちた所で視認するのは困難な服装に身を包み、風のように屋根の上を駆け抜ける。

言わずもがな小さな影は5歳になったエルネステイである。

体力づくりの日課である日々のマラソンは形を変え、今では屋根伝いに街を一周するのがその慣わしになっている。

科学文明から離れて久しいエルは、星明りがあれば視界には困らなかった。

身体強化の魔法はかつて失敗したときからさらに改良を重ね、低出力で足回りのみを強化するように絞られて使用されていた。

慣れも手伝ってかなりの速度で疾駆する。

と、それまでは屋根が続いていた通りの端に辿り着き、大通りが大きく目の前に開いていた。

エルは一つ大きく息を吸い込むと、一気に身体強化の出力を上げる。

力強い手ごたえと共にエルは弾かれたように加速する。



屋根が途切れるその瞬間、最後の踏み切りにあわせてエルはさらに魔法を重ねる。

前方の空気を圧縮し、高密度の空気の弾を作成する。

それ自体は基本的な空気弾丸エア・バレットの魔法だが、エルはそれを自身の後ろで炸裂させる。

圧縮したまま弾丸として発射するのではなく、指向性を与えて開放することで反動を擬似的な推進力とする。

瞬間的に勢いを強めたエルの体はそのまま弧を描いて通りの上を飛び越えた。

上空に飛んだ時点で身体強化は抑え、次は着地の瞬間に魔法を発動する。

またも空気弾丸の魔法　しかし今度は普通の弾丸より巨大なサイズで空気を圧縮する。

圧縮して発射しないままそれをエア・クッションとして見事に向かいの屋根に軟着陸を決めたエルは、自身の体を撓たわめて余分な衝撃を殺すとそのまま同じ調子で走り出した。

魔法を学び始めておよそ2年、エルの魔力はやや小さな体格にも拘らず、年代では異常なほどの保持量となっていた。

普通、この年齢でここまで魔法の能力を磨くものはいないため当然ともいえるが。

体力も向上し、細い体をしなやかな筋肉が覆っていた。

しかし、それでも身体強化を全開にして使い続けるのは無理がある。

その為に編み出したのが低出力で部分的に持続させ、必要なときに瞬間的に全開にする使い方である。

移動に関してならば先ほどのように別の魔法を併用して高速移動

する方法も考えた。

これらの修練は元々高かったエルの演算・制御能力を更に高めることとなり、更には着実に増大した魔力により魔法を使ってへばることも少なくなった。

そして、エルが移動系の魔法を重点的に練習するにはわけがある。

エルとて日がな一日修練ばかりで過ごすわけではない。

同年代の子供と遊ぶこともある。理由は多分に両親に心配をかけるためのクッションであったが、童心に返って遊ぶのも楽しかったのも事実だ。

すると、他の子に比べて自身の体格が小柄であることに気付いた割に体力のお化けと化しているのだが。

それ自体に不満はないが、このまま体格が伸び悩むとウェイトの軽さが弱点になる可能性が出てくる。

勿論身体強化はこれからも磨いてゆくし、生半可なことで力負けする気はなかったが、それでもウェイトの軽い体で攻撃力を出すには一工夫が必要だ。

そのための移動力強化であった。

それは単純に動きで相手を霍乱するためでもあるが、いざとなれば速度を乗せて攻撃することで威力を出すためである。

「（なんつうか、日本人は牛若丸好きやからねえ。俺の場合切実な事情があんねんけどさ）」

エルはつらつらとどうでもいいことを考えながら、今日も今日とて宵闇に包まれた街を疾走する。

いつものトレーニングコース、いつものマラソン。

ただ、その日は少しだけいつもと違うことがあった。

「なんだお前？」  
「誰ですか？」

期せずして誰何の声が重なる。  
これまで誰にも会うことがなかった屋根の上。  
そこに一人の少年がいたのだ。

しばし無言で向き合う。

お互いに、他に人がいるなどと思っていなかった場所での遭遇である。

多少以上に警戒するのは仕方なかったが、その上片方は全身黒尽くめでご丁寧にフードまでかぶっているのである。

星明りの下ではその表情までは窺い知れなかったが、少年の瞳が僅かに細められたのがわかった。

エルは標準よりやや小柄だが、少年はひょろっと背が高く、年齢はわからなかった。

下と言う事はないだろうが、そう年上にも見えない。  
お互いに無言ではつまらないのでひとまずエルは自己紹介をすることにした。

「僕の名前はエルネステイ、今は散歩の途中です。貴方は？」

黒尽くめの子供がいきなり自己紹介をしたのに驚いたようだったが、少年はすぐに立ち直ると言葉を返す。

「俺はアーキッド。……ここで星を見ていた」

エルはちらりとアーキッドとなる子供の背後を見やる。

彼の背後の屋根には出窓があり、そこから出入りしたようだ。

「ああ、それは邪魔をしまい申し訳ありません。僕は立ち去りますので……」

「いやちよつと待てよ。散歩つてか？ 屋根の上を、しかもそんな格好で？」

「（……ご尤も）」

声の調子から、アーキッドが相当に呆れていることがわかる。

「トレーニングなので、走りにくい場所を。でも余り目立ちたくはないですからこの服を」

エルが素直に答えても、アーキッドはしばし不審げにしていたが、ややあつて口を開いた。

「……そうかい、邪魔したな」

「お気になさらず。では、私はこれで……」

「いつもこの辺を走ってんのか？」

さつきから話をさえぎる人だなあ、と思いつつエルは素直にはいと肯定しまた挨拶を残して走り出した。

アーキッドはしばらく闇にまぎれるその姿を追っていたが、思った以上の速度で走り去るその姿に驚き、さらに建物の端で姿がぶれるほどの加速の後大きく弧を描いてジャンプするのを見、驚愕に目を見開いた。

「……すげえ。すつげえ。なんだありゃ、おつもしれー！」

ほんの気まぐれで屋根に出たその日に出会った奇妙な人間。

アーキッドの生活はその日を境に大きく変貌することになる。

エルとアーキッドが出会った次の日、同じ場所で彼らは再び対面していた。

「こんばんは。また星を見に？」

「いよう。いや、今日はお前と話しに」

星明りの下でもわかるくらいに、アーキッドは上機嫌に笑っていた。

いまひとつ彼の意図がつかめないが、もし面倒なことになるならこのまま走り去って明日からはコースを変えよう、と考えたエルはしばし話につき合うことにした。

「ところでそのフード、かぶってないといけねえのか？」

確かに、話をするのにフードをかぶったままというのは失礼かと思っただけで、アーキッドの隣に座った。

それで、と話を促そうとして、隣のアーキッドが実に形容しがたい表情で固まっていることに気がついた。

「……アーキッド？ どうしたのですか？ すごい変な顔になってますよ？」

「っえ？ ああ、いや、その、お前、女だったのかよ！？」

美しい母親に似たエルの風貌はさらに磨きがかかり、いまや立派な美少女ぶりだ。

紫銀の髪は今はセミロングに切りそろえ、あごの下でかすかに揺れている。

それは頼りない月光の下でも全く隠しようがなく、むしろ紫銀の髪輝きも、白い肌もその美しさをより一層神秘的に引き立てられていた。

その美しさと昨日見た動きの凄まじさがつながらず、アーキッドは混乱していた。

エルは微かに笑い、

「いいえ、見た目は母親似ですが、僕はれっきとした男ですよ。」

「いや母親に似るつても限度があるだろそれ。本当に男かよ?」

「……微妙に嫌ですが、確認します?」

「ええ!? いや、いいよ! すまねえ、疑って悪かった」

あたふたと慌てるアーキッドに落ち着くように言い、エルはそれと切り出した。

「お話、とは?」

「ああ、昨日屋根からすっげえ飛んでたじゃねえか? あれってよ、どうしてんのか気になってさ。」

「ああ、あれは……」

「んでよかつたらいつちよ俺にもこつを教えてくれよ!」

啞然としていたのは何処へやら、今度は勢い込んで話すアーキッドに、エルはどうしたものかと思案する。

「教えるのはいいですけど、あれはすぐに身につくものではないですよ?」

「かまわねえよ、お前と一緒に練習してたらそのうちあれくらい飛べるようになるだろ?」

「もしかしたらそれ以上に習得できない可能性もありますし……」

と前置いてエルは簡単に説明を行う。  
身体強化の魔法、上級魔法の簡単な説明、魔法の併用等……。  
アーキツドの理解力はかなりのもので、説明の飲み込みも早かったが、むしろ早かったが故に盛大に顔を顰めることになる。

「それすつげえ大変じゃねえか！」

「だから、最初からそういつてるじゃないですか」

「エルネステイはなんでそんな魔法つかえんだよ？」

「エルでいいですよ。……それは相性もありますし、これでも何年か魔法を練習してきていますので」

「んじゃ俺はキツドでいいさ。何年かって……いまいくつだ？」

「5歳です」

「同じじゃねえか!？」

ようしそれならやってやれねえことはねえ、と盛り上がるアーキツドにエルは慌てて釘をさす。

「でも、身体強化は上級魔法で、まずは基礎から練習していかない  
と……」

「だったらエルが教えてくれよ、魔法」

「……は？」

「エルすげえんだろ？ ジョーキューマホーとかガッツリじゃねえ  
か！」

予想外だ、とエルは顔が引きつるのを止められなかった。

確かに面倒ごとで、本来なら逃げ出したいところではあるが、隣で表情を輝かせるキツドを見捨てるのは彼の良心が許してくれなかった。

「あー、その、えーと、わかりました……けど」  
「さっすが、話がわかるぜ親友！」

「（格上げ早ッ！？ ちょいマツハすぎね？）」  
「でも！ 待ってください、さっきも言った通りすぐには身につかないんですから！」

「まずは基礎から学びます。いいですね？」

「おうよおうよ。任せな、すぐ追いついてやるって！」

「（わーお不安）」

エルは今後を不安に思いながらもアーキッドと細かな確認を行い、その場は別れたのだった。

そのまた次の日、アーキッドはエルの家を訪れた。

それを見てエルが訝しむ。アーキッドの隣にもう一人いたからだ。二人とも綺麗な黒髪フルネットにこげ茶の瞳、元日本人であるエルには少し懐かしさを感じる色合いだった。

キッドは髪を中途半端な長さでぼさぼさにしているが、もう一人は 女の子だ 緩くウェーブの掛かった髪を肩のあたりでそろえている。

ひよろつと身長が高いところも、意志の強そうな目つきもよく似た雰囲気の二人だった。

「キッド？ そちらの方は？」

「ん？ 俺の双子の妹。アデルルートってんだ。一緒にベンキョーすることにしたんでよ」

「（おまつちよつうえっ）」

「私もエル君って呼んでも良い？ 呼ぶわね？ 私のことはアディでいいから。」

「でも本当に可愛いんだ君！」



「（いや返事してへんねけど？ 微妙に話し聞かんのはキッドの双子やからか？）

えーと……いえ、もういいですけど。ちゃんと説明はしてますよね？ キッド？」

「任せる親友。だからこそアデイも付いてきたんじゃねえか」

「ええ、ええ、なるほどその通りですね……」

半ば悟りを開いたように案内するエルに、キッドとアデイが嬉しそうについていくのだった。

ティナが訪れてきた息子の友人にお菓子を振る舞い歓迎した後は、エルの部屋で基礎的な魔法の講義を行う。

エルは、キッドはああ言っていたものの5歳の子供の事だ、いざ講義となれば面倒くさがるだろうと考えていたが、意外にもキッドもアデイも熱心に講義に聞き入り、基礎式アイキテクトの実践では数回の使用で的の中心を撃つ制御能力を見せた。

この双子を侮っていたかと思いつつ、魔力切れでへばる二人にアドバイスをする。

「貴方方のその状態が、魔力切れの状態です。」

二人ともまだ魔力が少ないですから、しばらくは魔力を上げるトレーニングをした方がいいですね」

「うう、はあ、きつついなあ、これ……で、そりゃどうすりゃいいんだ？」

「毎日魔力切れになるくらい魔法を使います。そうすると何もしいよりも魔力は多くなりますね。」

同時に体カトレーニングもやったほうがいいです、その方が自力の延びがいいですし」

「……ははあ、するってーと、だからエルは屋根の上ん走ってたんだな？」

「その通りです。前も言いましたが簡単な事ではないでしょう？」

「いいえ！ やるわ！ 毎日やれば良いんでしょう？ 簡単じゃない！」

驚いて見上げると大分と落ち着いたアデイが両手を腰に当てて仁王立ちしていた。

意志の強そうな目つきは自信に溢れ、不敵な笑みを浮かべながら何故か自信満々に言い放つ。

背も高いし、将来はかなり美人になるんじゃないか、でもこの性格のままだとキツツイ子になりそうだなあと、エルはどこかずれた事を考えていた。

「……でしたら。しばらくは基礎術式で地道なトレーニングをしてみらいます。」

魔力があがってきたら、より複雑な術式を教えますよ」

「こいつぁ追いつくのは何時になるかわからねえな……でもエルの考えてるヨリや、ぜってえすぐに追いついてやっからよ！」

「（思ったよりか遅しいんやな。こら面白いダチできたもんやなあ）」

エルは心中でこっそりと“親友”の評価を上げる。  
こうして、エルの特訓に2人の友人が加わったのだった。

### #3 旅には道連れ(後書き)

1 1 / 1 / 1 6 表現、内容微修正。

1 1 / 2 / 2 7 表現微修正。

#### # 4 発想の転換

6歳になったエル、キッド、アデイの3人はエルの父マティアスから剣の手ほどきを受けていた。

剣に関してはキッドが一番筋がよかったようで、魔法を併用しないと正面からでは勝てず、エルは多少悔しい思いをしたりもした。

剣の練習を行い、魔法の練習も欠かさず、さらに日々の鍛錬も行う。

その間には近所の子供と遊び、親と共にいる時間も……と、エル、キッド、アデイの生活はこの年頃の子供としては非常識なほどの忙しさを見せていた。

エルは自身の目的のためにそれだけの修練を課している。それは長く続ける間に一種の習慣と化し、さほど辛いとも思っていないかった。

前世ではかなり怠惰な人間だったことを鑑みるに、継続とは力なり、そして欲望こそが人間最大の原動力なのだなぁなど思っている。

しかし、キッドとアデイはどうなのだろうか。

騎士を目指すとしてもここまでやる必要は、本来はない。

エルとの訓練は不必要にハイレベルで、彼らも既に子供としては異様なほどの能力に達しつつある。

彼らの原動力は何なのだろうか。

中身が“やる気を出したオッサン”であるエルは、この年頃の子供がここまでの訓練をこなさしめる理由を思いつけないのだった。

月日は過ぎ、彼らの耳にもライヒアラ騎操士学園への入学の話が届いてきた。

ここで少しライヒアラ騎操士学園について説明する。

ライヒアラ騎操士学園は大きく分けて3段階の学習過程を持つ。初等部が9歳から、中等部が12歳から、高等部が15歳からそれぞれ3年間である。

このうち、大半の生徒は初等部、中等部のみ在籍する。高等部とは地球で言うところの大学に相当する。

余談だがこの世界では慣習的に15歳で成人とみなされる。実際は18歳くらいから本格的に職業につくものが多いのだが、職業によっては15歳から一人立ちするものも少なくは無い。

さて、ライヒアラ騎操士学園にくるのは、何も騎士を目指す人間だけではない。

むしろ初等部、中等部への通学は国から補助が出ることもあり身分に関係なく多くの子供が在籍する。

それは義務教育というわけではなくて、この国の状況が大きく関係する。

この国は“騎士の国”と呼ばれているが、裏を返せばそれだけ戦いの場面が多いのである。

未だ人以外に支配された領域であるボキューズ大森海だいしんかいと隣接するこの国では、勢い魔獣の出現率が他国より高くなる。

中でも広大な農地を耕作する農民がその危険に晒され易く、国家としても税収、食糧確保の基本として農民の保護は重要な課題となっていた。

ここで、国内の魔獣の駆逐という手段をとらなかつたのは単に限がなかつたからである。

勿論そのために騎士がいるのだが、如何せん国土は広く、また魔獣の発見から動いたのでは後手に回り易く、そのままでは被害は広がる一方であった。

そういった背景もあり、いつしか農民自身が自衛のための技術を欲するようになっていった。

魔獣に関してもピンきりで、中には多少頑張れば撃退できるものもいた。

たとえ歯が立たないほど強力な魔獣が現れても、無策よりはよほどましである。

国がその要望に応えるまでさほどの時間はかからなかった。

最低限度の戦闘技術と魔法の知識を教育するための施設と法を整備したのである。

結局は農民といえども戦うすべなく過ごせるほど安全な環境ではなく、自らの身を守ることが必要だったのである。

これが後に“フレメヴィーラ王国では剣と盾は農具である”と言われるようになる所以である。

王政下での国家運営としては、最下級の身分である農民に戦うすべを教えるのを嫌う風もあったが、国全体の維持のために断行された。

しかし広く一定の教育をほどこすことで、逆に国家の一員としての意識と誇りを持ち、国内の治安を良くする結果となったのは僥倖（うまゆき）だったと言える。

その分王侯貴族にも高い意識と能力が求められるようになったが、それは彼らの当然の義務として受け止められている。

国内各所に学校施設が作られたが、その中でも最大の規模を誇るライヒアラ騎操士学園に人が集まるのは当然ともいえた。

そのため、学園内は農業学科や商業学科、騎士学科など細分化が

進んでいる。

各学科に共通して一定の戦闘技術科目は存在するが、それ以外は自身の求める職能についての教育が多くなる。

また等級が多く別れているのは各家庭の事情に対応するためであり、最低3年の学習である程度の技術を学べるようになっていた。

3人は説明を受け、それぞれ学園の案内に目を通していた。

「エルはやっぱり騎士学科に入んのか？」

「ええ、そのつもり……ですけど、これは少し困りましたね」

「どうしたのよ？　なんか不満でもあるの？」

「いや、そういうわけではないですけど。そもそも僕の目的は騎士操ナイトラ士ンナーになることでした」

ナイトラ  
ンナー  
騎士操士

シルエット  
ナイト  
幻晶騎士

に乘ることを許された騎士の総称である。

「幻晶騎士の数には限りがあります。

騎士操士となれるのは騎士としても最上の能力を持つ一握りとあります。

そうしますと騎士課程が合計6年で、騎士操士課程はその後になり、さらにその後の配属までと考えると……実際に乗れるようになるまでは遠い話ですね」

少し考えてエルはマティアスへ振り向いた。

「父様、質問があります」

「なんだ？　エル」

「騎士課程において飛び級、というのは可能でしょうか？」

マティアスにはエルができれば急ぎたいと思う気持ちも理解できる。

また彼の能力を鑑みるにあながち根拠のない話ではない。

「確かに、エルの魔法能力を考えればない話でもないが……騎士課程では難しいな。

単純に剣や魔法の才のみならず、騎士課程では礼儀に関する教育も行う。

今までエルはそのあたりを正式には学んでいないだろう？」

それは盲点でしたね、とエルがひとりごちる。

それに、とやや言いづらそうにマティアスは続けた。

「幻晶騎士への騎乗訓練は上級騎士課程の最終科目だ。大体は15歳くらいからになる。

……今のままだと、エルは……その、身長が足りなくて乗れる機体がない」

地獄のような沈黙が落ちた。

確かにエルは同年齢の平均より更に小柄だ。

まさかそんなところで足踏みを食らうとは。

このままでは念願の巨大ロボットパイロットまで最低でもあと7年は掛かる計算になる。

待てない訳ではなかったが、少し悔しさを感じるのも事実である。ふと影が差したのに気付いてエルが顔をあげると、正面にティナが立っていた。

「ごめんね、エル。私に似てしまったから、背が余り伸びなかったのね……」



申し訳無さそうなティナに、エルは目を見開いて首を振る。

「そんな！ 母様、そんなの関係有りません！

元々僕の年齢も足りてないのですし、そもそも方法だってそれしかないと言つ訳では……」

ふと、何かに気付いたように言葉を止める。

「……そう、それしか方法がないと言つ訳では有りません。

操縦する事のみ拘るから、余計な時間がかかるのです。

ならば、違う時間の使い方をすべき……」

「エル？」

訝しむティナに、エルは決然とした表情で顔を上げる。

「作ればいいんです」

「何を？」

脈絡のない言葉にキッドが気の無い返事を返す。

「シルエットナイト幻晶騎士です。自分で作ればいいんです」

「……は？」

「……え、エル君？ それ本気？」

今までにない決然とした表情で恐ろしいことを言い出すエルに、周囲の人間が呆気にとられた表情になる。

「ちょっと待てよ。作るつて、なんだよそりゃ？」

「言葉のままです。これまではずっと乗ることを考えて行動してきました。」

ですがよくよく考えてみると、それでは僕のための機体が手に入りません」

もしかして個人で所有する気だったのか、と周囲がこける。

一部の貴族や大商人を除いて幻晶騎士を個人で所有するものはいない。

製造、維持ともかなりのハイコストだからだ。

それゆえに、騎操士になるためには騎士になる事がむしろ近道のはずなのだが……。

「そう、そもそも支給されるような機体ではあまり派手に改造も出来ないではないですか……。

どうしてこんな単純な事に気がつかなかったのでしょうか。

カスタマイズはメカの華、どの道全身くまなく改造するにはそれ相応の知識が必要です……迂闊でした」

段々とエルの笑顔が危険な方向へ傾くのを見て、ヒツと呻いてキッドとアデイが距離をとった。

普段は物腰も穏やかで何事にも冷静にあたるエルだが、ときたま斜め上の方向へ有り得ない情熱で進む場合があり、キッドとアデイはその源泉とも言うべきものの正体を垣間見た気分だった。

「本気かよ、エル……」

「勿論です。このままでは無闇に時間がかかるのは確か、ならば自作を目指すのも一興というものです。

それに、今からお金を貯めて買おうとするよりは現実的でしょう？」

それはどちらも夢物語というんじゃないのか？ と思ったが、賢明にもキッドがその言葉を口にする事はなかった。

げんなりとするキッドを横目に、難しい表情のマティアスが言う。

「エル……気持ちはわかるが、言うほど簡単なことではないぞ?」

「わかっています、父様。でもできれば僕のための幻晶騎士も欲しいですから。」

「やれるだけのことはやろうと思います」

「そうか……騎士課程にもちゃんといくんだぞ?」

「はい。乗り手としても手を抜く気はありませんから」

アデイは一周していつそ感心した、という風だ。

何故かエルの頭をなでながら話し出す。

「なんていうか、エル君って本当に目的のためなら手段を選ばないんだね」

「……字面が少し気になりますが、選べる手段があるのに選ばない理由がありませんから」

「ホント凄い。エル君で見た目こんなに可愛いのに実はすっごく過激だよな」

「(こんなん言つな。むしろこんなんやから別の手段が必要になつたんだよ!)」

その後、キッドとアデイも騎士学科を希望することを決めた。

目的は様々だが、ひとまずは3人揃って騎士を目指すことになる。

「(さあて、いっちょロボット作ってみよか!)」

そしてエルのテンションはとどまるところを知らないのであった。

#### # 4 発想の転換（後書き）

もうしばし、脳内設定の垂れ流しが続きます。

設定類は完全に脳内だけの思いつきなので整合性の怪しい部分があるかと思いますが、矛盾点への指摘やより良いアイデアがありましたら感想でもメッセージでも連絡いただけると幸いです。

1 1 / 1 / 1 6 表現、内容微修正。

1 1 / 2 / 2 7 表現微修正。

## #5 図書館にて

ライヒアラ騎操士学園、その敷地内にある図書館。  
多数の学生を抱えその学習内容も多岐に渡るため、図書館も多種多様な資料を所有する知の宝庫であった。

その図書館にて、穏やかな日差しを受け窓際の席で本を読む子供が居た。

図書館にはそれなりに人が居たが、不思議な事にその子の周囲だけまるで何かを憚るように空間が空いていた。

日の光に透き通りそうな銀の髪が、滑らかな曲線を描く顔の輪郭に沿って流れている。

長い睫毛に彩られた蒼い瞳は、今は本を読むために軽く伏せられている。

背筋を伸ばした綺麗な姿勢で、しかし小柄な体格の為やや抱えるように本を支えるその姿はどこか微笑ましくも見える。

ここに画家が居れば迷わず筆をとるであろう、まだ幼いながら溜め息の出るような美しさをもったその子に、周囲の人間は気になりながらも気後れして近づけないで居るのだった。

その子とは言わずもがなエルであり、今は幻晶騎士シルエットナイトについての調査の為、まだ入学しても居ないライヒアラに潜入しているのだった。  
ひとまずは書物で調査可能なことを調べることにしたエル。

それだけでも相当な物量ではあったが、調べる物が物である。  
そもそも前世ではモルスーツの構造設定を片端から読み漁り、

機体名と設定に至ってはその8割を暗記していたような廃スペックのヲタクである。

実際の巨大ロボットの作り方など、これが俺の聖書だと言わんばかりに裂帛の気合いで読み漁っていた。

およそ半年をかけて数多の資料を読み込んだエルだったが、書物だけでは不十分な部分も感じていた。

「（あかな、やっぱ開示されてへん情報が有る……）」

幻晶騎士を構成する要素は大きく分けると5つになる。

頭脳たる魔導演算機、

マキウスエンジン

心臓たる魔力転換炉、

エーテルリアクタ

筋肉たる結晶筋肉、

クリスタルディスプレイ

骨格たる金属内格、

インナースケルトン

そして鎧である外装。

アウタースキン

幻晶騎士は魔力を動力として動く。

魔力を生み出すのは魔力転換炉だ。

この機関は、この世の生物がもつ“エーテル”から“魔力”への転換機能を機械的に再現したもので、周囲にエーテルが存在する限り半永久的に魔力を生み出し続ける。

そのままでは魔力は拡散し、エーテルへと還元してしまうが、それを全身の結晶筋肉へと送ることによって魔力のまま保持しておく。

クリスタルディスプレイ

結晶筋肉は触媒結晶を錬金術で加工した物で、特定の魔法術式と魔力の作用により形状を変化させる性質がある。

その性質を利用し、幻晶騎士にとって文字通りの筋肉として利用される他、内部に魔力を貯めることができるため魔力電池としての役割も持つ。

それらの制御を司るのがマキウスエンジン魔導演算機である。

内部に緻密にして膨大な魔法術式を抱え、スクリプト全身を動かすための魔力の制御、魔力転換炉の出力制御、その全てを行っている。

インナースケルトン アウタースキン  
金属内格と外装は比較的単純な金属製の骨格と外装になる。

ただし、この時代の鍛冶技術では10mサイズの巨人の鎧や骨格を一気に作成することはできない。

そのためある程度小さな部品を組み合わせフィジカルブースト身体強化の魔法を応用した強化術で接合強化し、全身を支えている。

これは幻晶騎士に見た目以上の防御力を持たせる結果となるが、魔力転換炉からの魔力供給がなくなると全身を支えられないということでもある。

幻晶騎士とは全身を冶金と錬金と魔術で構成した生物機能の単純模倣といえる。

さて、上記要素のうち結晶筋肉、金属内格、外装は運用上でも消耗の激しい部分であり、それこそ前線の砦や多少の設備のある街程度でなら容易に調達できるよう、鍛冶師と錬金術師むけに教育が行われている。

勿論ライヒアラにもそのための学科もあり、設備や材料と言った部分を別にすれば知識を得るのは簡単であった。

だが、魔導演算機、魔力転換炉 幻晶騎士の心臓部たる情報はほとんど開示されていない。

幻晶騎士とは国家にとって重要な戦力であると共に、おいそれと持たれては困る類いの物でも有る。

当然流通は国家に統制され、その心臓部の製法も秘匿されているのだった。

製法の秘匿は製造効率の低下につながり、大量生産できない分極めて値段も高額になる。

幻晶騎士のコストの原因の大半は此处にある。

「（とはいえ魔導演算機はまだ何とかかなりそうやねんけどな）」

魔導演算機は魔法術式を用いて全身を制御している事まではわかっている。

ならば、同様の魔法術式で干渉できるはず……早い話、エルはどこかの魔導演算機に対しハッキングをかけようとしているのである。単体で恐るべき演算能力を持ち、かつプログラム・ソフトウェアの知識も持つエルならではの発想である。

しかし、そんな理論的な部分ではない純粋な魔法技術の結晶、魔力転換炉。

この世界の魔法の根源を成す部分の模倣は、さすがのエルにも荷が重かった。

「（せめて……せめてもうちょっとヒントがないと。」

こないな概念前世にやそもそもないし、見当もつかへんしなあ）」

たった一つわかった事は魔力転換炉では“精霊石”と呼ばれる特殊な鉱石を使用している、と言う事だけ。

その使い方も入手方法も全く不明、いっそ清々しいさっぱりっぷりだった。

最悪、魔力転換炉は稼働品の入手が必要になるかもしれない。

全てを自作に拘るつもりはなかったが、結局その費用を考えると魔力転換炉だけの入手も現実的ではない。



「（まあ焦ってもしやあない、それに理論はわかってても生産設備の無いもんが大半やし、そつちの都合を先につけるほうが先決かねえ）」

本を積み片手をついて窓の外を見ながら思考にふける。

物憂げなその様子はまさに絵になる、と言つ風でちらちらと視線を向けていた周囲の人間の溜め息がさらに深くなる。

「（設備はむしろこの学園の設備をなんとかちよろまかしたほうがはいんやないか？」

どの道ここにあるんやし。むしろ餅は餅屋つてもんや、人材コミコミプランで渡りつけるべきか。

さすがに俺だけで全部カバーは出来んし）」

エルは脳内で書物より得た多岐に渡る知識を整理し、実現性を検討する。

「（……どの道本格的に考えるんはガツコ入ってからになりそうやなあ。むしろこれやっぱ銭の問題なんのとちゃうか。

嫌んなるねマジで、世知辛いこつて。世間を渡るにやコネとカネつてかーい。

ああもうほんまいつそのことどっかに所属不明の機体が落ちてたり遺跡に安置されてたり戦闘に巻き込まれて新型機見つけたりせえへんやろか）」

薄く息をつき、思考を切り上げたエルは帰宅の準備を始める。

此処に来るたびに読む資料が増えていったせいで、今やエルの前は教本の見本市のようになっていた。

帰るには多少面倒だが資料を返却しないとイケない。

そう思ってエルが顔を上げると目の前に座っていた人と目が合っ

た。

それもそのはず、目の前の人は本を読むでもなく、ずっとエルに視線を注いでいたのだ。

しかし、エルはまさかずっと注視されているとは思わずに普通にスルーして片付けを進めた。

エルの目の前に座った人物はそれを全く気にするでもなくその様子に興味深そうに観察していたが、ややあつてエルに喋りかけた。

「ねえ君、ちよつといいかしら？」

「……？ はい、何でしょうか」

声をかけられてエルは漸く確りと目の前の人物を見る。

豊かな金髪がウェーブを描き、形の良い眉とややたれ目気味の青い瞳が特徴的な美人がそこにいた。

年齢のほどははっきりとしないが中等部の高学年、もしくは高等部くらいに見える。

「随分といろんな本を読んでいるようだけど、どこの学科の子かしら？」

「僕はまだここの生徒ではありません。この春から入学するのですが、その前に予習をと思ひまして」

女性が軽く目を見張る。

エルは普通に答えてしまったことに少し後悔を覚える。

家族もキッド・アデイももはや気にしていないので意識したことはなかったが、これらの資料は入学すらしていない子供が読むものとしてはかなり異常だ。

人目につく場所での調べ物は迂闊だったかもしれない。

エルの内心の動揺に気付いたのかどうか、女性は表情を戻すと話

を続けた。

「入学前に応用錬金学、応用魔法構造学、初級騎操士概論まで読むなんて……貴方すごく優秀なのね」

「いえ……」

しっかりとタイトルまで観察されていたようだ。

エルは会話に地雷原の中を竹馬で走るような感覚を感じた。

「噂以上の子ね。図書館の姫君さん」

「（ちよっおまつっえっなにそれこわい）何でしょうか？ その……呼び名？」

「最近噂になっているの。図書館に信じられないほど綺麗な子が毎日来て」

女性はふと視線を窓の外に向けた。

「いつも窓際の席で本の海に溺れているって」

女性の視線が戻る。

頬杖をついたその顔には楽しそうな笑みが浮かんでいた。

エルも表面上はにこやかに対応しているが、内心はしかめっ面もいいところである。

「……存じ上げませんでした。それこそ本しか見ていませんでしたから」

「ふうん。それで、ね？ ちょっと興味があるんだけど……予習にしてもその量はすごいよね？」

「どうしてそこまで勉強しているの？」

ある意味当然の質問に、エルは即答を返す。

「趣味です」

「へえ、趣味。そうくるのかあ……ちょっと変わってるかもね、貴方」

「そうかも知れません。そろそろ本を片付けてきてもいいですか？あちこちに返さないといけませんから、時間が掛かりますので」

やや強引に切り上げたエルに特に不機嫌な様子も見せず、女性は片付けの手伝いを申し出た。

二人で本を片付け、挨拶を交わし図書館を退出する。

エルが相手の名前も話し掛けた目的も聞いていないことに気が付いたのは自宅に帰り着いた頃だった。

「（うーん、入学前にあんまり派手なことはしたあないな。概ね資料も行き詰ってたし、入学までは控えよかねえ）」

結局それから入学式の日まで、エルがライヒアラへと行くことはなかった。

図書館で出会った女性、彼女と意外な縁があることを知るのには、入学式より後のこととなる。

# 5 図書館にて（後書き）

1 1 / 1 / 1 6 表現、内容微修正。

1 1 / 2 / 2 7 表現微修正。

## #6 入学式にて

春、ライヒアラ騎操士学園は入学式を迎えていた。

エル、キッド、アデイの3人は連れ立って学園へやって来る。

遠くからライヒアラへやってくる生徒は寄宿するが、元々ライヒアラ学園街に住んでいる生徒は実家からの通学になる。

初日はまず入学式となっており、先生方のありがたい話を聞くことになる。

その後昼食をはさみ学科ごとに別れ、授業内容についての簡単な説明を行う。

とは言え初等部は基礎系の授業の大半が各学科に共通となる為、学科の区切りも曖昧で本格的に学科ごとに分かれるのは中等部からになるのだが。

入学式は大講堂で行われる。

規模に比例して広大な学園内の敷地に迷う人間も多い中、以前から図書館に通い詰めていたエルは勝手知ったるとばかりにすいすいと大講堂へと歩いてゆく。

あとの二人はその小柄な後姿を見失わないようにと必死だった。

「案内いらすつてのはいいんだけどよ、どうにもエルは人ごみで見失っちまうんだよなあ。ちっこいし」

「そうよねえ。もーちよつと身長高いとみやすそうなのに。可愛いから良いんだけどね！」

「置いて行きますよ？ 二人とも」

「あ、そうだ良い事思いついた！ エル君抱きしめておけば見失わないよね？」

「是が非でも止めていただきたいです」

どうでもいい雑談を交わしながら大講堂へ辿り着くと、そこは既に大勢の生徒であふれていた。

これが全て新入生なのだろうか。さすが国内一の規模は伊達ではないようだ。

座席はまずは新入生向に空いているところに自由に座れるため、できれば3人まとめて座れるところを探したかったエル達は無駄なあがきかと思いつつ周囲を見回した。

すると、端のほうの席に空いている場所を発見した。

5人がけの長椅子に1人しか座っていない。

渡りに船とばかりにエル達はそこへ行くが、辿り着いたところでその理由を知ることになった。

ただ1人そこに座っていたのは“ドワーフ族”と思しき少年だった。

少年といたのは、新入生用の席にいるからの推測であって、すでに立派な髭を持つその外見は年齢が解りづらかった。

ドワーフ族は主に北方の大地に住む山の民のことだ。

険しく、冬は雪に閉ざされる地方に暮らす彼らは、元々は山腹の洞窟などを利用して暮らしていた。

それは時代が進むにつれ自分たちで洞窟を掘るようになり、高度な掘削技術を生み出すことになる。

また北方の地には良質な鉱山が多く、日常的に山を掘って暮らす彼らは自然、多くの鉱物資源に通じていった。

それらの資源を利用するために鍛冶技術が高まり、今では彼らは鍛冶の民と見做されている。

そういつた経緯もあり、狭い洞窟で活動し易いように背は低いがその分全身を強靱な筋肉に覆われており、膂力だけなら人の倍にも達しようかというほどである。

風貌は概ね厳ついと言つてよく、しかも男性は生まれたときから髪の毛と同様に髭がある。

また十分な髭を蓄えることが立派と見做される一族の特徴と相まって、年齢よりも相当に老けて見えることが多かった。

そんなドワーフ族だが長い歴史の間ずっと北方の山地に閉じこもつていたわけではない。

一族に伝わる鍛冶技術と、その強力な身体能力をもつて各国で鍛冶屋として働くものも多い。

とは言え見かけける頻度は高くなく、一般的な子供にとつてはその非常に老けて見える外見は奇妙に映り、近寄るのを躊躇わっていたのだった。

バトソン・テンドー二は隣に人の気配を感じ、ちらと横に視線を向けた。

周囲の子供がドワーフ族である自分の横に来るのを躊躇っているのはわかっている。

嫌な気分にならなくもないが、まだ最初の入学式である。

多少の人見知りとして気にしないでおくことにした。

そんな訳で先ほどから隣の席は空きっぱなしだったが、その状況で物好きにも自分の隣に来る奴はどんな奴か、少し気になったのだった。

隣に座った人間は、一言で言うと小さかった。

ドワーフ族であるバトソンも身長は低いが、それでも既にかなり



筋肉質になりつつあるため存在感がある。

それに比べ、隣に来た少女は身長も低く、全体的に華奢で兎に角小さく見える。

単に座席が埋まってきただけかと視線を正面に戻そうとして、その前にこちらを向いた少女と目が合った。

予想外なことに少女は怯むでもなく至極自然に話しかけてきた。

「お隣、空いていますか？」

「あ、ああ。空いている」

「ありがとうございます。僕はエルネスティ・エチエバルリアと申します。貴方は？」

いきなりの自己紹介にむしろバトソンが怯みかけたが、黙っているのも失礼だろうと返事を返す。

「バトソン・テンドーニだ。見ての通りドワーフ族だな」

「バトソンさんですね。隣り合ったのも何かの縁です。よろしくお願ひしますね」

その少女とは簡単な挨拶を交わした後、入学式が始まるまで適当な世間話をしていた。

ドワーフ族を全く気にせず話しかける人間は珍しい。

しよっぱなからそんな奴に会えるとは、とバトソンはなんとなくこの先の学園生活が気楽に思えてくるのだった。

エルがドワーフ族を気にしていないのには大した理由はなく、エルにとってはこの世界のものは大半が“変わったもの”であるといっただけだった。

ドワーフ族の風貌などについては多少は聞いたことがあったが、

実際に見てみるとなるほどこういう感じなのかあ、と思ったただけだった。

そういう意味では真つ当に話を通じるならどの種族でも大差ないと割り切っている部分もある。

バトソンと話してみるとややぶつきらぼつなきらいはあるものの、特に引つかかる感じもない。

バトソンから父母が鍛冶師としてライヒアラに来たこと、こちらの慣習に従って学園に入学し、学科は当然鍛冶師学科であることなどを聞いていた。

「(ドワーフは鍛冶の技術がかなり得意らしいしなあ、新入生じゃ何があるってわけでもないけどいけどいずれコネがあるんは損やない。割と幸先ええんかもな)」

裏に打算も含みつつ入学式が始まるまで会話は続いた。

学園生活の心得や新生活に向けて、というお題目の長時間に及ぶ話を耐え切り、新入生一同に退屈と忍耐の表情が浮かんできたころ。教師の話が終わり、次は一人の女生徒が壇上にかかる。

見事な金色の髪を揺らし、背筋を伸ばして歩くその姿に、生徒の間に微かなざわめきが広がった。

「初めまして新入生の皆さん。私はライヒアラ騎操士学園の生徒会長を勤めますステファニア・セラージェイと……」

その姿を見たとき、エルは苦笑いを抑えきれなかった。

「（なんとまあ、こないだの図書館の人かい。まさか生徒会長とはねえ）」

そこに居たのは以前図書館で声をかけてきた女性だった。思ったよりも厄介な人に目をつけられたのかもしれない、そう思っていたエルだがふと隣で息を飲む気配を感じた。

ちらりと視線をやると、キッドとアデイが生徒会長を凝視している。

美人だから熱心に見ています等とは決して言えない苦々しさも感じる雰囲気、エルは首をかしげる。

「（なんか縁でもあるんか？ どうも双子とも関係ありそうやけど……）」

そのうち本人達から話があるかもしれない。

何も無いうちから藪をつつくのも無粋か、とひとまずそれは置いておく事にした。

生徒会長の挨拶も終わり、昼前に入学式は終了となった。

昼食を挟んで昼からは学科ごとのオリエンタリングになる。

昼食をとろうとする生徒で混雑する食堂の一角に、矢鱈と目立つ

集団がいた。

うち二人は黒髪をフルネットぼさぼさとゆるいウェーブの肩丈にしたよく似た雰囲気の男女。

うち一人は銀髪をセミロングに揃え、小柄な美少女（？）。

うち一人は赤茶けた髪と髭を伸ばしたドワーフの男性。

一体どういう取り合わせなのか、傍からはまるで解らなかった。

「……俺も一緒によかったのか？」  
「ええ。どなたかと待ち合わせの約束があるのでしたら、無理にとはいませんが」  
「いや、特にそういうことじゃないが……」  
「じゃ、いんじゃない？ つうか午後も話まだあんのかよ。なげーよ」  
「キッドはまともに聞いてないんだから良いんじゃないの？」  
「取り敢えずは食事にしましょう。混んでますし、早めに場所を空けたほうが良いでしょう」

傍からは詮索するような視線があつたものの、話しかける勇者はいなかつたようだ。  
しかしその中で、そんなことをものともせずには昼食をとる彼らに近づく人影があつた。

小型のテーブルは彼らだけで満員だったが、その人物は気にせず傍らへとやってくる。

「こんにちは。また会つたわね、図書館の姫君さん」  
「こんにちは、生徒会長。会つたも何もそちらからいらつしやたように見えるのですが」  
「あら、そんな細かいこと気にしちゃ負けよ？」

そこで生徒会長は一緒に席についていた面々のうち、双子を見て目を見張つた。

「アーキッド、アデルトルト……貴方達、どうして此処に……知り合いなの？」

キッドが表情を消し、常とは違う様子で答えた。

「ご無沙汰しております、ステファニア姉様。」

エルネステイとは、近所のよしみで一緒にいます」

「（姉様……なあ。しかしこいつ敬語使えたんや。知らんかったわ）」

「そうだったの…貴方達もライヒアラに入学する歳になったのね…」

「ステファニア姉様は……生徒会長、でしたか。バルトサール兄様も、此処に？」

「ええ、騎士学科の中等部1年よ。そのうち会う機会があるでしょう」

「（あーなんか、なんとう、察しがついてきた）」

どこかギクシャクした空気を払うようにエルが皆を促す。

「こんな混んでいるところで立ち話しても落ち着かないでしょうし、ここは場所を改めては如何でしょうか？」

「それもそうね。貴方達も騎士学科だったわね？だとすれば会う機会には困らないわ」

生徒会長は話すだけ話すと去っていった。

エルの視線は事情はまた今度聞きます、と語っていたがその場は特に何も聞かなかつた。

一人蚊帳の外でなんとも微妙な表情のバトソンに詫び、丁度いい時間なので学科の教室へ移動することを提案する。

なんともいえない雰囲気の中バトソンと別れ、3人で騎士学科の教室を目指し歩き出したのだった。

学科ごとのオリエンテーリングはさしたることもなく、明日からの授業内容と今後について簡単な説明があっただけだった。

説明を受けたあとは解散となり、3人は家路へとつく。

エルは気にしていなかったがキッドとアディは軽口も弾まず硬い雰囲気のままだった。

「詳しくはわかりませんが、あまり気を落とさないことです。明日からは授業も始まりますし、今日は特訓は無しにしましょうか」

「エル」

「はい？」

「聞かねえのか？」

「言う必要があるのなら、聞きますよ」

ひとつ息を吐くと、二人の雰囲気緩和。

少し確認するように視線を交わしていたが、ややあつて切り出す。

「エル君、このあとちょっと話したいことがあるんだけど」

「はい。では僕の部屋にでも行きましょうか」

エルの家に着き、部屋へと向かう。

普段魔法の講義にも使っているため二人にも勝手知ったる場所である。

「あー、まあ簡単に言うつとよ、うちの親父って貴族なんだ」

簡単すぎた。

エルは目を瞬いて答える。

「でもキッドも、アディも……貴族らしい事していませんよね？僕と訓練したりしていますし」

「ああ、そこがちょっと複雑で……母さんは正式な奥方じゃない。

所謂妾つてやつだな」

「……」

「まあ母さんのんびりしてるからさ。俺たちもできたし、妾でも気にしないって言ってたんだけど」

「父さんの正式な奥さんが……なんていうかスツゴク嫉妬深いのよねえ。その癖体面は気になるらしくて」

「で、苦々しくは思っても、妾ごときに突っかかるのはプライドが許さないんだとよ」

さすがにエルは反応に困って、とりあえず相槌だけ打っていた。

「母さんホント大人しいのよねえ。何でも奥様に遠慮して。」

それで、奥様がさ、結局私達が同じところに住むのはどうしても許せなかったみたいで」

「住む所を与えるって感じで今の家を用意して、そっちに住めってさ。あと食費の面倒は見てくれる」

「まあそういうわけで……さっきの生徒会長、がその正式な奥さんの娘」

「そっちはまだいいけど後二人息子がいてさ。その下のほうがこれまたうっぜえ奴なんだよな」

「何かにつけて威張り散らしてくるし、妾の子だなんだって絡んでくるんだよ」

苦々しげな様子でキッドとアディが溜め息をつく。

「それが、ライヒアラにいるのですね？」

「そう。騎士学科の中等部1年、だったっけか」  
「なるほど。トラブルの予感ですね」

キッドが天を仰いだ。

彼はトラブルの予感ではなく、確信に近い思いを抱いていた。

「生活費も出してもらってるし、親父には感謝してるんだけどさ」  
「向こうも放つて置いてくれるんだっいたらこっちから絡むことはないのに。どうにも突っかかってくるんだよな。気に入らないんだとよ」

キッドが大仰なりアクションをとり、どっかと椅子に沈み込んだ。

「姉さんに知られたからには……いずれ、来ると思うわ。」

そして、来たら一緒にいるエル君も、巻き込んだりうかもしれないし……」

「大よその事情はわかりました。で？」

小首をかしげつつエルが聞き返す。

「……で？　ったあ、なんだよ？」

「方針は、撃退ですか？　黙殺ですか？　それとも闇討ちとかでしようか」

「そうそう、闇討ち……っておい！」

「（なんと見事なノリ突っ込み）」

エルはいつもどおりニコニコとしながら物騒なことを言っている。

見た目どりの人間ではないとわかっているはずのキッドでさえ思わず引く勢いだ。

「……俺さあ、お前が友人でよかったと思うぜ？　敵に回すの嫌過ぎる」

「本当心強いつたらありゃしないわねえ。」



まあしばらくは様子見ね。もしかして何も起こらないんだつたらそれに越したことはないし」

「そうですね。とは言いましても、僕が何処まで首を突っ込んで良いかもわかりませんし。」

「必要なら言ってくください。幾らでも力になりますから」

「ああ、助かる」

「（しっかしまさか貴族たあなあ。っテーことは何かい？ 何やら俺に目えつけてきたのは貴族かい。」

「さてなんか一悶着ありそうやなあ（）」

その懸念は程なく現実のものとなる。

## #6 入学式にて（後書き）

10/10/31 誤字・表現修正。

11/1/16 表現、内容微修正。

11/2/27 表現微修正。

## #7 その武器の名は

入学式の次の日には授業が始まった。

そうするとエル達3人の生活も学園を中心としたものになってゆく。

騎士学科の授業内容は大きく分けると一般教養と初級騎士課程の二つに分かれる。

一般教養はほぼ全学科に共通で、騎士課程ではまずは魔法の知識・魔力の強化と剣術の習熟が重点的に行われる。

魔法は難易度や威力により、おおまかに初級魔法（コモン・レベル）、中級魔法（ミドル・レベル）、上級魔法（ハイ・レベル）に分類される。

基礎式（アーキタイプ）の行使からその規模拡大・連続使用や基礎式の複数同時使用までが初級魔法に分類され、フレメヴィーラ王国の国民は最低でも初級魔法以上は習得している。

中級魔法からは、単純な拡大でも一定以上の威力を持つもの、複数属性の組み合わせ魔法の行使、そして基本的な強化制御魔法の行使がその範囲になる。

戦闘職を目指すのではなく、一般的な職業につくものは中級魔法をある程度習得していることが多い。

保有する魔力と相談すると、ある程度の威力の中級魔法の使用が限度になるからである。

騎士学科以外の学科では初等部から中等部の間に中級魔法までを習得することを目的とする。

一定以上の中級魔法や上級魔法まで習得するのは騎士学科　つまり戦闘職のみだ。

上級魔法は身体強化に代表される多数強化制御、複数属性魔法の

上位版などどちらかという強力だが扱いの難しい魔法が分類される。

上級魔法になると、単純にその制御能力のみならず膨大な必要魔力を支える保有魔力の問題が大きくなる。

エルの例もあるが、魔力を増やすには日々の地道なトレーニングが必要になる。

長期間、十分に魔力のトレーニングを行えるのが騎士学科の特色ともいえた。

授業内容は勿論最初は初歩的な内容が主になるのだが、3人は魔法と剣術については以前から修練を積んでいるため、いまさら初歩を教わったところで意味がない。

エル達以外にも、例えば貴族の子弟には家庭教師をつけ事前に魔法や剣術、場合によってはそれ以外の知識も学んでいることが多々あるので全員一律の授業とはしていない。

最初のクラス分けで全く経験の無いものは一般クラスとなり、ある程度の経験者は上級クラスとなる。

入学前に魔法や剣術の教育を受けられるものというのは、当然それなりに裕福な家庭の者になる。

そのため必然的に上級クラスには貴族や商人の子供が多く、どこか言い知れぬ緊張感のようなものも感じられるのだった。

魔術の授業では、最初に各自に魔法を使う為の道具が配られる。

それは木製の杖で、銀の簡単な装飾が施され先端部分に触媒結晶が装着されている。

元々魔術を習っていたものは個別に持っていることも多いが、入学時には一律で配布されるのが常だった。

騎士であっても魔法を使うときは杖をつかうため、杖の扱いに慣れておくことは重要だ。

それを見ていた一人の生徒が手を上げる。

「先生、この杖なんですけど、他の物……例えば剣に触媒結晶をつけた物では駄目なのですか？」

教師は良い質問です、と頷いた後説明を始める。

「そうですね、それには魔力と金属の関係について知る必要が有ります。」

金属には、魔力をそのまま通すことができる性質があります。逆に木等は魔力を通さない。

皆さんの杖は素材は木ですが、表面に銀で装飾がありますね？それは魔力を通し触媒結晶に伝える為のものです。」

教師は手に持つ杖を軽く振りながら説明を続ける。

「金属と言っても一律に魔力を伝えるわけではなくて、種類によって通しやすさが違います。」

例えば銀は魔力を非常に良く通しますが、逆に鉄や鋼は魔力をやや通しにくい。

通常の鉄製の剣に触媒結晶を装着するのは、ロスが大きく奨められないんですね。

逆に全部銀で武器を作ると恐ろしく高価になってしまいます」「でも、それならこの杖と同じように魔力の部分だけ銀で伝えればいいのでは？」

説明を聞いていた生徒の一人が挙手し、質問する。

丁度聞いて欲しかった質問を受けた教師がにこやかに説明を続けた。

「いい着眼点です。しかしここで重要なのは剣と言うのは消耗品であるということですよ。」

魔獣には強靱な皮を持つ物も多い、何回か戦えば剣は直ぐに駄目になってしまいます。」

そこで新しい剣を用意するのですが……毎回銀を施していたのは余計な手間がかかってしまいます。」

平時ならともかくもし戦いが続くとこれは思ったより厄介な事なのです。」

「それで、魔法は専用の杖を用意するのですか」

「その通りです。長年の内に今の形に落ち着いたのですね」

教師の説明を聞きながらエルは考える。

「（まあそら剣と合わせてもらえんか。でもなあ、前から思ってたんやけど杖って扱いにくいんやなあ。」

なんとかかこう、杖をもっと使いやすくするか、剣とかに合わせられへんやろか）」

先ほどの説明を聞く限り、重要なのは触媒結晶とそれに魔力を伝える銀の導線。

そして近接武器は容易に交換できるものが望ましい。」

「（杖つちゅーか、これ要するにさ、射撃武器なんよな。魔法飛ばすための。」

扱い易い射撃武器つちゅーたら……銃やん。そうや、拳銃みたいな作ればいいんじゃないね？」

そしたら撃ちやすいし、何よりわかりやすい。何で今まで思いつかんかってんやろ）」

そしてエルの思考は授業から大きく飛翔を始めた。

「（特注品になりそうやけど本物の銃と違って複雑な機構はいらないし、ガワだけなら何とかなるんとちゃうか。

あれ？　ちよい待って？　銃？　剣？　……銃剣？　あ）」

思いついたエルは猛烈な勢いでデザインを考える。

銃剣　つまり魔法を発射する銃を模した部分と、それに装着する小剣とに分ければ良いのではないか？

ただし、本来銃剣自体はがっちりと斬りあう事など想定しているものではないので、構造は一工夫必要だろう。

最初はハンドガンに銃剣を装着するようなイメージで考えていたが、どうも色々としっくりこない。

そもそも銃としての機能が要らないのだからやはり剣に沿う形のほうが……。

そこで、彼の脳裏に閃くものがあつた。

前世で彼が大好きだった銃。

きわめて完成度の高いレバーアクション機構と流麗なフォルムを持つライフル。

“ウインチエスターM1894”

彼が所有していたのはそのショートバレルタイプのエアガンだが、あれの弾倉部分を剣と考えて、バレル部分の長さを変えてデザインすれば……。

放課後、魔法の授業そつちのけで書き上げた怪しい図面を手にエルは鍛冶学科を訪れた。

探しているのはバトソンだ。それ以外に鍛冶に縁のある知人は居ない。

一度挨拶しただけの縁ではあるが、彼はドワーフである。

彼自身に作ってもらうか、場合によっては親に頼んでもらう事はできないだろうか、エルはそんなことを考えていた。

ドワーフ族であるバトソンを探して訪れてきた見目麗しき少年に、周囲は何事かと囁きあう。

当のバトソンは悪目立ちすることのため息を隠せない様子だったが、訪れてきた知人を無碍にすることはしないようだった。

「いきなりどうしたんだ？ 鍛冶学科までくるとは」

「突然すいません。武器を特注で作りたいのですが、その、他に鍛冶に縁のある知人がいないものでして」

「ああ、それで俺に相談か。で、ものは何だ？」

「それは、この図面を見てもらいたいのですが」

図面を見たバトソンの表情が見る見る訝しげなものになる。

「エルネスティ、これは……なんだ？」

「ウインチエスターライフルです」

「聞いたことのない名前の武器だな、それにややこしい形をしてる……作るのが良いが、もう少し具体的な説明をしてもらおうぞ」

「お願いできますか？ ああ、勿論費用はお支払しますので、どれくらい掛かるかは見ておいてくださいね」

エルはほっとすると共に、同時にバトソンの鍛冶の腕を見る良い機会だとも思った。

数日後、バトソンから連絡を受け彼の家を訪れたエルの目の前に



は、エルがデザインした怪しい武器が形になって存在していた。ライフルのストックをイメージした、やや下へ向かって湾曲する持ち手に、本来鏢のある部分は奇妙な構造になっていた。

そこには、上半分はグリップから伸びた銀のフレームに触媒結晶が装着されている。

下半分はそこから伸びるショートソードの留め金になっており、刀身部分だけ交換可能となっていた。

ショートソードは一般的な量産品を流用可能になっている。

ドワーフ族の技術はエルの指定した構造をキッチリと仕上げてくれたようだ。

手にとって感触を確かめていたエルに訝しげにバトソンが声をかける。

「頼まれたとおり仕上げたが……剣にしては随分とごちゃごちゃとしているんだな」

「剣と同時に魔法を撃ってみようかと思いましたが」

実演します、と言ってエルは2本の剣を持ち、鞘を身につけて裏手へでた。

そこにある試し切りの的へ切っ先を向ける。

通常の剣や杖と違い、銃床を模した持ち手は手に馴染み、重量感も懐かしさを感じる程だ。

エルは徐に剣を水平に構え、魔法を発射する。

基本術式を軽く数発。狙い過ぎず的の中心に当たる。

そのまま走り出し、標的に斬りかかる。

当てる直前に真空斬撃ソニックブレードの魔法を発動、衝撃波を発生させ丸太の標的を両断する。

斬り飛ばされた上半分が地面に落ちる前にもう1本の剣を向け、今度は爆炎球の魔法を発射。

上空で丸太が粉々になるのを見届けた。

2本の剣を軽く振り、そのまま腰の鞘に収納する。

にこにこ上機嫌なエルと対照的に、バトソンは呆れ気味だった。

「何て言うか、無茶苦茶だな。出鱈目もいいところだ」

「まあそれはそれとしまして、素晴らしい出来栄です。バトソンさん、貴方はいい鍛冶師になりますね」

「これでもドワーフの端くれでね。ま、御代はきっちりいただくが」

バトソンから受け取った請求書を見たエルが首をかしげる。

「……思ったよりも安いんですけど。大丈夫ですか？」

「ああ、俺が練習がてら作ったものだからな。大半は材料費だ」

「色々ありがとうございます。他にも、思いついたらお願いしても良いですか？」

「場合によるし、俺の手におえるものならな」

そのまま“ウィンチエスター？&？”と名づけられた2本の剣はエルの腰に後ろに伸ばすような形で装着され、以降どこに行くにも持ち歩かれることになる。

## #7 その武器の名は（後書き）

10 / 11 / 1 冒頭に行き場の無い魔法のレベル説明的なものを  
追記。

11 / 1 / 16 表現、内容微修正。

11 / 2 / 27 表現微修正。

## # 8 授業をうけよう

場面はエルがウィンチエスター？&？を入手するより少しさかのぼる。

エル達がいるクラスでは魔法能力測定が行われていた。使用可能な魔法のレベル、構築速度、そして魔力の総量を測定する授業である。

参加している生徒もそれぞれにやる気を漲らせながら、自身に可能な最大の魔法を放ち、魔力の限界まで使い続ける。

単純に魔法能力の上下で何が決まるというわけではないが、やはり他人よりよい成績を出すと嬉しく、得意になるものだった。

ある生徒が爆炎球ファイアボールの魔法を放つ。

火の基礎式アイキテクト系統では中級に位置する魔法だ。

杖から放たれた橙色に輝く楕円形の魔力球が、微かな炎の尾を曳きながら標的へと命中する。

命中した瞬間、爆炎球の魔法はその名の通り炎を撒き散らしながら爆発した。

標的である鎧は形を保っているものの焼け焦げ、爆発の威力を物語っている。

周囲の生徒がどよめく。

入学直後に中級魔法、それも威力は折り紙付きの魔法である爆炎球を使いこなす者はかなり少ない。

さすがに強力な魔法だけあり必要魔力も高く、放った少年は息を切らせている。

入学直後にこれだけの魔法が使えれば、在学中に魔力の増大に努

めればいずれかなりの実力を持つことが望める。

教官達は今年の生徒は将来有望かもしれないと期待を抱いていた。

しかしそんな周囲の様子とは対照的に、エルは困っていた。

彼は他人の魔法能力について殆ど把握していないため、自分がどれくらいの位置にいるかをわかっていなかった。

正確にはキッドとアディの能力は知っているが、如何せん彼らはエルにとっては弟子のような位置づけであり、その能力の高低は世間一般におけるそれを知る指針にはなりえない。

エルの両親も息子の成長に変な枷をつけたくなかったからか、一般的なレベルに関しては殆ど説明をしなかった。

その結果、エルはどこまでやってもいいものか考えあぐねているのだった。

「(さっきの鑑みる限り、一発でも爆炎球使えんのは相当なもんつてことやな。」

もしかして爆炎球やったら連射できますとかフレイムストーム暴炎嵐巻けますとか言ったら吊るされんちゃうかこれ)」

エルが自身の魔法能力の位置づけに悩んでいる間にも、無情にも順番は回ってくる。

エルは教官の呼び出しに応じ、前にでながら心を決める。

「(あんまり飛ばしすぎると後々厄介そうやし、ここは爆炎球で様子みるか)」

未だ日本人だったときの思考が抜けきらないエルは、自身の趣味には全力を傾けるが大勢の前で力を振るうのには苦手意識を持っている。

程ほどを直指すべく爆炎球の魔法術式を組み上げ、エルが杖を構えたとき運悪く(?)小声で囁かれた周りの眩きが耳に入ってきた。

「お、次の奴見るよ。すつげえ可愛いじゃん！魔法使えるってことはどっかの貴族の子かな？」

「ほんとだ。あんな子が騎士目指してるのか？いくらなんでも無理じゃないかなー。」

「まともに魔法使えるのかあれ？あんだけちっこいんじゃない魔力もほとんどなさそうだし。」

真剣だったエルの表情が不自然なタイミングで微笑みに代わる。

「(ははは、遠慮するとかファツキン阿呆らしいがな……全力だ)」

魔術演算領域に展開していた爆炎球の魔法術式を変更、一部構成を変更し威力を引き上げ、繰り返し構文を構築し範囲を拡大する。

ビアシングランス  
徹甲炎槍 爆炎の魔法を圧縮し対象に命中した方向に指向性の爆発を発生させる、貫通力を上げた火炎弾 しかも1つではなく10本もの炎の槍が出現する。

瞬きするほどの間に杖を回転させて円周上に徹甲炎槍を配置すると、標的へ向けて一斉に撃ち放った。

狙い過たず、標的として用意された鎧に次々命中した赤く細い炎の槍が、当たった瞬間鋭い音を立てて炸裂する。

狭い領域に発生した熱と衝撃波が鎧を背後まで貫き、内部の杭を破断する。

それが10本。貫かれ、真っ赤に溶けた鎧が内部の杭ごと爆ぜ飛んだ。

徹甲炎槍の魔法自体は爆炎球よりやや上の中級魔法に分類される

が、一瞬でその魔法術式を構築し尚且つ一挙に10本も同時起動するとなると容易なことではない。

さらには驚くべきことに、それだけの規模の魔法を放ちながらエルは息すら切らしていない。

それは彼が保持する魔力に対し、徹甲炎槍の消費が負担になっていないということを示す。

そんなものは正騎士すら通り越してこの国の近衛騎士レベルの所業である。

間違っても学園入学直後の生徒に可能な芸当ではない。

吹き飛んだ鎧に一瞥をくれ、エルが振り返るとそこには驚愕に彩られた顔、顔、顔……。

エルがこれはもういつそ開き直ってこれまで通り全開で生きるかと考えていると、キッドとアデイが近づいてきた。

「おー、エルやる気満々じゃねえか」

「むしろ鎧に何か恨みでもあったとか!? というかエル君怒らせると消し炭にされちゃうんだ!？」

「違いますよ。これはその、手が滑ったと言いますか……」

「手が滑ると消し炭なんだ……」

話しながらすすりつと後ろに下がってゆくアデイを、キッドが苦笑しながら止めた。

「ちげえだろ。やっぱ目的があると手え抜けねえんだろ? よし、いっちょ俺もカツ飛ばして来るぜ」

「(ええ、ちょ、そらまずいんとちゃうか? 物凄い目立ってまうで?)」

エルは気持ち声を潜めてキッドに忠告する。

「そんなことをしたら恐ろしく目立ってしまいますよ。ここに居るご兄弟の耳に挑戦状を突き立てるつもりですか？」

「お前これだけブツ放してそれを言うかあ？ 前も言ったけどよ、どうせつるんでるんだからこっちまで辿り着くのなんざ時間の問題だろ？」

「（的確すぎて全く反論できへんな）……来るのも迎え撃つのもほぼ確定ですね……」

「予定通りじゃねえか。んじゃ、ちよいと行つてくら」

先ほどのエルの起こした大惨事に、未だショックが抜けやらぬ演習場にキッドが向かう。

あれほどの魔法能力を目の前で見せられて、なおその後が続こうなどと考える人間は稀である。

その気まずい雰囲気歯牙にもかけぬとばかりに出てきたキッドを、周囲は同情するような視線で眺めていた。

しかし、それも彼が魔法を使うまでであった。

「（さすがはエル、我らが師匠つてか。追いつくのは厳しいつつても、ちよつとくらいはカマしてやんねーとな！）」

気合いを入れたキッドが爆炎砲撃フレイムストライクを放つ。

単発だが威力の拡大率で徹甲炎槍を凌ぐ高火力の中級魔法。

派手な炎の尾を曳いた楕円形の魔力球が飛翔し、爆炎球を凌ぐ爆発を起す。

アデイがそれに続き、雷撃投槍ライオットスパローを放つ。

雷撃投槍はその名の通り、電撃を槍状に収束し、標的へと放つ中級魔法である。



眩い雷光が煌き、大気を裂く轟音と共に標的に雷の槍が突き刺さる。

雷の系統は威力は火の系統と場合により分けるといったところだが、性質上相手へと正確に誘導することが難しい。

地味に制御の負担が大きく、扱いが難しいため他の系統よりも上位として扱われることの多い魔法である。

二人とも手馴れた様子で魔法を放ち、無理をしている様子はない。さきほどのエルよりは地味ではあるものの、十二分に同年齢の平均をブツちぎる魔法能力を見せる二人に、周囲から何かを諦めた溜め息が漏れた。

以前述べたが、上位クラスの人間は貴族や商人の子供が多い。

それはとりもなおさずプライドが高い子供が相当にいるということである。

子供らしい短気さと結びついた幼い自尊心は、容易に勘気になりうる。

だが、目の前で見せられた光景は自尊心ごと対抗心を砕くだけの威力があった。

明らかに意気消沈したクラスの様子に、別の意味で失敗したかと困惑するエル達だった。

上位クラスの受難はまだ続く。

魔法に続き実施された剣術の授業。

先の授業で常人離れた能力を見せた3人に対し、周囲の生徒は“剣術まで化け物だったらどうしよう”と不安で仕方がなかったが、運動能力が高かったものの技術的には他の生徒と大差はなかった。

少しは安心したのもつかの間、エルとキッドが簡単な模擬戦を始めた時にその安心は脆くも崩れ去る。

二人の模擬戦は最初は軽い打ち合いだったが、お互いにいつもの相手であるため、何時の間にかいつもと同じ訓練メニューになっていった。

動き自体はまだまだ荒いが、互いに限定身体強化を発動しての恐ろしい速度の打ち合いに発展するまでさほどの時間は掛からなかった。

当の本人たちはこれでも遠距離魔法や機動系の魔法を使わずに流し練習のつもりだったが、周囲の人間からするとそこだけ別次元の空間である。

魔法を併用しての剣術訓練など、初等部では触りを習うかどうかというところ。

その上文句なしの上級魔法である身体強化を併用しての戦闘など、冗談もいいところであった。

驚愕や嫉妬を通り越し、上位クラスの生徒達は一つの悟りを開いた。

“アレは放っておいて自分たちの分を頑張ろう。それとアレに逆らうな。逆らうと死ぬ。”

一日が終わる頃には逆に晴れやかな表情になったクラスの生徒に、エル達は何ともいえないものを感じるのであった。

“ 今年の新生には上級魔法を軽々と使いこなす化け物がいる ”

その噂は数日と待たず同学年を越え、騎士学科中に響き渡ることになる。

しかし、直接目撃していない人間にとっては眉に唾をつけたくな

るような噂だ。

何故なら百歩譲って上級魔法を構築したのはいいとしても、必要魔力が壁と成り立ちはだかるからだ。

人が持つ魔力の量とは多少の差はあれ、概ね努力と訓練により増大するものであり、同年代でそこまで極端な差が出るものではない。たかが初等部の新入生が上級魔法に必要な魔力を賄えるとは到底思えなかった。

エルは学園への入学時点で6年にも渡り普通は過酷といわれるレベルの訓練を絶やさず続けている。

多少の遅れはあれどキッドとアデイも訓練量は相当なものであり、保持魔力だけなら一般的な成人の騎士にも引けを取らない。

しかし噂を聞いただけの生徒にそんな事情がわかるはずもなく、噂の真相を確認すべく物見高い一部の生徒が初等部の付近に現れるようになったのだった。

「おや、これはアーキッドじゃないか。久しぶりだなあ？」

そんな上級生の姿も見慣れたものとなった頃、廊下を歩いていたキッドは最も会いたくない人物に遭遇した。

彼の名はバルトサール・セラージェイ。

キッド・アデイの異母兄にして昔から彼らに嫌がらせを繰り返す人物だ。

その容貌は彫りが深く、整っていると言ってもいい顔立ちだが、口元に浮かべる笑みの嫌らしさがそれを損なっている印象があった。異母兄のいつもながらのにやにやとした表情に反射的にキッドは顔を顰めそうになるが、表面上は平静を保っていた。

「お久しぶりです。バルトサール兄様」

「噂を聞いたんだよ、噂。他愛もない話なんだがな？ 今年の新生に凄いのがいるらしいなあ？」

バルトサールの身長はキッドを上回る。

何が楽しいのか、彼は笑みを浮かべキッドを見下ろしたまま話を続ける。

「それがどうにもどうにも？ 詳しく話を聞けば誰かさんにそっくりだそうじゃないか？」

「そうなのですか？ 私はその噂を知りませんが……」

ついにきたか、とキッドは内心で気合を入れた。

常よりもさらにくどいこの態度を見れば、果たして愉快的な会話が期待できそうにもなかった。

「兄にむかってその態度、やはり新入生のガキじゃあまだまだ礼儀ができてないなあ？」

「……申し訳有りません」

「まあいい、私は寛大なんだ。躰のなっていないガキも広い心で赦そうじゃないか」

「……有り難う御座います」

「それよりも、そう、さっきの噂だ。アーキッド？」

バルトサールの目元が細められ、口元の笑みが更に深くなる。

キッドの背中を言い知れぬ気配が走る。

「（本題はここから、さてどう出る……？）」

「アーキッド？ それにアデルトルートもだ。お前たちも少な

らず魔法は使えるだろうが。

そう、少なからずだ。入学したてのガキにできることは少ないんだ。なあ？

しかるに噂の本文は下らない物だ。実に下らない。その通りなら……」

バルトサールの目がいつそう細められる。

「お前たちは既に正騎士並みの魔法を使えることになるじゃないか？　なあ？」

「兄様、それは」

「まさか、まさかだろう？」

バルトサールの口元から笑みが消える。

そのままにじり寄るように進みだし、周りを憚ってか声を潜めた。

「妾のガキごときに、随分と分不相応な話じゃないか？　なあ？」

「……家の近所に魔法を教える者がいまして、彼から習いました」

「お前らが？　上級魔法だと？　噂は無責任な物だ。」

何を誤魔化したのか知らないが周囲が勘違いしてるんだろう？」

「いいえ、概ね事実です。兄様、私たちは……」

「もういい、黙れ。」

バルトサールの口元は笑みとは逆の方向に歪められていた。

段々と感情的になるバルトサールに、キッドは何があっても対処できるように全身を緊張させる。

しかしキッドの予想に反し、バルトサールはふっと表情を消して問い掛けてきた。

「それでどうするつもりだ？　アーキッド」

「どう……とは？」

「上級魔法、騎士学科。随分と豪勢な騎士ができそうじゃないか？  
騎士か？ それで？ 手土産でも持って我が家へ帰るつもりか？」

表情を消したまま、バルトサールは淡々と問いかける。

「兄様、以前から言っているとおりは。私たちは実家とは関わるところは、ありません。」

騎士を指したのとてそれは生活を考えることです。」

「いいぞ、優しい兄は愚弟の言葉を信じてやるうじゃないか」

「ありがとうございます……御座います」

再びにやついたような笑みを浮かべたバルトサールは踵を返した。捨て台詞を残し去ってゆくバルトサールの姿に、キッドは溜め息を隠せなかった。

「（この場でどうこうっつーのはなかったがよ。ぜってえこのまま終わるなんてこたあない。」

嫌がらせくらいなら我慢すつけどよ、下手な騒ぎにならねーことを祈るぜ）」

心中とは裏腹に、キッドは悪い予感を払う事が出来ないでいるのだった。

キッドがバルトサールと話しているころ、エルとアディは別の場所で見覚えのある人物と遭遇していた。

「噂は聞いたわ。“図書館の姫君”は魔術、体術ともに非常に優秀

なようね?」

「こんにちは、生徒会長。それと噂はともかくその呼び名は止めていただきたいのですけれど」

「あら? どうして? 似合ってるのに」

エルはチラリと横のアディを見やる。

「(毎回会ったたびご機嫌なんやけどほんまこの人何のつもりなんやろ。」

こないだの話聞く限り、この人自身はキッドやアディに嫌がらせをするつもりは無さそうやし……)」

折角この場にいるのだから、とエルはその理由について直接聞くことにした。

「そつえば、前から気になっていたのですが」

「何かしら?」

「キッドとアディでしたら兎も角、生徒会長が主に僕に話しかけてくる理由はなんでしょうか?」

「あら、それはとても簡単な理由よ」

腰に手を当て、自信に溢れた表情でステファニアが言い切る。

「私は可愛くて賢い子が好きだからよ!」

あんまりな理由にエルとアディが凍りついた。

とつさにエルが裏手ツツコミを入れかけたが、驚異的な精神力で自重する。

「前々から図書館の姫君には目をつけてたのよねえ

実際見たら

凄く可愛い子だったし、しかも賢い！」

我慢できないとばかりにエルを抱きしめにかかる。

「魔法も得意で騎士を目指してるんでしょう？ どう？ お姉さんを守る騎士になってみない？」

「今なら3食添い寝付きで……」

「ちょ、ちょっと駄目よ！ エル君は私のぬいぐるみなんだから！」  
「（なにこの家系こわい。つーかアデイ、なんでぬいぐるみやねん）」

衝撃の告白に固まっていたはずのアデイが素っ頓狂な声を上げたかと思うとエルを奪還した。

ステファニアに対する言葉遣いが素に戻る勢いだ。

それを見るステファニアは笑顔というよりにやけているとか例えたほうが的確な表情をしている。

元が美人だけにどこことなく空恐ろしく感じる笑顔だった。

「あらあら、これはこれなるほどねえ〜」とかつぶやいていた気がしたが、エルは黙殺した。

「アデイ、言葉遣いが戻ってますよ」

「しまったと言いたげな表情でアデイが口を押さえる。

「いいわよ、学校でまで無理しなくても。私はバルトと違ってそんなの気にしないもの」

「姉様がそうおっしゃ……言っただったら」

「それはそれとしてアデイ？ そろそろ離して貰いたいのですが？」

「ほへ？ あ、ごめんごめん。あまりのすっぱり感につい……」



漸くエルは解放される。

ステファニアがそれを羨ましそうな視線で見ている。

「そうなのよね……エル君、君のサイズ、こっ、腕の中にすっぽり入る丁度よさ……」

「ええ、姉様。しかもエル君、髪の毛さらさらで……」

「アデルトルート……貴女、さすがは私の妹ね！」

「姉様……！」

エルはがしつと手を取り合う姉妹からそそくさと距離を取る。

「（いやちよお待とうやそこの変態姉妹。」

「つーかこんな変態が生徒会長でいいのかよ？ 裏で職権乱用とかしとんのちゃうか）」

どんどん議論が白熱する姉妹を横目に、これまでとは別の意味で学園生活の不安がぬぐいきれないエルだった。

# 8 授業をつげよう(後書き)

1 1 / 1 / 1 6 表現、内容微修正。

1 1 / 2 / 2 7 表現微修正。

## #9 決闘の時間

一部授業をのぞき、3人とも普通に学園生活を送っていた。剣術に関しては魔法を使用しないことである程度問題はなく、魔法に関してはもはや学園で習う事がないレベルだった為早々に自習になっていた。

そんな自習時間を利用し、エルはウィンチエスターの習熟訓練を行っていた。

標的と向き合い、腰にかけたウィンチエスター？&？を抜き放つ。ウィンチエスターをバトソンから受け取ってから、幾度となく練習し繰り返し返した動作。

以前の記憶・経験と重ねて、抜刀と運用は既にエル感覚に馴染んでいた。

エルにとっては、ウィンチエスターは魔法を使うための道具というよりは既に銃としての認識の方が強い。

それも発射するのは魔法であり、認識する魔法の種類だけ弾が選べるまさに“魔法の銃”だ。

エルは切っ先を標的に向けたまま“銃”としての発射に最適化した魔法術式を呼び出した。

「バレット（右弾種設定・エア・バレット“空気弾丸”、モード発射形態・フルオート“連続射撃”）」

魔術演算領域へ選択された魔法術式が展開し、瞬きするほどの間に追加の関数を呼び出し発射形態に合わせる。

フルオート連続射撃 前世の銃と同様に、弾丸を続けて発射するための制御文を付帯する。

右手の銃から魔法発射に特有のやや甲高い、乾いた発射音が連続して響き渡る。

弾に選ばれたのはお得意の空気を圧縮して弾丸にする魔法だ。

連続して対象に命中したそれは、当たった端から炸裂し強烈な圧力を標的に与えていた。

「（左弾種設定・バレット “ 火炎弾丸 ”、モード 発射形態・キャニスタショット “ 単発拡散 ”）」

左手は設定を変更する。

威力の低い炎の弾丸を同時に16発、網を広げるように拡散して投射する形態。

全く別の魔法術式を平然と同時に処理できるあたり、エルの処理能力の高さが伺える。

発射音が重なり、常よりも高い音が訓練場に響いた。

同時発動数の拡大も、連続発射も制御文の付加により簡単に実現できる。

「（さて他になに再現できるやる。3点バーストは鉄板にしてもグレネード？それただの爆炎球。もうちょっとおもしろい撃ち方なかったやるか？）」

この“魔法の銃”と前世における銃の最大の違いは弾切れがないと言う点だろう。

正確には魔力が続く限り撃ちつづけられる。

しかし、エルはまるで弾倉マガジンがあるかのように24発を1セットとして魔法術式の更新を要求するようにし、連続発射数に制限をつけた。

これは発射数の計数が容易となるようにであり、撃ちすぎによる魔力の過剰消費へのリミッターであり、単に昔の癖に合わせた遊び

の部分であった。

「（リロードのない銃とか浪漫がたりん。

欲を言えば薬莖と排莖機構が欲しいところやけどさすがにそれは遊びすぎやしなあ。

つうか物理的に機構が必要な部分はきつい）」

そんな様子を見て、横で同じく発動練習や魔力トレーニングを行っていたキッドがぼやいた。

「なんつうかよ、“ういんてすた”だっけ？ その武器」

「“ウインチェスター”です。どうかしましたか？」

「武器もそうだけど、その魔法をバカス力連射するやり方って珍しいと思つてよ。

普通は剣の補助にするか、隙を見て一撃狙いになるんじゃないかねえか？ その武器だと連射しやすいとかか？」

「どうでしょう、私はそう思いますけど、大半は感覚的な部分の話ですしね」

キッドは何かを思い悩むようにしばし空中を見ていたが、ややあつて切り出した。

「おんなじような武器を、俺も欲しいんだけどよ」

「あまりお勧めできません」

「即答するじゃねえか。理由は？」

「今の形態では機構上、大型の武器はつけられないのですよ」

ウインチェスターに装着されているのは比較的小型のショートソードである。

エルの体格的な問題もあるのだが、根元のグリップ機構の耐久性

の問題や魔法を放つ場合の取り回しも考えると、根本的に大型の剣を着けるのに向いていない。

キッドが好んで使うのはやや太ぶりのブロードソードであり、当然重量的にもかなり嵩張る代物だった。

「あー……そういうことか。ん、でもよ、それって魔法放つのに必要なのは根元の部分だけなんだから？」

「はい、そうですよ」

「じゃあ、杖の代わりにそこだけ使うのはありなんじゃないか？」

「（なるほど。銃&剣スタイルか。それはそれでよさそうやな）」

一回試して見ますか。製作はまたバトソンさんをお願いしないと  
いけませんけど」

「そうこねーとな」

エル達がこの後のことを話し合いながら教室に戻ると、クラスメイトの様子が少しおかしかった。

休憩時間が騒がしいのは良くある事だが、エル達を見てなんとも微妙な表情をされては、気にするなと言う方が無理だった。

「どうかしたのですか？」

「え？ いや、その、最近君たちのことを聞きにくる人が多くてさ。その、今も……」

「それはなんだか申し訳ないですね。手間を取らせてすみませんでした」

「そつ、そんなの別に手間でもなんでもないから！ きつ気にしないで！」

クラス……どころか学科に有数の実力者（しかも非常に可愛い外

見の！）に普通に頭を下げられ、クラスメイトは顔を赤くして焦ったようにわたわたと答えていた。

「しかしそんなに頻度が高いのですか？」

「結構来るみたいだよ？ でもまあ、大抵は少し質問したら帰っていくようなんだけど、さっきはなんていうか凄くしつこい人がいてさ」

「しつこい……」

キッドとアディは無言で視線を交わした。

それをちらと見てエルもなんとなく状況を察する。

「ねえ、そいつ、常に口元がいやらしくニヤニヤ笑ってて豚が腐ったような顔してなかったかしら？」

「（その例えに該当するんってほんま人間か？ いっちゃん最初に検索ヒットするのE Tやねんけど？）」

「ええ！？ そんな凄い顔してなかったよ！ ……あ、でも口元が笑ってつてのは、あつたかも」

キッドとアディが頷きあう。

「そうなんだ。あ、いろいろありがとうね？ 今度からそういうのって私たちが対応するって断ってくれたらいいからさ」

「なんだか全校生徒の前でガツーンとブツ放つのが一番楽な気がしてきたぜ」

「一理ありますね。だからとて見世物になる気は毛頭有りませんが」

これでクラスメイトの負担が少し軽くなるか、と3人は思った。

しかし、その後も“しつこい上級生”は何回か出没した。

その上級生は、大抵エル達と会わないような場合に現れ、話はエ

ル達本人に直接聞いてくれという上級生である事を理由にその場での回答を強制し、なおかつ内容によってはしつこく否定してくるらしい。

直接的な害はないがその影響も無視できなくなってきた。

クラスメイトとの間に漂う雰囲気はだんだんとギクシャクしてゆくのを、エル達は感じていた。

バルトサール・セラージェイは苛立っていた。

キッドと話した後、噂に興味のある上級生と言う風を装い、彼のクラスメイトにそれとなく聞いてみたのだが、彼らはキッド達の能力が如何に凄まじかったかを語った。

クラスメイト達の話は彼らが実際に見た光景なのだが、バルトサールにとってはその内容が信じがたく不愉快極まりない。

キッド達の実力は凄まじく、話のとおりならばバルトサールよりも遥かに強いことになる。

バルトサールにとっては妾腹の弟が自分より高い能力をもつなどあつてはならないことだ。

感情的にも受け入れられるものではないが、不機嫌の主な理由はバルトサールの立場によるものだった。

セラージェイ家はフレメヴィーラ王国では有力な貴族だ。

所有領の広さこそそこそこではあるが、地形がなだらかで大規模な穀倉地帯が存在する。

また位置的にポキューズ大森海に近い位置にあるため、魔獣を警戒し国内有数の規模を誇る騎士団を擁する。

前線と接する重要拠点とも言え、そのため最前線として常に人と物が行きかう活動の活発な場所であり、自然経済的にも発展してい



た。

セラージェイ家には3人の子供がいる。

長男のアートスは家の跡取りとして貴族としての教育を専門に受け、すでに父について領地経営の補佐を始めている。

長女のステファニアが現在ライヒアラ騎操士学園中等部3年、次男のバルトサールは現在ライヒアラ騎操士学園中等部1年である。

本来は妾腹の子供があと2人いるのだが、正妻と本人たちの希望により一般には知られていない。

一般に貴族の次男以下の男手は、大体の場合は騎士、もしくは官僚としての能力を求められる。

ゆくゆくは自領地の経営補佐に入るか騎士団へ参加するか、直接国に仕えるかである。

セラージェイ領には国内有数の騎士団があることもあり、バルトサールは当然騎士を目指した。

“騎士の国”では騎士団を率い、魔獣から領民を守ることは貴族として最も誉れ高い役目とされる。

領主や国王への尊敬とは別に、直接自分たちを守ってくれる者が尊敬を勝ち得るのは当然だからだ。

それ相応の能力は求められるが、領主の子弟ともなれば騎士団を率いる事も夢ではない。

そのためにもバルトサールはこれまで努力を続けてきた。

長兄の下で騎士団を率いる事を疑いもしなかったバルトサールだが、ここに来てのキッドの台頭が影を落とす。

これまでのバルトサールの努力を一笑にふすキッドの能力。

もし、本当に現時点で正騎士にも匹敵するだけの力があるなら、下手をすればいずれ国を代表する騎士にまで上り詰めるかもしれない。

い。  
いくら今は実家とは無縁の境遇にあるとは言え、それだけの能力があれば父の耳にもその名が伝わるだろう。

それほどの騎士を、しかも妾腹とはいえ領主と血縁にある人物を周囲が捨て置くとはとても思えない。

騎士団を率いるには単純な戦闘能力だけが問題になるわけではないが、それでもその性質上、より強い者が優遇される傾向はある。直接率いるかは別としても、キッドが現在バルトサールが目指す位置を脅かしていることくらいは簡単に想像がつく。

自身がつくべき名誉ある立場に、しかも妾腹の弟がつく。それはバルトサールにとって悪夢意外の何者でもなかった。

彼は考える。

これまでは目障りではあったが、実害もなければたいしたことも出来なかった妾腹の弟。

その油断が現在の状況につながってしまった。

もはや事態は一刻を争う。排除をできるだけ急ぐべきだが、噂の通りなら現時点でも正面きって戦いを挑むのは得策ではない。

キッドの能力をうまく抑えて、安全で効率的に排除する方法を模索する。

バルトサールは馬鹿ではない。

むしろ他を犠牲にすることを厭わないその性格は、時に卑劣な策を自らに与える。

常からにやついた笑いを浮かべるバルトサールの口元が、さらに醜悪な弧を描いた。

「これはどういうことでしょうか？ バルトサール兄様」

アデイの前ではバルトサールがいつもの笑みをへばり付けて立っている。

だが、問題はその周囲だ。

バルトサールの後ろに3人、そしてアデイの後ろに4人、まるで道を塞ぐようにして男達が立っていた。

一人で廊下を歩いていたらバルトサールに呼び出され、人気の少ないところに連れて来られた。

大声で罵声でも浴びせ掛けるのかと思って油断したのは失策だった。

アデイとしてもいくらなんでもバルトサールがここまでやるとは考えていなかったため、気付けば囲まれてしまったのだ。

「彼らは私の友人だよ。なに、聞き分けのない新入生に、礼儀を教えるのを手伝ってくれるそうでねえ？」

バルトサールの仲間は無言でにやにやと笑っているだけだった。

「礼儀は授業で学んでいる途中です。皆様のお手を煩わせるほどのことではありません」

「妾腹のガキには、授業だけじゃあ全然足りてないね。」

兄が手づから教えてやるうというのだ、平身低頭するのが本来というものじゃあないかね？」

バルトサールの子分の一人が前に出る。

「そつ、お嬢さんは大人しくして……」

もはや付き合っていていられないと判断し、アデイはその言葉が終わるのを待たず素早く腰の杖を抜く。

リミテッドファイナルブースト  
限定身体強化を展開、近寄ってきた子分が反応しきる前にその腹に肘鉄をかける。

とにかく逃げ出すにも包囲を突破しなければいけない。

アデイは子分の一人が悶絶して倒れた隙を逃さず、そのまま強化された足で駆け出す。

予想以上のアデイの動きに浮き足立つ子分どもの間を勢いをつけて突破しようとしたその時、

「スパークダート  
電撃矢」

アデイに背後から電撃が浴びせられた。

「かはっ」

致命傷ではないものの、電撃が直撃し体が痺れたアデイはそのままもんどりうって倒れる。

「（くっ、失敗したあ……駄目、気が……遠……く……）」

薄れ行く意識の中、アデイは電撃を放ったバルトサールがいつものにやけ顔のまま近づいてくるのを見ていることしか出来なかった。

アデイが意識を失ってしばし後、キッドの下へ望まぬ客が訪れていた。

「おや、今日は教室に居るのだね？ 天才君」

キッドは驚いた。

バルトサールは実家から離れている状態のキッドに話し掛けるのに、今までは多少場所を選んでいたようであったが、今回は大勢の人がいる場所で堂々と話し掛けてきた。

一瞬何と呼ぶべきか、キッドが言いよどむ。

「先輩、今日はなんの御用でしょうか」

キッドの質問に、バルトサールが常の笑みを浮かべたまま高らかに答えた。

「君に決闘を申し込む！」

「!?!」

周囲が一瞬シン、と静まり、直後抑えきれないどよめきが広まる。

「噂を集めるのも飽き飽きしてねえ。天才新入生と誉高き君の實力、この手で試させてもらおうか！」

「（こいつが遠まわしにでも誉めるなんざありえねえ。何かある、絶対何かろくでもねえこと考えてやがる!）」

「答えはどうしたんだい、天才新入生君？」

「いいじゃねえか……受けて立ってやるよ！」

これまでのように嫌味を言われるなら兎も角、正面から戦いを挑まれたのだ。

もはやキッドに態度を取り繕う気はなかった。

「なんと口汚ない……品性を疑うね。その化けの皮、何処までもつか楽しみだよ」

ライヒアラ騎操士学園では生徒同士の戦闘行為を禁止しているが、“決闘”と呼ばれる戦闘だけは例外だ。

決闘にはルールが存在し、必ず1体1で行うこと、決闘に参加する両者の合意が必要であること、別に審判となる人間が必要であること、そして審判の言葉と判断には従うことなどが決められている。他には武器は練習用の木剣を使用し、周囲に被害を及ぼさないため放出系の魔法が禁止になっている。

決着は片方の意識の喪失もしくは敗北の意思表示により付けられる。

騎士学科はその性質上、揉め事の解決を決闘で付けることも多く、学園内には“決闘広場”とも呼ばれる定番の場所まで存在する。

バルトサールとキッドの決闘の話はすぐさま周囲へ広がった。彼らが決闘広場に到着すると、噂の天才新入生の戦いを一目見ようとかなりの野次馬が詰め掛けているようだった。

生徒の一人が審判を買って出、決闘のルールを読み上げた。

両者の合意が確認され、二人が向かい合ったところでバルトサールが胸元のポケットから何かを取り出す。

それを見たキッドの表情が強張る。

「（あれは……今朝アディがつけてた髪留めじゃねえか！？ まさかこの下衆野郎……！！）」

驚愕の思いでバルトサールを見返せば、常よりもより深い笑みを浮かべた顔と目が合った。

キッドは相手の狙いを一瞬で悟る。

「てめえ……アディに……」

「ふん？ 何のことかわからないが」

バルトサールは既に高笑いを始めそうな様子だ。

「天才君はすでに上級魔法が使えるのだろう？ どうだい、一つみせてもらえぬいかね？」

キッドは低く唸った。

わざわざそんな事を言い出すのは、裏を返せば使うな、ここで恥をかけという事である。

その証拠に、バルトサールはそう言いながらも髪留めをちらちらと見せ付けていた。

「……そんなの、使えねえよ……」

キッドは肺の奥から搾り出すようにして答える。

周囲の観客からどよめきが上がる。

噂の新生は、実は何かの間違いだったのだろうか？

そして何より驚いたのはキッドのクラスメイト達だろう。

何を言っているんだ、以前アレだけの力を見せつけた君が？

「なんだ、なんだそれは！ ツヒアツ天才君なんていうのは何の間違いかい？

全く、ぼろが出るにも早いじゃあないか！ さっきまでの威勢はどうしたんだね？ ツヒアツ」

視線で人が殺せるなら、バルトサールはキッドの視線に射殺されていただろう。

そんな視線を意にも介さずひとしきり笑ったあと、バルトサール

は告げる。

「やれやれ、嘘をついてまで目立とうなんて、随分と不逞の輩じゃないか。」

新入生の腐った性根を叩き直すのも上級生の勤めというものだね？  
さあて、そろそろ始めようじゃないか」

そして、決闘という名の処刑が始まる。

「どうしたんだね？ 天才君！ 魔法も使えなければ剣術もさっぱりじゃないかね！」

剣を打ち合いながらバルトサールが嘲笑う。

キッドはよほど怒りにまかせて反撃しようかと思ったが、時折ア  
デイの髪飾りを見せられてはそれもかなわない。

傍目にはキッドの動きのキレは鈍く、決闘の開始から30分余り、  
ほとんど一方的に攻められる有様に見える。

何回か反撃するも、明らかに勢いに欠け、直ぐにバルトサールに  
押し返されている。

周囲の人間は噂の新入生の体たらくに失望の色を隠せない。

何を間違ったのか噂は所詮噂で、生意気な新入生が現実を知って  
終わるだけ。

既に飽きてその場を立ち去った者もいた。

だが、一部の生徒は違和感を覚え始めた。

相当数の打撃が直撃しているはずだが、キッドはそれでも立って  
構えていた。

圧倒的優位に酔うバルトサールはその違和感に気付かない。



ただまだまだキッドを打ち据える事ができることに喜ぶばかりだ。  
バルトサールを倒せない以上、キッドには攻撃を耐え凌ぐことしか出来ない。

果たしていつまで続くかはわからないが、それでもキッドは反撃の時をひたすらに待っていた。

本当にそのときが来るのか、キッドにも確信はない。

だが、彼にも望みはある。

彼の親友がこの状況でこの場所にいない。

これだけ仰々しく騒いでいるのだ、きっとその耳には入っていないはず。

ならば、親友が動かないはずは無い。

「（頼むぜ親友……ここで頼れるのはお前だけなんだからよ！）」

## #9 決闘の時間（後書き）

1 1 / 1 / 1 6 表現・内容微修正。

1 1 / 2 / 2 7 表現微修正。

## #10 決闘の決着

エルが調べ物をしようとして図書館へ向かっていると、突然誰かに後ろから抱きしめられた。

訝しげにエルが視線を上に向けると、果たしてそこにはエルの髪に頬擦りをするステファニアの至福の表情があった。

「ああ、このさらさら感、癖になりそう」

「（弟警戒しとつたらまさかの姉からの襲撃かい）生徒会長、もう擬態すら止めましたね……」

「こんなにサラサラな髪の毛がいけないによよう。この小・悪・魔ちゃんめ」

ステファニアはほお擦りをしたままエルの頬を指で突つつく。

「ひとまず正気に返ってください。そして離してください」

「あら、動揺もしいなんてお姉さん自信なくしちゃうわ」

「（やべえこの変態、完全にキヤラかわつとんがな）」

「そうそう、あまりのサラサラ感に本題を忘れるところだったわ」

「（諦めよう、こいつもうあかんわ……）」

かなり投げやりになりつつあるエルだったが、次のステファニアの言葉で急速に冷静さを取り戻す。

「アデイがね、バルトに呼び出されたみたいなのよ」

「！ それは……」

何かを言いかけてエルが言いよんだ。

確実にトラブルが起こっているが、最終的にはこれは身内の問題

になる。

エルには、どこまで首を突っ込んでいいものか判断がつかなかった。

しかし、そんな迷いも次の一言で吹っ飛ぶ。

「……それにね、バルトのほうはかなり大勢だったのよね」

「あまり人様の身内をどうこう言いたくはないのですが。非常にろくでもない予感しきしませんね」

エルの内心は言葉ほど冷静ではなかった。

兄妹喧嘩ならまだしも、人数を揃えてとなると話は別だ。

「エル君にはアデイを探しにいつて欲しいの」

「……いいのですか？ こう言うては何ですが、もしアデイに危害が加えられた場合、貴女の弟御とはいえ容赦できそうにないですよ？」

精神的には既に30台半ばも過ぎるエルだが、親友が大勢をもつて害されてまで大人しくは出来そうにない。

「死なない程度にお願いね」

「割り切りますね」

「バルトが一人で動いているのならまだいいの。」

「……でも今回は違う。生徒会長として、姉としても見過ごせないわ」

ステファニアは苦笑するような表情を浮かべている。

二人の視線が交錯し、エルは即座に決断した。

「アデイが連れて行かれた場所を、教えていただけますか？」

学園内にある今は使用されていない一角に、アデイとバルトサーの子分はいた。

アデイは今、両腕を後ろ手に縛られ、足も縛られた上で椅子に座らされている。

バルトサールの電撃により意識を失ってから1時間ほど、彼女の意識は戻っていない。

「チツ、このガキが、やってくれるじゃねえか！」

「おい、意識失ってるんだからあんまり余計なことすんな」

アデイの意識が無いにも拘らずこれだけの人数が居るのは、彼女が意識を取り戻して暴れた場合の備えだった。

そして苛立ちを抑えきれない様子の男は、アデイが包囲を突破しようとして肘鉄でのした男である。

彼もつい先ほどまで気絶していた。

「なんだよ、氣い失ってる上に縛り上げてるんだぜ？ そんなびびるこたねえだろ」

「一発でのされたくせに偉そうに言う」

「ああくそ、油断したんだよ！」

その男は気絶しているアデイの髪を乱暴につかみ、上を向かせた。

「ガキだと思つて手加減してりゃあ付け上がりやがって、一発思い知らせてやらねえと気が済まねえ！」

周りの子分達は呆れる。

彼がやられたのは手加減も何も、完全な油断を突かれて一撃で熨されただけだ。

そしてもし殴りでもしてアデイが意識を取り戻せば少々厄介なことになる。

男を止めようと、別の子分が手を伸ばした瞬間。

突然、教室の後ろから人が入ってきた。

ほとんど人が出入りしない場所だと高をくくっていた子分達は、突然の侵入者への対処が遅れた。

驚きつつ振り向いたとき、彼らが目にしたのは銀色の弾丸が剣を抜き走り出す姿だった。

侵入者……エルは迷いなくウインチエスターを抜刀し疾走する。

同時に風の中級魔法である風衝弾エアロタムを3点バーストで左右に同時発射。

放たれた風の弾丸が奥にいた二人に直撃し吹っ飛んでいくのを確認もせず、エルは身体強化でさらに加速し、今しもアデイに殴りかかるうとしていた男に斬りかかった。

男は慌てながらも迎撃しようとしたが、強化状態で走るエルのほうが圧倒的に速い。

エルはその状況でも冷静だった。

直接斬りはせず、疾走中に刀身に真空衝撃ソニックブームの魔法を展開、衝撃波で男をブチ飛ばした。

瞬きするほどの間に3人の仲間が仲良く切り揉みながら吹っ飛んでいくのを見て、残る1人は驚愕に動きを止めた。

それは侵入者が明らかに幼かったからであり、それが突然暴風のような勢いで全員を吹き飛ばしたからだ。残念なことになんか隙を見逃してくれる相手ではなかった。

とっさに構えた杖が一瞬で両断され、もう一刀が横合いから襲い

来る、それが彼が記憶している最後の光景だった。

暴風の勢いで子分4人を瞬殺したエルは、彼らが気を失っているのを確認してアデイに駆け寄る。

彼女を拘束する縄を切り、様子を確認すると怪我もなく呼吸も落ち着いており、気を失っているだけのようだ。

アデイの無事を確認したエルは一息ついた後、転がっていた子分たちを縛り上げにかかった。

全員の手脚を縛って拘束すると、エルはアデイを横抱きに抱え上げる。

悲しいかな、アデイの方が身長が高いため大幅にはみだし気味だがなんとかバランスをとる。

此処に来るまでに聞きつけた騒ぎの様子で向こうで何が起こっているのか、凡そのところは把握していた。

エルには向こうの様子は窺い知れないが、キッドが何もせずにはやられるとは思っていない。

「間に合ってくださいよ……」

エルは一刻も早くキッドの下に向かうべく、騒ぎの中心に向けて走り出した。

ライヒアラ騎操士学園の校舎の間にある中庭、通称“決闘広場”では、2人の生徒の戦いが未だに続いていた。

戦いは既に1時間の長きに渡り、ほとんど一方的な内容にも関わらず未だに決着の気配は無い。

バルトサールは此処に至り、漸く違和感を覚え始めた。  
キッドの剣術の腕前は其処まで高くは無い。

この戦いの間にキッドに剣が直撃した回数は数え切れないほどに  
上る。

木剣とは言え、普通は動けなくなるほどのダメージになって然る  
べきだ。

それが、確かに動きは鈍ってきているものの其処までのダメージ  
を感じられない。

人質を気にしてか積極的な攻めは行つてこないが、それにしても  
その瞳には強い光が宿り、何かを狙っていることは明白だった。

「(なんだこのタフさは？ 何故まだ倒れないんだこいつは！

まさか、アデイが自力で脱出してくるまで粘るつもりか？

確かにアデイもかなりの動きを見せた、有り得ない話じゃない)」

バルトサールが再びにやりとほくそ笑む。

キッドは、例えアデイが目を覚ましても縛り上げられている上に  
監視がついていることを知らない。

余計な希望も潰してやるとばかりにキッドに話しかけた。

「……なにを時間稼ぎをしている？」

「……！」

「あれがくるのを期待しているのかね？ だったらそれは無駄だと  
しか言いようが無いね？」

まあ私も飽きてきた。そろそろ決着をつけようじゃないか。なあ  
？」

アデイの髪飾りを殊更見せ付けるようにしながら木剣を構えなお  
す。



キッドの顔がこわばる。

彼も見かけほど無事ではない。

ダメージは確実に蓄積しているし、この上全力で攻撃を受ければ切り抜けられるかは微妙なところだった。

しかも、先ほどからバルトサールの視線はその狙いを雄弁に語っている。

「（避けるな）」

本当に決着をつけるつもりなのだろう、次の攻撃は恐らく渾身の一撃になる。

今の状態のキッドには、避けずにいて無事に済むとは思えなかった。

バルトサールが気合と共に間合いを詰めようとするのと、その影が飛んでくるのはほぼ同じタイミングだった。

決闘を見守る野次馬達の頭上をまとめて飛び越し、その最前列に突如として現れる。

かなりの大ジャンプ、しかも女性を横抱きに行っているにも拘らず、着地は何か柔らかいものを踏んだように音もなくスムーズだった。

野次馬達が驚いて自分達を飛び越した小柄な影を見る。

それがアデイを抱えたエルであると確認した瞬間、野次馬の中のクラスメイト達はこの決闘に決着のときが来たことを悟った。

それを横目に確認したバルトサールの表情が驚愕に歪んだ。

アデイは縛り上げた上に見張りまでつけていたはずだ。

それを突破してきた？ 彼の子分達は一体何をしていたのか？

それよりアデイを抱える銀髪の子供は一体誰か？

バルトサールには状況が全く理解できなかった。

移動している間に目を覚ましたアデイが立ち上がり、バルトサールを一睨みした後、キッドに向き直る。

握りこぶしから親指だけを立て、そのまま首を横に掻つ切る仕事を  
をする。

それを見たキッドの全身から力が抜け、笑い出しそうになる。  
キッドはアデイの後ろに居るエルを見て話しかけた。

「遅せえよ」

「すいません。教室がやたら多いのがいけないのですよ」  
「なんだよそりゃあ。まあいいけどよ」

笑いながら、キッドが木剣を構えなおす。

バルトサールは今にも叫びだしたい気分だったが、こと此処に至  
つては事態が最悪の方向へ向かっていることを悟らざるをえない。

だが、とバルトサールは思い直す。

確かにキッドを押し付けていたアデイという切り札がなくなった。  
だからと言ってこれまでキッドに与えたダメージがなくなるわけ  
ではない。

今ならまだ速攻で勝負を決められるはずだ。

バルトサールは再び渾身の力を込め、キッドに斬りかかった。

果たしてキッドの動きはそれまで散々に打ち据えられていた人間  
のそれとは思えないほどだった。

弾かれたような勢いで踏み出し、軽く剣を払うとそのままシヨル  
ダータツクルの要領でバルトサールを弾き飛ばす。

バルトサールが吹っ飛び、一旦間合いが開いた。

キッドの魔力容量はエルには敵わないものの、それでも相当な量を誇る。

これまでの戦いでかなり消耗していたが、それでも暫くの間全力で動いても問題ない程度は温存されている。

「（今までの借り、まとめて熨斗つけて返してやらあ！）」

キッドがエル直伝の身体強化フィジカルブーストを全開で発動した。

足元の石畳を踏み割りそうな勢いでキッドが加速する。

慌てて起き上がろうとするバルトサールが迎撃の構えを取る前に、キッドの木剣がバルトサールの腹に叩き込まれる。

ぐげっ、という声と共にバルトサールの肺から空気が吐き出され、その体が宙に浮いている間に次の攻撃が放たれる。

凄まじい勢いで連撃が叩き込まれ、バルトサールの体が滞空したまま不自然な体勢で回転しようとしているところに、さらにキッドの回し蹴りが叩き込まれた。

今度こそバルトサールの体は縛もつれる様に切り揉みしながら宙を舞い、数mは空を飛んでからべしゃっと地面に落ちた。

一息の間に全力を振り絞ったキッドが大きく息を継いだとき、やっと審判が我に返った。

慌ててバルトサールに駆け寄るが、彼は襪たぶ襪たぶ雑巾雑巾のような姿のまま白目を剥き、泡を噴いて気絶していた。

そのまま審判によりキッドの勝利が宣言される。

それまでの戦いが嘘のようなあっけない幕切れに野次馬もついでいけなかった。

最後にキッドが見せた動きは、明らかにバルトサールなど歯牙に

もかけないだけの力があつた。

ならば途中までのあの体たらくはなんだ？

野次馬の視線がキッドに駆け寄り少女に移る。

彼らも馬鹿ではない。彼女がこの場に來た瞬間、キッドが何かを吹っ切るような動きを見せたのだ。

事情など言わずもがな、というところである。

襤褸雑巾状態のバルトサールに向かう視線が冷ややかなものになつていく。

騎士学科の生徒にとって決闘は力による問題解決の手段ではあるが、それでも勝者に与えられる名誉は神聖なものである。

それをこのような手段で得ようとすることは、騎士というあり方に対する裏切りも同然であつた。

慌てた様子の子分達に回収され、保健室へ運び込まれるバルトサールに対する周囲の態度はどこまでも冷ややかだつた。

この出来事が噂となり広まるまでにさほどの時間は必要ないだろう。

さすがにダメージが重く、座り込んだキッドにアデイが寄り添つていた。

「キッド、大丈夫なの？」

「なんともねえ、とはさすがに言えねえな。随分痛めつけられちまつたぜ」

「うわ、服破れてるじゃない！……あんな豚の攻撃、避けちゃえばよかったのに」

「あんなもんちらかされたんじゃ早々自由にや動けねえよ」

「……！ごめんなさい、私の……油断のせいだ」

キッドは落ち込むアディの頭をぐしゃぐしゃと撫でながら笑った。

「気にすんな、悪いのはあの馬鹿だし。エルもありがとな、ちとやばかったぜ」

「間に合って何よりです。それより」

ちゃっかりバルトサールから髪飾りを回収したエルがそれをアディに返しながら聞く。

「相当に打ち込まれたようですが、その割りにダメージはなさそうに見えますね」

「ああ、あいつこつちが避けづらいからって技もへったくれもなく打ち込んだきたからよ」

苦笑しながらキッドが答える。

「当たる場所に合わせてフィジカルブースト身体強化とハードスキ外装硬化を一瞬だけ使って、ダメージ抑えてやってな」

「なるほど……しかし危険な芸当をやったのけますね」

「他に何も考えずに済んだからできた芸当だな……あとあの馬鹿にも救われた」

もつと全力で急所狙われたら保たなかっただろうな」

「結局、あの人の敗因は全く詰めが甘かったことですか」

エルが頷いている間にも、決着を見届けた野次馬がぞろぞろと解散してゆく。

「では、ひとまず後のことはこちらで片付けておきますので、アディはキッドを連れて保健室へ行ってもらえますか」

「わかったわ。キッド、立てる？」

「大丈夫だ。傷はほとんど打ち身だしな、歩くのには問題ねえよ」

野次馬が立ち去り、キッドとアデイも保健室へ向かうのを見送ったエルはややあつて振り向く。

そこには、一人ぼつんとステファニアがいた。

「良かったのですか？ 弟御へのダメージは、色々な面で軽くはないですよ？」

「……そうね、でもバルトはそれだけのことをしてしまったもの」

ステファニアはむしろ清々しいという表情で首を振った。

「あの子は……本当、こういうところばかりお母様に似るんだから……。」

そろそろしつぺ返しがあってもいい時だったの」

「（やっぱ遺伝なんやこれ）苦労されてるのですね……」

エルはキッドとアデイの実家の事情を思うとなんとも言えない気分になったが、頭を振って気持ちを切り替える。

「後始末はお願いしても？」

「ええ。家のほうとも、話さないといけないから」

エルは一礼してその場を離れた。

結局この決闘騒ぎにより、彼らの能力を疑うものはほとんど居なくなった。

そして、耳ざとい者の間ではキッド達とステファニア家の関係が囁かれるようになるのだった。

## #10 決闘の決着（後書き）

一つイベントを完了しました。

次からはエル達の手に入らずともロボットの出てくる話を考えたいところ。

1 1 / 1 / 1 6 表現・内容微修正。

1 1 / 2 / 2 7 表現微修正。

## # 11 陸皇襲来

フレメヴィーラ王国の西側はオービニエ山地にかかり、険しい山が連なっている。

中央付近で山裾から平地が多くなり、東側には平地からつながってボキューズ大森海だいしんかいが広がっている。

元々は人間はオービニエ山地の西側にしか居らず、東側は全て魔獣によって支配された地域だった。

オービニエ山脈を越えてきた人類は、幻晶騎士をはじめとする戦力によって魔獣を駆逐し、この地を手に入れたのだった。

しかし、それまでは快進撃を続けていた人類の歩みがこの地で初めて止まる。

広大な森林地帯であるボキューズ大森海の深部には、何百という幻晶騎士シルエットナイトをもつても敵わない強大な魔獣が潜み居り、人類はほうほうの体で大森海の手前まで撤退したのだった。

オービニエ山地の東側はなだらかな平野部から森林地帯に続いている。

開拓すれば優良な農業地帯になりうる土地を前に、人々は山を越えてまで撤退せず、森の浅い部分までをその領土とした。

そして以降もときたまボキューズ大森海から現れる大型の魔獣を防ぐため、東の国境には防壁が築かれることになる。

“街道”と呼ばれる森の出入口（それは正に巨大な獣道のことだ！）に砦を築き、主要な砦の間を城壁でつないだのである。

それにより大型の魔獣が国内へ侵入することは少なくなり、これまで危機的な状況は訪れていない。

国境全てを城壁で覆うことは物理的に無理があつたため、街道から外れた場所からの魔獣の侵入は絶えないが、国民の努力もあり概ね安定してきているといえる。



それは、静かな夜だった。

野生動物の気配すらしない、不自然なまでの静寂。

まるで森から全ての動物が逃げてしまったかのようなだった。

ボキューズ大森海の手前、バルゲリー砦。

街道から外れたこの砦は中型の魔獣が現れることも稀であり、比較的静かな場所にあった。

それでも常にない不気味な静けさに、その日の歩哨は違和感を感じていた。

いつもならば森から獣の遠吠えの一つや二つは聞こえてきても良い頃合である。

しかし静寂は長くは続かなかった。

遠くからまるで木々が次々に折られているような音が聞こえて来る。

何かが近づいて来る　そして木を折りながら進むような存在はこの世に魔獣しか居ない。

歩哨は躊躇うことなく警笛を鳴らした。

「なんだ、こんな夜中に魔獣の野郎か!？」

「街道でもねえってのにこんな田舎に何の用だよ!」

砦中に響く非常警笛に俄かに騒がしくなる。

その間にも木々が倒れる音は続き、それはすでに目前に迫っていた。

宿直の騎操士ナイトランナーが己の幻晶騎士シルエッタナイトに飛び乗る。

魔力転換炉エーテルリアクタの吸気機構が唸り、低い、地鳴りのような音が鳴り響きだす。

大急ぎで装備を整え、砦の正門を固めたところで、木々を踏み分けながらそれが現れた。

全長約50m以上、高さも20m以上はあるだろう。

ごつごつとした剣山のような甲殻を纏った堅固な体から、これまた隙間なく甲殻に覆われた手足と頭が生えている。

その様はまるで小山か巨大な岩石が動いたかの如くだった。

砦の城門の上から固唾を飲んで見張っていた歩哨も、知識でのみそれが何かを知っていた。

陸皇亀<sup>ベヘモス</sup> 強靱な膂力と呆れるほどの耐久性が特徴の動く要塞とも言われる魔獣。

ベヘモスの魔獣としての最大の能力は、簡単に言えば“強化”である。

およそ物理的に支えることが困難な巨体を強化魔法により支え、尚且つ見た目以上の素早い動きを可能としている。

その上装甲、骨格から各組織の一つにいたるまで恐るべき耐久性を誇り、主な攻撃手段である体当たりの威力は城壁すら砕く。

巨体に見合った“心臓”により生成される莫大な魔力は幻晶騎士数10体分にも上り、それに伴う無尽蔵とも言えるタフネスにより、鉄壁の防衛を崩すことを更に困難とする。

兎に角呆れるばかりの耐久性とタフネスによる難攻不落の魔獣。それが陸皇亀<sup>ベヘモス</sup>である。

一体何を考えているのか、ベヘモスはほんの少しの躊躇もなく砦に向かいそのまま直進してくる。

「敵影確認……ま、魔獣は陸皇亀<sup>ベヘモス</sup>……！ ベヘモスです！」

歩哨の悲鳴のような報告を騎操士達が理解する前に、ベヘモスが砦の外壁の門扉に突き刺さった。

自らが持つ莫大な質量に勢いを乗せ、恐るべき強度を誇る外殻によりその身を生きた破城槌と化す。

鋼鉄製の強固な門があっさりといひしゃげ、周囲の壁を抉りながら倒れていった。

ベヘモス　一瞬だけ聞こえた歩哨の報告と、目の前で打ち破られた門を見て、騎操士達の表情が驚愕と恐怖に染まった。

街道からもそれ、これまで大型の魔獣を見かけることも少なかったこんな辺鄙な砦によもや師団級の魔獣が現れるなど、誰が予想できただろう。

師団級と称される魔獣は、その名の通り倒すためには一個師団規模（約300機）の幻晶騎士が必要とされる。

この砦に配備されている幻晶騎士は1個中隊（9機）よりやや多い10機。

中型以下魔獣を駆逐するには十分だが、師団級を倒すには全く足りない。

それでも、騎操士達は覚悟を決める。

このベヘモスは如何なる理由かは知れないがまっすぐにフレメヴィーラ国内へ向けて進んでいる。

これ以上ベヘモスが進む前にこの事態を連絡しなくては、国内にどれほどの被害が出るか想像もつかない。

この砦の戦力では倒すことは叶わなくとも、たとえ僅かにでも時間を稼ぎ、またこの魔獣の弱点を探ることは出来るかもしれない。

ベヘモスは城門へ突撃したその勢いのままに周囲の城壁をも吹き飛ばし、内部へ侵入してきた。

待ち構えていた幻晶騎士が魔導兵装“カルバリン”を構え、その

切っ先をべへモスに向ける。

槍に似た武器へ魔力が流れ、内部の紋章術式に従って現象が発現する。

人間では不可能な規模の出力と構成  
戦術級魔法による巨大な  
炎の槍が放たれる。

轟！！

周囲を揺るがす爆音をあげて、直撃した炎の槍が盛大な火柱を上げ炸裂する。

残る機体も僅かに遅れて、全機で“カルバリン”を叩き込む。  
幻晶騎士用の魔導兵装は、その威力と引き換えに燃費が悪い。

一旦機体の持つ魔力貯蓄量の限界まで攻撃を叩き込んだところで法撃が止まった。

魔力転換炉が出力を上げ、周囲のエネルギーを吸入すべく吸気機構の唸りが大きくなる。

岩の入り口は次々に叩き込まれた炎の槍により炎上していた。

轟と燃え盛る炎と煙によりべへモスの姿を見失う。

僅か10機とはいえ全出力による法撃である。

いかな師団級といえ少しは傷を負わせただろう……騎操士達がそんなことを考えた瞬間だった。

炎を掻き分けて猛然とべへモスが飛び出してきた。

期待に反し、その巨体には些かのダメージも見受けられない。

その巨体からは考えられないような勢いに、近くに居た幻晶騎士は避ける事ができなかつた。

大質量による体当たりをまともにくらい、ひとたまりもなく一瞬で胴体が陥没し、手足がひしゃげる。

鎧の隙間からキラキラと光る結晶の破片を撒き散らしながら体当

たりされた機体が吹っ飛んでゆく。

あの様子では内部に居る騎操士も無事ではすまないだろう。

それを見ていた他の幻晶騎士が慌てて散開し、距離をとる。

もはや地震と聞き紛うような地響きを立てながらベヘモスは猛然と進み続け、同じく避けきれずに最後の抵抗とばかりに数発の炎弾を浴びせる幻晶騎士を跳ね飛ばした。

魔法による攻撃では埒が明かないと判断した何機かがベヘモスに追いつがり、剣で斬りかかる。

しかし、ベヘモスを覆う甲殻は評判どおり恐ろしいまでの耐久性を示し、斬撃の一切を通さなかった。

全身を甲殻で覆われている上にその巨体からは想像もつかないほどの速度で動く。

僅か10機では時間稼ぎにすらならず、むしろ簡単に全滅の危機に瀕している。

残る騎操士達の背中を言い知れぬ悪寒が走った。

先ほどの覚悟も被害予想も、全く生温い。

生き残った騎操士達のうち、隊長格の人物は、即座に決断した。

「アーク、ベンヤミン、クラエス！ 生きてるか！」

「……はい……」

ベヘモスは幻晶騎士を吹き飛ばした勢いのまま砦自体に体当たりをかけ、暴れている。

石造りの砦は見る間に砕け、あと幾らも持たない風だった。

「アークはうちの生き残った奴をまとめて脱出、カリエール砦に駆け込め！」

ベンヤミン、お前は進路予想上の至近の都市に連絡！ ヤントウネンへ行け！

クラエス！ お前は王都に走れ！ クリスタルティシュー 結晶筋肉が砕けるまで走りま  
くれ！

絶対にこのことを伝えるんだ！」

隊長機は機体の頭部をぐるりと後ろに回した。

「残った奴は……すまねえな、貧乏籤くじだ。」

名前を呼ばれた3名は隊の中でも比較的若い人間だった。

ここで脱出に選ばれた理由は明白だ。

しかし、ここで反論することも躊躇することも許されはしない。

重要なのは生きて、情報を伝えること。

一瞬でも早くこの危機を伝えること。

別れを惜しむ暇すら、そこには在りはしなかった。

一瞬機体の中で悲壮な表情を見せた彼らは、しかしすぐに決意と使命感に意気を上げる。

「行け！」

「『『『』』』』」

「野郎ども！ 狭い場所では吹っ飛ばされるのがオチだ！」

砦は現時点を持って放棄、野外で遅滞戦闘を展開する！」

「応さ！」

「俺たちの国に入れさせやしませんぜ！」

「亀野郎に目に物見せてやりましょう！」

3機の幻晶騎士が駆け出したところで、残りの5機も砦から脱出する。

砦を崩し、再び歩みだしたベヘモスに対し、細かく攻撃を加え歩みを阻害する。

闇雲に遠くから法撃を加えるだけでは歩みを止めることすらできない。

必然的に近寄り、頭部や脚部を集中的に撃つては逃げ、の一撃離脱を繰り返すことになる。

その間、攻撃に怒ったべへモスから逃げ回ることになるが、如何な幻晶騎士といえどその力には限りがある。

幻晶騎士のもつ動力炉、魔力転換炉、エーテルリテクトそれ自体は半永久機関である。

周囲にエーテルが存在する限り魔力に変換し供給するが、一度に供給可能な量には限度がある。

こと戦闘という状況では消費魔力が供給魔力を上回り、機体の魔力貯蓄量はどんどんと減少してゆく。

それだけでなくとも幻晶騎士を動かしているのは人間　その全てが有限の存在なのだ。

魔力貯蓄量の減少し、動きが鈍った機体が体当りで吹き飛んでゆく。

疲労により集中力が落ち、離脱のタイミングを失敗した機体が尾の一撃を受け倒れる。

それでも彼らはたつた5機の幻晶騎士で、師団級の魔獣を相手に貴重な数時間を稼ぎ出すことに成功する。

最期に残ったのは、やはり最も実践経験豊富な隊長機だった。

機体の細かな傷は数え切れず、尾が掠った右腕は半ばから折れ飛んでいた。

全身の結晶筋肉は疲労とダメージであちこちが砕け、魔力貯蓄量も残り少なく、最早逃げる事も容易ではなかった。

「ひよつこどもは逃げおおせたか……この亀野郎、この次に来るのは俺達みてーな半端ものじゃねえぜ。」

本物の騎士団様だ、覚悟しやがれ。」

逃げることもかなわぬならば、と隊長機はボロボロの機体を叱咤し突撃する。

残る魔力の全てをつぎ込み、それまででもっとも鋭い動きで隊長機がべへモスに肉薄する。

未だ残った左腕と剣を固定し、機体の質量を全て乗せた一撃を顔面へ向けて放った。

魔獣にも、敬意という概念があるのかもしれない。

べへモスは自分を邪魔した最後の敵を見定めると、大きく口を開け、息を吸い込んだ。

一拍の間があり、魔術による猛烈な竜巻プレスがその口から放たれるのと、隊長機の攻撃が当たるのはほぼ同時だった。

プレスを正面からくらった隊長機は吹き飛び、結晶の欠片と鎧の破片を盛大に撒き散らしながら森の中へ落ちていった。

べへモスは低く唸る。

遅滞戦闘を仕掛けるために彼らが浴びせた数々の攻撃。

そして、隊長機が最後に加えた一撃により顔面に僅かな罅ひびが穿たれていた。

その傷は僅かに眼球をそれている。

邪魔者が居なくなつたことを認識すると、魔獣は歩みを再開する。地に響く足音をたてながら、無感情な瞳のまま。

魔獣の進路上には、フレメヴィーラ中央部最大の都市、ヤントウネンがあった。



# 1 1 陸皇襲来（後書き）

1 1 / 1 / 1 6 表現・内容微修正。

1 1 / 2 / 2 7 表現微修正。

## #12 見学しよう

場面は変わって、ベヘモスが現れる2週間ほど前のこと。

ライヒアラ騎操士学園において、花形の学科といえばその名にも冠する騎操士学科であろう。

騎士課程を修了し、高い能力を認められた生徒が騎操士になるべく日夜勉強に励んでいる。

しかし、一口に騎操士学科と言っても操縦者ナイトランナー騎操士が居るだけでは幻晶騎士シルエットナイトは動かない。

当然ながら機体の整備を担当する人間というものが必要になる。

騎操士学科とは幻晶騎士の操縦技術を訓練するための学科だが、それとは別に幻晶騎士を製造・整備するための人材も育てている。

騎操士は操縦技術を学び、鍛冶師は外装、金属骨格の修理、製造技術を。

錬金術師は結晶筋肉の製造、整備方法を学ぶ。

直接機体の整備とは関係しないが、関係ある分野を扱うものとして刻印術師も含まれる。

刻印術とは、魔法術式スクリプトの構成を魔術演算領域マキウス・サーキットで処理するのではなく、外部の物体に図表の形式で記述することで魔法を使用可能とする技術である。

刻まれた物体とその魔法術式を合わせて刻印紋章エンプレム・グラフと呼ぶ。

刻印紋章を使用して魔法を使う場合は、直接それに魔力マナを通して魔法が発動する。

便利な技術に思えるが、魔法術式は実際に記述するとかかなり嵩張る代物になるため、目的とする魔法に対して巨大な装置になりがちである。

製造の手間や難易度を考えると日常での普及には難がある技術である。

この技術が最も有効なのが幻晶騎士用の外付け式遠距離魔法攻撃用装備である魔導兵装シルエットアームズの術式実装としての利用だろう。

意外なことに、幻晶騎士は単体では規模の大きい魔法を使用できない。

幻晶騎士を制御する魔導演算機マギウスエンジンの機能は全身の制御、それに特化している。

魔法を使用しようにも、魔法の単純増幅機能など搭載していないのである。

そのため、幻晶騎士が魔法を使うためには内部の騎操士が直接魔法を構築する必要がある。

しかし幻晶騎士が使用して有効な規模の魔法現象オイバ それは戦術級魔法イドニスベルと呼称される を発生させる術式の構築は、人間には極めて困難である。

稀に構築可能な処理能力を持つ人間も居るが、それは時間をかければ可能という話でありとても戦闘中に構築できるものではない。

よって、幻晶騎士が戦闘中に戦術級魔法を使用するためには、魔法術式のみをあらかじめ外部に用意するという方法がとられている。刻印紋章による術式構築は、術式を記述するだけの面積を確保できればいかなる魔法も用意できる。

発動時には外部からの魔力マナを供給するだけで使用可能であり、魔力の塊とも言える幻晶騎士とは相性のいい技術である。

欠点は、一つの術式につき刻印された一つの魔法しか使えないこと。

そのため、魔導兵装は様々な状況に対応するため多数の種類が作成され、戦闘行動中の幻晶騎士は背中に複数の装備をつけていることもしばしばである。

そういつた訳で、直接は騎操士学科ではないものの、刻印術学科もほぼ併設に近い扱いを受けている。

#### 閑話休題。

そういつた背景から、騎操士学科では実際に幻晶騎士を運用することでそれぞれの職業ごとの技能を修得できるようになっている。騎操士学科は内部でいくつかのチームに分かれており、各チームごとに幻晶騎士を保持している。

3年の間、定期的に模擬試合や野戦訓練を行い実技を磨くのである。

学園で保有する幻晶騎士は2機ずつ10チームで20機。

数だけ見れば2個中隊余に相当し、ちよつとした皆よりも戦力が整っているが、どの機体も長年に渡って運用されてきたものであり、戦闘能力は2線級のものである。

さらには1機に対して複数名居る騎操士達が交互に訓練を行うため常に消耗を強いられており、騎操士学科で真に大変なのは裏方である、と言わしめるほど頻繁に整備が必要なのであった。

余談だが騎操士学科を卒業した鍛冶師・錬金術師はそのまま最前線で働けるだけの能力を持っていることも多いという。

ライヒアラ学園内の訓練場では今も幻晶騎士同士の戦闘訓練が行われていた。

紅い機体と白い機体が、それぞれ剣を片手に激しく打ち合っている。

幻晶騎士による模擬戦闘といえど、あくまでも授業であり、当然その時間は他の学科では授業がある。

そのためその場に居るのは関係者ばかりであり観客などいようは  
ずもないのだが、最近は事情が違った。

ぶつかり合う幻晶騎士を指揮所から様々な人間が眺めている。

ある者は戦闘の記録をとり、騎操士の操縦技術について調べてい  
る。

ある者はダメージの様子から補修部品の手配をし、ある者は使用  
される魔導兵装の効果を検分する。

慌しい様子を見せる指揮所に、非常に小柄な人影があった。

その場の他の人間よりふた周りは小さなその人影は、他の人に遮  
られないように最前列で幻晶騎士同士の戦いを食い入るように見て  
いる。

その影はやはりエルネステイである。

授業をサボっているわけではなく、自習になる魔法の時間と模擬  
戦闘訓練が重なっているときはこうして見学に来ているのだ。

エルは、最初は可愛らしいその外見からマスコットののような感覚  
で出入りを許されていた。

彼自身があくまで見学にとどまり大人しくしていたというのもあ  
る。

そのうちに戦闘だけでなく整備も見学するようになり、機体の構  
造について質問もした。

（あくまで男だが）見目麗しく、しかも礼儀正しい後輩からの質問  
に先輩達は快く答えていた。

さまざまな知識を現場から吸収しながら、やはりエルが熱心に見  
ていたのは戦闘訓練である。

巨大ロボットが現実に目前で戦闘を行う姿は、エルの胸にえもい  
われぬ感動を呼び起こす。

鎧騎士を象った巨大な人型の存在が鋼鉄の手足を打ち鳴らし、剣

で斬り合い、魔法を撃ち放つ。

その一挙手一投足を見逃すまいと、常に漲る熱意で模擬戦の様子を見つめていた。

余談だが少女と見紛うような美貌の少年が、頬を上気させ憧れの視線を幻晶騎士へと注ぐさまは、周囲の人間を倒錯の世界に誘いかけたとかかけないとか。

「エル、今回の戦闘はどうみるんだい？」

戦闘の記録をとっていた上級生がエルに横から話しかける。

どちらも視線は訓練場から離さず、しかし会話は滑らかに続いていた。

「グウエールの剣速が、以前より鈍く見えます。そのせいで何度か有効打を逃しているように見えますね」

「……なるほど。言われてみると今回はミスがやや多い。どうしたんだろうね」

「右腕の動きが渋いですね。恐らくは関節が、クリスタルティシュー結晶筋肉を取り替えたのではないでしょうか」

上級生は手持ちの資料の中からグウエルと呼ばれた紅い機体の整備記録を確認する。

確かに今朝方、疲労劣化により右腕の結晶筋肉を全交換していた。動きが硬いのは、その後の慣らしが不十分なのだろう。

彼もグウエールの動きが悪いことは把握していたが、右腕の不調までは見抜けていなかった。

訓練を見るエルの熱心さ、細やかさは当事者たるチームメンバーよりも上だろう。

彼はその熱意の元はなんだろうと不思議に思うのだった。

訓練場ではグウエルと対戦していた白い機体、アールカンバーが有効打をとり、戦闘に勝利していた。

グウエルは前述の不調による攻撃のミスをかバーし切れなかったようだ。

学園に用意されている機体は操縦席のある胸部の装甲が特に分厚く、騎操士の生存性に重点が置かれている。

それでも幻晶騎士同士が全力で戦闘を行うのは危険が大きいため、模擬戦闘では威力を抑えた訓練用装備を使用し、命中回数を競う競技的な形式で行われる。

正式装備による戦闘は魔獣に対する実戦訓練の場合にのみ許可される。

今しがた戦っていた機体が整備場に戻り、騎操士達が降りてくる。白い機体、アールカンバーの騎操士はエドガー・C・ブランシュ、威風堂々とした体躯をした偉丈夫だ。

見た目どおりに質実剛健な性格をしており、騎操士学科内でも上位の実力を持っている。

紅い機体・グウエールの騎操士はディートリヒ・クーニッツ、エドガーとは逆にやや細身の優男だった。

こちらも実力は中々のものだが、神経質な性格が災いして些細なことでペースを崩しがちで、実力に斑があるのが難な騎操士だった。負けた後だからだろうか、その表情は曇っている。

彼は機体から降りるや否や、整備班と口論を始めた。

どうやら今回の敗因についてやり合っているらしいが、原因を調べるといふよりは責任の押し付け合いに終始し、傍から聞いていても埒の明かないものだった。

見かねた観測担当の上級生が、先ほどわかったグウエールの腕の

調子について説明する。

途端ディートリヒの表情は晴れ、皮肉げな笑いすら浮かんできた。対照的に整備班は苦々しい表情だ。

「ああ、どうにも今日は動きが悪いと思ったら、そういうことか。全く、整備班の奴らは中途半端な仕事しか出来ないねえ」

言外に負けたのは自分のせいではない、と含ませる物言いに、エドガーが険しい顔をしながら横から忠告した。

「ディール、それは言いすぎだ。腕の不調を感じたなら感じたで、それをカバーする戦い方というものがあるだろう。

その上で負けてしまうのは仕方ないが、今日のお前の動きはとても工夫を感じるものではなかった。

全てを整備班のせいにするのは良くないぞ」

正面から正論で諭され、皮肉げに笑うディートリヒの表情が一気に不機嫌なものとなる。

「こちらの不調で勝ちを拾っておきながら随分と言ってくれるじゃないか」

「模擬戦は勝敗よりも内容が重要だ。必要な反省はしたほうが良いとっているだけだ」

「そうかい、だったら次はお前が不調を抱えて戦えば良いさ！」

ディートリヒは付き合っていられないとばかりに捨て台詞を残し、足音も荒く立ち去った。

整備場に居る面々はいつものことだという風に肩をすくめるだけだったが、その場で1人反応に困っている人物が居た。

エルである。



なにしろグウェールの不調を言い当てたのは他ならぬ彼なのだ。それはさきほどのひと悶着の原因を作ってしまったに等しい。申し訳なげな様子のエルをみた記録係の上級生は、苦笑いしながらその懸念を否定した。

「エル君は悪くないよ。むしろミスや課題を発見してもらえてありがたいくらいだ」

「ですが、先輩は納得されていないようですが」

「いや、口ではああいつているが奴も内心反省はしているさ。それに原因がわかったほうが本人もすっきりするだろう」

本来ミスや問題点は、そこから改善することを思えば見つかるに越したことはない物である。

しかし結果を出す当人にとっては必ずしもその限りではなく、悪い結果を嫌う人間というものは何処にでもいた。

「そうですね……今後も問題を見つけられるように注意します」

「そうしてもらえると有難いよ。正直、君ほどの眼をもつ人間は少ないからね」

「そろそろ自習の時間が終わるので、戻ります」

「ああ、そうだね。またおいで、いつでも待っているよ」

「はい、ありがとうございます」

辞去を告げ、エルはその場を後にした。

「野外演習？」

見学を終え席に戻ったエルにクラスメイトが野外演習について聞

いてきた。

エルには全く聞き覚えがないが、何かしらのイベントのようである。

クラスメイトが皆一様にそれについて話しているところをみると、エルは話題に乗り遅れているようだ。

興味のある分野にのみ異様に詳しい、ヲタ気質の弊害ともいえる。今生でのエルは、その辺ひどい事にはならぬよう意識して生きてきたつもりだったが、最近の騎操士学科参りの間ついぞ疎かになっていたようである。

「すみません、十分に内容を把握していません。できれば何のことか教えて欲しいのですけれど」

困ったように言うエルに、クラスメイトは一瞬顔を見合わせたがすぐに口々に話し出した。

単純にエルと喋るのが楽しいのか、エルに教えるのが嬉しいのか、てんでばらばらに喋る全員の話をもとめるのは根気の要る作業だったが、話を要約すると以下のようになる。

- ・魔獣と戦い実戦経験をつむため、騎士学科の中・初等部各学年合同で参加する遠征。
- ・毎年実施しており、目的地はヤントウネンの近く、比較的小型の魔獣が多くすむ山林地帯。
- ・新入生は体験参加のようなもので、一緒についてゆき基本的な野営などのアウトドア技術を学ぶのが主。
- ・万が一を考え、騎操士学科から幻晶騎士が数機護衛としてつく。

「なるほど。それが2週間後にあると言っわけですね」

「つつかよ、今まで知らなかったのかよ」

「そりゃそうよね。さーいきんずーっと高等部に入り浸りだったし

ねえ？

「ぜーんぜんこっち戻ってきてないんだもの」

呆れた様子のキッドはまだしも、アデイの不機嫌な様子にエルは首をひねった。

「アデイ？ その、なんだかご機嫌斜めのようですか？」

「なんでよ。全然全くそんなことないわ。気のせいじゃないの？」

腕を組み、強く言い放つその姿自体が不機嫌ですと公言しているようなものである。

「とても気のせいには思えません。僕、何かしましたか？」

「そうよねー。何にもしてないわよね。何せ居なかつたんだもんね

ー」

取り付く島がないとはこの事だ。

エルは助けを求めキッドにアイコンタクトを送る。

キッドは仕方ないなあと言いたげな様子で強引に話題の転換を図った。

「で、野外演習じゃ班組んで行動すんだけどよ、お前はどうすんだ、エル」

「ああ、それは」

横目に好奇心を隠しきれて居ないアデイをみつっ

「特に指定がない限り僕達で集まっていたほうが良いでしょう」

「ま、だろうな。でもよ、1班5人なんだよな」

あと2人なあ、とこぼすキッドから視線を逸らし、エルが周囲を見回すと何故かクラスのほぼ全員が3人を見ていた。

気圧されるものを感じたエルは引き攣った笑顔でキッドへ振り向く。

「それについてはおいおいですね。」

聞けば新入生はほとんどおまけですし、適当に決めても問題ないでしょう」

「ふーん、じゃあその間は一緒に居られるんだ……」

ふと見るとアデイの機嫌が明らかに好転していた。

その様子に、前世から数えるとその精神年齢もそろそろ30代後半になるエルネスティは

「（俺にやあいくつんなくても女心ってもんはわからんかもしれへん……）」

ある種の戦慄を覚えるのだった。

# 1 2 見学しよう(後書き)

1 1 / 1 / 1 6 表現・内容微修正。

1 1 / 2 / 2 7 表現微修正。

### # 13 出発しよう

エル達が野外演習に出発する日、空は好天に恵まれていた。ライヒアラ騎操士学園の前には大型の乗合馬車がずらりと並び、生徒達が教師の誘導に従いそれぞれに乗り込んでゆく。

野外演習の最終的な目的地はクロケの森と呼ばれる場所である。ボキューズ大森海<sup>だいしんかい</sup>ほどではないが森林地帯と小高い山々が広がっており、比較的弱い魔獣が多くいる場所だ。

わざわざ馬車を使い長距離を移動するのは、生息する魔獣の強さや拠点の確保などを鑑みると、クロケの森は様々な意味で都合が良かったためである。

まずはクロケの森への最寄の都市であるヤントウネンまで馬車で移動する。

ヤントウネンにて一旦物資を補給した後、馬車はクロケの森の手前まで向かう。

森の浅い場所を全体のベースキャンプとし、後は学年や目的別にそれぞれ森の各所へ向かうことになる。

ヤントウネンは位置的にはフレメヴィーラ王国のほぼ中央に位置する。

国内の流通の1大拠点でもあり、当然首都であるカンカネン、その付近にあるライヒアラからヤントウネンまでは整備された街道が続いていた。

ぞろぞろと連なる大型の馬車の群れがのどかな街道を進む。

そして馬車の列を護衛する様に、一定間隔で合計10機の<sup>シルエットナ</sup>幻晶騎士<sup>イト</sup>が歩いている。

高等部の騎操士<sup>ナイトランナー</sup>達が乗る機体だ。

学園で使用する機体は元々は軍で使用していた物の払い下げだが、長年に渡り学生達が自分でメンテナンスしてきた結果、その外見はかなり趣味的な物になっている。

鎧に複雑な文様が刻まれた機体、頭部に矢鱈と大きな飾りがある機体、無闇に複雑な形式で装甲が接続されている機体……それぞれにこれでもかというばかりに自己を主張している。

色もそれぞれに派手に塗り分けられており、勇壮と言うよりはひたすらに派手だった。

10機のうちには、真紅の機体と純白の機体　グウエールとアールカンバーの姿も見える。

そしてライヒアラ騎操士学園で使用される幻晶騎士はどれも日々酷使されているはずだがどの機体も装甲に歪み一つなく、新品のように綺麗な姿をしていた。

こういった幻晶騎士を伴う演習が企画される場合は長距離の移動に耐えられるように、事前に機体の大規模なオーバーホールが行われる。

学園側としても日頃の酷使を把握しているため、こういった機会ごとに特別に準備期間と資金が与えられ、機体は新品同様まで修復された後、慣らし運転を経て遠征に参加するのである。

仮にも学園の外部に出すのだから継ぎ接ぎだらけの姿だったり動きに支障があつては困る、という見栄が入っているのは否定できない。

この演習には大勢の騎士学科の生徒が参加している。

まだ未成年の子供たちだがそこは騎士を目指すもの、多少の魔獣に襲われた程度ならば問題は無いだろう。

演習の目的としても、小型の魔獣にまごつかれては困る。

しかしフレメヴィーラ国内といえども、森や山には数m〜十数m

サイズの中型の魔獣が生息しており、何かの拍子に街道沿いに現れないとは限らない。

その備えとしての幻晶騎士であった。

とは言え例年さほどの問題も起こらない暇な行程であり、一応は騎操士達にも長距離移動の訓練は課せられている物の、全体的に緊張感ややる気と言った言葉とは無縁の旅になるのであった。

「仕方ねーってのはわかんだけだよ。さすがにこいつぁ暇すぎんだろ」

馬車にゆられること約半日、キッドは腐っていた。

別にキッドだけのことではなく、周囲に居る生徒も同様という感じである。

到着まで約3日、基本的に馬車で移動するためどうしても暇な時間が多くなる。

しかも何といてもここにいるのは子供の集団である。

雑談こそいくらでも可能だが、動くこともままならない馬車の上では早々に飽きが来るのも致し方ないことだった。

「でしたらキッドも外の景色を眺めませんか？見ていると飽きませんよ」

「いや、そんなもんで満足できんのはおめえだけだつて。つつかよく飽きねえなあ。何時間見てんだよ」

キッドが呆れ気味の視線をエルに送る。

エルは所謂”電車で移動するとき、ずっと外を見ている人”であり、風景が続く限り退屈はしない人間だった。

放って置くと3日間ずつと外を見ていそうな勢いだ。



「周り見てみるって。どう見たって暇そうな奴のほつが多いじゃねえか」

「そうですねえ……」

エルは窓の外を見ていた姿勢から振り向き、そのままちよこんと座り直す。

小首をかしげて考え込む姿は可愛らしく、一瞬周囲の雰囲気が変わるんだ。

ややあつて何かを思いついたふうに顔を上げた。

「僕の持ってきた本を読みますか？ 暇つぶしにはなると思いますけれど」

「本かあ……なんつつか体動かしたいんだなあ。まあいいや、なんて本だ？」

「錬金術概論？・上巻です」

「いや教科書だろ、それ」

がくつと音がしそうな勢いでキッドがうなだれた。

「んなもんで暇潰すくれーなら寝たほうがましじゃねえか」

「とはいえこんな場所では本当にやる事がありませんね。アディを見習って大人しく寝るのもいいかも知れませんよ」

キッドが胡乱げな視線を向けた先では、アディが実に気持ちよさそうに眠っていた。

「結局そうなのかよ……」

彼は思わず天を仰ぐ。

そのまま、ふと何かを思いついたように視線を上に向けていた。

「まあ、退屈しのぎには、なるか？」

二人は馬車の屋根へと上がっていた。

馬車の屋根の上には、元々生徒達の荷物が載せられている。

内部とは違い座席などはないが、単に乗るだけならさほど問題はなかった。

「此処からのほうが景色がいいですね」

晴れた空の下、のどかな街道を進む馬車の屋根の上は実にのんびりとした雰囲気か漂っていた。

街道を吹き抜ける風がエルの銀の髪を揺らし、流れてゆく。

エルは荷物の間に陣取り、早くも風景鑑賞モードへと入りつつあった。

「あー、結局暇だな。まあ、狭い馬車の中よりや、ましか」

どうせやる事が無いなら、青空の下で寝るのも一興かとキッドが考え始めた頃。

「キッド、本当に退屈しているんですね。……んー、でしたら……時間余っていることですし。」

本当はクロケの森についてからにしようと思っただけですが……「ん？」

エルは馬車の屋根に括り付けられた荷物の中から一抱え程度の木箱を探し当て、キッドに差し出した。

「こいつは？」

訝しむキッドを前にエルが箱を開く。

中には金属製の道具が並んでいた。

短く、直線的な金属パーツに握り手と思しき部分が”く”の字形についている。

握り手には指を引っ掛ける輪がついており、その機構は前方のグリップ部分につながっていた。

「これはハンドガン……えーと、“ヴァーテックス”という名前の、ガンライクロッド銃スタイルの杖”です”

「ウインチェスターの小型版ってやつか！へええ。こいつが……」

キッドは受け取った銃杖をまじまじと眺める。

構造上先端部に重心が偏りやすく振り回すと慣性のつく杖に比べ、重心が手元付近にある銃杖のほうはその影響が小さい。

また対象へのポイントイングがやり易く、魔法の発射方向の調整が容易である。

かなり小さな差ではあるが、戦闘という状況ではこのポイントイングの難易度というのは無視できない要素になる。

目標を正確に素早く狙うことが出来れば、それだけで遠距離戦闘でのアドバンテージになりうるのだ。

「馬車での移動中においてそれと魔法を撃つことは出来ませんから、渡すのは森に着いてからにしたかったのですけれど」

「確かに。でもよ、だべりっぱなしだの寝っぱなしだのよりやこいつ見てるほうが遥かに楽しいぜ」

キッドはエルの構えを思い出し、見様見真似でヴァーテックスを

構える。

「どの道やることも無いのですし、ヤントウネンに到着するまでは“抜き撃ち”の練習でもしましょうか」

先ほどまでの腐りようはどこへやら、テンションの上がったキッドがニイ、と笑いながら応じる。

「そうこねえとなあ。これでやっとこの旅も面白くなってきたってもんだ！」

途中起き出してきたアデイを加え、3人で銃杖の習熟訓練を行う。勿論実際に魔法を撃つわけではないが、それでも馬車の中で振り回すわけにも行かず。

結局3人はヤントウネンまでの道中のほとんどを馬車の屋根の上で過ごすことになるのだった。

# 13 出発しよう(後書き)

1 1 / 2 / 2 7 表現微修正。

## #14 クロケの森にて

馬車にゆられるライヒアラ騎操士学園・騎士学科の一行はフレメヴィーラ王国中央部最大の都市であるヤントウネンに到着していた。ヤントウネンが国内でも有数の都市になったのには訳がある。

国の西側、オービニエ山脈だいしんかいを越える他国との輸送路と、国の東側ボキューズ大森海手前の砦や穀倉地帯からの荷を運ぶルートのうちようど中継地点に位置しているのだ。

そして街道の要所にあるが故に、この街は国内でも王都に次ぐ高い防衛能力を持たされている。

街の周囲は堅牢な城壁に覆われており、更にその周囲には堀がめぐらされている。

それだけでなく、内部には最大で幻晶騎士シルエットナイト1個旅団（約100機）規模になる騎士団を抱えている。

この数はいくら重要な拠点とは言え一つの街にある戦力としては過剰だが、これは街道を利用することでいざというとき国内各所への戦力派遣が可能なためであり、実際に一部は周辺に出ていることが多かった。

ライヒアラの一行がヤントウネンに到着したのは昼も過ぎたころだった。

この時代、一定以上の規模を持つ街は魔獣の襲来を警戒し城壁を備えている。

勿論ライヒアラ学園街にもあるのだが、ヤントウネンのそれは他を圧倒する規模を持ち、見ただけでこの街の重要性が理解できるものだった。

魔獣が存在する影響で少人数での長距離移動が難しいこの時代、初めてライヒアラ以外の大都市を見る生徒も多く、圧巻とも評すべ

き街の様子に興味津々の様子だった。

「すごい城壁ねえ。一体何と戦うつもりなのかしら」

「今存在する魔獣と、というよりも建国時の魔獣を想定しているのでは？」

「今よりも凶悪な魔獣も多かったようですし」

「なるほどねー。それは分厚くなるわけね」

城壁の内部へ通じる巨大な門の威容に生徒達の期待が高まる。

しかし彼らに乗せた馬車は門をくぐらず、その手前の広場で集結していた。

「なんだよ、ヤントウネンには入らねーのか？」

「事前の説明で、ヤントウネンでは物資の補充だけが目的だと説明していましたし」

馬車から出て休息をとることは可能だったが、荷物の積み込みが終われば再び出発しなくてはいけない。

巨大な門を睨みながら双子が盛大に愚痴っていた。

「なによつまんない。街の中くらい入れてくれてもいいじゃないの！」

「だよなあ。あちこち見て回りたかったんだけどなあ」

「いえ、そういう目的の旅ではないのですが……」

「エルは見たくないのかよ」

「それは興味はありますけど。」

この人数の生徒をまとめて観光とか、さぞ恐ろしい事態になると思いますしね」

そういつて横を見やれば事前に手配していたのだろう、街から出

てきた商人から受け取った物資が馬車に積み込まれてゆく。

短い休憩は終わり、すぐに出発の時刻がやってきた。

ヤントウネンに未練たらたら生徒達を乗せたまま、馬車は目的地であるクロケの森へと出発するのだった。

ヤントウネンから更に馬車で一日ほど揺られたところにクロケの森はある。

東の国境線へと向かう街道からそれ、ほとんど舗装されていない道を苦労して進むこと丸一日。

鬱蒼とした森林がその口を開いていた。

馬車は森に入ってすぐの木々のまばらな、開けた場所に次々と止まってゆく。

そこは例年、野外演習があるたびに拠点として利用されている場所だった。

「よし、荷物を降ろしたら各班まずはテントを作れ。それが終わったら夕食にするぞ」

教師の号令一過、生徒達が寝床となるテントを作成する。

これまでの行程では夜間の就寝にも馬車を利用してきた。

開けた街道を利用して移動しているとはいえ、いつ何処で魔獣の襲撃に会うかわからないため、いざというときすぐに動けるようにしていたのだ。

ここでは演習の日程は数日間に渡り、さすがに馬車を使って過すわけにも行かない。

そのための拠点としてのテント設営だった。

上級生は既に何度も経験したことであり、手馴れた様子でテントを設営してゆく。



騎士学科ではこういった演習以外にも、何かにつけて設営を行う機会が多い。

いずれ騎士となるならば、行軍時の拠点設営は必須の技能となる。単純に剣や魔法だけではなくこういった技能の教育を行う事も騎士学科の特徴といえた。

しかし、新入生にとっては中々容易なことではなかった。

野外演習に先立って説明と練習は行ったものの、そも体格的にも幼い初等部の低学年にとってはテントの設営はかなりの重労働だ。

教師がフォローに入るもあちこちで作業が遅れ、結局その日の夕食は遅い時間となった。

テントを張り終えた森の入り口はさながらキャンプ地の様相を呈していた。

周囲には篝火が焚かれ、薄暗い森の中でこの場所だけが明るくなっていた。

さらには、中等部以上の生徒は持ち回りで夜間の歩哨を行うことが実習に組み込まれている。

流石にこの人数を教師だけで面倒を見ることは出来ないため、実習を兼ねて生徒自身でも周囲を警戒しているのだ。

エルの班は他の班より早めにテントの設営を終えた。

十分に手順を理解していたためもあるが、中でも双子は同年代でも体格に恵まれ、しかもエルとの訓練を経て体力的にもかなり高かったためこういった場面で活躍したからだ。

今彼らははまごつく他の班の設営を手伝っている。

そしてエルは1人野営地の外れへと向かっていた。

「（ノルマはこなしとるし決してサボリやないですよー……っど、

あつたあつた」

そこには高等部の騎操士達と彼らの幻晶騎士の駐屯地になっている。

さすがに幻晶騎士で見回りをした日には、騒音で安眠妨害も甚だしいことになる。

そのため、彼らは有事に備え野営地の一角で待機していることになつていた。

片膝をつく様な駐機体勢をとり、10機の幻晶騎士がずらりと並ぶ。

篝火に照らされ、夜陰の中にその影を浮かび上がらせていた。

その姿は全体が視認しにくいこともあり、昼間見るそれよりも更なる迫力を持っていた。

常人ならば威圧感を感じるであろう、無言で居並ぶ鉄の巨人達をエルは満面の笑みで見回す。

「（ああ、やっぱ巨大口ボはええなあ。これぞ心の癒し。一家に1台必須やなあ）」

そんな恐ろしいご家庭はこの世界にも存在しないが、エルの心の中のを吹き突っ込める存在は居なかった。

「おい、その……銀色？ エルネステイか？」

そうしてしばらく経ったころ、謎の癒しに没頭するエルに背後から声がかかった。

エルが振り返ると、そこにはアールカンバーの主、エドガーが居た。

「こんばんは、エドガー先輩。少しお邪魔しています」

「やはりエルネスティか。何故此处に……などと聞くだけ無駄な  
だろうな」

すでにエルは騎操士学科でも有名人であり、そしてその行動理由も  
も知れ渡っている。

「先輩は、待機の担当ですか？」

エドガーは先ほどまでとは別種の苦笑を浮かべ、首を振った。

「いや、先ほどまで待機の順番を決めていたんだがな……まあ、例  
によってディーが渋ってたな」

「ディートリヒ先輩が？」

「ああ、簡単に言うとな待機任務は面倒だと、盛大に愚痴を漏らして  
いてな。」

我らはライヒアラ最高学年の騎操士として、後輩の安全を守るこ  
とも立派な任だというのに。

相変わらず奴は気分屋だよ」

我俣を言ったところで結局は役に付かざるを得ないため、騒ぐだ  
け無駄というものなのだがそこを気にしないのがディートリヒと言  
う人物であった。

「奴の愚痴に付き合うのも面倒になったのでな。少し気分転換がて  
らこいつを見に来た」

そして二人で、それを見上げる。

篝火の明かりに浮かび上がるのは純白の鎧を纏う巨大な騎士、幻

晶騎士アールカンバー。

特別な工夫はないものの基本に忠実に、堅実に調整されたこの機体は突出した点はないものの、極めて素直な性能を持っている。

それは学園の騎操士でもトップクラスの实力を持つエドガーの能力に確実に応え、彼らの組み合わせは騎操士学科でも上位に位置していた。

「先輩も、幻晶騎士が好きなのですか？」

「ううむ？　好きと言うか……こいつは、私の武器であり相棒でもあるからな。

共にあれば気分が落ち着く。今みたいにささくれた時とか、疲れてるときにはよくこいつのところに来るよ」

柄にもないか、とエドガーが頭をかく。

「いいえ、信頼できる相棒が居ると言うのは素晴らしいことだと思います」

「お前は幻晶騎士が好きなのだったな。

騎士として努力を続ければ、お前もいずれ良い相棒を得ることができるだろう。

ああ、長々と立ち話をしてしまったな。余り夜が深ける前に戻っておけ」

挨拶を交わし二人は元来た道を戻る。

「さて、そろそろディーも落ち着いたあたりか」

一人ごちると、戦闘に向かうような気合を入れてエドガーは戻っていくのであった。

とつぷりと日が暮れる頃、遅めの夕食を終えて新入生達もそれぞれテントに入っていた。

初等部の生徒は夜間に特にやることはない。

移動と設営をこなし、疲労を感じていた生徒達はしばらくするとそれぞれ毛布に包まって眠りに付いてゆく。

その時である。

生徒達が完全に寝入る前に森から獣の遠吠えが聞こえてきた。

「狼だろつか、1匹が声を上げるとそれに応じるような声が森のどこから響いてくる。」

歩哨に立つ生徒は一瞬森の方を警戒したものの、遠吠えだけなら良くあることでありすぐに興味をなくしていた。

しかし、そうはいかなかった者も居る。

初めて野外演習に来た新入生達は、その遠吠えに今更ながら自分達の状況を再確認していた。

安全な街の中ではなく、すぐに逃げ出せる馬車でもなく、魔獣が潜む森の手にテントを作り寝ているという状況。

いくらクロケの森の危険度が高くはなく、見張りに立っている生徒も居ると言えども此処は全く安全という訳ではない。

ここまで安全に移動してきたこともあり、これまでどこか気楽な気分であった彼らは一つの遠吠えで一気に緊張を感じ始めた。

疲労による眠気も引っ込み、逆に目がさえてしまった格好だ。

「今の声……魔獣？」

「いいえ、ただの狼じゃないかと思うんだけど……」

エル達の居るテントでも、不安を紛らわすかのようにぼそぼそと

会話が交わされる。

彼らの会話を何とはなしに聞きつつ、キッドも寝転びながら首を振った。

程度の差はあれど、キッドも少なからず不安なものを感じており、すぐには寝付けそうもなかった。

「（自分ではもうちつと図太いって思ってたんだけどよ、俺も結構キンチョーするんだな）」

少し篝火の明かりが差し込む薄暗いテントの中、落ち着かない空気が流れる。

ふと隣で寝るエルも同じように不安を感じているのかと思い、キッドが小声で声をかけた。

「なあ、エル。ちょっといいか……って」

しかしエルは既に寝入っていた。

エルとてこの状況に緊張感を感じないわけではない。

しかし、前世では地獄の最前線プロクラーマーで戦士として戦っていたエルは、休息を取る事ができる状況で確実に休んでおく事の重要性を嫌というほど知っていた。

さらには、ユーザからの連絡待ちの間すら休める彼は、如何なる状況でも寝ることが出来るスキルを体得している。

騎操士学科の先輩達が警備についていることも把握しており、多少の不安は無視していたのだった。

「（すげえなエル。前から思ってたけどよ、神経太いよなあ）」

キッドの声にアディが振り返り、そこに眠るエルを見つけた。

「むう、ずるい」

何がずるいのか良くわからないままアディはもそもそと移動し、そのままエルを抱え込む。

所謂“抱き枕”の体勢である。

さすがにいきなり誰かに抱きつかれてエルも目を覚ましたが、それがアディだとわかると軽くその頭をひと撫でし、再び睡眠に戻った。

それで安心したのか、しばらくするとアディからも寝息が聞こえてくる。

それを見ていたキッドは、眠れない自分が馬鹿馬鹿しく思えてきて思わず苦笑した。

「（なんか俺だけ緊張してんの馬鹿みてーじゃねえか）」

なんとなく気楽に思えば、程なく眠りの中へと落ちていったのだった。

翌朝、日の出からしばらくすると生徒達が起きだして来た。

寝不足の生徒も大勢おり朝からだるい雰囲気漂う中、エル達はすっきりとした目覚めを迎えていた。

野営で寝付けない生徒が出るのはいつものことである。

街の中ばかりでなく、野外でこういった緊張感を実際に感じる事もまた演習の目的である。

ただ、教師達としても体力の少ない低学年の生徒に無理をさせる気はなく、これを見越して初等部は比較的作業内容が軽い。

生徒たちは保存食を使った簡単な朝食をとった後、教師の号令に

従い学年別に集まって行つた。

簡単な説明の後、中等部の生徒は森の奥を目指し、班ごとに出発してゆく。

彼らは途中森に生息する魔獣と実際に戦闘し、一定以上を狩る事がこの演習の最大の目的だ。

初等部の生徒は森の浅い部分を目指し、場合によっては戦闘もありうる、という程度である。

学年や班に分かれ、教師の先導に従い生徒が移動を始める。

そして、彼ら騎士学科の生徒達にとって忘れられない体験となる、とても長い一日が始まった。



#14 クロケの森にて（後書き）

11/2/27 表現微修正。

## # 15 魔獣襲来の日

魔法現象に特有のやや甲高い飛翔音を残し、エアロリッパ大気円刃の魔法が風スタツに襲い掛かった。  
カトリザード  
蜥蜴に襲い掛かった。

薄く圧縮された大気の刃がスタッカートリザードの華奢な首を切り裂き、断末魔すら残さず魔獣を討ち倒す。

「すり抜けた蜥蜴が来ます！ 前列、盾構え！」

凜とした声の女性の指示に従い杖や弓矢を構えた生徒が後ろに下がり、代わりに重い鎧を着込んだ生徒が前に出る。

横一列にずらりと並び、押し寄せる魔獣の群れに対し盾を構える。魔法や弓矢といった遠距離攻撃で仕留め切れなかった魔獣が生徒達に襲い掛かり、激しいぶつかり合いが発生した。

牙や爪をもって迫る魔獣の攻撃が盾で弾き返され、逆に剣で切り倒され、多くの魔獣がここで屠られてゆく。

しかし魔獣は数で以ってその鉄壁の防御をかいくぐり、その背後へと抜けるものも居た。

突破されたと見るや否や重装備の生徒の後ろに控えていた比較的軽装備の生徒がすぐさま対応し、陣形の背後まで抜けた魔獣は皆無であった。

班ごとに別れ、クロケの森へと分け入ったはずの中等部の生徒達は今や一箇所に集まり大規模な隊伍を形成していた。

大きく横に広がり、一方からの攻撃を受け止めることを目的とした陣形をとっている。

彼らの前には、森の奥からまさにとめどなく魔獣の群れが襲い掛かっていた。

津波のような勢いの魔獣の攻撃を正面から受け止め、中等部の生徒達は獅子奮迅の戦いを見せる。

数え切れないほどの魔獣が屠られてゆくが、しかし恐ろしいことに此処で倒される魔獣は全体の一部でしかない。

熾烈なぶつかり合いの様相を呈する部隊の正面を迂回し、あるいは時たま突破して魔獣達が森の入り口へと殺到する。

「このままだと後ろの初等部にも魔獣が……！ 何とか連絡しないと！」

先ほどから指揮を執る女生徒が危機感を覚え、後方へ危難を伝えようとするがしかしその時彼ら自身にも大きな危険が迫っていた。

「やばい！ メイスヘッドオーガ 棘頭猿だ！ こっちにむかってきやがる！」

それを目撃した生徒から悲鳴が上がる。

これまでに戦っていた風蜥蜴も剣牙猫も、スタックカートリザサドベルキヤットそれほど体躯は大きく

なく、数こそ厄介ではあるが現在の陣形で対応可能であった。

しかし、メイスヘッドオーガ棘頭猿はその名の通り短く節くれだった角を頭頂部一面に生やし、全高3mにも達する巨大な猿のような魔獣だ。

本来は1匹に複数名で立ち向かって漸く戦える強力な魔獣であり、小型の魔獣を相手しながら戦えるようなものではなかった。

「……！ 第2列杖構え！ 猿の脚を狙って！ 近寄られたら対処できません！」

前線の間から杖が差し出され、様々な魔法が撃ち出される。

爆炎の魔法が、風の魔法が、雷撃の魔法が魔獣たちを迎え撃った。

事態の発生は数時間前にさかのぼる。

午前中、早速クロケの森へと分け入った中等部の生徒達は意気揚々と歩を進めていた。

彼らは警戒しながらも順調に森の奥へと進んでいたが、次第に違和感を感じ始めた。

いつもならば、ここまで森に分け入れればそれなりの回数魔獣と遭遇するはず。

それがこの日は1回も戦闘が発生していなかった。

此処しばらくでクロケの森から魔獣がいなくなったなどと聞いた事はない。

彼らは困惑したまま森を彷徨い、そして次に情報を求めて他の班と接触を図った。

どの班も異口同音に魔獣が居ないと口にする。猫はおるか、蜥蜴の一匹も出ないと。

あるべきものが居ないと言うことも、異常事態といえる。

相談の後、彼らは一旦ベースキャンプに戻り事態を報告することを決心した。

彼らが移動しようとしたその時である。

森の奥よりぽつぽつと魔獣が現れ始めた。

彼らにとっては少し拍子抜けした気分だが、それでも現れた魔獣を討伐すべくそれぞれが武器を構える。

1匹、2匹……5……10……。

魔獣の数が2桁を超えたところで彼らの表情が強張り、そして森の奥から走り来る数え切れぬほどの魔獣の大群を目にするに至り、

最初とは別の異常事態が起きていることを悟った。

不幸中の幸いとも言うべきだったのは偶然にも彼らが一旦集まり、大人数で居たことだろう。

日頃より騎士としての戦闘訓練をつむ生徒達は、すぐさま事態に対応すべく大人数で迎撃陣形を取った。

いずれ騎士団にて行動することを想定し、集団戦闘の訓練も行われていた成果が発揮された形だ。

彼らの部隊と魔獣の群れがぶつかり　そして冒頭の状況に至る。

すでに撃破したメイスヘッドオーガは10匹に上る。

遠距離からの足止めを優先するやり方は功を奏し、接近戦で被害を受ける前に何とか切り抜けられていた。

そしてこの場に留まっても損耗が増えるだけだと判断した彼らは、現在じりじりと森の入り口へ向けて後退中である。

中等部の生徒にとってもう一つの幸運は、この場に生徒会長であるステファニア・セラージェイが居たことだろう。

元々彼らは班行動の際にある程度役割を分担し、それに合わせた装備を使用していた。

大人数での陣形を組む際もその延長線上として各自が適した役割に入ることにより、即席の割りにスムーズに進んだと言える。

しかし、実際に部隊として行動する際に問題となるのが指揮官の不在であった。

それぞれが役割分担に従い行動するのは良いが、適したタイミングで適した運用を行わねば折角の大人数も宝の持ち腐れである。

その上この場には生徒しかおらず立場の上下と言うものも明確ではなかった。

そういつた状況でこの場の最高学年であり、生徒会長としての肩書きを持つ彼女が指揮を執ることに異論を唱えるものは居なかった。彼女自身、単に肩書きを持つだけでなく学科での成績優秀者に名を連ねる。

即席の部隊に即席の指揮系統ながら、彼女の指揮は的確でありこれまででは大した被害を被らずに切り抜けることが出来ていた。

「（まずいわね。魔獣の数も問題だけど、何故かこいつら皆必死に向かってくる……この圧力にいつまで耐え切れるか）」

ステファニアは内心で焦りつつも懸命に指揮を執っていた。

今はまだ生徒達の体力、魔力共に余裕がある。

しかしこの調子で襲撃を受け続けては、いずれ押し潰されてしまうのは目に見えていた。

「（それに、全ての魔獣を止められたわけじゃない。後ろの子達、どうか無事で居て……！）」

状況は全く好転しないが、それでも彼らは懸命に抗うのだった。

中等部の生徒達が森の奥で奮戦しているころ。

比較的森の浅いところで実習を行っていた初等部の生徒達もまた、魔獣の襲撃を受けていた。

最初から戦闘を想定して装備を整え、また日頃から戦闘訓練を積んできた中等部に対し初等部の生徒達は全てにおいて準備不足だった。

最も森の奥側にいた生徒から悲鳴が上がった。

突如数匹のスタッカートリザードが襲い掛かり、生徒に噛み付いてきたのだ。

一撃で致命傷となるほどの攻撃力はないが、それでも多数に襲われれば危険である。

それに気付いた教師達がすぐさま助けに入り、生徒に襲い掛かる魔獣を攻撃した。

彼らを責めることは出来ないが、結果的にこの教師の行動は裏目に出た。

現れた魔獣がこの数匹だけならば良かったが、時をおかず多数の魔獣が森の奥から現れたのだ。

動くタイミングを逸した教師達はそのまま戦闘を続行せざるを得なくなる。

彼ら自身はすぐさま倒れるようなことはなかったが、その後ろで生徒達は突如現れた魔獣の群れに半ばパニックになっていた。

それを静める役を負う教師が動けず、十分な指示が出来ないため生徒達は我武者羅に杖を振り回し魔法を撃つ。

ろくに狙いもつけられていない魔法は十分な効果を発揮せず、逆に同士撃ちにすらなりかけていた。

更には周囲に他の生徒が居る中で剣を抜くものすら現れ、パニックは深まる一方である。

「エアロタムド、キャニスタシヨット  
風衝弾、単発拡散」

突然、生徒達の集団を何者かが飛び越した。

銀色の髪が陽光に反射し、混乱の坩堝にあつた生徒達の目に焼きつく。

彼は上空で身を捻るようにして地上へと狙いを定め、多数の風の

法弾を一斉に撃ち放った。

連続して響く轟音は、法弾が一斉に地面へ着弾した音だ。面を押し潰すように放たれた圧縮大気の弾丸が魔獣もろとも地面を耕し、吹き飛ばす。

中央の魔獣が大きく減ったところで更に左右から二人の生徒が前に出た。

一人が魔獣の群れに突撃し、その手に握る大振りなブロードソードを薙ぎ払う。

フィジカルブースト 身体強化で強化された臂力を以って振り回された剣は、多数の魔獣をまとめて両断した。

剣を振った勢いを殺さずそのまま一回転するように身を捻り、その間に腰から武器を取り出してまだ生き残る魔獣へと向けた。

「甘えぜ！  
ソニックブーム 真空衝撃！」

その武器 ガンライクロッド 銃杖・ヴァーテックはその先に空気の断層を発生させ、ぽつかりと空いた真空に流れ込む空気が衝撃波となって魔獣に襲い掛かる。

ブロードソードの範囲外に居た魔獣が衝撃波に直撃し、その身を不自然な体勢に曲げながら吹き飛んでいった。

逆サイドでは、もう一人の女生徒が両手に持った銃杖をそれぞれ別の魔獣に向けながら走っていた。

「ライオットスバロー 雷撃投槍！」

直後、轟音と閃光を伴って雷撃が走り、一塊になっていた魔獣を撃ち据える。

引き撃ったような断末魔を上げる魔獣には目もくれず銃杖を腰の



ホルスターに戻すと、その横に下げていた剣を引き抜いた。  
双剣を両手に持ち、すれ違いざまに残る魔獣を斬りつける。  
小ぶりな双剣でありながら魔法で強化されたそれは、易々と魔獣を切り裂いていった。

たった3名の生徒による嵐のような攻撃により、魔獣の群れは大きく数を減じていた。

群れの接近による圧力が減り、状況に一瞬の猶予が生まれる。

目の前で行われる蹂躪にも等しい戦闘を目撃した生徒達は混乱よりも驚愕で動きが止まっていた。

「総員、抜杖」

さきほど生徒達の頭上を飛び越え、その最前線に立った小柄な生徒が指示を出す。

幼く、小鳥が囀うなづるような声の中に言い知れぬ迫力を感じた生徒達は、慌てて指示に従った。

「集まって、密集陣形を。先生！」

同様に呆気にとられていた教師がその声で我に返る。

「指揮をお願いします。隙を見せないようにしながら後退しましょう。」

僕達は、周囲のフォーローに回ります」

教師達が慌てて指示を始め、生徒達は密集陣形を取り守りを固めてゆく。

個々の戦闘能力で劣り、また装備も十分ではない初等部の生徒達が魔獣に対抗するには、集まって魔法火力を集中させるしかない。

それでも魔力の上限が低いため息切れも早いだろうが、それは指揮を執る教師達でカバーできる範囲だろう。

再び森の奥から走り来る魔獣を睨みながら、エルはゆっくりとウインチエスターを構えた。

彼の左右を固めるようにキッドとアデイが並ぶ。

キッドは大振りなブロードソードを片手で持ち肩に乗せ、片手にヴァーテックを持っている。

アデイは双剣を鞘に戻していた。

「おうおう、すげえ数の魔獣だな。まだまだじゃんじゃんくらあ。

こいつあ思う存分暴れられそうじゃねえか」

「ふふーん　新しい武器もあるし、遠慮なんてしないんだから！」

氣勢を上げる二人をエルが嗜める。

「二人とも、戦うのは構いませんが他の生徒のカバーにはいる事を  
お忘れなく」

「えー。あっちはあっちで何とかするんじゃない……の……」

不満を漏らそうとしたアデイの台詞が尻つぼみに消えてゆく。

エルが全くの無表情でアデイへ振り向いたからだ。

「暴れたいだけなら、ここに居る必要はありませんよ？」

「う、わ、わかってるわよ！」

キッドは早々と両手を上げて降参のポーズをとっている。

「幸い此処はまだ森の入り口。後退すればすぐにキャンプに戻れま

す。  
向こうで幻晶騎士と合流すればかなり楽になるでしょう。それ  
では」

言いながら素早く風衝弾を放つ。

会話中のエル達に襲い掛かろうとした魔獣が正面から法弾をく  
ら吹っ飛んだ。

「僕たちが彼らを守らねばなりません」

初等部・中等部の生徒が森へ出ている間、高等部の騎操士達は待  
機任務から外れてそれぞれが訓練を行っていた。

護衛戦力として持ってきてきている幻晶騎士に訓練で負担をかけるわ  
けにもいかないため、騎操士同士での訓練が主になる。

ふと、訓練中のエドガーが違和感を感じた。

違和感の元を辿ると……その耳に訓練では起こりえない音が微か  
に届く。

「おい、何か、森の中が騒がしくないか？」

「ん？」

その言葉に剣を組み合っていた相手も森の方を見、耳を澄ませた。

「爆発音……魔法か!？」

「何かトラブルが起こっているようだな……全員、訓練の中止を！  
騎操士は幻晶騎士の騎乗準備だ。森の中へ偵察に出るぞ！」

ベースキャンプが俄かに慌しくなり、整備要員が幻晶騎士から離れてゆく。

半数の5機の幻晶騎士が立ち上がり、森へと偵察に出ようとした。

「おい、アレをみるよ……」

森の中に入るまでもなく、すぐに湧き出すように走り来る魔獣の群れが目に入る。

「な、なんだこれは！」

「魔獣の暴走だと？ ガキどもヤバいんじゃないか！？」

言いつつ、幻晶騎士が森へと入ってゆく。

彼らが初等部の生徒と合流するまで、さほどの時間はかからなかった。

初等部の生徒達はエル達の機転により即座に撤退行動をとっていたからだ。

一塊に集まり、群れへ魔法を放ち牽制しながら後退する初等部の生徒達。

その周囲には圧倒的な速度で駆け回り、魔獣を打ち倒す生徒達がいる。

「おいおい、あの銀色はエルか？ あいつ、本当に鱈目な力持ってたんだな」

幻晶騎士が彼らの前に出て、群れを蹴散らし始めたところで生徒達に安堵が広がっていった。

人が持つ最強戦力である幻晶騎士に対する信頼は大きい。

特にこのような魔獣に襲撃された場面において、その一騎当千の

戦闘能力は生徒達に大きな安心をもたらした。

初等部の生徒達がベースキャンプに合流し、幻晶騎士が守る中教師と高等部の騎操士達により善後策が協議されている。

初等部は十分にカバーできるが、目下の問題は森の深くへと入っていった中等部だ。

「中等部の子供達の進路はわかりますか？」

「難しいな。実習の目的を考えると森の中全域に広がっているはずだ」

如何せん幻晶騎士の数にも限りがある。救援に向かおうにもどこに行けばいいか、彼らは決めあぐねていた。

唸る教師の横からひよこりとエルが顔を出す。

「森の中で、比較的人が集まりやすい場所は？」

「ん？ ああ……この辺りだな。」

唐突なエルの質問に、教師がいぶかしみながらも答える。

本来、この場に初等部の生徒がいても仕方ないのだが、既にエルの存在を邪険に扱うものはいなかった。

「これほどの規模の魔獣の群れ、先輩達も集団での抵抗を考えるのではないだろうか？」

「ならば、それなりの規模の人数が動きやすい場所へ行くかと」

「ふむ……一理あるな」

「それに、あまり木々の多い場所では幻晶騎士は動き辛くなってしまいます。」

こちら側の戦力事情としても開けた場所から探索するのがベター

ではないでしょうか」

ルートとして指定された開けた場所は丁度森の中央を抜ける形になる。

「こちらに向かう魔獣を逆流する形にもなります。

巻き込まれて戦闘をしている人がいれば音でわかるでしょう。」

エルの提案は受け入れられ、救助部隊に伝達される。

この場にいる幻晶騎士の半数が救助部隊として編成された。

幻晶騎士に乗り込もうとしたエドガーを呼び止める声が上がった。彼が振り向くとそこにはエルの姿がある。

「私もお供してもいいですか？」

「なぜだ？」

「中等部には、親友の家族がいます。彼らが心配していますので出来れば探しに行きたいのです」

束の間、エドガーは悩んだ。

先ほどみた会議での機転を鑑みれば、探索の役に立つ可能性は高い。

危険も多いがそれもエルの戦闘能力があればある程度は問題はないだろう。

そう考え、エルに了承を返す。

アールカンバーはエルをその手に乗せ立ち上がった。

「魔力切れの人は負傷者を運んで！ 前列、待機列と交代！ あと少しです、持ちこたえて！」

魔力が減り、荒くなる呼吸を無理やり落ち着かせながらも負傷した生徒を抱え、彼らは後退していた。

戦闘の開始からすでに数時間が過ぎ、中等部の撤退戦は凄惨な様相を呈していた。

1匹1匹はたいした事はないが凄まじい数が押し寄せる小型の魔獣は否応なく体力を削り。

幾たびも現れたメイスヘッドオーガが魔力を削ってゆく。

先ほどついに十分な魔法を撃てずにメイスヘッドオーガの接近を許し、大きな損害を被ったばかりだ。

部隊を組むうち半数近くの間人間が魔力切れか負傷状態になっており、戦力はもはやギリギリだ。

僅かな体力を温存し、前衛が交代しながら戦線を維持しているが、それも何時までもつかはわからなかった。

ベースキャンプまでの距離はあと僅か。

安全圏まであと一歩という希望だけが彼らを支えていた。

しかし、現実には彼らにとって非情であった。

正面から、メイスヘッドオーガが2体。

それらは興奮し、泡すら吹きかねない様子で一直線に部隊に突っ込んでくる。

応じる魔法は最初に比べ明らかに散発的で、十分な足止めにならなかった。

前衛の生徒の表情が歪む。

先ほど1匹のメイスヘッドオーガを倒すのに10名以上の生徒が

負傷し、部隊は大きな打撃を受けた。

このまま2匹同時に戦えば、下手をすればこのまま瓦解しかねない。

それは指揮をとるステファニアも同じ気持ちだった。

さきほどからステファニア自身も指揮をとるだけでなく、杖を持ち魔法を放っている。

あらゆる可能性を検討するが、現状を打破するにはどうしても戦力が足りない。

部隊を組む生徒たちは体力的にも魔力的にも限界近い。

無理をしてもメイスヘッドオーガを撃退しようにも、その無理をするだけの余力が残されていないのだ。

体躯に見合った強靱な体をもつメイスヘッドオーガは、生徒の最後の抵抗をもともせず肉薄してきた。

むしろ、下手に魔法による攻撃を受けた分さらに興奮状態になってしまっている。

「駄目だ……」

その呟きは誰のものだったのか。

メイスヘッドオーガの拳が振り上げられ、前衛の頭部めがけて振り下ろされる。

絶望的な抵抗だが、彼には自身の身を守るべく盾を掲げる事しかできなかった。

ヒュゴボツ

だから、彼は頭上で鳴り響いたくぐもった音が何を意味するのか、直ぐには把握できなかった。



部隊の背後から恐るべき精度で飛来した複数の徹甲炎槍ピアッシングランスの火線が、狙い過たずメイスヘッドオーガの腕に吸い込まれるのを。

徹甲炎槍の魔法が自身の術式に従い次々と炸裂し、その腕を吹き飛ばしたのを。

飛んできたのは法弾ではなかった。

直後、法弾を放った本人が銀色の弾丸と化して飛来する。

それは半ば比喻ではなく、エアロスラスト大気圧縮推進によりジャンプ中に更に加速したエルはまさに弾丸と化していた。

空中の勢いそのままに、腕を失い大きく体勢を崩すメイスヘッドオーガへ、すれ違いざまに真空斬撃ソニックブレードの魔法と共に斬りつける。

瞬くほどの間にメイスヘッドオーガの首が宙を舞い、その巨軀が地に沈んだ。

地面をえぐる勢いで着地したエルは滑走しながら振り向き、もう1匹のメイスヘッドオーガへと爆炎球ファイアボールを連続射撃で放つ。

多数の炎弾が連なるようにメイスヘッドオーガに襲い掛かり、爆発の嵐がその巨軀をも揺るがした。

その体の半ばを焼かれながら、メイスヘッドオーガが地面に転がる。

「今よ！ とどめを！」

突如飛び込んできたエルに驚愕しつつも、ステファニアは生まれ たチャンス逃がさなかった。

その声に慌てて生徒たちがメイスヘッドオーガに止めを指す。

「……エル君……」

「お待たせしました、生徒会長。強力な助っ人を連れてまいりました」

エルの指し示すとおり、後方から重々しい足音が響いてくる。彼らが振り返ると、そこには高等部の幻晶騎士の姿があった。中等部の生徒達から歓声上がる。

もはや限界を迎えていた彼らにとって、これほど心強い救援はなかった。

「やれやれ、まさか本当にエルネステイを連れてきて正解とはね」

そして周囲の魔獣を駆逐しつつ、アールカンバーの中ではエドガーがぼやいていた。

エルの進言どおり開けた場所を選んで進んでいたところ、中等部の生徒達は比較的容易に発見できた。

しかしエドガーが彼らを発見したとき、既に部隊は大柄な魔獣により危機を迎えていた。

幻晶騎士の力であれば苦もなく排除できる程度の魔獣……しかし、余りに部隊との距離が近すぎた。

近寄って斬りつけようにも、遠距離からシルエットアームズ魔導兵装で撃とうにもこのままでは生徒達まで巻き込んでしまう。

力を持ちながらも眼前の事態に有効な手を打てない……エドガーが歯噛みしそうになったとき、アールカンバーの手に居たエルが飛び出した。

10m近い高さから飛び出したにも関わらず滑らかに着地し、そのまま残像すら残すほどの速度で疾走する。

恐ろしい勢いのエルの一撃により部隊に迫っていた魔獣が倒されるのを見ながら、エドガーはこれでは自分達の立つ瀬が無いな、と溜め息を隠せなかった。

そうしてギリギリのタイミングで間に合った幻晶騎士の護衛を受け、多くの負傷者を抱えながらも背後を気にすることなく撤退することが出来た中等部の生徒達は、無事ベースキャンプまで逃げ延びる事に成功したのだった。

# 15 魔獣襲来の日（後書き）

11/2/27 表現微修正。

## # 16 魔獣襲来の夜

ヤントウネン市街地、東門へと一機の幻晶騎士シルエットナイトが辿り着いた。余程急いで来たのであろう、機体を駆る騎操士ナイトランナーは疲弊しきつた様子であったが、城門へ辿り着くなり詰めていた騎士へと駆け寄る。突然の事に騎士は驚いていたが、騎操士の話を聞くなり顔を青くして報告に走った。

「それは……本当の事が!？」

ヤントウネン守護騎士団の団長であるフィリップ・ハルハーゲンは、部下の報告に血相を変えた。

共に団長室にいた副団長であるゴトフリート・ヒュヴァリネンも無表情ではあるがその顔色は蒼白であり、報告の内容が与えた衝撃の強さを表している。

「ハッ、陸皇亀ベヘモスの襲撃によりバルゲリー砦は壊滅的な打撃を受け、守備隊も恐らくは全滅。

ベヘモスはそのまま国内へと西進しており、いずれはこのヤントウネン付近に姿を現すことが予想される、との事です!」

師団級魔獣の突然の襲撃。

悪夢としか言いようのない事態に、フィリップは眩暈がする思いだった。

しかし、騎士団の指揮官たる彼が呆けている場合ではない。不幸中の幸いでその騎操士が急いでくれたことにより、ベヘモスが現れるまでに僅かな猶予がある。

この時間を一刻たりとも無駄にすることは出来なかった。

「く、大至急ヤントウネン付近にいる全ての騎士に召集命令を出せ！  
緊急事態だ、現在遂行中の全ての任務より優先する！」

報告を持ってきた部下は復唱すると、敬礼を返しすぐさま走ってゆく。

その後を追うように、フィリップとゴトフリートは作戦会議室へ向かうべく团长室を飛び出した。

「べへモスだと……いかなヤントウネンと言えど、師団規模の戦力はないぞ。」

そんなものを持っているのは王都ぐらいだ」  
「等級の区分は目安でしかありません。」

師団規模ならば余裕を持って相手を討ち取れると言っただけの話。  
現在の戦力でも、相応の被害を覚悟すれば討伐は可能かと思われる  
ます」

足早に移動しながら、フィリップは拳を握り締める。

「わかっている、そんなことはわかっているが、問題は被害の規模だ！

我が騎士団の1000の騎士と相打ちでは意味がないのだぞ！  
その後ヤントウネンは誰が守るといふのだ！」

その言葉にゴトフリートは押し黙る。

彼とて騎士団の壊滅を望んでいる訳ではない。  
しかしすでにべへモスにより砦一つが壊滅しているのだ。

仮にこのままヤントウネンが甚大な被害を被った場合、国内の物流が大きく滞る。

国境線への物資補給が滞っては、連鎖的に被害を被る砦も出てく

るだろう。

今此処で騎士団と引き換えにしてもベヘモスを倒す必要があった。

そして必要とあらば如何なる内容であれ団長に進言するのが、副団長たる彼の役目なのだ。

「……いや、もはやそのような事を言っている場合でもないな。此処で止めねば下手をすれば国が滅ぶ。

王都に遣いを出さず。我々が壊滅した後の騎士団を頼まねばならん……」

状況への苛立ちに表情を歪めるフィリップに、ゴトフリートは頷きを返すことしかできなかった。

フィリップ達が作戦会議室へ入ると、そこには騎士団詰め所になっていた騎士達が集まっていた。

どの顔も突然の事態に緊張の色を隠せない。

外に居る騎士達が召集指令を受け集まるまでの間に現状の確認が行われる。

早速地図が用意され、ベヘモスの予想進路の推定作業が始まった。報告を持ってきた騎操士も、ベヘモスの具体的な位置を把握しているわけではない。

ベヘモスの移動能力、地形からのルート割り出しで大まかな現在地を推定するのだ。

その上で騎士団が迎撃するための場所を決定する必要がある。

「やってきた方角、バルゲリー砦からの地理を考慮するとデグベル山を迂回し、麓の森林地帯を踏破するルートが最も有力な予想進路になります」

「このルートだとヤントウネン近郊は避け得ないな… 現在位置の推測は？」

問われた騎士が地図上の1点を指す。

「恐らくはクレペル平原を過ぎ、クロケの森に差し掛かったあたりかと」

「クロケの森か……近いな。このままでは迎撃するにもヤントウネン至近での戦いになるな……」

その時、背後で一人の騎士が切羽詰った声を上げた。

「クロケの森だって……！？」

「どうした？クロケの森に何かあるのか？」

最悪の予感を感じ、声を上げた騎士は言葉を詰まらせる。

「あそこでは今、ライヒアラの学生たちが演習を行っています！」  
「なっ……！？」

周囲の騎士たちも絶句する。

ヤントウネンの街だけではなくライヒアラの財産たる国民、それ  
も子供達が危険に晒されている。

中にはライヒアラの騎士学科に家族の居る者も居た。  
焦った一部の騎士が前に出る。

「すぐさまクロケの森へ向かうべきです！」

重なる問題にフィリップは頭を抱える。

しかし、悩んだのは一瞬だ。彼には優先すべき使命がある。



「伝令は向かわせる。しかし、騎士団は動かさん。もう少し騎士が集合してからだ」

「団長！ 見捨てるおつもりですか!？」

血相を変えて詰め寄る騎士をフィリップが一喝する。

「そんな訳はないだろう！」

隠し切れない悔しさが、その声に滲んでいた。

「助けに行きたいのは当然だ、だが我が騎士団の戦力ではベヘモスを倒すので精一杯なのだ！」

……それ以上の戦果は望めない。

戦力の整わぬまま焦って出撃しても徒に消耗し、最悪ベヘモスを討ち切れない可能性もある。

間違えるな！ 我々の目的はあくまでもベヘモスの討伐。

それによりヤントウネン……ひいてはフレメヴィーラ王国を守ることにある！」

ざわついていた騎士達が沈黙する。

「……今我々に出来ることは、彼らの幸運と機転に期待する事だけだ……」

クロケの森の入り口、ライヒアラ騎士学科のベースキャンプ。

中等部の撤退が完了した後は、高等部の幻晶騎士が全機でベースキャンプを囲み防衛網を構築していた。

森から出てくる魔獣の大半が1 m前後のサイズであり、大きくても3 mほどである。

全高10 mの幻晶騎士とは戦闘能力の桁が違う。群れ集う魔獣は剣の一振りでも吹き飛ばしていた。

しかしサイズが違う故にどうしても討ち漏らしが出てしまったため、その穴を埋めるようにまだ生徒達が展開していた。

魔獣の側からしてもその存在を誇示する幻晶騎士と正面からぶつかるのを嫌ったのか、いつしか流れがベースキャンプを挟んで二つに分かれていた。

ちょうど川の真ん中に島があるような形に例えられる。

中等部にて怪我人が多く出、戦力的に厳しい騎士学科の面々にとつてこれは幸運だった。

太陽が中天を越し、真っ赤な姿で山間に沈む頃。

魔獣の襲撃が途切れてからも警戒態勢を維持していた彼らもさすがに事態の収束を感じ、一息ついた。

「さすがにもう魔獣は居ないようね……」

ステファニア・セラータイは心底疲れた、と言う風に息をつく。

結局彼女は無事な生徒達を率いて最後まで指揮を執っていた。

キャンプには合流した教師達も居るが、脱出中から指揮を執っていた彼女が継続したほうがわかり易いだろうという判断だ。

「キッド、アディ、エル君」

警戒態勢を緩め、休息をとりだす生徒達へと労いの言葉をかけながら彼女もキャンプへ戻っていた。

その中に彼女が良く知る顔を見かけ、呼び止める。

「あ、ねえ……じゃない先輩、お疲れ様です」

慌てて言い直すアデイにステファニアが苦笑する。

「わざわざ隠さなくてもいいわ。こないだの事もあるし、今まで通りで、ね？」

「うん、じゃあ姉さん……怪我してない？ 中等部は大変だったってきいたんだけど！」

ステファニアは首を振る。

「見ての通り私は大丈夫よ。それより、貴方達も無茶をするわね」

そういうステファニアの表情はやや呆れ気味だった。

ベースキャンプまで撤退した直後は、負傷と疲弊により中等部の戦力はかなり落ちていた。

そのままでは幻晶騎士の防衛網を掻い潜ってきた魔獣の相手も困難だったが、エル達が時間を稼ぐことでなんとか部隊を立て直したのである。

「つつつてもよ、あん時は戦えるの俺達だけだったしな。多少の無茶はするってもんだ」

「……3人で部隊1つレベルの活躍を見せるのは多少どころじゃないと思うのだけれど……まあいいわ。

あ、エル君」

ステファニアは二人の後ろに居たエルに近づくとそのままがばつと抱きしめる。

抵抗する暇も無く捕まり驚くエルをよそに、ステファニアはご満悦の状態で髪の毛に頬ずりをしていた。

「ああ〜やっぱり癒されるわ エル君がいればまだまだ戦えちゃう」

「（おいおい。まあしゃあない、今回はサービスしとこか。俺一人の犠牲で気分転換になるなら安いもんやろ）」

エルはよっぽど抗議しようかと思っただが、これまでの彼女の活躍を考えて思いとどまる。

後ろの双子も、アディがなにやら不審な挙動を見せてはいたが止めるつもりは無い様だった。

そうしてステファニアがしばらくエルを堪能していると、彼らの背後からおずおずと声がかかった。

「あ、あの、生徒会長……」

ステファニアを呼びに来たと思われる生徒は、彼女の様子に半ば以上引き気味だ。

つい先ほどまで中等部の生徒を率い、凛々しく指揮を執っていた彼女が今は下級生を抱きしめてだらしない笑顔を浮かべているのである。

さもありませんという所だ。

「何かしら？」

「（うん、今更キリツとしても手遅れやおもっくんよ。色々）」

「今後の方針を決めるので、来て欲しいと先生が呼びで……」

「わかったわ。ごめんね3人も、行って来るわ」

恐ろしい速度で生徒会長モードに切り替わったステファニアに半ば呆れつつも手を振った。

「（さあて、当面の危険は乗り切ったやろうけど、こっから先どうなるんやろね）」

エルはクロケの森を振り返る。

日が落ち始めた森は、まるで視線を拒むかのようにどんどん暗さを増してゆく。

その奥に何が潜んでいるのか、それはエルにもわからなかった。

「それで？ 結局移動は明日になったのかよ」

その後の方針をめぐって多少もめたようだが、夕食が始まるころには全員に行動が伝えられている。

夕食に携帯食料と簡単な山菜のスープを啜りながらエル達は状況を確認していた。

「ええ、負傷者は多いのですが幸いにも致命傷を負った人はいません。重くて骨折といったところでしょう。」

それよりも魔力を使い果たし疲弊している人も多く、実働上の戦力が乏しいのが痛いですね。

この状況で強行軍で移動するのは危険だと言う判断だとか」

「ねえ、こんなところで休んでるのも危険じゃないの？」

「夜間となれば、馬の視界も利きませんしね。」

疲弊を押して危険な馬車での移動中に襲撃されるよりは明かりもあり、まだ拠点としての能力のあるこのキャンプのほうが安全だと

判断したようです。

それに、さすがに同規模の魔獣の群れがもう一つ存在するとは思えませんか」

「ふーん。なんか楽観的だね！」

「楽観つーよりや、何やつても賭けになるからリスク低いほう選んだってだけだろ。」

仮に夜になんか来るつつつても、動かねーほうが幻晶騎士による防衛がカンタンなんだしよ」

似たような危惧は他の生徒も抱いており、小声で話し合う姿がそこかしこで見られた。

今現在彼らに出来ることは十分に休養を取りつつ、危険が発生したときにそれを速やかに検知・対処することだけ。

ギリギリの状況ではあるが、こまめに交代することで前日に倍する人数の見張りを立て、緊張感は拭えないものの何とか夜を過ごすのだった。

だが、彼らは見落としていた。

魔獣が暴走した原因は何なのか。

そして彼らは気付けなかった。

こちらへ向かう魔獣が、どれも必死の様子だったのを。

何かに追い立てられる様にして西を目指していたことを。

それを後悔するのは、夜明けを目前にした深夜のことであった。

夜が明け、じわりじわりと山々の頂から赤い日差しが見え始める頃。

見張りに立つ生徒が、森から異様な音が聞こえてくることに気がついた。

それは木が張り裂け、倒れる音。  
規則正しい間隔で聞こえる、重量物が落下したような音。  
彼らはその意味に気付くのに時間は必要なかった。  
すぐさま力の限り警鐘を打ち鳴らす。

「やばい！ 大物だ！ 大物がきやがった！」

突如鳴り響いたけたたましい鐘の音に、教師、生徒を問わず寝ているものは全員が飛び起きた。

元々緊張もあり眠りはやや浅かったこともあり、全員起き上がるや否やすぐさま行動を開始する。

待機中の幻晶騎士が森の入り口を固め、休憩に入っていた機体も次々に立ち上がって行く。

だんだんと木が倒れる音も、地響きのような足音もはつきりと聞こえ始めている。

かなり巨大な何者かが迫っている。

「おいおい、こいつはやばかねえか？」

言うまでも無く、その場にいる全員がこれまで以上の危険を感じている。

張り詰めたような空気の中、引き寄せられるように全員の視線が森の入口へと集中した。

これまでクロケの森には決闘級（最低でも幻晶騎士が必要なレベル）以上の大型魔獣が居なかった。

小型の魔獣しかいないからこそ実習の場所に選ばれたのである。

しかし響いてくる足音は明らかにそれ放つ者の巨大さを物語っている。





# 16 魔獣襲来の夜（後書き）

1 / 1 / 2 / 2 / 7 表現微修正。

## #17 死地からの脱出

奇妙な静寂がその空間を覆っていた。  
現れた魔獣、その場に居た人間の双方が無言で対峙したが故の静寂。

その場の人間、ライヒアラの学生達は目の前に現れた陸皇龜の巨体ベヘモスに気圧され、動くことすら出来ないでいた。

かつてベヘモスと遭遇した精鋭たる国境守護騎士団の騎士すら、一瞬の自失を避け得なかったのである。

十代半ばの学生に、それに匹敵する胆力を求めるほうが酷だ。対してベヘモスが動いていない理由は定かではない。

しかし現に森の入口から周囲を見回し、状況を確認するかのよう  
に黙し、佇んでいる。

凍りついたような時間の中、先に動いたのはベヘモスだった。

恐らくそれは余裕の程度の差なのだろう、ひとしきり周囲を見回したベヘモスはその口を大きく開き、咆哮を上げる。

それは最早音と呼ぶよりも、空気の振動による衝撃波に近いものだった。

途方も無い肺活量により押し出された轟音は地面を振動させ、至近距離の木々が破裂する。

防衛を担うべく前に出ている幻晶騎士シルエットナイトの装甲が振動で震え、押し寄せる圧力に絶えかね何歩か後ずさった。

少し離れていたはずの生徒達ですらあまりの大音量に耳をふさいで蹲り、衝撃に気を失うものすらいた。

そしてそれが彼らの金縛りをとく事となる。

一度動き始めた彼らは、それまでの停止が嘘のように弾かれたように魔獣からの逃亡へと移った。

しかしそれは正気に戻ったからではなく、逆に恐怖と混乱による暴走へと陥っただけだった。

もはや教師の統制など利くはずも無く、ただべへモスから距離をとろうと闇雲に駆け出すのみ。

この状況では逃走自体は最善の選択肢だが、その方法がまずかった。

人の足では逃げられる範囲など高が知れている。

より遠くへ逃げるのならまずは馬車へと向かうべきだったのだが、だが恐慌状態の生徒達はそんなことすら思いつかないのか、走る方向はばらばらだ。

そうして彼らが四方に離散するかと思われたとき、突如進行方向のあちこちで爆発が発生する。

いくら恐慌状態とは言え、目の前で爆発が発生してそれに突っ込む生き物はいない。

一瞬生徒達の動きが止まる。

それを狙ったかのようにその前に人影が躍り出た。

「離れて逃げては危険です！ 全員馬車のほうへ！」

ファイヤボール  
爆炎球を放ち彼らの離散を制したのはエルを筆頭に何名かの冷静さを保っていた生徒達だ。

彼らはまるで勢子のように魔法により注意を引いて散らばった生徒達を集め、馬車の元へと誘導する。

生徒達は冷静には程遠い状態だったが、それでも言葉を認識できる程度には落ち着くことができた。

今度こそ彼らはべへモスから逃れるため、馬車へと向かってゆく。

ベヘモスの威圧感に恐怖していたのは高等部の騎操士達ナイトランナーも同様であつた。

しかも彼らの場合は幻晶騎士という力があるゆえに、ベヘモスの脅威はより深刻であつた。

無闇に逃げ出すには自分達は力を持ち、相対するには敵が強力に過ぎるのだ。

「立ち止まるな！ 動けええ！」

進退窮まり、強敵を前にしているにも拘らず足が止まっていた騎操士達のなかで、最初に動き出したのはエドガーだつた。

逃げるにしろ戦うにしろベヘモスの前で足を止めるのはただの自殺行為でしかない。

ベヘモスが突撃を開始するのを見て取つた騎操士達は慌てて回避行動に入った。

そして、ベヘモスの進路の先に初・中等部の生徒達が逃げる馬車置き場があるのを見て取つたエドガーは、自分の中の恐怖を押し殺して決断する。

「我々で、ベヘモスの注意を引く！」

「なつ、お前、自分で何を言っているのかわかつてるのか！ あれはベヘモスだぞ！」

俺達じゃ片足で蹴散らされるのがオチだ！」

「だからと言って！ このままでは後輩達が全滅しかねない！」

その上あのまま馬車の後を追われてはいずれヤントウネンが襲われるんだぞ！」

反論した騎操士にもそれはわかっている。

ここで彼らが逃げ出したとて、逃げこむ先すら危ういのだと。

「くそう！ やるしかねえのかよ……！」

「俺たちは騎士だ。弱きものを助けるために剣を習い、国を守るために幻晶騎士に乗る。」

ここで何もせずに逃げるなど、できはしない！」

言いながら、エドガーはアールカンバーにシルエットアームズ魔導兵装を装備させた。

「俺だつて無駄死にはしたくない、兎に角べへモスの注意をそらすんだ！」

「畜生が！」

アールカンバーは既に走り出し、べへモスの足へと狙いを定める。

「全員抜杖！ 法撃で注意を逸らしつつ離脱だ！」

エドガーは叫びながら操縦桿トリガーを引き絞る。

騎操士の意思を受けたアールカンバーは魔導兵装・アークウィバスへと魔力マナを送り込む。

長柄の、シンプルな棒状の杖のような武装の先端が眩く発光し、放たれた雷撃がべへモスを撃った。

雷撃に効果があつたようには見えない。

べへモスの巨大さによるところもあつたが、雷撃は甲殻を伝い地に逃げるのみで内部組織には伝わっていなかったためだ。

エドガーの他にも3機の幻晶騎士がそれぞれに魔導兵装を構え、べへモスと並走するようにしてオールド・スベル戦術級魔法による法撃を始めた。

そのどれもが効果があつたとは言いが、それでもべへモスの注意をそらす程度の役にはたつた。

攻撃を受けたことに気付いたべへモスが首を巡らし、いましも魔

法を放った幻晶騎士を視界に捉える。

「く、全く効いてないだと……」

「逃げるぞ！ 時間を稼げればそれでいい！」

ベヘモスの注意がこちらを向いた事を知った騎操士達は、そのままベヘモスを初・中等部の生徒達から引き離すべく後退を開始した。

高等部の幻晶騎士がベヘモスに挑みかかっている間、初・中等部の生徒達は必死に馬車へと乗り込んでいた。

定員に達した馬車から次々に出発しているものの、乗り込めた人数は全体の半分と言った所だった。

「（さすがに人数が多い……先輩の頑張りあっちに期待するしかないな）」

エルは生徒達の最後尾で、ベヘモスと幻晶騎士の戦闘の様子を見ていた。

生身の人間には不可能な出力での魔法 戦術級魔法による法撃も堅固極まりない甲殻に阻まれ効いた様子が無い。

人間の技術の粹たる幻晶騎士すら、あの魔獣の前では無力な存在に過ぎない。

ましてや一人の人間になど何ができよう。

エルは険しい表情で戦いを見守っている。

傍から見ている限りでは高等部の騎操士達は圧倒的に不利だ。

何せ攻撃が通じていない。

今は後退を中心に動きで翻弄しているが、ベヘモスの巨体から鑑みて幻晶騎士すら一撃で行動不能になる可能性がある。

エルにしてもこうして見ている事しか出来ないのは非常にもどかしいが、いくらなんでも手の出しようが無かった。

「（こっちは全員逃がして見せる。先輩達も死なんといてや……！）」

ベヘモスが本気で突撃を開始しては幻晶騎士の移動速度をもつても逃げ切れる保証は無い。

そのため、誰かが狙われそうになる度に逆側から集中砲火を浴びせ、注意を逸らすことで時間を稼いでいた。

攻撃はさしたるダメージにもなっていないが、それでも攻撃される事自体にベヘモスは苛立っているように見える。

「ははは！　なんだ、このデカ物め、手も脚も出ないじゃないか！」

デイトトリヒが咆える。

その巨体からでる威圧感に圧され、竦んでしまったからこそ現在の自分達の優位を、まず自分自身に言い聞かせる。

しかし時間稼ぎが上手く行くことによって逆に彼らは油断し始めてしまった。

実はこの魔獣はでかいだけのウスノロで、大して恐れることは無いんじゃないのか？

実際には一回でもベヘモスの突撃が当たれば幻晶騎士は破碎されかねないのだが、この巨獣を手玉に取っているという事実が彼らの判断を曇らせる。

そうして暫くは順調に時間を稼いでいるかのように見えた、その時。

攻撃を加え逃げる機体を追っていたベヘモスが突如動きを緩める。先ほどまでは闇雲に追ってくるばかりだったベヘモスの変化を、騎操士達は訝しんだ。

ベヘモスが大きく息を吸い込む。

直後、その口腔から猛烈な竜巻プレスの吐息が放たれた。

魔法による遠距離攻撃。

これまでの行動から突撃しか行わないと思い込んでしまっていた騎操士達は、ベヘモスの突然の魔法攻撃に反応できなかった。

竜巻が直線状に放たれ、荒れ狂う大気の渦が機体を捕らえた。

圧倒的な圧力に抵抗することも許されず、幻晶騎士の装甲がひしゃげ、体を支える結晶筋肉クリスタルティニューが砕けてゆく。

全高10mの金属の塊である幻晶騎士の機体が軽々と宙を舞い、地面に叩き付けられた。

激突の衝撃で最も耐久性に劣る四肢が破砕し、ちぎれ飛ぶ。

なまじ幻晶騎士は人の形をしているため、地面に散らばるその姿の凄惨さが、残る騎操士達の目に焼きつく。

「ヒッ、う、うわ！」

ディートリヒはその様子をまともに見てしまった。

これまで高等部で共に学んできた学友が、彼が駆る幻晶騎士が、呆気なく粉碎される様を。

彼の喉から出たのは引き攣れるような悲鳴だ。

瞬間、風を斬る轟音と共にディートリヒの前に居た機体が居なくなつた。

一瞬彼には何が起こったのかわからなかったが、少し視線をずらせばすぐに原因がわかった。

ベヘモスによる尾の一撃。

動きの止まったところを遠心力のついた攻撃に直撃され、目前に



居た機体はひとたまりも無く折れ飛んでいたのだ。

ディートリヒが無事なのはほんの少しの偶然、立ち位置の違いによるものだ。

あと数歩踏み込んでいれば尾に巻き込まれ、同じように吹き飛ばされていただろう。

瞬く間に2機の幻晶騎士がまるで陶器か何かのように砕け散った。それまで仮にもベヘモスに対しても戦いうると考えつつあった騎操士達は、完全に己の考え違いであったことを悟る。

ベヘモスが残る機体に向けて振り向いた。  
目の前で、実際に易々と幻晶騎士が粉碎される光景を見せられ、そしてその原因が次はこちらを狙っている。

「うわああああああああああああああああああ」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお」

2種類の叫びが交差する。

前者はディートリヒ、目の前の魔獣に対する恐怖の叫びだった。後者はエドガー、己の恐怖に打ち勝つ奮起の雄叫びだった。

「（くそっ、何故油断した！ ベヘモスは師団級魔獣……俺達で簡単にどうにかできる相手じゃないなんてこと、わかっていたというのに！）」

全員正面は避ける！ 兎に角回避を優先するんだ！ あと少し、あと少しだけ粘ってくれ！」

どの道既にベヘモスと相対している以上、迂闊に背を見せてはなぎ払われて全滅するのは目に見えている。

エドガーの声に、恐怖に震えながらも他の騎操士が応じ、死に物狂いでベヘモスの攻撃を避けてゆく。

最早彼らには、完全に死線を越えてしまった場所で粘ることしか、道が残されていなかった。

べへモスからの魔法の暴威により、高等部の騎操士達が窮地に陥っていたところ。

エル達は初・中等部の生徒を全員送り出し、最後の馬車へと飛び乗っていた。

信号弾代わりに空中に爆炎球を数発打ち上げる。

何とか、それに気付いた騎操士達が脱出に移ることを祈るのみである。

エルは走る馬車の後部から遠ざかる戦いの様子を見ていた。

先ほどのべへモスの魔法攻撃により、高等部の旗色は良くない。恐らくはエル達が此处を離脱した後でも、距離を稼ごうと戦い続けている。

エルの胸中に、一昨日のエドガーとの会話がよぎる。

もはやエルには、届かないと解っていても応援を送ることしか、できることはなかった。

その時、エルの視界の端を紅い影がよぎった。

森へと振り向き、それが何であるかを確認したエルの表情が驚愕に彩られる。

紅い影 それは幻晶騎士・グウエールだ。

まさか、という思いで振り返れば、他の機体はべへモスと戦っているのが遠くに見える。

つまりグウエールは、他の生徒を見捨てて、一機だけ逃亡している事になる。

そう理解した瞬間、エルの体は馬車から躍り出ていた。

幻晶騎士の移動速度は速い。エルも全力を込め、弾丸の如き速度でグウエールの後を追いつめた。

突然のエルの行動に驚いた皆が止める暇も有らばこそ。

その姿は一瞬の間に森の中に消え、もはや探すことは出来なかった。

#17 死地からの脱出（後書き）

11/2/27 表現微修正。

## # 18 戦闘準備

日が差し込み、明るい森の中を紅い幻晶騎士シルエットナイトが走る。

周囲には森が広がるばかりで何者の姿も無い。

しかし紅い機体は脇目も振らず、速度を緩めずにまるで何かを追  
い立てられている様に全力で駆けていた。

そして事実、紅い幻晶騎士　グウエールとその騎操士ナイトランナー、デー  
トリヒ・クーニッツは完全に追い詰められていた。

デートリヒを駆り立てているのは恐怖の感情だ。

陸皇亀ベヘモスに学友の幻晶騎士が倒される光景が、彼の脳裏にこびりつ  
いて離れない。

後ろを振り返ることすら出来ず、デートリヒは遮二無二グウエ  
ールを走らせる。

自分が走っているわけでもないのに、恐怖に乱れた呼吸が肺を締  
め付けていた。

彼だけの話ではないが、騎操士達は己の愛機に絶対の信頼を持っ  
ている。

勿論世の中には幻晶騎士の戦闘能力を上回る魔獣もあり、全くの  
無敵であるとは思っていない。

時には犠牲も出るだろう。

しかしそれでもあのような、一切手も足も出ずに、しかも一撃で  
粉碎されるような敵がいるなど彼の覚悟の埒外だった。

力への信頼は、それを圧倒的に凌駕する存在に出会った時に崩れ  
去ってしまう。

信頼できるものが無いまま戦場に出ることは、寸鉄を帯びずに飢  
えた虎の前に立つに等しい。

結果、恐慌状態に陥った彼は恥も外聞も無く生き残る道を　残

る学友を囷にしての逃走を選んだ。

しかし運命の女神は容易にはディートリヒを見逃さなかった。

突如、グウエールの速度が落ちる。

全く冷静さを欠いているディートリヒだったが、それでもすぐにその原因に思い至った。

先ほどの戦闘とあわせての全力疾走。

しかも彼は常日頃の訓練の成果を出すこともなく、とにかく我武者羅で効率の悪い走り方をしてしまった。

当然その結果に待つのは魔力貯蓄量の枯渇だ。

動けなくなることへの恐怖がディートリヒを襲うが、それでもこの状況で何を出来るわけでもない。

グウエールを立ち止まらせてから駐機姿勢をとらせ、魔力貯蓄量マナ・プールが回復するまでその場での休憩を余儀なくされる。

彼はひとまずベヘモスに追われていない事を確認し、荒れた呼吸を落ち着けた。

しかしいざ立ち止まって少しでも冷静さを取り戻すと、次に襲ってきたのは猛烈な後悔の感情だった。

彼は首を振ってその思考を振り払おうとするが、動くことも出来ずにその場にいる状況では、後から後から思考が湧いて出てはディートリヒを追い詰める。

そう、自分は味方を見捨てて逃亡した……。

轡くわを並べて戦ってきた友を見殺しにするなど、騎士たる者として恥ずべき行いだ……。

「（だっ、だから何だって言うんだ！ あの場にいたんじゃ、殺されるだけだ！

私は生き残る道を選んだだけだ！ 騎士の心得だつて無駄死にしろなんて言っていない！」

他の誰でもない、ディートリヒ自身の内からの声 良心の呵責という名の声を必死に否定する。

一度は落ち着けたはずの呼吸が再び荒くなる。操縦桿を握り締めた手は強張り、力の入れすぎで白くなっていた。それにも気付かずにディートリヒは目を見開き、滝のような汗にまみれながら自分の思考を肯定し、否定していた。

自らの思考に振り回されていたディートリヒは、突如聞こえてきた音で我に返った。

圧縮空気の噴出する鋭い音。バカッ、と言う金属の摩擦音が続き、彼の正面の視界が広がった。余りに突然の事態にディートリヒの思考が追いつかない。

幻晶騎士の胸部装甲は操縦席へ乗り込むために圧縮空気の力を用いて上下に開くようになっていた。

今、突然それが開いたのだ。

勿論彼は装甲の開閉操作などしていない。する理由が無い。そして外部から開くための方法は、誤動作で装甲が開かないように複雑なレバー操作を必要とする。

つまりは何者かが外から装甲を開くためのレバーを操作したとは思えない。

その推測を裏付けるように、開いた装甲の上に跳び乗るように人影が現れた。

初等部としても小柄な体躯に、紫銀の髪が眩く映える。

呆然とするディートリヒに向けて、エルネステイは涼しげな表情で微笑みかけた。

「やっと追いつきましたよ、先輩」

エルの口調はまるで忘れ物を届けるかのように気軽なものだった。小首をかしげながら、さらりと問いを口にする。

「単刀直入にお聞きします、先輩はあの場から逃げ出したのですよね？」

エルにとってはまさに確認のためだけの問いかけだったが、問われたディートリヒはびくりと震える。

突如として現れた後輩からの、しかもあまりにストレートな問いかけに彼は再び興奮状態へと陥っていった。

「……！ くっ ああ、そ…… くそ……」

そ、そうだ！ 逃げて何が、何が悪い！ あの場所で一人増えようが減ろうが、結果は全く変わらない！

だったら何故私が無駄死にしないといけないんだ、騎士の心得とて、命まで捨てるとは言っていない！」

口から泡が飛ぶのもかまわずディートリヒは繰り返す。

それはエルの言葉に対する答えではなく、自分自身へ言い聞かせる言葉だ。

興奮するディートリヒに対し、エルは笑みを崩さずに頷いた。

「よかった」

「……なに？」

予想もしない反応にディートリヒが呆気にとられる。

よかった？ 今の彼の台詞のどこに、喜ぶ要素があったというのだろうか。



「先輩からならば、僕も安心してグウエールを借りれそうです」

エルがウィンチエスターを引き抜く光景を最後に、ディートリヒの意識は途絶えた。

エア・バレット  
大気弾丸でディートリヒを撃した後、エルは操縦席の中を一通り回した。

幻晶騎士は全高10mの巨体でありながら、骨格と各種機材を詰め込んだ操縦席内は狭く、雑然としている。

最も目立つのは中央のシート、その左右の肘掛の部分に2本の操縦桿がある。

シートの下には錠あぶみがあり、騎操士は両手を操縦桿に、両足を錠に置く形で操縦を行う。

エルは以前見せてもらったことのある操縦席の機能を軽く思い出しながら、操縦に必要な手順を脳内で再確認していた。

そしていざ気絶したディートリヒを退かせようと、固定帯をはずしながら彼はふと気付いた。

「（さすがに気絶したままここに放り出した日にゃ、獣とかに襲われて死ぬんちゃうん？）」

一人で逃亡したディートリヒに怒りを感じていたのは事実だが、さすがに生命の危険に晒すのは彼の本意ではない。

少し悩んだ後、エルはシートの後ろの空間に目をつけた。

幻晶騎士の操縦席には一般的に、サバイバル用の物資が備え付けられている。

毛布や携帯食料、簡易医療セットなどがあり、作戦行動中にはぐれても数日は単独で行動できるようにするためだ。  
大抵の場合はシートの後ろ側に邪魔にならないように詰め込まれている。

「（まあちよつと勿体無いけど、此処しか空いてへんしな）」

エルは無造作に荷物を引き抜き、外へと捨てる。

背後の空間にいくらかの余裕が出来たのを確認した後、シートの上で伸びていたディートリヒを其処へ詰め込んだ。

やや人としてとってはいけない態勢のような気がするが、気にしたら負けだ。

ディートリヒを片付けた後、エルは改めてシートに向き直る。

シートは高等部の生徒の体格に合わせたものであり、そこに座るとエルの体格では操縦桿にも鎧にも届かない。

勿論地球における車のように、シート的位置調整などという便利な機能は存在していない。

しかしこれは既に想定済みの問題であり、その対策も考えずに操縦席に乗ったわけではなかった。

徐にシートの左右のコンソールを切りつけ、外装を破壊する。別に八つ当たりしている訳ではない。

事前に一般的なコンソールの形式は調査しており、破壊したその下から操縦桿へと伸びる銀製の配線シルバーナイフ 銀線神経を引っ張り出した。

それをウィンチェスターに巻きつけると、彼はシートに座って固定帯で自分の体を固定する。

ウィンチェスターの魔力伝達用の銀部分と銀線神経を直結することで簡易の入出力端末にしたのである。

銀線神経は魔力と共に魔法術式スクリプトを伝達する。

本来、幻晶騎士の操縦には操縦桿と蹬からの入力と、そして魔法術式を利用する。

しかし幻晶騎士の制御システムたる魔導演算機は、最終的には魔法術式のみを使用して全身を制御している。

つまりは極論すれば操縦桿を使用しなくても、魔法術式さえ利用できれば幻晶騎士は動くのである。

では何故操縦桿と蹬が存在するのか。

それは操縦に必要な負担を減らし、操縦を簡易なものとするためである。

幻晶騎士を制御する魔法術式は極めて複雑で規模の大きいものであり、そのままではとても一人一人の処理能力で処理できるものではない。

そのため、魔導演算機から操縦者に伝達される魔法術式は、機能を限定することで処理の軽い形になっている。

ある程度の条件を変数として持つ、入力専用の関数で本体の処理を隠蔽しているのである。

ただ、完全に魔法術式に依存する方法では操縦者にとって感覚的に理解しづらい操縦法になってしまう。

そのため操縦桿と蹬がある。

感覚的に理解しやすい操縦者の四肢に対応した物理的な入力装置をトリガーとし、限定的な魔法術式の関数から動作の詳細を入力する。

半思考制御とも言える、この二つを併用する方式により操縦の簡易さと動作の自由度をある程度両立させているのである。

エルが幻晶騎士を操縦するに当たったの問題点は物理的な入力機器が利用できない点にある。

ならば、最初から全てを魔法術式のみで処理してしまえばいい。

それは魔導演算機で処理される膨大な魔法術式を個人の魔術演算

領域で処理しようというものだが、エルの処理能力はもはや人外の域にある。

勝算の低い賭けではなかった。

エルは軽く息を吐いて気を落ち着かせると、目を閉じて意識を集中させる。

銀線神経と接続したウィンチエスターを通じ、魔導演算機へアクセスを開始。

送られてくる動作用の関数を読み込むと、そのまま関数の本体へと意識を潜らせてゆく。

本来、騎操士は魔導演算機から術式を受け取り、必要分を追加して返答することしかしない。

普通の騎操士は魔法術式の処理による負担が低いほど良いと考えるため、魔導演算機側も騎操士からの直接操作など想定していなかったためであろう。

拍子抜けするほどあっさりバイパスと経路が確立され、魔導演算機に蓄積された魔法術式が次々に読み込まれてゆく。

目を閉じて術式の解析に没頭するエル。

彼の意識上では空中に魔法陣が積み重なり、縦横に展開されている。

彼は意識上で腕を伸ばすと、魔法陣をなぞるようにしてその内容を読み取っていく。

「(さあて、こっからが本職の腕の見せ所や)」

これまでにエルが学び、記憶している術式と、魔導演算機内の術式を比較する。

極めて迅速に、魔法技術の精髓を解体にかかる。

「（パターン解析開始……類似術式検出、フィジカルブリスト身体強化、エンチャント拡大術式……）」

内容の多くが既知の術式との類似を見せ、エルの認識下に置かれてゆく。

そして術式の配置からその意味を把握。認識が広がるほどに加速度的に内部の把握が進んでゆく。

「（いつちゃん根っこにあるんは、身体強化か？ 確かに筋肉動かしんやったら似たような話になるか）」

基礎となる術式を下敷きに、個別の制御部が連結されている構造。エルの意識上ではすでに空中を埋め尽くさんばかりの魔法陣が展開されていた。

クリスタルティンユ

「（結晶筋肉の動作制御……配置のマッピング。部位ごとにモジュール化して連結。」

エーテルリアクタ出力制御、これが魔力転換炉の入出力……）」

駐機姿勢をとり、立膝を突いていたグウエールが僅かに震えた。指先が微かに動き、それまでは視線が定まらなかったその瞳がしっかりと周囲を認識し始める。

「（動かすには……俺の体を動かす身体強化術式と幻晶騎士の動作用術式を連結。」

コンバート動作パラメータを幻晶騎士にあわせ変換、併せて入出力制御を初期値で動作開始）」

全身に張り巡らされた銀線神経を伝い、干テリリアクタ魔力転換炉で生成された魔力がコクピットからの魔法術式を乗せ伝播してゆく。  
幻晶騎士は与えられた術式の指示に忠実に従い、結晶筋肉が貯蔵された魔力を消費し、伸縮を開始する。  
ゆっくりと、震えながら、まるで生まれたての小鹿のような動きで機体が立ち上がる。

「（動作パラメータのコンバートを完了、駆動開始……。  
出力制御の変数調整、魔力貯蓄量は十分、まずは一步……）」

ゆらりと、一歩一歩と踏みしめるようにグウエールの巨体が歩みを始めた。

だがその動きはまるで死者のように覚束なく、ゆっくりとしたものだ。

「（動作差異の反映、フィードバック最適化を開始）」

実際の動作から情報を反映し、機体を動かしながらも結晶筋肉の余計な動作を走査し、次々と術式に修正を当ててゆく。  
パッチ

既存の魔法術式の面影を残しつつ、思考と同速度で行われるデバッグにより、短時間の間に術式は極限まで最適化されてゆく。

数歩の歩みを刻む間に、その姿は優雅ささえ感じるほど滑らかなものになっていた。

エルが魔導演算機へアクセスを開始してからおよそ30分。

シルエットナイト

幻晶騎士 人の英知の結晶とも言うべきその魔導兵器は、完全にエルの制御下に入った。

エルの意思に従い自在に動くグウエール。

エルの思考は魔術演算領域上で直接術式へ変換され、幻晶騎士へ伝達される。

そこには物理入力装置による遅延も、関数に隠蔽されていたが故の無駄も存在しない。

操縦者の思考と同速度で動く、完全なる直接制御フルコントロールが此処に実現していた。

今は非常事態である。

こうしている間にも高等部の騎操士達は死線の際で戦っている。ここには一刻の猶予もなく、エルもそれが故にグウエールに命じる。

エルの意思を受け、グウエールは此処までかかった時間を取り戻すかのように猛烈な速度での疾走を開始した。

しかし。

走るに連れてエルの表情が緊張感を感じるそれから、笑みの形に変わってゆく。

この時のエルが感じていたのは、焦燥でも重圧でもなかった。

今エルはロボットに乗っている。

ロボットはエルの思うとおりに動き、力強い走りを見せている。

グウエールを追っている間は、考える暇がなかった。

魔導演算機へとアクセスする間は、思考がいつぱいで考える余地がなかった。

今、実際に移動を開始して余裕が出てきたところで、エルは自身自身がとっている行動の意味を、冷静に振り返り始めたのである。

こんなときに不謹慎だ、とはエルも思う。

しかし彼は自らの感情を止めようがなかった。

「(うおおロボや、俺ロボに乗ってる、走ってる!)」

機体が走るたびに伝わってくる振動も、ホロモニター 幻像投影機に映る景色が恐ろしい速度で流れてゆくさまも、そして今エル自身にかかる慣性も、その全てが彼にとっては幸せといっても過言ではない。

彼の表情が喜色満面の笑みになるのを、果たして誰が止められようか。

エルはこの先に待つのが強大な魔獣との戦闘であることも忘れ、幻晶騎士を動かす悦びに浸っていた。

そうして一歩ごとに目的を見失い行くエルと、泡を吹いて気絶したままのデイトリヒを乗せ、グウエールは戦場めがけて駆け抜けてゆくのであった。



# 1 8 戦闘準備（後書き）

1 1 / 2 / 2 7 表現微修正。

## # 19 駆け抜けてみよう

開けた草原から徐々に木が増え、いずれ木々は森と呼ばれる密度になる。

その中を石畳に覆われた街道が一直線に東へ向けて伸びていた。フレメヴィーラ王国東部へと続く最大の街道である“東フレメヴィーラ街道”。

国内における街道の中でも特に、カンカネンからヤントウネンまでを結ぶ“西フレメヴィーラ街道”と、ヤントウネンから国境へ向かう東フレメヴィーラ街道は石畳による舗装がなされている。

その歴史は古く、国境線に砦が建築される際に物資輸送を簡易にする目的で舗装されたのが始まりである。

それは現在まで国内の物資輸送を助け、まさに大動脈として活躍していた。

普段は商人の馬車と護衛の幻晶騎士シルエットナイトが活発に行き交うこの街道も、今は閑散とした印象を受ける。

それは多数の魔獣の暴走が発生したためかもしれないし、商人達の噂話に大型魔獣の目撃情報が上がっているからかもしれない。緊張感にも似た静けさが漂っている街道に俄かに騒がしさが訪れる。

数十台の馬車の群れによる蹄の響きが辺りを満たす。馬車にはクロケの森を脱出したライヒアラ騎操士学園の生徒達が乗っていた。彼らは高等部の騎操士達ナイトランナーの必死の足止めにより、辛くも巨獣の襲撃から逃げ延びてきたのである。

脱出当初は馬車を全力で走らせていたが、さすがに馬の消耗が激しいため今は通常以下のペースで進んでいる。

それでも通常はヤントウネンまで約1日の道程の凡そ半分程度を踏破していた。

馬車の中では生徒達がそれぞれに疲れた様子で座っている。

ここまでの間背後から魔獣が追ってくる様子も無く、走り続けるうちに大分と落ち着いてきては居るものの、生徒達が胸に抱いた不安感は容易に拭えそうにはなかった。

「エル君、どうしてるのかなー？」

そんな重苦しい空気の中、最後尾を走る馬車の中ではキッドとアデイがぼんやりと後方を眺めていた。

クロケの森からの脱出際、馬車を飛び出し森へと入っていったエル。

それは彼らが止める暇もないほど唐突で、そして後を追う前にその姿は視界から消えていた。

「……なあ、もしかしてよ」

「？」

微妙に上の空のキッドが、何かを思いついたようにぼそりと呟く。

「あいつよ、幻晶騎士奪って殴り込みに行ったんじゃないやねえか？」

まさか、と返そうと口を開けかけて、アデイはそのまま考え込んだ。

彼女の脳裏にありありとその光景が思い浮かぶ。

常識的に考えれば、騎操士課程の学生でもないエルが幻晶騎士を動かせるはずもない。

しかし彼ならば、あの彼ならば独自の学習で動かし方を知っているもなんら不思議ではない。事実、動かせたのだが。

となれば、彼がそのまま陸皇<sup>ベヘモス</sup>に突撃することは想像に難くない。

「ああー……うん、なんだかすごく納得しちゃった。エル君ならやりかねないよね」

「何にせよ心配いらねえだろ。いざとなればあの脚で逃げ切るさ」

キッドはエルとともに行ってた走り込みの様子を思い出していた。

エル自身が<sup>エアロスラスト</sup>大気圧縮推進と名付けた魔法を使用して、恐ろしい速度で走り去るその姿。

狼の疾走より尚早く、空行く鳥と同じ速度で地を駆ける彼を果たして誰が捕まえられようか。

しかも恐ろしいことに彼はその勢いそのまま優に1時間は走り続けられるのだ。

かの巨大な魔獣を相手にしても逃げるだけなら早々に視界の外へと逃げおおせるだろう。

そこまで想像して、二人は顔を見合わせニーツと笑いあう。

ちょうどこの頃エルがグウエルを奪取し、彼らの予想通りにベヘモスへ突撃しているのだが、幸か不幸か馬車に揺られる二人にそれを知る術は無かった。

群れの先頭を行く馬車に乗った教師が、突如後方に注意を促した。進行方向の遙か彼方に何者かが進む土煙が見え、ほどなく馬車の前方より馬の蹄とは違う音が響いてきた。

重量のある物体が、多数集まっているかのように重なった音。

地響きの原因は直ぐに知れる事になる。列を成し、整然と進む巨人の群れ。それは、フレメヴィーラ王国で制式採用されている幻晶騎士である“カルダトア”だ。

フレメヴィーラ王国の国民にして、その姿を知らないものは居ない。

そしてカルダトアがここに居る意味がわからない者もまた、居ない。

「ヤントウネン守護騎士団！！」

先頭の馬車に乗る教師の声は、すぐさま後ろにも伝わってゆく。次々と馬車から顔を出してその光景を確認した生徒達の顔が希望と興奮に輝いてゆく。

此処にいる部隊は幻晶騎士2個大隊規模にも上る約90機、その後ろには輜重隊と野戦整備隊。

これはヤントウネンの戦力の大半であり、バルゲリー砦からの使者を迎えてより一日も経たない内に揃える事が可能な戦力としては最大限といえる。

カルダトアは制式採用された量産機の常で飾り気には乏しいが、長きに渡って使い込まれ、磨き上げられたその姿は一種独特の迫力を持つ。

両肩に飾られたフレメヴィーラ王国の国旗と、ヤントウネンの都市旗の紋章はこの地を守護するものとしての誇りを感じさせた。

ライヒアラの生徒達はもはや不安など感じていない。

例えばあの魔獣ベヘモスが如何に強大であろうとも守護騎士団がそれを打ち破ってくれる。

そう信じるに足るだけの信頼と力がそこには存在した。

馬車を発見した騎士団のほうでも、生徒たちとは別の安堵感が広まっていた。

可能な限り急いで準備し出撃してきた彼らではあるが、ライヒアラの生徒達はその時点で全滅すら覚悟されていた。

それがざっと見たところその大半が無事に脱出してきたのである。

そして、ライヒアラ側からはベヘモスの位置情報を含む、貴重な情報もたらされた。

「そうですね……高等部の騎操士達が……」

そしてその中には、ライヒアラの生徒達が無事に逃げられた理由も含まれる。

騎士団にもライヒアラ騎操士学園の出身者は多い。

彼らは自分達の後輩が見せた騎士の鑑たる行動に、決意を新たに  
する。

「ご安心ください。我らが国家を守るため、そして犠牲を無駄にしないためにも彼奴は必ずやこの地で討ち取ります」

騎士団は意気を上げてクロケの森へと向かう。

ライヒアラの生徒達が遭遇してからまだ半日と経っていない。

ベヘモスとの遭遇戦は目前と予想され、騎士団の緊張感は一歩ごと  
に高まってゆくのであった。

鬱蒼とした森の中を、グウエール紅い幻晶騎士が駆け抜ける。

走る、走る。ディートリヒが逃げてきた道を、それに倍する速度  
で戻ってゆく。

グウエールの性能は、勿論ディートリヒが乗っていた時から変わ  
らない。

ではこの差は何によるものか。

スクリプト魔法術式を利用した操縦法を行うに当たり、エルはグウエールの  
制御に、自身の動作パラメータを変換して適用している。

現在のグウエールは彼と同じく高速機動を主体とした動作に最適  
化されているのである。

更に、彼は完全にマキウスエンジン魔導演算機 システムと直結した状態にある。

彼の思考は直接魔法術式スクリプトに変換され、タイムラグなく機体の全身へと伝達される。

クリスタルティシュー  
元々幻晶騎士の結晶筋肉は生物の筋肉組織よりも出力や応答速度といった性能が高く、伝えられる命令を遅滞なく実行することができる。

結果としてグウエルは並の幻晶騎士の倍近い反射速度と移動速度を叩き出しながらの行動が可能となったのである。

前方から聞こえる地響きが徐々に大きくなり、暴風吹き荒れる音に混じって爆発音や雷撃と思しき音も聞こえ始める。

あと数分もしないうちにベヘモスと接敵することになる。思わずエルの顔が笑みの形に歪む。

抑えきれない歓喜を滲ませながら、彼は人生初の幻晶騎士による戦闘に突入していった。

ゴガアッ！！

金属同士の重々しい打撃音が響き、吹き飛ばされた巨人が宙を舞う。

ベヘモスの突撃に弾き飛ばされた機体は、あまりの衝撃にそのまま地面を転がってゆく。

内部の騎操士の安否を確認する暇もないが、地面に打ち付けられ、胸が潰れ腕がひしゃげている様子を見ると無事とは思えない。

「くそっ！」

初・中等部の生徒が離脱した後も高等部の騎操士達は戦闘を続けていた。

すでに疲労の色が隠せない彼らに対し、ベヘモスはさすが要塞とも称される魔獣、その動きには全く衰えが見えない。

元々圧倒的だった力の差に加え、刻一刻と持久力の差まで現れ始めてゆく。

国境守護騎士団でさえ耐え切れなかった圧力を前に、高等部の機体は1機、また1機と倒れ、最早残るのは3機に過ぎなかった。

吹き飛ばされた味方機に一瞬気を取られたエドガーを、ベヘモスの尾が襲う。

鞭のようにしなる尾を避けきれないと直感したエドガーは、アルカンバーを可能な限り下がらせながら左手の盾を大きく振るわせ、危ういところで尾の一撃を受け流した。

それは正にアルカンバーの性能と高等部有数の技量を持つエドガーの力が合わさってこそ可能な離れ技であったが、尾の先端が掠った、その威力だけで盾を弾き飛ばされてしまった。

不用意によるめかない様に衝撃を受け流しながら、アルカンバーがベヘモスから更に距離をとる。

「(盾を持っていかれたか！ まずいな、どんどんと追い詰められていく！)」

それでもアルカンバーはまだ無事な方で、残る2機は魔力貯蓄量や損傷が限界にきている。

エドガーは脳裏を過ぎる最悪の予感を振り払えない。

後どれ位もつだろうか、悪くすると5分と経たず全滅している可能性すらあるのだ……。

ベヘモスから既に何度目かもわからない竜巻の吐息が放たれる。

暴風渦巻くブレスは効果範囲が広く、大きめに回避しないと気流



に巻き込まれる。

それまでの疲労と損傷が蓄積していた機体が最後の力とばかりに直撃こそ避けたものの、周囲の気流に煽られて大きくその体勢を崩した。

「ヘルヴィイツ！！　くそ、間に合えっ！！」

叫びつつ、エドガーは倒れた機体めがけて突撃し始めたベヘモスの気をそらすべく、僅かな可能性にかけてシルエットアームズ魔導兵装・アークウィバスを撃つ。

必死の攻撃も虚しく甲殻に弾かれるばかりで、ベヘモス意識は目の前にいる幻晶騎士エモにそそがれたままだ。

ベヘモスの速度が上がり、立ち上がろうとあがく機体へと迫ってゆく。

そして、誰もが次なる犠牲を覚悟した、その時。

「ツツツ　　ツチエエエエエエ　ストオオオオオオオオ！！！！！！」

ついに、グウエールが戦場に辿り着く。

森から出れば、其処にはいましも倒れた機体を轢かんとするベヘモスが目に入る。

瞬間的にさらに速度を上げたグウエールは、紅い弾丸と化しながらベヘモスの左手から迫る。

走りながら抜剣。

斬ることなど考えない。

選ぶは突き、勢いを一点に集めた攻撃。

狙うは一点、要塞とも称される魔獣の数少ない急所、眼球。

並みの機体には到底辿り着けない速度を叩き出しながら、グウエールの動作は精密極まりない。

しかし、ベヘモスはグウエールの剣が直撃する直前に紅い影に気

付いた。

気付いてしまったが故に、ベヘモスは反射的に首をそちらに向ける。

既に不可避の間合い、グウエールの剣は振り向いたベヘモスの目を正確に追う。

吸い込まれるように剣が眼球へと突き出され、剣と甲殻がぶつかり合う。

それはただの偶然。

ベヘモスの眼を守るはずの甲殻には、僅かな罅ひびが入っていた。

凡そ半月前に、ある騎士が、命と引き換えに刻んだ、罅が。

ただ横から攻撃を受けただけならば、もしかしたらベヘモスの甲殻は突きを弾けたかもしれない。

しかし振り向いたが故に、偶然に剣は罅を正面から捕らえ

…貫いた。

通常の幻晶騎士に倍にも達する速度で、金属の塊たる自身の重量全てを一点に集中した突き。

金属同士が摩擦する耳障りな音を立て、火花を散らしながら剣がその眼を貫いてゆく。

そのまま根元まで差し込まれるかと思われたが、しかし。

ガツツ、と硬質な音を残して剣が半ばから砕け散る。

乾坤一擲の一撃は確かにその眼を穿つたものの、その奥にある頭蓋を貫くには至らず、両者の衝突の勢いに耐え切れなかった剣が砕けてしまったのだ。

エルは剣が砕けたことを悟るや、正に一瞬であるにも関わらず宙へと飛び上がり、衝突を回避する。

突撃の勢いが残るベヘモスの巨体を掠るようにグウエールがすり抜けて行く。

高々と宙を舞い、空中で綺麗に縦捻り回転を決め両足から着地。

そのまま更に2回バク転を繰り返し出し、ベヘモスから離れるとやつと停止した。

ベヘモスが、それまでになく激怒の咆哮を上げる。

左目からはとめどなく血が噴き出し、その身をそれまで経験した事のない衝撃が駆け抜ける。

ベヘモスは魔獣の中でも圧倒的な防御力を持ち、攻撃を受けても傷つくという事が少ない。

それ故に、眼を貫かれるという激痛と、視界の半分が失われたことによる衝撃は計り知れなかった。

ベヘモスは残った右目を血走らせ、左目を奪った怨敵を探して暴れ狂う。

最早その場にいる全てがベヘモスの興味から消えうせる。

求めるのはただ一つ、左目に最後に映った光景、紅いヒトガタの姿のみだった。

高等部の騎操士達は、戦闘中にも関わらずそれを啞然とした表情で見ている。

状況に、彼らの理解が追いつかない。

逃げたと思われていたグウエルがありえないほどの速度で駆け抜け、それまでびくともしなかったベヘモスの甲殻を穿ち、その眼を潰して見せた。

今、目の前の巨獣は憤怒の咆哮を漏らしながら、紅い機体と向かい合っている。

「！ ヘルヴィー！」

ベヘモスの注意が逸れたのを幸いと、アールカンバーが倒れた機体に駆け寄る。

ヘルヴィ機は転倒による損傷もあり、歩行もやっとの有様だ。  
振り向けば、ベヘモスがグウエールに襲いかかっていた。

片目を失ったにも関わらず、それまでより尚激しい勢いで突撃するが、グウエールの動きはそれを上回る速度だ。

エドガーの目には本当にディートリヒが乗っているのか疑わしいほどに映ったが、彼にそれを気にする余裕はない。

グウエールがベヘモスの猛攻を凌げるといふのなら、損傷の激しい味方を救出する時間ができる。

「(すまないディー、少しだけ持ちこたえてくれ……!)」

巨獣と踊る紅い機体に背を向け、彼らはその場を離脱した。

エドガーは今グウエールを操っているのがエルだとは知らない。

そしてエルがどのような状況にあるかも知らない。

グウエールの中では正面幻像投影機ホロモニターに映る、迫り来る巨体を睨み据えながらエルは唸っていた。

「これがベヘモス。これが魔獣。これが戦闘。これが……幻晶騎士での!戦!闘!」

その顔には凶暴なまでの笑顔が花開いている。

隙を突いての奇襲は望外の成果を得た。

しかし、手負いとなった巨獣は更なる殺意に血塗られながら迫り来る。

山としか形容できない威容が、景色をゆがめそうなほどの殺意が、致命の威力を以って迫り来る。

熟練の騎士でも恐怖を拭えないだろうその光景に対しても、エルが感じているのは狂喜であり狂気だ。

ロボットに乗って巨大な敵と戦う。

メカヲタクにしてそれを夢想しないものが居るだろうか。それを望まぬものが居るだろうか。

実際にそれを前にして萎縮する気持ちなど彼の中には微塵もなく、身の内を歡喜が逸り立てる。

それ故に彼が命じるのは唯一つ。

「Go ahead  
前進!」

僅かに身を沈ませたグウエールが、爆発しそうな勢いで大地を蹴立て走り出す。

ベヘモスへと向けて。

瞬く間に両者の距離が詰まる。

互いの相対速度に一瞬で過ぎる時間の中、突如グウエールの姿がベヘモスの視界から消えた。

片目を失ったベヘモスはそれに気付く事が出来ず、そのままグウエールがいた場所を粉碎する。

あるうことがグウエールは衝突の直前にジャンプし、剣山のように刺々しいベヘモスの甲羅を蹴りたてて飛び越えていた。

軽やかに空中で宙返りしながらエルは素早く思考を走らせる。

「(全身ほぼ隙間無く甲殻。よほどの助走がないと斬るだけ無駄。魔法も撃つだけ無駄。

ならば巨大兵器破壊の心得・その壱ッ!!)」

着地の衝撃を膝で殺し、グウエールが予備の剣を引き抜く。

「(多脚式ならば狙うのはまずは脚、そして関節!!)」

軽く助走すると、恐るべき精密さで以って後ろ足の膝の甲殻の僅

かな隙間へと剣を突き立てる。

剣は確かに肉へと突き立ったが、その手応えは予想以上に硬かった。

それを悟ったエルは剣を抜き、即座にグウエールを下がらせる。

「（ほとんど刺さつとらん！ 中身まで硬いんかい！）」

エルとしても予想外だったが、ベヘモスの“フィジカルブースト身体強化”は内部組織すら恐るべき耐久性に引き上げていた。

この重量を支えるには四肢全てを強化するしかないため、当然といえばそうなのだが、戦う側にとっては悪夢というほか無い。

突然後ろ足に加えられたダメージに、ベヘモスが更に猛り狂いながら振り返る。

再びベヘモスの視界から外れるべく走りながら、エルは先ほどの攻撃を思い出す。

確かに一撃で関節を破壊することは出来なかったが、甲殻へ攻撃するよりは手応えを感じられた。

クスツ、とそこだけは何故か可愛らしく、嬉しそうにエルは笑う。

「持久戦になりそうですね……まあ、それはそれで構いません。嫌いじゃありませんから」

激情に猛る巨獣を前にしながらも、軽やかに、そして楽しそうにグウエールが駆け出した。

# 19 駆け抜けてみよう(後書き)

11/2/27 表現微修正。

## #20 目が覚めたら

「(む……うっ…… ……?)」

彼は意識を取り戻す。

視界に入るのは薄暗い空間。

ぼんやりとしていた意識がハッキリするにつれて、俄かに無理な体勢をとっていた全身を痛みが襲う。

「ぐっ……う、うっは……」

呻き、狭い空間でなんとか体勢を立て直そうとすると、目の前の壁に押し当てられるような独特の圧力が襲ってきた。

くぐもった悲鳴をあげつつも、今の圧力で彼の意識がハッキリとする。

彼がさきほど感じたのは慣性……ナイトランナー 騎操士ならば馴染みの感覚だ。

ただし今のは彼の記憶にあるそれよりも随分と強烈だったが。

ならば、ここはシルエットナイト 幻晶騎士の操縦席と言う事になる。

そこまで考えて彼     デイトリヒは記憶にある最後の光景を思い出す。

そう、小柄な新入生が目の前に現れて、そして。  
彼は慌てて無理矢理に体勢を立て直し、座席の後ろから首を持ち上げるが、その時に彼の目に入ったものは幻像投影機を埋め尽くさんばかりに迫り来る陸皇亀の姿だった。

「んもツギゃあああああああああああああああああああああ  
あ!……!……!……!」



突如として座席の後部から響く絶叫に、さすがのエルも驚いて操縦を誤る。

「ま ずいつ！ とっ！」

崩れかけた体勢を無理矢理立て直し、あわやという所で突進してきたベヘモスの左側に滑り込むように飛び退いた。

距離を開け、再びベヘモスが振り向くまで落ち着きながら、エルはチラリと後ろを見やった。

「えー、おはよう御座います先輩。只今死地です。できればお静かに願いますね」

穏やかな口調とは裏腹の内容に、デイトリヒは開いた口が塞がらない。

言われた内容もそうだが、彼の思考は逃げ出したはずの自分が再びこの場所にいることへの疑問で埋め尽くされていた。

「お、お前！ なんて事を！ 正気なのか！？ いや、そもそも何故戦っている！？」

彼はその後も矢継ぎ早に質問をしようとするが、再び走り出したところで口を閉じざるを得なくなった。

ホロモニターに映るベヘモスの凶相。

逃げる前よりも確実に凶悪な気配を撒き散らし、邪魔物を払う等というものではない本物の殺意を滾らせながら巨獣が暴れていた。

本来の騎操士である彼も体験した事のない速度でグウエルが走り、間一髪の間合いで襲い来る魔獣の攻撃を避けてゆく。

普通なら幾たび死んだかもわからないその光景に、彼はいつそ恥も外聞も捨てて泣き出したかった。

しかし彼は必死に声を押し殺して歯を食いしばり、今にも白目を剥きそうな壮絶な表情で耐えていた。

なぜなら彼が余計な事をして、エルが操縦を誤ればすぐさま本当に死にかねないからだ。

「（これは……なんだ！？ 私一人逃げた罰なのか？）」

今この場所にいるのはグウエルだけだ。皮肉にも彼が逃げ出した状況とはほぼ真逆である。

そして機体を操るエルが戦い続ける以上、再び逃げることはかなわない。

「（逃れられない定め……私を連れて、一体どうするつもりなんだ？ この戦いを、最後まで見届けると言うのか！？ 仲間を見捨てた、この私に！！）」

捨てるに困ったから、などと言う真実は流石に彼の想像の埒外だった。

彼の心情になどまるで頓着せず、巨人と巨獣の戦闘は続く。

ベヘモスの強靱な膂力による一撃は大地を砕き、破壊的な竜巻の吐息は木々を薙ぎ倒し、吹き飛ばす。

その全てが致命の威力を持つというのに、グウエルは……そして今それを動かしているであろう小柄な少年は、楽しげにすらしながら攻撃を掻い潜り、巨獣の四肢を狙い反撃まで行っている。

デイトリヒは目が覚めた当初こそ恐怖心に冷静さを全く失っていたが、その状況が続けばいずれ違う心境に至る。

信じがたいことに、この少年が操るグウエルは防戦が主体だが巨獣に抗して見せている。

グウエールの騎操士だった彼だからこそわかる。

この機体はそれほど性能の高い機体ではない。ライヒアラの実習機は元々どれも2線級の代物なのだ。

他の高等部の幻晶騎士がどれも敵し得なかったことからそれは明白である。

何か違いがあるとすれば 当然、この騎操士が原因だろう。

彼も見知ってはいる、時たま騎操士学科で見かける小柄な新入生。こんな若い少年がこれだけの操縦技術を持っているなど、普段であれば到底信じられないだろう。

しかし現実に巨獣を相手に一歩も引かない奮戦を見せている。

「（私が……生き残るには、このままこいつに戦ってもらうしかない……！）」

一時は絶望に沈みかけたディートリヒだが、現状に一縷の希望を見出していた。

ディートリヒの目には危なげなく戦っているように見えるグウエルとエルだが、実を言うとそこまで余裕があるわけではない。

2つの大きな問題が徐々に状況を圧迫し始めていた。

1つは、グウエールの魔力貯蓄量マナ・プールの問題だ。

通常、幻晶騎士が全力で戦闘し続けられるのは長くて1時間程度である。

それ以上は魔力マナの消費量に供給量が追いつかず、十分な能力を発揮できなくなってしまう。

グウエルが戦闘を開始してから、既に2時間が経つ。

通常の倍にも及ぶ時間を、しかも高速機動を駆使しながら未だに戦い続けているのだ。

それは偏にシステムを掌握したエルの緻密な制御の賜物だった。

魔法術式の最適化による必要魔力の軽減、動作に必要な結晶筋肉を限定して駆動することによる消費の節減。

さらに彼は常にグウエールを動かせているわけではなく、動きの中に細かく“息継ぎ”を入れていた。

ベヘモスの視界からそれている間、更にはほんの僅かな滞空時間まで利用して魔力貯蓄量を回復させている。

彼は持久戦を決意してからは、一見激しく動きながらも裏ではリソースを極限まで節約した戦闘を行っていた。

しかしそれも完全と言うわけではなく、魔力貯蓄量は最大時の半分を割り込みつつある。

このペースが続けば、戦闘可能な時間は多く見積もっても後2時間は無いだろう。

2つ目の問題が、武器の損耗だ。

2時間に渡りベヘモスへ攻撃を加えた結果、グウエールの剣は刃こぼれでガタガタになり、只でさえ通じにくかった攻撃は最早ほぼ通じなくなってきた。

武器であればまだ魔導兵装があるが、グウエールが装備する風の刃は一点集中の攻撃には向いていないため、この状況では有効とは言えなかった。

一度はエル自身が戦術級魔法を構成しての使用も考えたが、さすがの彼も幻晶騎士1機を制御しながら魔法術式……しかも戦術級のそれを構成するのは負担が大きく、断念していた。

彼の戦意は全く衰えていない。しかし、攻撃手段の不足ばかりは如何ともし難かった。

「（んなことになるなら、ハリネズミみたいに剣持っついで欲しかったな）」

苦々しく思いながらも、グウエールは回避を中心にせざるを得ない。

反撃の頻度が減っている事に、ディートリヒも気付いていた。

単純に生存を重視するなら回避を中心にするのは悪いことではないが、それでは持久力の差で負ける。

いずれこの場を離脱することを考えれば、脚を攻撃し巨獣の機動力を殺いでおく事が必要になる。

しかも、エルの操縦ならば反撃も十分に可能なのだ。

にも関わらず、先ほどから何度か十分なチャンスがあったが攻撃していない。

「（何故だ、何故反撃しない！ このまま逃げればかりでは追い詰められる一方だぞ！）」

開き直ったディートリヒは、自身のことは棚に上げて憤っていた。焦れた彼はついに十分に回避した隙を見計らい、エルへと質問を始める。

「おい、君、何故反撃していないのかね!？」

それまで静かだったディートリヒの突然の質問に少し驚きながらもエルは現状を説明する。

「ベヘモスが硬過ぎて、剣がボロボロなのですよ。既に攻撃が通りません」

ホロモニターの隅に映る剣は確かに刃毀れが激しく、完全に鈍らと化していた。

「た、確か予備の剣があるはずだ！ そちらを……」  
「最初に一本折れまして。これが予備の剣ですよ」

ぐぬう、とディートリヒが唸る。

「（なんとか、なんとか武器を探さねば……！ ここまで来てやられるなど、冗談ではない！！）」

彼はホロモニターに映る光景を必死に探し始めた。

エルも周囲を調べてはいるが、ベヘモスの攻撃を回避しなければならなかったため優先順位は下がる。

それゆえにディートリヒの方が先にそれに気がついた。

それを発見した瞬間、状況も忘れて彼は叫ぶ。

「そこに倒れている、幻晶騎士！ あれの武器を拾うんだ！！」

エルが一瞬だけ指差された方向へ視線を送れば、そこには先に倒れた高等部の幻晶騎士があつた。

即座にディートリヒの意図を把握したエルは、ベヘモスの攻撃をかわしざまグウエルを加速させる。

地面を擦るかのように姿勢を低くし、最高速での疾走。

そのまま削り取るように地に倒れた機体から剣を抜く。

高等部の騎操士達は主に魔導兵装で攻撃を行っていたため、剣は殆ど消耗していない。

「ありがとうございます先輩。こればかりは、困ってましたからね」

「れ、礼などいい！ さっさと奴の脚をしとめるんだ！」

エルはすぐさまベヘモスへ向き直り、改めてその状態を観察する。幾度も数え切れないほど斬り付けられたベヘモスの脚は、何箇所かは血を流しそのダメージが決して軽くないことを示していた。

「（魔力の残量は50%を割ってる。脚の一本でも潰してからやないと逃げるにしてもきつそうやな）」

新たな剣を構え、グウエールの反撃が再開される。

巨軀を誇るベヘモスはどうしても細かな動きを苦手としている。

速度と精密さを武器とする今のグウエールとは、そもその相性が最悪だ。

無限とも思えるスタミナに支えられ、ひたすらに攻撃を繰り返すがそのどれもが当たらない。

逆にグウエールが攻撃を繰り返すうち、ベヘモスの脚の傷は無視できないレベルになりつつある。

塵も積もれば山となる。

片目と四肢から血を流し、さしものベヘモスもその動きが鈍り始めていた。

そして。

再び、それに先に気付いたのはディートリヒだった。

後ろから聞こえた驚愕の叫びを聞き、エルも素早く周囲を見回す。

そこにいたのは幻晶騎士。

チラリと見ただけでも見間違えようのない、それはフレメヴィーラ王国における幻晶騎士の代名詞、“カルダトア”。

それがグウエールとベヘモスを包囲するように展開していたのだ。彼らはその機種と、それらの間にはためく旗を確認し、即座にその正体を悟る。

「カルダトアだと!? あ、ああ……あの旗は! ヤントウネン守護騎士団!」

よかった! 助けだ、ついに助けがきたあああ!!!!!!」  
「(ここで現れるんか……予想よりも早い、先になんか情報得てたんか?)」

エルは素早くこの後の行動を思考する。

グウエールは確かにまだ戦えるが、魔力貯蓄量は3割を割り込み、余裕に乏しいのも事実だ。

騎士団が到着したのならば時間稼ぎにも意味はないし、ここは素直に騎士団に任せて下がるべきだ。

グウエール一機では不足していた火力も、これだけの戦力が有るなら十分な物があるだろう。

未だ執拗に迫るべへモスをいなし、わざと騎士団に背を向けるように誘導する。

そして、目の潰れた左側をすり抜けるようにしてグウエールは騎士団の陣へと駆け出した。

グウエールが近寄ってくるのを見て取ったのか、騎士団が一斉に魔導兵装を構え始める。

魔獣にはいまだ憎き紅いヒトガタしか見えず。

ついに決戦の舞台へと誘い込まれるのであった。



## # 2 1 陸皇討伐

舗装された東フレメヴィーラ街道の上ではなく、街道沿いの森の中を数騎の騎馬が駆けてゆく。

この騎馬はヤントウネン守護騎士団の斥候部隊だ。

本隊に先駆けてクロケの森を偵察し、目標である陸皇龜<sup>ベヘモス</sup>を確認することが目的だった。

街道からそれて暫く進むと、一層木々の密度が上がる。

クロケの森と呼ばれる場所は馬車ならば街道から半日ほどだが、単体の騎馬ならば更に短い。

学生達との遭遇時よりベヘモスの位置がさらに街道よりになっていた為、斥候部隊はさほど時をかけずに本隊へと帰って来た。

「そうか、もはや目と鼻の先と言ってもいいが……街道まで来ないのはありがたいな」

斥候からの報告を聞き、ヤントウネン守護騎士団長であるフィリップ・ハルハーゲンは唸る。

ベヘモスの進攻具合によっては街道上での戦闘も覚悟をしていたが、その心配は無さそうだ。

そして斥候からも一つの報告を聞き、微かに渋い表情になる。

「3機を保護、まだ1機が戦闘中か……」

グウエールの乱入によりその場を離脱した高等部の幻晶騎士<sup>シルエットナイト</sup>は、街道まで出たところで騎士団に保護されていた。

うち2機は疲労、損傷とも激しく、後方で修繕を受けている。

残る1機……アールカンバーは比較的損傷が軽かった為、魔力貯<sup>マナ</sup>蓄量を回復させた後戦列に加わる事になっている。

そしてまだ戦っている機体とは、グウエールだ。斥候部隊が見たそれは、並の幻晶騎士をぶつちぎる勢いで戦闘していたのだが、彼らはそれについては伝えあぐね、結果として位置と戦闘の事実だけを報告していた。

報告を元に、フィリップは騎士団へ作戦を伝達する。

中隊単位（9機）に分かれて目標を半円状に包囲。

実際に戦闘を行った生徒たちから得た情報により、巨獣に対する接近戦は危険と判断。

魔導兵装の波状攻撃を中心とした遠距離攻撃により、可能な限り打撃を与えることになる。

ベヘモス側からも突撃や竜巻の吐息による反撃が予想されるが、彼らも元より無傷で倒せるなどは考えていない。

最悪、狙われた隊を囿として魔獣を足止めし、その間に撃破する文字通り決死の覚悟をもって騎士団は森へと進んだ。

巨獣の咆哮が木々を震わせる。

騎士団がそれを包囲にかかる間も、巨獣はその場でぐるぐるのたうつように暴れておりほとんど移動していなかった。

予想外に包囲が簡単に完了したことに彼らは若干の訝しさを感じるが、その原因がはっきりと確認できるに至り、一様に絶句する。

信じられないほどの速度で走る紅い幻晶騎士。

片目から血を噴き、激怒の咆哮を上げながらそれを追う巨獣。

ただの一撃で幻晶騎士を砕きうる巨獣の攻撃を、紅い機体は速度でもって翻弄する。

騎士団随一の腕前である騎士団長であってもあれほどの動きができるかどうか。

彼らの間で思わず感嘆の声が漏れた。

巨獣がその場から動かなかつたのは、ひたすら紅い機体を追っていたためと理解する。  
目の前の敵に集中するあまり、巨獣は周囲の状況に気付いてすらないようだ。

俄かに、紅い機体が騎士団の存在に気付いたように立ち止まった。次の瞬間には走り出し、ベヘモスを騎士団に背を向けるように誘導すると、そのまま脇を駆け抜け抜け騎士団の方へと向かってくる。即座に意図を理解したフィリップが全軍へと指示を出した。

「総員、<sup>カルバリン</sup>炎の槍構え！」

高々と剣を掲げたフィリップの号令を受け、カルダトアが一斉に魔導兵装・カルバリンを構える。

紅い機体が凄まじい速度で走り、騎士団の包囲の間を駆け抜けて行った。

入れ替わるようにしてフィリップが剣を振り下ろす。

「第一列、法撃開始！！」

ベヘモスをめがけ、一斉に<sup>カルバリン</sup>魔導兵装が火を噴く。

中隊はそれぞれ3機ずつ3列の形態をとっている。

同時に攻撃するのはそれぞれ1列の3機ずつ。

次に2列目の3機が撃ち、そして更に続いて3列目の3機が撃つ。交互に攻撃することにより幻晶騎士の魔力貯蓄量<sup>マナ・プール</sup>の消費を抑えながらも、間断なく炎の槍による攻撃を可能とっていた。

<sup>ゲッタール</sup>紅い機体を追いかけることしか眼中になかったベヘモスを、突如

として無数の炎の槍が襲った。

轟音と共に炎の槍が次々にベヘモスに突き刺さる。

オーバー・スベル  
戦術級魔法による炎の槍が炸裂して火柱を上げ、いくらも経たずにベヘモスの巨軀を炎が包む。

それはまるでバルゲリー砦の光景の再現。

しかしかつての数倍の規模で炎は燃え盛り、森の一角を紅蓮に染め上げた。

巨獣の影は完全に炎に飲まれ、その姿は見えなくなっている。

それでも騎士団は攻め手を緩める事無く、炎の槍を撃ち込み続けた。

「は！　うはははは！　どうだ！　どうだ魔獣め！！

これが我らが守護騎士団の力だ！！　はははははははは！！！！」

騎士団の間を抜けたグウエールは攻撃が始まると同時に立ち止まり、その様子を見ていた。

隊の後ろに陣取った後は機体を休め、魔力貯蓄量を回復させている。

シートの後ろで笑い狂うディートリヒに顔を顰めつつも、エルは油断なく目の前の地獄を観察していた。

いまだ撃ち続けられる炎の槍。全てを焼き尽くさんと炎は更に規模を増してゆく。

これだけの攻撃だ。如何に頑丈さが売りのベヘモスといえど、決して無傷では終わらないだろう。

「（でもこれで終わるほど、安くないんやろなあ）」

エルの思考が契機になった、などと言うことはないが俄かに炎に満ちた空間に変化が発生する。

それまでは轟と燃え盛るばかりだった炎が渦を巻くような動きを見せる。

渦を巻いているのは炎だけではない。

むしる周囲の空気が渦巻くように荒れ狂い始め、炎はそれに巻き込まれているのだ。

それはすぐに炎の竜巻とも言える状態になる。

一拍の後、それは攻撃を続ける騎士団へと向けて放たれた。

考えるまでもない、ベヘモスの竜巻の吐息。

意図したわけではないだろうが、炎を巻き込みより凶悪になったそれが騎士団を襲った。

「なっ、何だ!? あれは!?!」

騎士団はある程度距離をとって法撃を行っていたため、竜巻の吐息も完全な致命の威力は持っていなかった。

のたうつ炎蛇が騎士団を舐めてゆき、元は彼ら自身が放った炎を盛大に周囲へと撒き散らす。

竜巻の吐息の存在は把握していたが、まさかあの炎の中から放たれるとは思っておらず、彼らは動揺し大きく体勢を崩していた。

一角が崩れた分、炎の槍による攻撃が緩む。

その瞬間に残る炎を弾き飛ばしながらベヘモスの巨体が飛び出し、てくる。

鉄をも溶かすような獄炎の坩堝にあつた甲殻は所々が赤熱し、少なくともダメージが見て取れる。

グウエールによりつけられた四肢の傷は炎を浴びたことにより更に焼け爛れ、四肢へのダメージは相当なものになっているはずだ。

実際にベヘモスの動きは最初に比べ明らかに勢いが落ちていたが、それでもさすがは耐久力ならば並ぶ物なき魔獣である。

その突撃は体勢を立て直す途中の騎士団を蹂躪するのに十分な力を持っていた。

隊を組んでいるがゆえに、騎士団の動きが鈍いことも災いした。中隊のど真ん中にベヘモスの巨躯が突き刺さる。

進路上の機体は跳ね飛ばされ、倒れた機体は踏み潰され鉄屑へと変わってゆく。

何機か迎撃を試みた機体も居た。高熱で脆くなった甲殻を剣が削るが、それでも内部に届く前に尾に薙ぎ払われ、無残にも粉碎されてゆく。

如何にダメージがあろうと近距離での戦闘能力には絶望的な差がある。

一個中隊が見る間に壊滅に追い込まれていった。突撃の途中にも加えられていた法撃は、さすがに味方部隊との混戦となった事により徐々に散発的な物になっていた。

「2番、4番、8番隊！ 鎚用意！」

残る中隊もその様子を指をくわえて見ていただけではない。

もとより彼らは被害は覚悟の上で此処にいるのだ。

フィリップの号令が戦場に轟き、動きの止まったベヘモスへと彼らの切り札が突撃を開始する。

ベヘモスを左右から挟みこむように、数機の幻晶騎士が大型の武装を抱えて走る。

それは4機もの幻晶騎士を必要とする対大型魔獣用改造破城鎚詰まる所、至極単純な巨大な杭だ。

巨大な金属の塊を杭の形状に成型しただけの代物。

しかしその名が示す通り、幻晶騎士4機でもって打ち付けられるそれは、堅牢な城壁すら打ち砕く破壊的な威力を秘めている。

まさに要塞の異名を持つ魔獣への切り札として用意された武器だが、実は武器としてはかなりの欠陥品である。

当然のことながら破城鎚は重い。この武器は重量を破壊力に変換する類のものだからだ。

そのため運用には幻晶騎士が4機は必要になり、巨大さも取り回しは劣悪極まりない。

原理が単純なだけに、威力を高める為にもある程度の速度まで加速して叩きつける事が望ましいが、走りながら動く目標を狙うなどと言う芸当は到底望めるものではない。

幻晶騎士にも劣らぬほどの速度で移動する魔獣に対して命中させるためには、何よりも相手を足止めする必要があるのだ。

さらに突撃という攻撃の方法上、至近距離での危険性は非常に高い。

特にベヘモスは大半の攻撃が幻晶騎士にとって致命的である。下手な使い方をしてはただの特攻に成り果ててしまう。

これらを併せて、十分な効果を発揮しなかった場合は反撃で倒れる危険が高く、その場を直ぐに離脱しなければならぬ。

つまりかなりの場合において使い捨てにされる。

当てるは難しく、機会も少ないと極めて使いどころが限定される武器だが、ベヘモスの防御を貫くだけの威力を持つ武器はそうはない。

味方の犠牲の上にもこの攻撃は成功させる必要があった。

事前に全ての騎士団員に破城鎚の問題点を通達してある。

それは今ベヘモスと交戦中の中隊も例外ではなく。

彼らは壊滅を目前にしながら一歩も引かず、むしろベヘモスへと喰らい付くようにしてその動きを止めていた。

破城鎚を抱えて走る機体からもその光景は見えている。

その操縦席では操縦桿を握るナイトランナー騎操士の手が軋みを上げ、脚が鎧を蹴り飛ばしている。

犠牲は覚悟の上とは言え、仲間を蹂躪する魔獣への怒りが収まる

わけではない。

彼らの犠牲に応えるために、雄叫びを上げながら破城槌部隊は走る。

1 本目の破城槌がべへモスへ辿り着く。

そも細かな狙いの効く代物ではない。最も巨大な部位である横っ腹めがけて、破城槌を叩き込む。

4 機もの幻晶騎士を必要とする重量が生み出す破壊力は凄まじかった。

火炎に炙られ甲殻の強度が落ちていたとは言え、べへモスの甲殻をあつさり貫き腹部に突き刺さる。

一瞬その巨体が揺れたかようにべへモスが震え、一拍置いて眼を討たれたときよりさらに苦悶を滲ませた咆哮が響き渡った。

天を仰いで上げた咆哮が大地を揺らし、破城槌の突き刺さった腹部からは夥しい血が噴き出す。

それを見た騎士団から歓声上がる。

使いどころの難しい武器だが、その威力は十分に通じることがわかった。

破城槌はまだ2本あり、今しも巨獣へと到達しようとしている。

巨獣はいまだ苦悶に呻いており、破城槌を避けるどころか気付いたそぶりも無い。

残る2本が狙うのは逆側の腹と頭部。これが直撃すれば如何な要塞とて致命傷だ。

騎士団の大半が勝利を確信し、期待を背負った破城槌部隊が巨獣を撃ち貫かんと、最後の距離を詰める。

それまで苦悶の声を上げていたべへモスが突如下を向いた。

騎士団はおるか、エルもその行動の意味がわからず、行動の意味を訝しむ。



ましてや破城槌を抱え走る騎士団員がそれを悟れる訳は無く。  
そこでべへモスは、あるう事か下を向いて全力を込めた竜巻の吐息<sup>ス</sup>を放った。

極至近距離の地面へと放たれた暴風は荒れ狂うままに大地を抉り、狭領域内で圧縮された大気は岩石を撒き散らしながら爆発と化す。

命中を目前にした破城槌部隊にそれを避ける暇などない。

頭部を狙っていた部隊は岩石に打ち据えられ、爆発に巻き込まれそのまま地面と共に粉碎される。

更に信じられないことに、爆発と竜巻の衝撃の全てを下面で受けたべへモスが、その勢いを利用して立ち上がった。

離れたところにいた騎士団員が、啞然とした表情でホロモニターに映るその光景を見つめる。

全長50mにも及ぶその巨体が、莫大な重量にも関わらず前足を完全に浮かし、起き上がっている。

あまりの事態に、全員それに対する反応が遅れた。

「！！ しまった！！ 逃げてくれ！！」

フィリップが叫ぶまでもなく、腹部を狙っていた部隊は突然の事態に混乱しながらも回避を試みていた。

しかし彼らは破城槌という超重量の武器を持ち、全力で走っていたのである。

その一瞬での急な回避など望むべくも無かった。

そこへ重力に従ったべへモスの巨体が、落下してゆく。

魔獣の巨大な重量が生み出した破壊力は、破城槌とは比較にならないほど莫大だった。

それは周囲に小規模な地震を引き起こし、その身が叩き付けられた地面は碎け抉れ、周囲に散弾のように岩石を撒き散らす。

逃げられなかった破城鎚部隊はひとたまりもなかった。金属の塊であったはずの破城槌すらひしゃげ、それを持っていたはずの幻晶騎士は既に原形を留めていない。

余りに壮絶なその攻撃に、放ったベヘモスも無傷とはいかなかった。

破城鎚に貫かれた腹部から流れる血は勢いを増し、全身あちこちの甲殻に罅が入っている。

外からは解らないが、いくつかの内臓器官が強化を突き抜けたダメージにより損傷を受けている。

ベヘモスとてもはや相当に追い込まれているのである。

しかし、騎士団が被った被害はさらに深刻だ。

最初に襲われた中隊とあわせ、騎士団は凡そ2割の戦力が完全破壊、飛来した岩石により1割が中破。

何より切り札である破城鎚を失い、騎士団の打撃力は大きく落ちている。

その上必殺の攻撃を無力化された衝撃は、むしろ彼らの心に打撃を与えていた。

騎士団を最初に倍する緊張感が包む。

単純にその力のみならず、巨獣の存在と言う圧力が、彼らの心を蝕んでゆく。

「……………」

その光景を見ていたグウエールの中では、ディートリヒが声もなく震えていた。

守護騎士団の一部を犠牲にした必殺の一撃すら、その力の前に粉砕された。

果たしてこの魔獣を倒すことなど可能なのだろうか。

実際にはベヘモスのダメージも決して浅くはないのだが、信じていた力が通用しなかったと言う事実の前に動揺する彼に、そこまでの判断は不可能だ。

震えるディートリヒを正気に戻したのは、前の座席から聞こえてきた呟きだった。

「……許せませんね」

ディートリヒにはエルの後姿しか見えない。

しかし、エルから立ち上る尋常ならざる気配だけは理解できた。

「僕の目の前で、ロボットを壊すなんて」

「えっ」

「ロボットを壊していいのは……ロボットだけなのですよ……?」  
「ええっ!?!」

ディートリヒには全く理解できない理屈を呟きながら、エルはグウエルを立ち上がらせる。

その表情は薄く微笑んでいるが、並々ならぬ意思を込められた蒼い瞳の輝きが、彼の雰囲気修羅のそれへと変えている。

エルは素早くグウエールの状態を確認する。

魔力貯蓄量の残量は5割強、武器はまだ使用可能、損傷は無いに等しい。

一人の悲鳴を後に引き、グウエル紅い幻晶騎士は再び戦場へと走り出す。

ベヘモスはまだ動く。

もはや満身創痍といってもいいダメージを負いながら、まだ行動可能なその耐久力は驚嘆に値した。

冷静に見ればそれも最後の足掻きにも近いものだと思つたかも知れない。

しかしすでに精神的に圧倒されつつあつた騎士団は、ベヘモスがまだ動くと言う事実の前に積極性を失つていた。

炎の槍による法撃が応戦を始めるが、まとまりを欠いた攻撃は十分な効果を發揮しない。

騎士団の包囲自体がベヘモスの動きに圧され、崩れかけていた。

騎士団長であるフィリップが盛んに檄を飛ばしているが、一度下がった士気は容易には上がらない。

歪な包囲を紅い風が突き抜けた。

金属地そのままの色をしたカルダトアの中にあつて、一際目を引く紅い幻晶騎士。

誰もが止める暇もなく、それは一直線にベヘモスへと向かつて疾走する。

「お前それは無理やばいあれは無理騎士団いる逃げ無理うっつおおおおおわあああつあああああ！？」

グウエールを操るエルは騎士団の様子など頓着してはいない。

そして叫びが意味不明の領域に入ったディートリヒも彼の意識の外だった。

彼の深い蒼の瞳は一直線にベヘモスを捉えている。

騎士団を後方に突き放し、グウエールはベヘモスへと迫る。

満身創痍のベヘモスではあるが、記憶に残る紅いヒトガタの姿に再び咆哮を上げた。

互いの距離が詰まる。

近寄るにつれエルはベヘモスの様子をはっきりと確認していた。

その甲殻には遭遇時には見られなかつた亀裂が縦横に走っている。

最も巨大な破壊跡は腹部の破城槌による攻撃部分だが、エルはあえて罅の入った甲殻を攻撃する。

紅い機体が疾風と化し、速度を乗せた斬撃がべへモスへ繰り出される。

剣の軌跡は正確に罅の一つを捉え、硬質な音と火花を残して甲殻の破片が飛び散った。

「（速度乗せたら斬撃も通じるんか）」

両足で滑るように勢いを殺したグウエールは反転し、そのまま再びべへモスへと踊りかかる。

脚だけでなく全身のあちこちに攻撃は通用する。

回避を中心とした動きから攻撃へ。此処に来て攻守が逆転を始めていた。

その光景は、魔獣に気圧されていた騎士団員に衝撃を与えた。

彼らからすれば、グウエールはライヒアラ騎操士学園の生徒が乗っている機体だ。

騎士団員よりも若いはずの人間が、恐るべき魔獣に対して未だ戦意が衰えることなく立ち向かい、しかも果敢にそれを攻め立てている。

一見蛮勇とも取れるその行動。

しかしそれ故に、その姿は幾万の言葉よりも遙かに雄弁に騎士団員を説得していた。

「各隊、包囲を再構成！ 列を立て直せ！ 攻撃を再開する！！」

騎士団員は実際に目にした巨獣の力に押されていた自分を恥じ、一層奮起した。

次はべへモスを中心とした円形包囲。

各中隊はそれぞれに移動し、紅い機体を巻き込まないようにしながらべへモスの足止めとダメージを意図して法撃を再開する。

紅い騎士の剣が魔獣の甲殻を削り、炎の槍の爆発がその脚を縫い付ける。

巨獣はその攻撃力を封じられ、逆に巨体は攻撃の的になる。

一挙に形勢は傾き、次はべへモスが追い詰められてゆく。

それを見た騎士団の士気は上がり、グウエールはもとより縦横無尽に駆け回っている。

もはや魔獣に抗する術は無いと思われた。

しかし、誰もが想像だにしないところで、唐突に結末の頁が紐解かれる。

突如、エルはガクツと沈み込むような感覚を覚えた。

回避行動を取ったグウエールを反転させようと、両足で踏ん張ったところで片足の力が抜け、大きく体勢を崩してしまったのだ。

殺しきれなかった勢いに振り回され、グウエールが地面を転がる。それまでは無傷だったグウエールの紅い装甲が歪み、一部が宙を

舞う。

「なんっ！？ ですっ！？ かつ！？」

転がりながら地面を叩くようにして無理やり姿勢を立て直す。

膝立ちのような姿勢を取りグウエールがなんとか安定を取り戻した。

「（べへモスから攻撃はくらってない！！ 何故、どっからダメージきたんや！？）」

予想外の事態に、エルは素早く機体状況を走査する。

地面を転がったことにより幾つかの装甲が破損したものの、それだけでは致命傷には程遠い。

しかし脚部の反応が鈍い。

関節の各部が軋みをあげ、装甲の隙間からは結晶筋肉クリスタルティシューの欠片が毀れる。

それを見たエルが事態を悟る。

攻撃を受けたわけではない。

既存の操縦方法よりも自由度が高く、精密な制御が可能な直接制御フルコントロだが、反面エルが要求する高度な機動戦法の負荷にグウエールの機体が耐え切れなかったのだ。

その上通常の幻晶騎士の想定を大きく越えた長時間の戦闘によりダメージは過剰に蓄積し、最も負荷の大きな脚部が、此処に来てついに限界を超えて自壊を起こしていた。

生物であれば痛覚と言う形でその異常を事前に悟れたのかも知れない。

しかし機械である幻晶騎士に異常を訴える機能はなく、限界を超え、破壊を起こすまでそれを知る術はなかった。

エルの額を汗が流れ落ちる。

それまでのエルとグウエールの優位を支えてきたのは取りも直さず機動性に因るものだ。

脚が自壊し、機動性が死んだ今、もはや戦闘の継続は不可能である。

エルに出来ることは機体を捨て、脱出する事だけだった。

事態に悩む時間すら残されていない。

ベヘモスが、それまでと同様に、憎き紅い機体へと、既に突撃を開始していた。

突如膝を突き、動けない紅い機体を助けようと騎士団から撃ち放たれた炎の槍が浴びせられるが、その歩みを止めるには至らない。

ベヘモスの残された右目が怒りのために血走り、口からは憤怒の雄叫びが漏れ出でる。

亀裂の走った甲殻も、流れ続ける血も構わず、魔獣は全てを粉碎すべく突き進む。

その速度は見る影もなく衰えている。

しかし、動けない今のグウエルにとっては死を告げる存在に他ならなかった。

「まさかのタイミングだな。脱出せんと……」

彼の能力ならば機体を捨て、突撃の範囲外へ逃げることは可能だ。

「（そう、俺は……俺だけは）」

彼ならば。だが彼の後ろで恐慌状態の、ディートリヒにはそれは不可能だ。

固定帯を解き、エルはホロモニターに映るベヘモスを睨む。

もはや幾ばくの余裕もなく、巨獣の突撃はグウエルを蹂躞するだろう。

その思考は一瞬。

「（ここで見捨てるのも寝覚めが悪い……けど、揃って生き残るのは並大抵やない）」

彼は可能性を模索する。

エルに可能なこと、ディートリヒに可能なこと、グウエルに可能なこと。

「（突破口は、ある。いけるやるか？ チャンスは一度きり、チッ  
プは命……」。



まあ、ロボと共に死ねるなら、最悪それも、有りか」

メカヲタクも此処に極まっていた。

「先輩」

エルの言葉は場違いなほど静かだ。

後ろのデイトリヒに果たしてその言葉は通じているのか。

彼は目前の絶望に恐怖し、喘ぐように何かをつぶやき続けている。

「今すぐ操縦を代わってください」

エルの語調は変わらない。

だがそれまでとは違う、声にこめられた異様な気迫にデイトリヒがびくりと震えた。

その様子を確認もせずエルは銀線神経シルバーナウごとウインチェスターを引き抜き、ホロモニターにぶつかると前に出る。

「も、もう無駄だ！　ここで、私が操縦などして何になるって言うん」

「そんなことはどうでもいいです。死にたくなければ今すぐ席に着いてください」

死にたくなければ、の言葉にデイトリヒが反応する。

限界の状況に、それでも彼は這い出すようにシートへと滑り込む。

「そ、それでどうするんだ！　なにが出来ると言うんだ！？」

「説明は一度しかしません。まず……」





る。

大気で滅殺され、動きで衝撃を緩和し、硬化魔法で防御しても尚その突撃の威力は殺しきれず、周囲の装甲が弾け飛び接触した部分が歪む。

操縦席ではホロモニターに罅が入り、目前の光景が歪むのを見てエルが息を呑んでいた。

「（これだけじゃ足りないんか！）」

死力を振り絞つての抵抗も破られたかと諦めかけるが、しかし最後の幸運がベヘモスの突進を受け止めきる。

ライヒアラで使用されている実習機は、搭乗者の保護を重視して胴体部の装甲が特に厚いのである。

硬化魔法を併用した前面装甲はその目的どおり、歪みながらも搭乗者を守りきった。

誰もが紅い機体の最期を覚悟したが、グウエールはベヘモスの頭を抱えるようにして五体を残したまま存在していた。

自らの突撃を受けても壊れないそれを見てベヘモスは何を思ったのだろうか。

突撃は続き、グウエールを押し出すようにしてベヘモスは前進する。

そして此処からがエルの攻撃の始まりだった。

エルは操縦桿からの制御に割り込み、グウエールの機体を一部操作する。

操るのは機体の右腕だけ。それを振り上げ、そのままベヘモスの頭部を殴りつけた。

如何に甲殻が脆くなっているからとて、拳でそれを破壊することは出来ない。

しかしその腕が突き刺さったのはかつて左眼があった部分だ。

其処には半ばで折れた剣が刺さっている。

エルはそれを掴むと、そのまま後のことは一切考えずに全身の結晶筋肉、そこに貯蓄された全ての魔力を動員する。

安全装置も全て解除、その時機体に残っていた全ての魔力を使い、自身の持てる演算能力の全てを以って最大規模の魔術を構築した。

「チエックメイト  
王手」

過去、この世界で発現したことのない規模の雷撃が、機体の腕から剣を通りベヘモスの頭部へ直接叩き込まれる。

ベヘモスとて生物である以上、頭部には脳が存在する。

眼窩で放たれた雷撃は視神経と血液を伝い、その脳髓を直撃した。ベヘモスの頭脳を途轍もない電流が蹂躪し、無慈悲な電子の流れに内部組織が灼かれ、破壊される。

生命活動の中枢たる頭脳を灼かれ、ついに陸皇亀ベヘモスが絶命する。

電流はそのまま神経を灼き、ベヘモスの全身が一瞬痙攣するように出鱈目に動作する。

その動きに頭部に抱きつくような状態だったグウエールが投げ出され、地面へと叩き付けられる。

魔力貯蓄量が完全に尽きたその機体は、自身の構成を強化することすら出来ず衝撃でそのまま分解し、完全に大破した。

巨獣がゆっくりと地に沈む。

壮絶で、そして呆気ないその幕切れに、誰もが言葉を失っていた。やがて魔獣が再び動くことがないとわかると、徐々に騎士団に歓喜が広がってゆく。

彼らが勝ち鬨を上げるまでに、さほどの時間は必要なかった。

「（最後はやばかったなあ。下手したら挽肉になって死んどるわこれ）」

大破したグウエールはひどい有様だった。

四肢がもげたのは当然として、接合強化の途絶により金属内格インナースケルトンが分解、操縦席回りまで半分崩れている。

無事な装甲は一枚としてなく、紅い色はまぢまぢにしか残っていなかった。

操縦席も激しくシエイクされたのだが、吹っ飛びながらエルが自身の魔力で周囲に大気衝撃吸収を展開し事なきを得ていた。

反動でデイトリヒはシートに押し付けられ圧死寸前だったが、挽肉になるよりはましというものだろう。

殆ど刺し違えるような行動だったとは言え、エルも生き残ったことに安堵していた。

深く息を吐き、直後にその表情が痛恨に曇る。

「（……あああああ……ばらばらだ、グウエールばらばらになった……）」

白目を剥いて気絶するデイトリヒを一顧だにすることなく、エルは的のずれた後悔に首を振る。

「（ああでも悲しんでばかりではいらねん。

グウエール、ちゃんと俺が修理したるから、待っててくれ！）」

さらにずれた決意を胸に、エルは半壊した操縦席から出てゆくのだった。

## #22 戦いの結果

ミシミシッ　パキイッ！

枯れ木を折るような音が断続して周囲に響く。

音の発生源は小山の如き巨大な塊……陸皇龜ベヘモスの死骸だ。

死亡し、魔力マナの供給と身体強化魔法の維持が途絶したため、50mを越す巨体が自重に耐え切れず崩壊を起こしていた。

戦闘により多くの罅ひびが刻まれた甲殻が崩れ、内部の骨格が砕けたためにその高さが徐々に低くなる。

特に重量の集中する胴体付近は完全に下面が潰れ砕けていた。

地に沈んだ巨獣を包囲した布陣のまま、騎士団が勝ち鬨を上げている。

槍にも似た魔導兵装シルエットアームズ・カルバリンを高々と掲げ、巨獣に対する勝利を誇る。

犠牲も大きかった。だが犠牲が出たが故にその勝利を捧げるが如く示していた。

歓声止まぬ騎士団から離れ、3機の幻晶騎士シルエットナイトが歩いていた。

大多数をカルダトアで構成された騎士団の中にあつて、3機とも機種が違うその集団はある種の異彩を放っている。

1機は騎士団の長たるフィリップの専用機“ソルドウオート”。実用性を最重視したカルダトアに比べ豪華な外見をしており、さらには外部につけた外套型追加装甲サー・コートにより集団の中でも特に目立っていた。

その脇に行く副団長ゴトフリートが乗るのはカルダトアをベース

にしなから一回りがつしりとした機体、“カルディアリア”。

彼らの後ろを進むもう1機はライヒアラ騎操士学園の実習機である“アールカンバー”。

全身を純白の装甲に包まれ、無骨でありながら整った形状はカルダトアとはまた別の機能美とも言えるものを感じさせる。

彼らは地に倒れるべへモスの横を通り過ぎ、その先にある物体に近づいてゆく。

近づくごとに、紅い塗装を施された金属片が地面に散らばる様子が見えてきた。

そこに散らばっているのは、幻晶騎士・グウエールの残骸だった。

先頭に行くフィリップの視界に飛び込んできたのはグウエールの腕だ。

骨格部分が崩壊したそれは、元の形を想像することが困難なほどに破壊されていた。

それを横目に見ながら彼らは無言で先に進む。

そして、ついに目的の物へと辿り着いた。

四肢と頭部を失った胴体部分。

クリスタルティシュー

装甲はところどころ剥離し、内部の結晶筋肉は粉碎されている。

胸郭を形成する骨格が崩れ、全体的に形が歪だった。

さらに正面装甲は歪んでおり、それが受けた衝撃の凄まじさを物語っている。

「（もしかやと思ったが、この様子では中の騎操士は……絶望的か……）」

言葉にはしないが、全員の胸中に大差はない。

一縷の望みを抱いてはいたが、原形を留めぬほどの衝撃を受けな



がら、内部の騎操士が無事などとは到底思えなかった。

フィリップとゴトフリートは、無言で幻像投影機ホロモニターに映るそれを見ている。

ライヒアラ騎操士学園高等部に所属し、ベヘモスの襲撃から後輩を守る為に最後まで立ち向かった機体。

ベヘモスの攻撃に圧倒される騎士団よりも前に立ち、烈火の如く巨獣に立ち向かい、そして相討ちに散った機体。

フィリップは思う。

この機体に乗っていた騎操士はどんな人物だったのだろうか。  
乗っていたのは学生のはずだ。それならば、彼はどれほど将来有望だったことだろうか。

巨獣を圧倒する高い技量、他人の為に命を賭して戦う高潔な姿勢、不利を跳ね返す強靱な精神力、どれをとっても騎士として理想的なまでの姿だ。

一言も交わしていない相手ではあるが、巨獣の襲来に果敢に立ち向かい、そして散った英雄に、彼は静かに黙祷を捧げた。

アールカンバーが、グウェールの傍らに膝をつく。

圧縮空気の噴出音が響き、アールカンバーの正面装甲が開いた。

エドガーは装甲の上に立ち、しばし静かに眼下の残骸を見つめていたが、ゆっくりとそれに話し掛け始めた。

「デイー……最早、手遅れだが俺はお前に謝らねばならん。」

……俺はあの時、お前が俺たちを見捨てて逃げたと思った」

それを語るエドガーの静かな口調とは裏腹に、彼の表情は後悔に

歪んでいる。

「一瞬、俺はお前を見損なつたんだ。……だが同時に納得もした。あの状況は絶望的だった。ディーならそんなことには付き合わないだろうと。」

だが……お前は、戻ってきた」

握り締めたエドガーの手が震える。

「そして……お前は……。」

すまない、ディートリヒ。

お前が何故これだけの力を隠していたのか、俺には想像もつかん。それでも、お前が命をかけて俺たちを助けろ」

ガボオツ!!

独白を遮るように、突然の炸裂音と共にグウエールの胸部装甲が高々と宙を舞った。

そのまま放物線を描いて飛んだそれは、くわんくわんと音を立てて地面を転がる。

3機そろって呆然と吹っ飛ぶ装甲の軌跡を目で追い、そして足元の残骸に視線を戻した。

呆気にとられる彼らの前に、操縦席から小柄な人影がひょっこりと顔を出す。

「やれやれ、正面装甲が歪んで開かないなんて、お陰で外に出るのに苦労しまし……」

ええと？ 皆様どうなされたので？」

「「「……………えっ?」」」

守護騎士団が全軍で出撃し、厳戒態勢にあつたヤントウネンは、今その城門を大きく開き、彼らの帰還を受け入れていた。

凱旋を飾つた守護騎士団が整然と列をなし、行進する。

騎士団の出撃と共にベヘモス襲来の報が伝えられていた市民は、無事に帰つて来た騎士団へと惜しみない喝采を浴びせていた。

まるで戦争に勝利したかのごとき熱狂ぶりだが、実際にベヘモスに対する勝利はそれと同等以上の価値がある。

そして列が進み、門をくぐつた物体を見て市民がどよめく。

それは、幻晶騎士の胴体よりも巨大な魔獣の首　　ベヘモスの頭部だ。

台車に乗せて運ばれるそれは、圧倒的な迫力で直接それが動くところを見ていない市民にも、魔獣の脅威をまざまざと知らしめた。

一瞬の静寂が観衆の間を走り、直後、それまでに倍する歓喜が爆発した。

市民は口々に巨獣を打ち破つた守護騎士団へ賞賛を浴びせ、彼らの守護たる騎士団への尊敬を深くする。

ヤントウネンの興奮は頂点に達していた。

騎士団が行進する中央通から少し離れた場所に、町中の熱気から外れるようにひっそりと喫茶店が存在していた。

市民の大半が大通りに居る状態では店の中は閑古鳥がないており、客らしきものは数名の少年少女が居るだけだった。

彼らはライヒアラの生徒だ。

騎士団が街に戻ってきたため、彼らも数日のうちにはライヒアラへ戻る手はずになっている。

それまでは街中であれば自由行動を許されていた。

今は大半の生徒は中央通りで市民と共に騎士団の凱旋を祝っている。

ここに居るのは喧騒を逃れた一部の生徒。

その中でも今回の事件の関係者を含むエドガー、ステファニア、キッド、アデイ、そしてエルだった。

「全く、出鱈目にも限度がある……」

溜息と共にエドガーは手に持つ紅茶をおろす。

彼の言葉はその場に居るエル以外の全員の心境を代弁したものだ。陸皇亀事件でのエルの行動について、軽く説明した直後の言葉だった。

「むしろ巻き込まれたディーに同情しなくなってきたぞ……」

魔導演算機マキウスエンジンのハッキング、幻晶騎士フルコントロールの直接制御による機動戦闘。

それだけでも常識が金切り声を上げて悶死しそうな話だ。

エドガーは頭を抱えてしまい、ステファニアも目を見開いて驚きをあらわにする。

キッドとアデイも呆れ気味ではあったが、何かを納得すると顔を見合せて呟いた。

「「ほらやっぱり幻晶騎士奪った」」

「二人とも、やっぱりとは何ですか。その通りですけど」

エルは少しムスツとしていたが、双子に睨み返されついと視線を逸らした。

エドガーはの中でエル以外で唯一実際に幻晶騎士を操縦したところのある人物である。

それだけにエルの説明はショッキング極まりなかったが、実際に彼の記憶にあるグウエールの機動はそれくらいの無茶をしないと実行不可能なものだ。

何度も頭を振り、何とか自分を納得させていた。

そして彼はふとある可能性に思い至る。

「エルネスティ、あの時デイーが逃げなかったらどうするつもりだったんだ？」

「どうもしませんよ、あれは半ば勢い任せな行動でしたし。そのまま皆と一緒に馬車で逃げていたでしょうね」

エドガーの表情が苦々しいものになる。

あの戦闘でエルとグウエールの存在が無かったらどうなったか。少なくともここにエドガーはおらず、騎士団が被ったであろう被害は数倍に跳ね上がったであろうことは容易に想像できる。下手をするとベヘモスを倒せていたかどうかも怪しい。

今回の戦闘の殊勲賞は間違いなく目の前の小柄な少年なのだ。

しかし、それだけの功績がありながらも彼自身の立場が事態を複雑にしていた。

エドガーは一つ溜息をつくと意を決し本題へと入る。

「我々……高等部の生存者は、このあと王都<sup>カンカネン</sup>にて行われる叙勲式へ出るようになってる」

語る内容に反して、エドガーの心中はどこかすつきりとしなかった。

「ヤントウネン守護騎士団からも代表が、恐らくハルハーゲン卿と

何名かが出るだろう。

師団級魔獣の討伐ともなれば国中、いや諸外国へ喧伝してもいいレベルの話だ。

かなり大々的に執り行うらしい」

「そうですね、おめでとございます……という割には表情が晴れないようですが？」

「この事件における紅い幻晶騎士グゥエールの存在は、恐らく伏せられる。

……つまり、エルネステイとディーの功績が評価されることは、ないだろう」

キッドとアデイが睨むようにエドガーへと振り向く。

ステファニアは申し訳なさそうな表情のまま、手元の紅茶へと視線を落としていた。

一人エルだけが全く気にするそぶりも無く平然と頷いていた。

「やはり、ですか。これが騎士団の一員か、正式に高等部の騎操士ならば問題は無かったのでしょうかね」

「おいおい、エルがいなけりやばかったんだろ！？」

どうしてそこで評価されねーなんてことになるんだよ！！」

思わず立ち上がったキッドをステファニアが目線だけで抑える。

一つ息を吐くと、彼女はゆっくりと説明を始めた。

「落ち着きなさい。

正騎士が活躍したのなら昇進や褒賞が出るわ。高等部の生徒なら正騎士に取り立てることになるでしょうね。

……でも、今のエル君を同じように騎士にするわけにはいかないの」

「どうして？ エル君その辺の騎士よりよっぽど強いのに！？」

「騎士になる、と言うことは騎士団に入るとのことなのよ。」

飛びぬけて強いだけなら何とかなるのでしようけど、10歳の子供と一緒に働ける騎士は、多分居ないでしょうね。

組織に所属するということは、片方だけがいいと思っていてもまならないことなの」

「せめて成人していればやりようはあっただろうが……。」

それに仮にも正騎士たる騎士団を差し置いて10歳の子供が殊勲賞などと言ってみる、彼らの面子がズタボロになる。

彼らの面子は国の面子だ。誰もそんなことは望むまいよ」

エルはくい、と首を傾けながら、微笑を浮かべつつ聞き返した。

「なるほど。それで、先輩達はその説得を頼まれたのですか？」

エドガーとステファニアの表情が僅かに引き攣る。

エルはそれには頓着しないまま言葉を続けた。

「さておき、僕としては実際に幻晶騎士を操縦できたのである程度満足しましたし。

褒賞関係で下手にこじれるよりは何も無いほうがましです。

勝手に首を突っ込んだのはこちらですしね。ただし」

ずっと、紅茶を一口飲みながらエルの瞳が細められる。

年下の少年を相手にしているというのに、エドガーもステファニアも庄されるような感覚を覚えていた。

「この後、勝手に利用されるようなことは、防いでおきたいですね」

ステファニアが力強く頷く。

「そんなことはさせない。セラーティの名においてそれは保障する」

わ

「ああ、それについてはハルハーゲン卿にも一言言い添えておこう」  
頷くエルに対し、キッドとアディは納得しかねる表情だ。

「いいのかよ、エル？」

「そうよ、そもそもエル君は騎士になって幻晶騎士に乗るのが夢でしょ？」

「ここで退いてもいいの？」

「今回は言わばイレギュラーです。報酬をたかるともりはありませんよ」

不満たらたららのキッドとアディを宥めつつエルが締めくくったことにより、エドガーとステファニアはこっそりと安堵の吐息をついた。

実際にグウエルはベヘモスとほぼ相打ちになっており、エルが受けた危険に対してなんの褒賞も無いというのは彼らにとっても心苦しい。

反面、騎士団側がエルというイレギュラー要素を扱いかねているのも理解できるため、彼らはせめて命令ではなく直接説得し、エルにも納得してもらおうとこうして説得役を買って出たのだ。

二人ともエルが暴れるとまでは危惧していないが、話の内容が内容である、拗れることを覚悟していただけに予想以上に物分りのいい彼の姿勢はありがたいものだった。

「（いやーあつぶな。今回は突発暴走やったしなあ、縊られんかっただけありがたい所やな）」

傍から見れば平然と紅茶を含むエルだが、内心ではかなり冷や汗をかいている。



実を言うと今回の決着に悩んでいたのは彼も同様だ。  
しかも立場的にエルから働きかけることは容易ではない。  
そういう意味でも、相手が穏当な手段に出してくれたのはエルにと  
ってこそ僥倖と言えた。

「（実際に動かした上になによりも魔導演算機マキウスエンジンの制御術式を入手で  
きた訳やから報酬という意味では悪くない。

今回の件にしても考え方によっちゃ騎士団への貸しになるやろし。  
これ以上下手に突っ込むには話がでかすぎるし、向こうを立てて  
おこう。

後は騎士団とか、現場の人間に多少のコネもつけれたら、結果才  
ーライとところやろ）」

にこやかな微笑の下で今回の事件の処理を考えつつ、エルはゆっ  
くりと紅茶を飲み干す。

緊迫した話を通り過ぎ、全員の間には落ち着いた空気が流れてい  
た。

遠くから響く、パレードの歓声は今だ途切れることは無い。  
それから暫くは全員でゆっくりと雑談に興じるのだった。

…

ゆっくりと、意識が浮上する。

最初に感じたのは疑問。

「（私はどうなったんだ？ あの時……魔獣に……）」

次に感じたのは苦痛。

全身あちこちから鈍い痛みを感じ、その刺激で彼の意識がはつき

りとする。

「くっ……っ……」

呻きながらディートリヒは目を開いた。

目に入るのは木造建築の天井だ。

横を見れば、清潔な白いシートが視界に飛び込む。

彼は軽く混乱しているものの、何となく状況が理解出来た。

どこかしら病院のような施設に収容されている　つまり彼は救助されたのだろう。

「（……と、言う事は戦闘は終わったのか……）」

記憶に残る巨獣の姿を思い出し、彼は身を震わせる。

アレを放っておいたまま彼が助け出されるのは困難な状況だった。ならば戦闘は何らかの決着を見ており、そして彼がこうして生存している以上、勝利という形であろうと予測できる。

「あら、気が付いたのね」

安全圏に居ることがわかり、彼が呆けた様子で寝転がっていると横から声をかけられた。

「ここはヤントウネンの騎士団詰め所よ。あなた、戦闘の終了から一日以上気を失っていたの」

振り向いたディートリヒが目を見開き、その体が小さく震え始める。

かけられた言葉の内容が原因、ではない。

その言葉をかけてきた相手が

「打撲が何箇所があったけど、そんなに大した事なかったから安心していいわ。」

君、若いんだから怪我の治りも早そうだしね」

頑強そうな体躯を白衣に押し込め、頭はさっぱりと刈り上げ、内股気味にしなを作りながら、野太い声で女性の口調で喋る　男性  
だったからだ。

医務室の一角から悲痛極まりない声が響いた。

### #23 家に帰り着くまでが

ヤントウネンから王都カンカネンまで通じる石畳の道、西フレメ  
ヴィーラ街道の上を馬車と幻晶騎士シルエットナイトが移動していた。

馬車の群れはライヒアラ騎操士学園騎士学科の生徒達のもので、  
幻晶騎士はヤントウネン守護騎士団のものだ。

騎士団の騎士達は王都カンカネンで行われる叙勲式へと出席する  
ため、ライヒアラの生徒の護衛をかねて移動している。

馬車の列の中に1台、屋根の上に人を乗せた車両があった。

日向ぼっこでもするかのように座り込むその人物は、後ろに連なる  
馬車を眺めている。

馬車の列の最後尾には回収された幻晶騎士の残骸を詰めた荷車が  
続いている。

陸皇亀ベヘモスに倒された機体はほぼ例外なく屑鉄と化していたが、最悪  
でも幻晶騎士の部品でも最も高価な部品を積んだ胴体は回収されて  
いた。

損傷の程度にもよるが、エーテルリアクタ魔力転換炉とマキウスエンジン魔導演算機が無事ならば本  
体の再生は比較的容易だ。

最悪、新規の筐体に中枢部だけ入れてしまえばいいのである。

ヤントウネン守護騎士団の残骸はヤントウネンへと送られたため、  
此処にあるのはライヒアラの物である。

馬車の屋根に居る人物 エルは茫漠とした視線を後方に送って  
いた。

この荷車のどこかにグウエールの残骸もあるはずだが、幌を被せ  
られているため場所までは判然としない。

石畳に行く馬車の振動を感じながら、エルはベヘモスとの戦闘の  
最終場面を思い返していた。

「（思い返してみたら最後のアレは完全に運任せやったなあ）」

フルコントロール  
直接制御による高機動戦法での負荷による機体の自壊。

クリスタルティシュー  
あの時は最も負荷の大きかった脚部の結晶筋肉が破断し、機動性を失ったエルは一か八かの賭けに出る羽目になったのである。

「（同じ轍を踏まんためにも、せめて全力で動かしても壊れん機体を作らんと。」

……しかもこれはあんま他人任せにできんし）」

現状、彼以外にこんな短時間で機体が限界を迎えるほどの操縦が出来る人間は居ない。

となればこの問題を把握し、対策を考えることが出来るのも彼だけということになる。

いずれ自身の機体を作成する時に向け、アイデアを練る必要がある。

「エル君、こんな所で考え事？」

まとまるでもない思考で漠然と悩んでいると、後ろから誰かが抱きつきながら問いかけてくる。

そんなことをする人間には一人しか心当たりが無い　　エルは後ろに居るアデイへと振り返った。

「ええ、こないだの戦闘で明らかになった欠点を改善しないといけませんから」

「まーたそんなのばかりなんだー！」

微妙に不機嫌そうなアデイがそのままもたれかかる。

アディのほうがエルより背が高いため、体重をかけられるとエルはあっさりと押し込まれてゆく。

「そ、そればかりというか、こういうことは時間のあるうちに考えておかないと、次に困るのは僕自身ですから」

ピクリ、とアディの動きが止まる。

むすつとした表情が消え、代わりにアディが浮かべたのは何かを悩んでいるような顔。

「……エル君、やっぱりまた……。ねえ、約束して欲しいことがあるんだけど」

「なんででしょうか？」

「今度は一人で飛び出していかないで、私達も連れてってよ」  
「それは……」

エルからは後ろに居るアディの表情は窺い知れない。  
そのまま何となく振り向きづらく感じ、正面を向いて少し悩む。

「確かに、私達じゃ役に立たないかもしれないわ。でも」

「そんなことは……場合によるのではないでしょうか」

「どうかな、私幻晶騎士乗れないし。それでもせめてエル君が何を  
するかくらい、教えてよね！」

そこまで言われて、エルに反論の余地はなかった。

「わかりました……できるだけ。本当に緊急の時とかは、無理かもしれないですけど」

「むう。なーんかその言い方ずるい！」

そりゃ、私達が居たからって何かあるわけじゃないけど、絶対1

人より3人のほうがいいんだから！」

「はは、そうですね。3人のほうが……3人？」

苦笑気味に返答していたエルの表情が突如真剣味を増す。

「エル君？」

「1人より3人……1本より3本、1本の矢ならすぐに折れるが、3本なら折れない……」。

そうです、1本ずつだからもろひつてはにふるんれふは」

ジト目のアデイがエルの頬をつまんでむにゅっと広げている。

「話してる最中に全然関係ないこと考えるとか、しつれーよね。うん」

「いたた……うう、そうですね、失礼しました」

エルがつねられた頬を押さえているのを見ながら、アデイはさも何かを思いついたように、ニイツと笑い出した。

彼女はエルを横から覗き込むようにしながら満面の笑みを浮かべている。

何故だか、エルはその笑みに嫌な予感が広がるのを抑えられなかった。

「そうだ、私達にも幻晶騎士の動かし方、教えてよ！」

「うわー、そう来ましたか」

エルの操縦方法は余りにも特殊だ。

完全に個人のパフォーマンスに依存したその方法は、エルの弟子とも言えるこの双子をしても利用できるかは微妙なところだ。

それ以前に現状では手元に幻晶騎士がないのだから如何ともし難

い。  
アデイに苦笑を返しながら、内心でエルはどうしたものかと頭を悩ませるのだった。

広めのテーブルの中央に置かれたポットローストから食欲をそそる香りが漂う。

その周囲には所狭しと料理が並べられ、今もエルの母親であるセレスティナ・エチエバルリア（ティナ）がスープを大皿へと移している。

その隣では双子の母親、イルマタル・オルター（イルマ）が焼きあがったパイを並べていた。

普段の食事よりも豪華な料理の数々が並ぶ中、彼女達は忙しくも楽しそうに盛り付けを進めている。

「そろそろアデイさんにも料理を教えないといけないかしら？」  
「ふふ、そうね、あの子ったらキッドと一緒にやんちゃなばかりなんだから」

話しながらも鮮やかな手さばきで準備を整え、それが終わったところでそれぞれの家族を呼ぶ。

エチエバルリア邸ではエチエバルリア、オルター両家の人間が集まり、子供達の無事帰還を祝ってささやかなパーティーが開かれていた。

元々子供達が野外演習から還って来たときはこうして迎える予定だった。

それが今回はただの演習ではなく、魔獣の暴走、巨大魔獣の襲来と未曾有の事態に巻き込まれたのだ。

突如降りかかった災厄は報せを受けた家族の顔色を真っ青に変じ



させたものの、事態に比して被害は少なく、騎士学科の生徒の大半は無事に帰りつきその家族は慌てるやら喜ぶやらと大忙しであった。それはこの両家も例外ではなく、特にイルマは双子と3人で暮らしていることもあり、当時の心配様は生半可なものではなかった。さすがにその状態で一人で待つことはできず、暫くの間子供同士だけでなく親同士も付き合いの深くなっていたエチエバルリア家で過ごしていたのだった。

子供達の全員が無事に帰りついたこともあり、久方ぶりの両家揃ったの食卓は安堵に包まれている。

「でも全員無事で、本当に安心したわ」

並べられた料理を端から平らげてゆく子供達を見、イルマは溜め息をつくように呟く。

「ご心配をおかけしました。この通り僕達は特に怪我もありませんでしたし（わりと奇跡的に）」

「いいのよ、無事に帰ってきてくれれば。それにこんなに料理をほおばる元気があるのですもの。」

「本当、全然大丈夫そうね」

「「もみもんも」」

「二人とも、せめて飲み込んでから喋りましょう……」

残る二人は無心に料理を頬張っている。

何せ移動中は保存食を中心とした味気ない食事が多かったため、彼らはまず何よりも目の前の料理に関心が行っていたのだった。

イルマはそれを気にする様子もなく、むしろせつせと料理を取り分けていた。

「大変な事になっていたと聞いたのだけれど、大丈夫そうね。

エルは向こうではどんな事をしていたのかしら？」

「はい、ベヘモスと殴り合ってきました」

「ングツカツ、ゴホツゲホツ、ゲフゲフツ」

そして母息子の余りにもドストレートな会話にマティアスが食べ物に詰まらせる。

「まあ、とても大きかったのでしょうか？　大丈夫？　ちゃんと殴れたの？」

「先輩から幻晶騎士を借りたので、大丈夫です。

少し危ない場面もありましたけれど、ちゃんと殴り勝ってきました」

「あら、幻晶騎士を貸してもらえたの？　よかったわね、エル。

でもあまり無茶をしては駄目よ。いつも貸してもらえとは限らないのでしょうか？」

「そうですね。その時はいい先輩がいて助かりました」

マティアスは必死に明後日の方向を向いているが、この場にいる他の人はその会話を普通にスルーしているあたり、ある意味で訓練の行き届いている家庭なのだった。

食卓にいる人物のうちでただ一人、エルの祖父であるラウリは食事中は特に喋るでもなく穏やかにそれを見守っていたが、食後にエルを呼び出した。

「それでだ、エル。明日のことなんだが、わしと少し出かけて欲しいんだが、よいか？」

「はい、お祖父様。何処へ行くのですか？」

「うむ、それはな……」

フレメヴィーラ王国の王都、カンカネン。

元々この街はオービニエ山地の山裾に前線基地として作られた要塞都市だった。

その名残を残した町並みは堅牢な石造りであり、王城を中心として何重かの城壁がその周囲を囲んでいる。

現在は最外周の城壁のみが防壁として機能し、内側の城壁は区分け程度の意味しかないが、それでもその存在がこの国の歴史を物語っている。

街の中央にそびえるのがフレメヴィーラ王城、“シュレベール城”。

前身たる砦としての風貌を色濃く残したその外観は、荘厳でありながらも無骨さを残し、現在でも十分に要塞として通じるだけの威容を誇っている。

それは“騎士の国”であるフレメヴィーラ王国の気風に実に良く馴染み、カンカネンを訪れた者はみなこの城を誇りに感じていた。

シュレベール城の中心部には王への謁見のための間がある。

四方に豪華な垂れ幕が掲げられ、巨大な柱が並び立つ。天井は高く、幻晶騎士自体が入れるだけの空間があった。

中央には真っ赤な絨毯が敷かれ、その先には玉座がある。

玉座の背後には恐ろしく巨大な座席がしつらえられ、そこには一機の幻晶騎士が周囲を見下ろすように座っている。

国王専用幻晶騎士“レーデス・オル・ヴィーラ”

フレメヴィーラに現存するどの機体よりも優美な姿に、国旗と同様の模様を編まれたマントを肩から垂らした様は正に騎士の頂点たる王の姿を体現していた。

左右に近衛騎士団を配置し、中央にレーデス・オル・ヴィーラを

据えたその光景は勇壮の一言に尽きる。

時には兵士、幻晶騎士にて埋め尽くされる事もあるが、今この場所にはほんの数名の間人がいるばかり。

レーデス・オル・ヴィーラの前にある玉座に座る壮年の男性は、フレメヴィーラ王国第十代国王アンブロシウス・タハヴォ・フレメヴィーラ。

その横にはセラージェイ侯爵領を預かるヨアキム・セラージェイ侯爵が控えていた。

そして玉座の正面にはヤントウネン守護騎士団長フィリップ・ハルハーゲンの姿がある。

本来ならば片膝をつき、頭を垂れるのが謁見の儀礼だが、この場では許しを得て頭を上げアンブロシウスに対して報告を行っていた。

「以上が、ベヘモス陸皇亀との戦闘における報告になります」

フィリップから報告を聞いたアンブロシウス王はふむ、と鷹揚に頷き返す。

その手には報告内容をまとめた書類があり、アンブロシウスはざっとそれに目を通していった。

「ベヘモスの死骸の回収はどうなっております？」

「は、さすがにベヘモスほどの大物になりますと回収者ガーベッジコレクタだけでは足りず、我が騎士団からもいくらか人手をまわしております。

数日のうちには大半が回収されるものかと」

「此度の戦いで損失を彼奴の死骸で少しでも埋めておきたいところじゃな。

まあ、師団級魔獣を相手取った被害としては、実に少ない被害と言うべきなのじゃがな」

「陛下、確かにヤントウネンの戦力はいくらか減っておりますが、

一時的に我がセラータイ領より騎士を回しておりますれば、埋め合わせを含め一月もあれば持ち直す範囲かと」

報告を補足するヨアキムの言葉を聴きつつ、アンブロシウスの視線は報告書の一角で止まっていた。

そこに記載されているのは紅い幻晶騎士グウェールとそれを操ったエルネステイについての情報だ。

彼の顔に浮かんでいるのはなんともいえない表情。

「エチエバルリア……ラウリめの孫か。よもや斯様な活躍をしようとは」

「陛下……」

「のうフィリップ。俄かには信じがたいことじゃが、こやつは本当にかの魔獣を圧倒して見せたのか」

「恐れながら、我が目で確かと見届けた事実でございます。お疑いになられるのも当然の内容とは思いますが……」

さすがにこればかりはフィリップも強くは言えず、ヨアキムは表情を表には出さないが内心では大いに疑っていた。

「お主が斯様に益体の無い嘘をつくと思うてはおらぬ。おらぬが、こればかりはな。」

特にこのくだり。魔導演算機の術式をその場にて変更したと報告にはある。

事実だとすればもはや正気の沙汰ではないぞ」

「半ばは伝聞ですが、実際に目撃した動きを見る限り……事実ではないかと」

「私のほうにも同様の報告が入っております……実際に目撃したのはハルハーゲン卿と守護騎士団のみになりますか」

アンブロシウスは静かに眼を閉じ、その意味に悩む。  
東の間の思考の後、彼はポツリと呟いた。

「この者、危ういのう」

それに慌てたのはフィリップだ。

あの戦闘においてエルの働きは実質的に何十人もの騎士団員の命を救ったに等しい。

さらには様々な事情からエルに褒賞を出すわけにも行かず、その上拍子抜けするほどあっさりとそれを承諾された事もあり、フィリップはエルに対して負い目に感じる部分がある。

相手が遙かに年下の少年であろうと、共に戦い、さらには助けられた相手を蔑ろにするほどフィリップは薄情ではなかった。

「陛下、恐れながら申し上げます。

この少年、10歳の年齢でありながらその知識は優れ、態度は聡明そのもの。

また礼儀もわきまえ、周囲のものに聞く限り人物評は良好にございます。

なにより彼はベヘモス戦で先陣を切り戦っておりますれば……」

フィリップの言葉を、アンブロシウスが軽く手を振り遮る。

「案ずるな、今すぐにどうこうするつもりは無い。

それに今はそれでよいかも知れぬが、聞けば齡10とな。

にもかかわらず実に恐るべき能力というところじゃが……それで  
も所詮は10の童よ。

いずれは己の力に溺れるやも知れぬ。わしが危惧するのはそこよ」

アンブロシウスの懸念は尤もだ。

どんなに有能であり現在は清廉潔白であろうと、時の流れにあって人は変わるものである。

特に10歳ともなれば、精神的にもこれから多感な時期であり、ここで力に驕るようであれば有能さはむしろマイナスにしかならない。

実際にはエルの中には40年近くの時を経た精神が存在するため、一般的な考えは当てはまらないのだが、そんなものは当然ながら彼らの想像の埒外である。

故に彼らはその才が失われること、道を踏み外しはしないかと危惧する。

「それでは、如何いたしましょう」

「この心を失わぬなら良き騎士となるじゃろうが……導かねばならぬ。」

ラウリめの元にいるならば要らぬ心配かも知れぬがの。

ふむ、そうじゃな……まずは時を設け、一度会って見ねばならぬな」

アンブロシウスの言葉に、ヨアキムとフィリップは礼を以って返した。

## #24 国王陛下に会おう

「お祖父様もいかがですか？」

「ふむ、わしは遠慮しておこうか」

露店で買ったパンケーキをぱくつきながら、エルは隣を歩く祖父、ラウリに問いかけていた。

ラウリの言葉に頷くと、そのまま薄めに焼き上げ果物をはさんだクレープに近い菓子を食べきる。

軽く視線を上げると、そこには王都カンカネンの中心に聳えるシユレベール城が視界に入った。

「（現実逃避してる場合や無いよなあ）」

今カンカネンではヤントウネン守護騎士団とライヒアラの騎操士への叙勲式が行われている。

近年稀に見る強大な魔獣の襲来と、それを打ち破った騎士団、そして果敢に立ち向かった学生（準）騎士達を褒め称え、街は活気に溢れていた。

吟遊詩人は早速勇猛果敢な騎士団の活躍を歌いあげ、それを肴に酒場では昼間から酒を飲み交わす者達がいる。

商人達はここぞとばかり出店を出し、浮かれた住民達によるお祭り騒ぎが続いているのだった。

そんな騒がしい街中をエルとラウリはシユレベール城を目指し移動していた。

「（まさかの王様からの呼び出し。褒章何も無いから、てっきり話はアレで終わりかと油断してたなあ）」



エルとしては終わった話が地雷に変わったようなものである。単に事情を聞かれるだけならば兎も角、国王クラスに呼び出されるとなると、嫌な予感が止まらない。

薄くついた溜め息は通りの騒ぎに溶けて消える。

彼らは人ごみに逆らうようにすり抜けながら中心部へと進んでいった。

シュレベール城の正門前は空前の賑わいを見せているが、裏門周辺はかなり人がまばらになっている。

そこへ辿り着いた二人は兵士に案内されながら城内へと入っていた。

「（そういえば、なんで爺ちゃんに連絡きたんやろ）お祖父様」

城内の長い廊下を歩く間、エルは少し前に行くラウリに問いかける。

「お祖父様は陛下とお知り合いなのですか？」

「うむ、わしと陛下はこれでも長い付き合いだな。わしらは昔ここカンカネンの王立貴族院学園に通っていた。

陛下はその時の、所謂学友と言うやつなのだ。

その縁で相談役紛いのことをやっていた時期もあってな……今でも時折助言を求められる事がある」

「そうだったのですか。お祖父様は今でもフレメヴィーラ最大の学舎の長ですから、陛下も信頼されているのですね」

「まあ、陛下としても気が合うだけやもしれんがな。ほれ、着いたようだよ」

彼らが案内されたのは会議室のような場所だった。

今現在は叙勲式の後始末の最中であり、その場所ではしばし待つようにとの伝言を伝え兵士が下がってゆく。

「緊張しているのか？」

「それは勿論。陛下に拝謁する機会があるなどと、想像もしていませんでしたから」

「エルならばそれくらい平然としておるかと思っただがなあ」

「それはなんだか、ひどいお言葉です。お祖父様」

そうは言いつつも国の長に会うと言うのに殆ど緊張を感じさせず、2人が益体も無い会話を交わしていると再び兵士が現れ、国王が訪れることを告げる。

それを聞いた彼らは姿勢を正して部屋の入口へと向き直った。

扉から数名の人間が入ってくる。

先頭に立つのはフレメヴィーラ王国においてその姿を知らぬものはいない、国王アンブロシウスその人だ。

すでに壮年を過ぎつつあるが、それを感じさせない威風堂々とした雰囲気纏っている。

その後ろには貴族然とした雰囲気男性が二人、続いている。

アンブロシウスはラウリと目を合わせると一瞬だけにやりと笑った。

「ご苦労、待たせたようだの、ラウリ」

「お久しぶりにございます陛下。陛下こそ、お忙しいと言うのにお時間を頂きありがとうございます」

「よい、この場はわしの好奇心から出たようなものでもあるしな。して、そちらが例の子供か」

アンブロシウスとあと2人の視線がラウリの横へと滑り、エルへと向けられる。

わずか10歳にして幻晶騎士シルエットナイトを駆り、陸皇亀ベヘモスと渡り合う。それだけを聞けば、彼らはきつと到底10歳の子供とは思えないほどの

者が来ると思っていたのだろう。

実際にそこに居たのは平均的な10歳の子供よりも小柄で、しかも少女と紛うばかりの風貌をした少年だった。

国政の場において鍛えに鍛え上げられたはずの彼らの顔面がしっかりと引き攣るのが見えた。

報告にはその容姿までは記載されていないこともあり、無理ならぬことだったが。

しかしそこは王もさるもの、最初は驚いたようにピクリと片眉を上げたが、すぐに面白がるような顔になる。

「うむ、報告書から勝手に男子とっておったが、まさか女子であつたか」

「いいえ陛下、こう見えてもれっきとした男子にございます。

申し遅れました、お初にお目にかかります、ラウリ・エチエバルリアが孫でエルネステイと申します。

本日は陛下への拝謁の誉れに与り、恐悦至極に存じます」

「ほう、齡10の子供と聞いていたが随分と堂に入ったものではないか。

無闇に堅苦しくしても話しにくかるう、この場は楽にするが良い」

「はい、ではお言葉に甘えまして」

本場にさらりと返すエルに、アンブロシウスの後ろに控える二人の表情が驚愕から呆れに近いものに変わる。

大物と言うべきか、礼儀がなっていないのか、彼らにも判断しづらいところだった。

「さて単刀直入に行くかの。本日こうして来てもらったのは他でもない。フィリップめより話は聞いておろう。

おぬしの此度の働き、聞き及んではおるが表立ってそれを賞す訳には行かぬ」

アンブロシウスは無遠慮にエルを観察する。

「おぬしがそれを納得したことも聞いてはいるがのう、ベヘモスと戦いつる有能な騎士を無碍に扱つような真似はどうかと思うてな。

そこで表にせぬところで働きに見合つた代わりの褒賞を出そうかと考えたのじゃ。

さりとて未だ成人もせぬ童に、如何なる褒賞を出せばよいかとわしらも悩んでな」

説明するアンブロシウスの表情はにこやかな笑みが浮かんでいる……が、それはどう見ても“人の悪そうな”笑顔だ。

一度無しとなっていたものを後から出そうとする、それはまるで

「（試されとるんか……？）」

エルは普段どおりの態度をとりながら、裏では徐々に警戒レベルを上げている。

「何しろ騎士に取り上げるにも、身分を与えようにもお主の年齢が問題になる。わかるか？」

「御意。僅か10歳の間には過分な処置と存じます」

「ふむ、中々理解は早いようじゃな。まあそこでじゃ……」

お主、何が欲しい？」

アンブロシウスの余りにも簡潔な言葉に、一瞬エルの表情が揺れる。

「何が……でございますか？」

「やはり本人に聞くのが手っ取り早いかと思うてな。  
此度の功績に見合うものであれば褒美として取らせよう。まずは  
何が良いか申してみよ」

アンブロシウスの提案を受け、エルの思考がトップスピードで回  
転を始める。

「（単純に好意……ってのは考えづらいかなあ。物で釣れる人間か  
を見ようとしてるんか？」

いまさら出すってのがなんか怪しいよなあ」

棚ぼた、濡れ手に粟、しかして只より怖いものはない。

それは前世も今世もさほど変わらぬ人の世の共通認識だろう。

「（だからと言って国王陛下の好意を無碍にするとかむしる難易度  
高いし、なにかしら出さんとね）」

しかし、“ベヘモス討伐への貢献”これに釣りあう報酬と言つのが  
意外と難しい。

金銭にすればどれほどなのか？ 物にすればどれほどなのか？  
地位以外で他に望めるものはないか？

ここは子供であることを盾に無茶な要求をしてみるか……そう考  
えたところでエルは自身の考えを振り払う。

「（いやあの表情は子供に対するものとは思えんし）」

アンブロシウスの表情は、エルの記憶の中に思い当たるものがある。  
る。

既に風化しつつある、前世で働いていた時の記憶の中。

一見にこやかな表情を浮かべながら裏で少しでも話の穴を伺おう

とする　　営業マンの表情。

「（それこそ幻晶騎士の一機くらい要求してみるか？　基準を伺うにはちょうどええかな」。

…… 実際働きからすれば通りそうな気もするし。じゆる）」

さり気無く欲望に負けつつエルが答えを返そうとしたとき、彼の脳裏に一つの閃きが走る。

「（しかしこれほどの好機、直接国王に請い願う機会なんてこの先二度とあるかわからん。

ここは一つ国王へと願わなければ手に入らないレベルのものを吹っかけるべきやないか？

そう、それこそ今必要としてる最高難易度の代物とか……）」

時間にすればさほどの事もなく、エルは思考から浮上する。

駄目なら駄目で次を考えれば良い、彼はあえて気楽に考えてそれを口にした。

「では、陛下にお願いいたします。…… 僕が今一番欲しているものは知識。

干  
テ  
リ  
ア  
ク  
タ 魔力転換炉の製造方法、に御座います」

あまりにも予想外の願いに、アンブロシウスは虚を突かれた顔になる。

無理もないだろう、齢10の子供から出る願いとしては奇妙極まりない。

彼だけではなく、それまでは悠然と構えていたラウリの表情は引

き攀っているし、残る二人の表情は理解が追いつかない、と言った風だ。

さすがに相手は子供であり、単に予想外の要求であるならば彼らもここまでの醜態を晒しはしなかつただろう。

しかしエルが願ったものは、単純に個人で求めるものとして有り得ない代物だ。

アンブロシウスは機転に優れた人物だ。しかし、予想外も度が過ぎると反応が遅れてしまう。

そのため、そこに生じた奇妙な沈黙の中で最初に動き出したのは、彼の背後に控える貴族のうち片方　クヌート・ディクスゴード公爵だった。

「なっ……貴様、自分が何を言っているかわかっ……」  
「静かにせよ」

混乱の余り激昂しかけたクヌートの言葉を、我に返ったアンブロシウスが遮る。

それまでのどこか気楽だった雰囲気とは打って変わり、国の長としての威を纏う国王の姿に、すぐさまその場の全員が姿勢を正した。

「エルネスティよ」

「はい」

「魔力転換炉の製法……と、予想外よな。確かにわしに願わねば手に入らぬものではある。

だが、普通はそのようなものを欲しがりませぬ。当然であろう、そんなものを知ってどうすると言っのか」

国王の目が細められる。

プレッシャー

無言のままエルにかかる精神的重圧が強くなり、視線を交わすエ

ルの背に冷や汗が流れる。

通常の10歳の子供には耐え難いであろうその視線も、エルにとっては腹を据える契機になっただけだった。

「是非はまず横に置いて……理由を、申してみよ。何故そのようなものを欲しがる？」

「は、僕は……ライヒアラにて騎士を目指し学ぶ身でございますが、そもそもは自身のためだけの幻晶騎士を欲しておりました」

「ほう、己のための幻晶騎士をな。それも随分と剛毅な願いじゃが、それであればまだわからぬ訳ではない。

今それを願えばよかったのではないか？ 叶ったやも知れぬぞ？」

アンブロシウスの言葉に、エルはゆっくりと首を振った。

「確かに、以前は単に幻晶騎士が手に入れば良いと考えていました。しかし今は違います。僕は……僕のためだけの幻晶騎士を、最高の幻晶騎士を、自身の手で作りたいのです」

想像の斜め上の返答に、再び国王が言葉に詰まる。

彼の脳裏では、報告書にあった一文が思い浮かんでいた。

この者、独力でマキウスエンジン魔導演算機のスクリプト魔法術式を改変したとあり。

「（もしや、この者本気が。戯言でなく、本気でそれを望んでおると言っのか？」

「……それだけの能力を、もつと……言っのか？」

アンブロシウスが沈黙したことで、エルは説明を続けていた。

「そのためにライヒアラ騎操士学園にて様々な知識を求めてまいりました。



魔法の知識を得、幻晶騎士の構造を学び、そしてその動かし方もその身を形作る技術は既に調べ上げております。

しかしながら、その完成には後一つ部品が足りません。魔力転換炉でございます。

「ご存知の通りその製法は一般には流布しておりませぬので」

「……」

「もし可能でありましたら、魔力転換炉の製法をご教授いただきました。それが解れば、あとは作るのみにございます」

ラウリも、孫の言葉を固唾を飲んで見守っていた。

エルが幻晶騎士に傾倒していることは知っていたが、まさかここでそれを願うほどとは、彼にも予想外だった。

すでに賽は投げられている。事こうなつてはフォローも難しいだろう。彼はちらりと国王へと視線を向ける。

アンブロシウスは曰く言いがたい表情で考え込んでいた。

「……つまり、その理由は？」

「趣味に御座います」

その場にいる全員の顔が、何か恐ろしく奇妙なものを見たような名状しがたい表情になる。

なんとも言えない沈黙が降りる中、突如として漏れ聞こえてきた忍び笑いに、全員が驚いたようにそちらを見やった。

アンブロシウスはしばらくは黙って肩を震わせていたものの、すぐに我慢できないとばかりに破顔する。

「なんと！ ふはっ、なんと馬鹿馬鹿しい！ 言つに事欠いて趣味と申したか！

はははっ、これは愉快的事よ！！

国家の秘事ぞ、それを趣味で聞くと！ そのほう真に10の子供か？

ふははっ、これは傑作よの、おぬしのような面白き者には久々に出会ったわー！」

溜まらないとばかりに笑う国王を、後ろの二人が呆然と見やる。

付き合いの長いラウリには、国王が本気でそう思っているのがわかり少し胸を撫で下ろしていた。

「良からう、その願い聞き入れたー！」

「な、陛下、いけませぬ！ このような得体の知れぬ子供に教えてよいものではないですぞ！」

「得体なら知れておろう、我が学友の孫ぞ」

「し、しかし……！！」

「まあその方の疑念も当然よな。のう、エルネスティよ」

エルは説明の後はじつと事態の推移を見守っていたが、アンブロシウスの言葉にさつと表情を引き締めた。

「確かにその願いは聞き入れよう。しかしな、あれは本来門外不出の秘よ。」

ベヘモス討伐程度の功では、いささか釣り合いが取れておらぬというもの」

エルの表情が怪訝なものになる。

一度受け入れると言いながら、功績が足りないと言うその真意をいぶかる。

エルの表情によぎった懸念を読み取り、アンブロシウスがにやりと笑う。

「案ずるでない、国王たるものが一度口にしたことを反故にするつもりはないぞ。」

……つまりそれに見合うだけの功が積もった暁に、おぬしに知識を伝えると約束しよう」

数瞬、アンブロシウスとエル視線が絡む。

「（一聞したただけやと単に褒賞の予約を盾に只働きが続くとも取れる。」

しかし望外の成果つっべきやな。何せ秘中の秘を、条件はともあれ知る可能性が出てきたんやから）」

エルにとってはそれは幾万の金銭に勝る褒賞足りえる。

ゆるりと笑うその可憐な表情の中に、燃え滾るような渴望と熱意の炎がちらつき始めていた。

「（この表情、まさしく本気であったようじゃな）」

くく、これだけでは具体性が足りぬよな。よってその方法を申し付ける。

先程おぬしは幻晶騎士を作ると申したな？ なれば魔力転換炉の製法を活用できるという根拠を示して見せよ」

「根拠……それは如何にして？」

「知れたこと、実際に幻晶騎士を作ればよい。」

おぬしの思う、最高の幻晶騎士の筐体を作り上げて見せよ。

それがわしを満足させるものであれば、此度の約束を果たそう」

それを聞いたエルの表情はまさしく獲物を見つけた肉食獣のそれであった。

彼の求める最後のピースを手に入れる条件が提示されたのだ。

しかもそれは、彼にとってはいずれ到達する必然の先にあるもの。果たして受けることに迷いは必要なかった。

「拝命いたします。必ずや、陛下の御目に適う幻晶騎士を用意いたしますよう」

エルの謁見が終了してからしばし後、玉座の間とも会議室とも違う、王の私室の一つにアンブロシウスはいた。

室内にはもう一人の人影がある。

「くく、久方ぶりに実り多き日であったことよ。

ラウリよ、これはまた随分と愉快な孫を持ったものだな」

ワインを口に含むアンブロシウスの表情は、思い出すたび笑みの形をとっていた。

「はっはっは、いや教育方針は娘に一任しておりましたからな。

昔より幻晶騎士の好きな子ではありませんが、まさかあれほどとは。

わしも把握してはおりませんでしてな」

「10の子供がべへモスと戦ったと聞いて呼びつけてみれば、有り得ぬな。

アレは最早子供と呼べぬであろう」

「いやあ、我が孫は学園に通う、れっきとした子供ですが」

「子供の夢は壮大にというが、あれほど奇矯な願いを誰が語るうや。

これまで人の願いを聞く機会は多々あったが、今日のアレは飛び切りであったぞ！」

互いにグラスを交わしつつ、どこまでも上機嫌に会話は続く。

「あまりの面白さゆえつい愉快的な約束をしてしまった」

「そこは我が孫ですからなあ。」

陛下のお見立てを損なうことが無きよう、しっかり育てていきましようぞ」

「おお、そういえば有能さゆえ先の心配をしておったのだったな。実際に会ってそんな物すっかり吹っ飛んでおったわ」

アンブロシウスはにやりと笑う。

「それはそれは。陛下に先を見込まれるとは、我が孫も中々の気骨者ですな」

「ふふふ、お主の孫だから、ではないが……興味が湧いてきたのう。あの者が何を為すのか。」

よき幻晶騎士を作るなど、それ自体が夢物語の一つであろうに、あの者全く躊躇なく頷きおった」

言いながら、アンブロシウスは一つの確信めいた予感を感じる。

「それを持ってくるのも、そう遠い話とは思えんのう」

「あのような約束を軽々と、陛下には少し道楽の気を抑えていただかねばならん」

先程の謁見で後ろに控えていた貴族のうち一人　クヌート・デイクスゴード公爵はそのもう一人であるヨアキム・セラール侯爵

へと愚痴っていた

「滅多なことを言いなさるな」

「陛下は苦言を受け入れぬほど狭量な方ではない。」

それとも貴公もあのような得体の知れぬ子供に、国家の機密を教えてよいと思うのか？」

「思いませんが……それゆえ陛下もさらに条件を増やしておられま

す。  
新たな幻晶騎士を作り上げるなど、如何にライヒアラの学長の家

族と言えど、容易なことではありませんよ」  
「事の難易度の如何を問うているのではない、そのような約束をす

ることが問題だと言っているのだ」  
クヌートは憤懣やるかたない、と言う様子で廊下をのしと進

んでいる。  
それに続きながら、ヨアキムが脳裏に浮かべていたのは彼の子供

達のことだ。  
ヤントウネン守護騎士団長フィリップ・ハルハーゲンの報告を補強したのは彼の娘であるステファニア、そして彼女から伝えられた内容には彼の愛人の子供達が、エルネステイと共にあることも含まれていた。

なんとすればエルネステイは彼と全く縁のない人間ではない。

いま少し情報を集めるか、もしくは彼の庶子に何かしらの指示をする必要があるかもしれぬ。

思考にふけるヨアキムの横で、クヌートは徐々に表情を険しくしていた。

「たかが子供一人であれ……これは放置するのは危険かも知れぬな」

その呟きは誰にも届かず、静かに空気に溶けていくのだった。

## #25 まず最初に作るのは

シルエットナイト  
幻晶騎士を運用するライヒアラ騎操士学園・騎操士学科には当然ながら、幻晶騎士を整備するための場所がある。

インナースケルトンアウタースキ  
クリスタルティシュー  
金属内格や外装といった金属部品を加工するための鍛冶場。結晶筋肉を接続し、全身の組み上げを行うための作業場。

それら諸々をあわせて、幻晶騎士の製造・整備を行う施設は一般的に“工房”と呼ばれている。

工房の内部は、10m級の人型を扱っただけあって、面積、高さ共に広大な空間が広がっている。

椅子のような形の整備台に据えられた幻晶騎士の足元で、大勢の生徒が作業を行っていた。

外装のつけられていない幻晶騎士の腕が台車に乗せて運ばれてゆき、鍛冶場では巨大な鎧の一部を作り上げるための槌の音が響く。

あちこちで怒鳴り声が飛び交い、中にはテンションが上がりすぎたのか、本当に喧嘩を始める者すらいる。

慌しく走り回る生徒たちの間をのっしのっしと進んでいく大柄な人影があった。

いや、大柄と言うのは些か語弊があるかもしれない。

彼は身長自体は160cmほどであり、同年代の男性の平均身長からすればむしろ小柄だ。

しかしその体躯は常人の倍はあろうかと言うほどの太さを持ち、周囲に強烈な存在感を示していた。

脂肪で膨らんでいるのではなく、その身を覆うのは強靱で分厚い筋肉だ。

そして細かく編みこみ後ろに垂らした髪の毛と、それ以上の長さを誇る立派な髭が、彼の出身を示している。

ドワーフ族、鉄鋼と鍛冶の民。

彼は言い争いをしている生徒のそばに行くと、人間の脚よりも尚太い腕を振り上げ、その2人を無言で殴りつけた。

手加減をしたとはいえ、ドワーフ族の強烈極まりない拳を受けた2名はそのままのた打ち回る破目になる。

「まったく、どいつもこいつも、このクソ忙しい時に余計な仕事を増やしゃがって！！」

口動かす暇があつたら手え動かしやがれ！！」

「ゲフツ、を、親方！ すまねえ、すぐ作業に戻る！！」

冗談ではなく、ドワーフ族が本気を出せば、その拳は岩をも砕く。これ以上“親方”と呼ばれたドワーフの機嫌を損ねてはかなわなと、言い争いをしていた2人は慌てて作業へと戻っていった。

「ただでさえ全身作り直しが7つもあるってえのに、まったくよう」

ここには陸皇龜ベヘモスと戦い、大破した学園の幻晶騎士の残骸が運び込まれている。

大半の機体が中枢部と骨格が無事なだけという状況に、学園側は全会一致で修理よりも新造する事を決定していた。

確かに整備班に所属する学生達の知識と技術があれば、機体を1から作り上げることも可能だ。

しかしそれも一度に7機分の全身新造となると必要とされる作業量は膨大なものとなる。

今回機体を失ったチーム以外の人員も借り出され、今整備班は総力戦の構えで作業を行っているのだった。

新造とはいえ、比較的無事な部分の多いものから優先的に組み上げられている。



自然、損傷の大きなものは後回しにされていく事になる。

「（こいつあ一番最後だな）」

親方はとある機体の前で立ち止まる。

運び込まれた残骸はどれも酷く損壊しているが、その機体は一味違い、金属内格自体が分解している。

大半の箇所が部品単位でバラバラになっている様は、運び込まれた残骸の中でも一際酷い状態だ。

逆にここまで来ると、魔力転換炉エナメルリアクタと魔導演算機マギウスエンジンの再利用が可能だったのが奇跡としか言いようのない状態だった。

「しかし、よくよく見ると少しばかり見事すぎるほどの壊れ方だな」

先ほどから残骸を睨む、彼の視線は厳しい。

「魔力マナ切れで自壊しやがったか。骨格構造から崩れてやがる」

横でその眩きを聞いていた生徒が首をかしげる。

彼は親方が何に驚いているのか、理解できていなかった。

「はあ？ そんなの珍しくもないじゃないっすか。魔力転換炉が潰れちゃあ仕方ねえって……あれ？」

言った生徒がふと自身の言葉を訝しむように残骸をしげしげと眺め始めた。

そうだ、この残骸は魔力転換炉は無事なのだ。

にも拘らず魔力の供給が切れて骨格構造が自壊した形跡がある。

そこまで考えその生徒は漸く親方の疑問に合点がいったが、同時に別の疑問に首をかしげることになる。

「あー……銀線神経シルバーナウでもきれやしたかね？ 珍しいやられ方するもんっスねえ」

「おお、そうだな……全く珍しい、やられ方だ」

親方はじつと、残骸のうち脚部にあたる部分を見つめる。

装甲が外された脚部の露になった結晶筋肉には縦横に罅が入り、途中から断裂していた。

何度も機体の修理を担当してきた彼らにとってはおなじみの症状、耐久性を超えて使用し疲労断裂を起こした跡だ。

幻晶騎士は生物ではない、結晶筋肉は使用と共に疲労し、いつかは疲労断裂を発生する。

それ自体は珍しい話ではない。しかし……

「こいつらは出発前に全身オーバーホールしたばかりだ。なんでいきなり疲労断裂なんてしてやがる？

おかしい、こいつのやられ方は何かがおかしい」

髭に埋もれた顔を顰め、親方は唸っている。

彼の直感とも言うべき部分が目の前の残骸から違和感を伝えていた。

この機体の壊れ方は明らかに、彼らが知るどの場合とも違っている。

整備班の仕事とは何も機体の修理を行うだけではない。

使用者のミスで機体が壊れたのならともかく、構造的に改善できる部分があれば対策を行うのも彼らなのだ。

そのため機体に起こりうるトラブルの原因はできる限り把握しておく必要がある。

「機体名はグウエール。騎操士ナイトランナーはディーの野郎か……あいつ一体何

をしやがった？」

ぶつぶつと呟きながら、親方は目の前の残骸の騎操士である、デイトトリヒを呼びつけるのだった。

フレメヴィーラの王都カンカネンには、貴族街と呼ばれる区画がある。

基本的に国内の貴族はそれぞれ領地を持っており、普段は領地内の屋敷で過ごしている。

それとは別に、行事や国政への参加など王都で行われる活動に参加しやすいように、王都内に別邸を構えるのが常であった。

それらの別邸が集まる区画が貴族街と呼ばれる場所だ。

屋敷の主たる貴族自身がない場合が多いため、1年のうち大半はひっそりと静まり返っている場所である。

その貴族街にある一軒の屋敷に、アーキッド、アデルトルートの双子がいた。

そこは彼らの父親であるセラージェイ侯爵が使用している別邸だ。

庶子である彼らは、本妻の意向もありセラージェイ家の活動とは全くと言っても良いほど関わっていない。

この別邸に来るのも何年ぶりか、そして今彼らの前の前にいるヨアキム・セラージェイ侯爵と顔を合わせる事自体、数年ぶりのことだった。

双子が別邸を訪れると、そのままヨアキムの書斎へと案内される。書斎にはけばけばしくならない程度に品のいい調度品が並んでおり、持ち主の性格を反映してかどこか堅い雰囲気漂っていた。

数年ぶりに父親と顔をあわせる双子には、明らかに緊張の色が見

て取れた。

彼らを呼び出した本人であるヨアキムはしばらく軽く書類を確認していたが、ややあつて口を開く。

「二人とも久しぶりだな」

「……お久しぶりです、父上」

「元気そうだな。イルマも息災か」

「はい。母さんも病氣一つすることなく、元気にしております」

親子というには硬さの残る雰囲気は漂う。

双子も実家からはやや疎まれ立場にあるとは言え、父親から直接そういったことを言われたことはない。

単純に接触時間の短さとヨアキムの纏う雰囲気が場の空気を支配しているのだ。

「ティファから聞いた話だが」

ティファ　双子の異母姉ステファニアのことだ　の名前が出

たことで、双子の緊張が高まる。

数ヶ月前のバルトサールとの争いについて、結局あの後彼らには何の連絡もなかった。

これだけの時間を空けてまさかその話を続けるのかと訝しむ隙を突くように、ヨアキムの口から双子にとって予想外の名前が飛び出す。

「お前達の知り合いに、エルネステイ・エチエバルリアという者がいるな？」

「!? ……はい」

「どのような人物だ？ 話せ」

有無を言わさぬ父親の言葉に、困惑を押し殺しつつも彼らは自身の印象を述べる。

幼馴染で魔法の師匠、魔法だけなら国内でも随一と思われる能力に、幻晶騎士への多大な興味。

話を聞くだけなら非常に奇妙に思える内容だが、ヨアキムは途中否定するでもなくじつと耳を傾けていた。

「そうか、そういえばお前達も正騎士に匹敵する力を持っているのだっとな。」

「それもティファから聞いた話だが」

「父上、兄様は……」

「アレについては、今は良い。騎士団の者に性根を叩きなおさせている」

もしかして呼び出された目的は本当にエルについてたずねるためだけなのだろうか？ だとしたら何故？

疑問が表情に出ていたのだろう、ヨアキムは少し考えた後説明を続けた。

「ベヘモスとの戦いにおける功労者として名前が挙がっていた。」

歳に見合わぬ能力を持っているようだが……今後の働き次第では何らかの褒賞を出すことになっている」

「え、では、エルもちゃんと評価されるのですね!？」

「早まるな。今後次第、だ」

あの時、危険を冒したにも拘らずエルへの褒賞や評価はなされていない。

それについてエル本人は納得してあっさり引き下がったが、双子にとっては十分に納得のいく話ではなかった。

「（やっぱ見てる奴はちゃんと見てんじやねえか）」

今まで父親のことを多少苦手に思っていたキッドも、その話だけでもこれまでに比べ随分と打ち解けた感じを持っていた。

厳しい人物ではあるが、ヨアキムは話のわからない人間ではない。

「ひとまず、今後彼が何かしらの成果を出したならば、まず私に伝えて欲しい。いいな？」

「わかりました、父上」

彼らの師匠たるエルならば、きっとそのうち何らかの成果を打ち立てるだろう。

エルがそれをどうするかはわからないが、それを父親に伝えればいずれエルのためになる。

それはこれまで魔法を教わった彼らにとって、一種の恩返しのように思えた。

そしてここを訪れた時の緊張した雰囲気や和らぎ、明らかに嬉しそうな表情を浮かべている双子を、ヨアキムは表情を変えないまま見つめていたのだった。

「（一つ書いては俺のため、二つ書いてはロボのため……）」

騎士学科の生徒達がライヒアラ学園街へと帰り着いてから1週間ほど、学園は休校になっている。

怪我をした生徒がおり、また子供達の安否を心配した親がその無事を確認したり、面会に来るための時間を作るためである。

無事な生徒も思い思いに過ごしているであろうが、ここに来た

時間をフルに活用する人物がいた。

彼 エルネステイは今、一心不乱に机へと向かいひたすらに何かを紙へと書き付けている。

先日の国王への謁見の場において、彼は自身の知識を反映した幻晶騎士を作り上げると宣言した。

彼としては、すぐさま機体を製作して持ち込みたいところではあるのだが……。

「まあぶつちゃけ幻晶騎士を作る当てなぞ全くない訳で」

結局のところ、今彼に出来る事はいずれ役に立つ事を考えてアイデアを書き溜めておくことくらいだった。

「(国王陛下に啖呵切った以上はそれなりの事やってのけなあかんしなあ)」

インク壺にペンを突っ込み、エルは一心不乱にアイデアを書き連ねる。

これまでに学んだ座学による構造論、他者が動かしているときに観察した結果、そして何よりも彼自身が動かしたときの経験を元に、して多くのアイデアの実現性を検討してゆく。

緩やかな午後の日差しが差し込む空間に、ペンの奏でる微かな音だけが満ちていた。

「(ああそつや、ついでに双子の特訓方法も考えんと)」

長時間机に向かっていたせいで凝りに凝った肩をほぐし、大きく伸びをした。

そのまま背もたれに体重をかけ、漠然と天井を見つめながらつらつらと考えを連ねている。

「（実機は使えないから、仮想操縦装置シミュレーター見たいなのが作れたらいいんやけど、さすがにむずいなあ。

幻晶騎士の操縦特訓に役立つて、それでいて個人で扱えるもの…。

幻晶騎士はあのサイズだから、駆動に膨大な魔力マナを必要とする。ならば規模を縮小すれば必要な魔力を少なくして……やってみる価値はあるかなあ）」

うつすらとまとまったアイデアをさらにノートに書き足してゆく。

「（……しかし）」

ひとまずの部分まで書き終えて、ふと気を緩めた瞬間に忍び寄る誘惑。

頭の片隅から染み出したそれは、まるで真水に墨を流したように、急速にエルの思考を蝕んでゆく。

手に持つペンを握り締め、まるでそのまま黙っていてもそのまま思考を乗っ取られるといわんばかりに、彼はついにそれを言葉として吐き出した。

「幻晶騎士に……乗りたい……」

なまじ関係のあることを考えていたのが仇になった。

考えまいとすればするほど、それはこびりついた様に脳裏から離れなくなる。

これが前世であれば、幾らロボットのことを考えていようとそれは所詮妄想の域を出ず、精々が漫画を読むなり、アニメを見たくなる程度だろう。

しかし、一度幻晶騎士に乗ってしまったのが運の尽きだった。



目を閉じれば今でもはつきりと思い出せる。

エルの思考に応じ、力強く踏み出す鋼鉄の足、数mはある巨大な剣を振り回す腕、前進を命じるたびに襲い掛かる慣性、破壊的な巨獣との戦闘。

それら、実際に体験してしまった全ての記憶が幻のようにエルを襲っていた。

「また……動かしたい……」

エルの心中に、新作ゲームを買った直後にやめるときにも似た、強烈な渴望感が沸き起こる。

居ても立っても居られなくなった彼はうろつろつと部屋の中を往復し始めた。

「（あああかんマジヤバイこれヤバイメカ乗りたい動かしたい眺めたい頼ずりしたいバラしたい）」

意味もなくスクワットを始めたかと思えば突如ブリッジ。

腹筋で体を跳ね上げ四つん這いになり、またのけぞりブリッジにボタンボタンボタンボタンボタン

それを繰り返して部屋の壁に衝突したところでエルの動きが止まる。

「（ああさすがに緊急事態じゃないから幻晶騎士借りれもせんやろうしなあ。」

「なんか代わりになるもんがあれば……）」

代わりになるもの、前世ではこういつとぎにどつやって過していったか。

そこまで考えた時に、彼の脳裏に天啓が走った。

「（そうや、プラモや）」

倒れたままのエルの瞳に熱意と言う名の炎が灯る。

「（全高10m？ なら1/60サイズが一般的……ってあかん、  
プラスチック  
熱可塑性樹脂がない！！」

金属か！？ 金属加工か！？ ドワーフ族に頼んで伝統工芸（？）  
幻晶騎士一刀彫を……！！

ってそれ結構いけるんとちゃう？）」

両腕を支点にくるりと回転して起立。

何の意味もなく右腕を左上方へ伸ばし、左腕を曲げて脇を占める  
ポーズで決め。

「（ちょうど友人に手先の器用な人間がいる！ ここは頼まねばな  
るまい！）」

エルは机に戻り、そのまま意気揚々と図面を引き始めた。

「と言うわけで時代はプラモデルだと思つたのですよ」

「すまんがいきなり何の話だ？ と言うかプラモデルってなんだ？」

所変わってここはテンドー二家が所有する鍛冶工房。

相も変わらず突然やってくるエルをバトソンが出迎えたところであ  
る。

多量の紙の束を抱えたエルの様子を見て、バトソンは諦めたように溜息をついた。

「前置きがさつぱりだがどうせまたぞろ怪しいものを作るのだろう。話してみる。」

「え？ 怪しいことは前提なのですか？ そんなに変なものを持ち込んではいないと思うのですが……」

半目になりつつもエルは紙の束を広げ説明を始める。

幻晶騎士を1/60サイズで再現した置物。一個原型を作った後、  
鑄造で複製量産できないか 等。

一通り話を聞いたバトソンは考え込んでいた。

「お前にしては随分とまともな話だな。なるほど、幻晶騎士の置物……悪くないな。」

それなりに手軽な値段に出来れば、カンカネンやライヒアラ、大都市ではそこそこ売れる余地はある。

よし、これは親父達に掛け合ってみよう

「ありがとうございます。後、試作が出来たらすぐに教えてくださ  
いね。真っ先に欲しいので」

「もしかしてこれはお前が欲しいものなのか」

「はい、勿論毎日眺めたり頬ずりしながら過ごしますとも」

言いたいことは色々あったがバトソンは敢えて飲み込み、目の  
前の図面と説明を読み直す。

一通り見て頷いた後、確信を持ってエルに問いかけた。

「で？ お前のことだ、これだけって事はないんだろう」

エルはにこやかに頷くと紙の束のうち別の図面を開いて解説を始

める。

そこに書かれていたのは先ほどのような商品とは違う、かつての銃杖ガンライクローレドのように異様な発想で作られた道具。

「やっぱり来たか……こいつはまた、銃杖に輪をかけて複雑な代物だな」

「どこまで実用的に出来るかも難しいところですけど。使えるならかなり面白い事になると思いますよ」

髭に覆われたバトソンの顔が笑みの形に歪む。

「そして随分繊細だ。また職人として腕が鳴るところだな。

まあ、幻晶騎士の置物の話も貰ったことだしな、こっちも何とか仕上げて見せようじゃねえか」

「よろしくお願いしますね」

製作を依頼してしまえば、どちらも後は完成待ちである。

「完成が待ち遠しいですね。暫くは何も手につかないかもしれないです」

「そんなにか。どの道すぐできるようなものじゃないぞ」

「それでも、気分転換に必要なものですから。このままだどこかで暴走します」

バトソンにはエルが暴走している時としていない時の差が今一わからなかったが、ふと思いついたことを勧めてみた。

「そんなに気分転換が必要だったら、騎操士学科の工房にでも行ったらどうだ？」

「工房に？」

「ああ、ベヘモスとの戦いで、多くの幻晶騎士が壊れたんだろ？  
だったら今修理の真っ最中じゃないのか」

バトソンとしてはほとんどただの世間話のノリだったのだが、それはエルにとっては恐るべき重要性を持つ情報だった。

エルは一瞬ぽかん、とした表情を見せたがすぐに満面の笑みへと移行する。

「そうです……その通り、今修理の真っ最中なんですよね！

だったらきつと、むしろもつと幻晶騎士のことを調べるチャンス。ならばいつそ加えてもらう勢いで……！」

「（うわしまった、これは余計なこと口走ったんじゃないか？）」

「ありがとうございます、早速見てきますね！」

「ああ、うん。あんまり暴走して邪魔しないように……な……」

バトソンの言葉が終わりきる前に、そこからは小柄な少年の姿が掻き消えていた。

彼はしばらく複雑な表情を浮かべていたが、すぐに割り切る。

そう、彼も伊達にエルと武器製作を行ってきたわけではない。時に諦めが肝心なのだ。

「……ま、いいか。こっちはこっちで作業に入らないとな」

## #26 工房へいこう

「そら、見つけたぜ」

「エル君確保ー!!」

「えーと、キッド、アデイ？ 何故こんなところにいるのですか」

バトソンと別れ、ライヒアラ騎操士学園を目指して移動していたエルは、途中でオルター兄妹に捕まっていた。

二人とも現時点でエルより頭一つ分背が高いため、両腕をそれぞれ持ち上げるようにして捕まえるとエルの体が完全に宙に浮く。

エルの銀髪も相まって、まるで連行される某宇宙人状態だ。この世界に宇宙人がいるかは不明だが。

「いや、此処にいるのは単に偶然なんだけだよ」

「見つけたからには捕まえないとね!」

「え？ 僕は珍獣か何かですか?」

「似たようなもんだろ。あー、んで、どこに行こうとしてたんだ?」

二人の間でぶらーんと浮いたエルが観念したように溜息を吐く。

「いま学園では壊れた幻晶騎士シルエッターナイトの修理が行われているはずですから、ちよつと見学に行こうかと言つところですよ」

「そうなんだ。じゃ、このまま学園まで行つちやおう!」

「二人とも、行くのはいいですけどその前に離してください」

そうして3人は授業のある日でもないのに学園へと辿り着いていた。  
た。

しばしば騎操士学科に出入りしているエルにとって、この場所は

勝手知つたる何とやらである。

迷いなく目的地にたどり着くと、慌しく作業に勤しむ整備科の生徒達の邪魔をしないように、こっそりと工房の内部へと侵入する。

工房の内部は喧騒に満ちていた。

槌を振るう音、部品を吊り上げるクレーンの滑車の音、怒鳴り声、そして幻晶騎士の駆動音。

エルにとっては組み上げ作業を近くで見学したいのはやまやまだつたが、鬼気迫る様子で作業する整備科の生徒達を見ると、邪魔をするのは流石の彼でも気が引ける。

そのため、勢い作業の行われていない方向へと進むことになる。

彼らはまだ作業の行われていない機体の前に来ていた。

そこに据えられた幻晶騎士整備用の巨大な椅子の上には、天井からクレーンで吊るされた残骸としか表現できない金属の塊が鎮座している。

恐らくは幻晶騎士の胴体部なのだろう。

しかし外装がひしゃげ中身は骨格から歪んでいるため、エルはともかく双子はそれが一体何なのか、即座には把握できなかった。

それが置かれた場所、そしてこびり付くように僅かに残る装甲の紅い塗装がヒントとなり、彼らは漸くその正体に思い至る。

「こいつが……その、エルが乗ったグウエール、ってやつか？」

じつと残骸を見上げるエルの横顔を伺いつつ、キッドがぼつりと問いかける。

「ええ。この装甲や、壊れ方には見覚えがあります。」

本当に派手に壊れたことで……さすがに修理は後回しにされたようですね」

アデイは言葉もなく、その完膚なきまでに破壊された残骸に見入っていた。

目の前のそれは、万の言葉よりも尚雄弁に、陸皇龜ベヘモスとの戦いの激しさを物語っている。

それは幻晶騎士を操ったことのない双子にも、容易に想像できるほどだった。

キッドもアデイも、以前にエルの話聞いて、彼がどれほどの危険に立ち向かってきたか、わかっているつもりだった。

しかし現実には目の前に示された残骸を見て、その想像以上の姿に言葉を失っていた。

まるで鉛細工のように滅茶苦茶に歪んだ巨大な金属の塊。

それを為しえる力とは、果たしてどれ程強力なことであろうか。それに立ち向かうという事は、果たしてどれ程危険なことであろうか。

キッドは自分がいつの間にか血が引き真っ白になるほど強く拳を握り締めていた事に気付いた。

アデイの目には、うつすらと涙すら浮かんでいる。

ほんの少し何か違っていれば、エルはあの戦いで死んでいたかも知れない。

唐突に思い至ったその考えは、彼らの背筋を一瞬で寒からしめた。何よりも、エルがそれだけの危険に立ち向かっている間、知らなかったとはいえ何もせずに居た自身への憤りが、彼らを内側から圧迫する。

言葉を失ったかのような二人の耳へと、エルの漏らした微かな呟きが届く。

「……しい」



「え？」

「壊れた機体もまた、美しい……」

「……」

ほう、と溜息をつくエルは横顔はまさに恍惚のそれ。

二人の表情が一気に曰く言いがたい微妙なものになっていく事に気付かず、エルは言葉を続けている。

「そう、形あるものが崩れ、後には残骸だけが残る……これが詫び寂びというもの。」

この漂う寂寥感、廃れたものの想い……ふつくしい……」

双子の視線が一瞬だけ交錯し、第132回オルター兄妹会議は満場一致を見て無言のままにエルへの攻撃を決定した。

「！？ いった……いひゃいひゃい、いひはらにするんれふは」

両側から頬をつねられたエルは珍しく涙目で抗議の声を上げる。それを聞く双子は無表情で頬をつねり続けていた。

「やれやれ、どこのどいつだ、こんなところではしゃいでやがるガキは」

しばらく頬をつねり続けられた後、漸く開放されたエルが両頬を押さえて二人に講義していると後ろから声がかかる。

彼らが振り返るとそこには、頑強な体躯のドワーフ族……親方の姿があった。

野太い親方の声は、騒音の絶えない工房内でもよく響く。

「なんだ、銀色坊主<sup>エルネステイ</sup>じゃねえか、まった入り込んでやがるのか。おめえも好きだな、おい。あんま作業の邪魔すんじゃねえぞ」

しかし、エルはやや呆れた雰囲気の親方を見てもおらず、その視線は親方の隣にいる人物へと注がれていた。

そこに居るのは幽鬼も斯くやとばかりの蒼白な顔色を浮かべ、目の下には色濃く隈が残り、以前は丁寧<sup>テイトリヒ</sup>に撫で付けられていた金髪は見る影もなくボサボサとなった。テイトリヒだった。

一瞬記憶の中のテイトリヒと印象が合わず、エルは思わず目を擦るものの、何度見直しても目の前のテイトリヒはボロボロだった。

その雰囲気にも覇気はおろか、尊大ともいえた自信の一欠けらも残ってはおらず、ただ焦燥だけが感じられる有様だ。

「え、えーと……テイトリヒ……先輩？」

微妙に引き攣った笑顔で問うエルも自信がなさそうだ。それくらい、今のテイトリヒは変わり果ててしまっている。

「……ああ、エルネステイか」

「え、えっと、一体何があったのですか？」

エルの言葉にディーは軋むように笑顔を作り、錆び付いたような声で話し始める。

「ふ、ふふ……少し……そう、少し、ちょっと、だ。

最近よく悪夢を見るんだよ……医務室の悪魔が、来る……。

おかげで、最近、寝不足だね。

そう、気を抜くと、奴が、く、やつが、奴がぐぶべっ」

喋っている間に悪夢の記憶がよみがえったのか、徐々に目の焦点が怪しくなり、世界の向こう岸へと届きかけたディートリヒを親方のチョップが引き戻す。

ディートリヒはしばらくその場で悶絶していたが、親方の一撃が効いたのかちゃんと正気に返っていた。

「ぬごおおお……ハッ、私は今どこへ……」。

うおっほん！

まあ私の事は良い。それで、エルネスティも居るといふ事は、君も説明に呼ばれたのか。

それなら手間が省けそうだな」

「ああ？ 銀色坊主が何を説明するんだ？」

「何って、グウエールが壊れた原因が知りたいのだろうか？」

だからその原因を呼んだんじゃないのかい？」

彼はしばらくの間怪訝そうにディートリヒとエルの顔を交互に見ていたが、言葉の意味を理解するにつれ、むしろ怪訝な表情が深まってゆく。

「待て、ディートリヒ。それだと銀色坊主が原因でグウエールが壊れたように聞こえるぞ」

「えっ？ その通りじゃないか……もしかして、知らずに呼んだのかい？」

「いや、そもそも呼び出したんじゃないここに勝手に居たんだがな」

「……え？」

微妙に噛み合わない会話に全員が首を捻る。

数瞬の間を空けて、デイトリヒがぼん、と手を打った。

「ああ、これはひよつとして非常に余計なことを口走ったのかね？」

「見事にその通りだと思いますよ」

「まあ、何でも良いが」

親方は長く伸ばした髭を撫でつけながら、二人に向けてギロリと鋭い視線を送る。

「この際、洗いざらい説明してもらおうか」

全身の筋肉を唸らせながらにたりと笑う親方に反論できる者は、その場にはいなかった。

エルがグウエールを操縦していた時、デイトリヒもその場にはいたものの、彼はエルが行った操作の具体的な内容を把握しているわけではない。結局は説明の大半をエルが受け持つことになった。しかしいざ説明を進めると、間を置かず問題へと突き当たる。

「……………すまんがもう一度言ってくれ」

「ええ、ですから。僕が乗っても操縦桿や蹬に手足が届きませんか。  
ら。」

マキウスエンジン スクリプト  
魔導演算機内の魔法術式を転写して、自分で演算して幻晶騎士を動かしたのですけど」

豊かな髭を蓄え、普段から厳しい<sup>いかめ</sup>表情を崩さない親方が珍しいことに目を見開いて驚愕している。

それも無理なからぬことで、そもそも幻晶騎士を動かす魔法術式

は到底一人の力では制御しきれないからこそ魔導演算機というものが存在するのである。

それを使わず自力だけなどと言われても、普通は信じられるものではない。

実際に背後でグウエールの動きを見たディートリヒはともかく、親方が半信半疑の表情となってゆくのを誰が止めれようか。

「……百歩譲って、それはまあいいとしよう。」

それで？ それとこいつが魔力の途絶マナで自壊してるのと、どういう関係があるんだ？」

「つまり魔導演算機を代替すると言う事は、ありとあらゆる機能を自由に操作できると言うことです。」

それでベヘモスにトドメをさす際に安全装置リミッターを解除して、機体の持つ全ての魔力を攻撃に回しまして。

構造の強化を維持できないほど魔力を使ってしまったのですよね」「無茶苦茶じゃねえか！！ そんなもん如何やって対策しろって言うんだ！！」

そもそもが対策としての安全装置だつてのに」

口調は荒くとも、親方はエルのしでかした無茶にしきりに頭を振っている。

彼が吐いた、諦めを多量に含む吐息はどこまでも深かった。

「確かに。それについてはこの操作は僕くらいしかやらないでしょうし、対策はいいのでは？」

「当たり前だ！ そんなもんぼんぼんと出来てたまるか！！」

ああもついい、後は、だ。脚の結晶筋肉が疲労断裂してやがったが、アレもお前のせいだか。

いやお前のせいだな？」

「間違つては居ませんが……何だか言い方が釈然としません」

「うるせえ、やつぱりお前のせいか!!」

「あれは、フルコントロール直接制御の反動ですよ。」

幻晶騎士のレスポンスを最大にして、普段想定される以上の負荷をかけてしまったために限界を超えて、断裂してしまったのです」

「お前なあ……全身張り替えなんぞやった日にゃ、普通一月は無事に動くつてのによ」

親方はついに額に手を当て天を仰いだ。もはやここまで来ては処置なし、の一言に尽きる。

この時点でも十分に頭が痛い、彼はふと最悪の可能性に気付いてしまった。

「するつてえと何か、坊主が本気出せばどいつもこいつも壊れるつてののか？」

「現時点ではその可能性が高いですね。」

騎士団のカルダトアならば結晶筋肉の品質が高いので、もう少し長持ちはするかもしれませんが」

結局は負荷の問題ですしね、などとのんびりと呟くエルを横目に、親方は渋い表情になる。

「ちつ、そいつあ改善しねえと鍛冶師の面目つてもんが立ちやしねえ。」

とは言えそんなもんを今すぐどうにかする手段なんてねえしな」

これまでにこんな無茶をした騎操士など存在しないため、対策が存在しないのも当然と言えば当然の話だ。

その上これほどの問題に対応するためには応急処置ではなく、相当根本的な部分での対策が必要となる。とても一朝一夕に改善できるものではなかった。

— 先ずは今回の修理での対策は見合わせよう、後から対応策を練れば良い……そう親方は現実的な方針を心の中で決めようとしているが、あいにくとその場には非現実的を地でいく存在が居る。

「ある程度の対策は考えてあります。要は結晶筋肉の耐久性を上げればいいのですから」

さらりと言つてのけたエルに、全員の視線が驚愕を乗せて集中する。

「結晶筋肉の耐久性をあげるだと？」

簡単に言うがお前、それをするために錬金術師の野郎どもがどれだけ研究に没頭してると思ってるんだ。

実際の話としてここ数十年はほとんど改良されてねえんだぞ」

「ああいえ、耐久性をあげるのですけど、結晶筋肉自体は変えません。

僕も、錬金術に関する経験は乏しいわけですし。

なので、結晶筋肉の使い方に一工夫してはどうかと思ひまして「使い方です？」

「ええ、一先ずですね……」

疑問符を浮かべる面々を前に、エルが解説を始める。

彼が提案したのは結晶筋肉の繊維を束ねて編み、綱つなとする、と言うものだった。

1本1本では脆弱な繊維も、縊り合わせて使えば耐久性が上がる。さらに縊り合わせて捻りを入れた事により、結晶筋肉の繊維ごとの全長を長く取れるため出力の増大も見込める。

例えるならゴム紐をそのまま使うよりも、捻って使ったほうが強い力が出るようなものだ。

「名付けて綱型結晶筋肉と言ったところですか」

一通り説明したエルは実際に結晶筋肉の繊維を編み、その場で伸び縮みさせている。

双子は良くわかっていないようで、そういうものなのか、と言った感じだったが幻晶騎士に関わってきた人間の反応は劇的だった。

これまで少なからず幻晶騎士の改良を試みてきたであろう親方が、綱型結晶筋肉を手取る。

それを調べつつ、何かに悩むようにしきりに頭を振っては考え込む、しばらくの間はそれを繰り返していたが、やがて諦めたように息を吐いた。

「結晶筋肉の繊維を繕って使う……こいつは盲点だ」

日頃から重々しい彼の言葉だが、その一言はまさに万感の思いが籠ったものだった。

「そうなのですか？ 今までやっていなかったのも不思議でしたけど」

「確かに坊主の言うとおりだ。言われて見れば、無かったのが不思議なくれえだ。

……でもよ、幻晶騎士の改良ってのは普通、骨格の形と筋肉の張り方を考えるもんだ。

後は材質そのものを向上させるか。筋肉の組み方まで変えるなんて発想は、ねえんだよ」

「（幻晶騎士つてのは良くも悪くも生物……人間に類似し過ぎてる。感覚的な扱い易さや理解のし易さを優先したのかも知れんけど、そのおかげで発展性が阻害されてる。

人体の常識から外れるって発想がないんやな……）」



金属で骨格を作り、結晶で筋肉を構成しているというのに、幻晶騎士は根底では生物的な肉体と類似した扱い方をされている。

一種の矛盾ではあるが、それが長きに渡る慣習として染み付いているため、幻晶騎士の設計に携わる人間には根本的な変更を行うという発想がなかったのだ。

ほんの単純なアイデアで新たな方法を得た親方は早速周囲を走り回る生徒達を集め始めた。

彼の表情は髭に埋もれわかりづらいが、中々見られない獰猛な笑顔が浮かんでいる。

「はは！ わかってみりゃこいつは面白えな！！」

「ちょうど良い、今修理中のやつに早速こいつをぶち込んで見るか！！」

珍しく上機嫌極まりない親方の様子に、集まり始めた生徒達が軽く引いているが、彼は気にした様子もなく周囲を見回し。

「でしたらついでに」

これから行われる幻晶騎士の改良に思考を埋められかけていた親方の耳に、悪魔の囁きが届く。

「少し、人の形から離れてみませんか？」

ゆっくりと、言葉を咀嚼しながら時間をかけて親方が振り向く。

果たして振り向いた視線の先には、眩しいほどに輝く笑みを浮かべたエルの姿があったのだ。

## #27 異世界からの風

「背中に腕を増やそうかと思うのです」

少女然とした花の様な愛らしい見た目に、まさに花開くような輝く笑顔を浮かべたエルの台詞は、しかしあまりに酷いものだった。

説明の過不足などと言う次元をとうに越え、妄言か戯言に片足を突っ込む勢いだ。

確りとその言葉を聴いたはずの親方がその意味を把握するまでに先の言葉以上の時間が必要であり、しかもエルの言動に慣れているはずの双子すら訝しむような、呆れたような表情を隠せないでいた。

シルエットナイト  
幻晶騎士と言うものはそもそも“人の形をした”兵器である。

それは前提条件どころではなく、この世界においては至極当然の常識だ。

そしてこの世界でも“ヒト”の形は二腕に二脚。それは不変の事実である。

世界広しと言えども腕の数が多い人間がいるなど、そんな話は聞いたこともない。

……万が一未開の地に存在していたとしても、それが人間と呼ばれるかは怪しい所だ。

今のところそれが存在し得るのは唯一、御伽噺や物語の中だけだった。

つい先ほどまで幻晶騎士の構造を変更すると言う発想を持たなかった彼らにとって、そんな奇妙な形をした機体は想像することすら困難だ。

故に幻晶騎士の背中に腕を増やすなどと言う言葉がどうやって出てきたのか、言い放った本人以外にその理由を理解できる者は誰も

居なかった。

親方は大量の呆れを含んだ溜息と共に言葉を返そうとして、ふと思いとどまる。

これが他の生徒から出た台詞ならばただの妄言だが、そこはつい先ほどストランド・クリスタルティシユール綱型結晶筋肉という新たなアイデアを示したエルが放った台詞である。

ほとんど罵声に近い言葉を力ずくで飲み込み、親方は非常な努力を払い、できるだけ落ち着いた言葉で問いかけた。

「……一応、念のため、聞くぞ。な、何のために、どうやってだ？」  
必死の努力にも関わらず、彼の声が多少震えていたのを責める事は出来ないだろう。

「何故かと言いますと。前回動かした時に気付いたのですが、幻晶騎士って腕が2本しかないですよね」

「え？ うん、勿論だけど、そんなの当たり前って言つか、え？」  
「まあ落ち着いて、アデイ。まずは最後まで聞いてください、ね？」

……で、ここで問題に思ったのがシルエットアームズ魔導兵装の扱いです。

幻晶騎士が遠距離攻撃を行うためには魔導兵装を使用する必要があつて……そして、それを扱うには手に持って使うしかない。

だから距離と状況によって剣と魔導兵装を持ち変える必要が出てきます」

一旦言葉を切ったエルが、軽く周囲を見渡す。

そこに居並ぶ面々の顔には、一様に「それは当たり前で、何が問題かわからない」と書かれている。

まだ早かったかなあ、とエルは心中で一人ごちるが、一度流れ出

した水を止めることはできない。

こうなればとことんまでとばかりに気合を入れなおし、言葉を続けた。

「ですが、それはかなり非効率的だと思つのですよね。

持ち替えると隙も大きいですし、当然至近距離になれば魔導兵装を仕舞わざるを得ませんし。

ですから、背中に魔導兵装を使用するための腕……のようなものを追加したいのです。

わざわざ持ち替えなくとも、いつでも魔導兵装を使えるように」

笑顔で語るエルの言葉に対する反応は芳しくはない。周囲の全員が色濃い困惑を表情に乗せている。

誰もが違和感と疑問を感じ、それをどう言葉にすればいいか迷っている。何とも言えないその空気の中で動いたのは、やはり技術者の長、親方であった。

「……言わんとすることあ、わからないでもない。

この際腕を増やすなんて暴論の是非は、ちよつと横に置いといてやる。

しかしよ、仮に魔導兵装用の腕増やしたところでそんなもんどうやって動かすんだ？

言うまでもねえだろ、人間の背中に腕はねえんだよ。ねえもんは、どうやってたつて動かせねえ」

親方が指摘する間でもなく、その疑問は当然、全員が抱いていた。幻晶騎士の操縦方法は基本的に騎操士ナイトランナーの四肢の動きを基点としたものである。

そのシステム上、騎操士……人間に存在しない部位の操作は不可能に近い。

いや、そんなシステム上の理屈を持ち出すまでもなく、彼らの感情が人に在らざる部位の追加に拒否反応を示しているのだ。

出来るならばこの奇妙な話を笑い飛ばして、終わってしまいたい。漠然とではあるが、それは等しく皆が感じていた。

しかしエル顔から笑顔が無くなる事はなく、同時に彼は進む脚を止めることもない。

一人この世界の常識から遊離する、異世界の落とし子はいかに幻晶騎士という存在そのものへとメスを入れる。

「懸念はご尤もです。何も本当に腕そのものを追加するわけではありませんし、腕と同等に動かす必要もありません。

要は魔導兵装を保持し、それを撃てればいいのですから。

ですから……」

集まった全員の困惑と拒否を受けながら、エルは滔々と言葉を吐く。

小柄であることも、少女のような外見であることも関係なく、ただ自信と辿り着くべき明確な目標がエルの言葉を強力に後押しする。いつしかその場に居る全員が、彼の言葉とその勢いに呑み込まれ始めていた。

「同時に、専用の自動動作術式と、照準用の機能を作ります。

それらを合わせた、魔導兵装装備用の部位の追加、そしてその制御システムの追加。

これが僕の提案……バックウエポン ファイアコントロールシステム 背面武装と火器管制システムの、開発です」

整備場の一角に「会議室」と呼ばれる、仕切りで区切られたちょっとした空間がある。

そこには黒板と椅子が並べられており、主に整備班の打ち合わせ用に使用される場所だ。

余りにもそれまでの常識から外れたエルの提案を、それでも一蹴せずに検討するために一同がそこに集まっていた。

エルの鈴を鳴らすような声が説明を続け、カツカツカツ、とりズミカルな音を立てて動くチョークが黒板へと異形の機能の全貌を刻んでゆく。

「先ほどは腕と言いましたが、実際に僕が考えているのはもっと簡単な構造の……可動機構を持つ固定器具のようなものです」

背中に追加する腕　以下、補助腕とする　に求められるのは、魔導兵装を使用しない場合に収納する機能と、そこから発射状態へと移行する機能だ。

展開した場合は魔導兵装が肩越しに正面を向くような状態になる。そして、火器管制システムは補助腕の収納、展開時の動作を制御する魔法術式スクリプトを格納する。

この動作自体に大きな自由度を与える必要はなく、あくまでも収納と展開と言う一定の動作を行えばいいため、これは騎操士へ負担をかけずにシステム内で自動的に処理することが可能だ。

そこまでなら単に魔導兵装が前を向くというだけだが、この後が火器管制システムの最大の特徴　照準機能の搭載である。

操縦席に映像を移す幻像投影機ホロミターに照準線レイトールを表示し、照準と魔導兵装を連動させることで自動的に発射方向の制御を行うのだ。

エルがここまで説明を行ったところで、それを聞く生徒達の表情が俄かに変化してきた。

両腕を自由にしながら魔導兵装を使用し、あまつさえ狙いをつけることすら可能になる。

幻晶騎士を動かす専門家は騎操士達だが、整備班の生徒が幻晶騎士を動かせないわけではない。

それ故に背面武装がもたらす利点　攻撃機会の増加、戦術の幅の増加、そして攻撃能力自体の増加　を、ゆっくりとだが把握し始めたのだ。

「火器管制システムについては、マキウスエンジン魔導演算機の余り領域内に機能を追加します。

あ、勿論ここを作るのは僕がやります。

そして、この機能を使用する場合に騎操士に求められるのが……」

騎操士に追加で求められるのは照準を上手くつける技能だけになる。

何故なら、わざわざ補助腕を自在に動かす必要がないため、展開収納、照準まで火器管制システムにより自動的に処理されるためだ。展開と収納の切り替えは操縦席からのごく簡単な操作で行い、処理上での実質的な負担の増加はないに等しい。

求められるのが技能であるならば、つまり後は訓練次第ということになる。

「……と、以上が提案の概要です。

具体的な構造については後々詰めることになると思いますが……如何でしょうか？」

可愛らしく小首をかしげるエルに対し、反応を返すことが出来たものはその場には居なかった。

今、工房の内部は恐ろしいほどの沈黙に支配されている。

エルが語った“技術”は凡そ常識というものを丸ごと投げ捨てた代物だ。

人型から外れた部位の追加、それまで不可侵であった魔導演算機への機能の追加。

事前に綱型結晶筋肉という提案を受けていても尚、エルの発想はその場の生徒達にとって異様であった。

しかし、エルはそれを理路整然と説明して見せた。

黒板に並ぶ文字は技術者に共通の言葉である“技術”を語り、そこには夢物語も御伽噺も存在しない。

一笑に付すには現実的で、無視するには魅力的な、技術。

「（昔取った杵柄やけど、まだプレゼンテーション能力は落ちてないな。」

さて、もう一押しやるか？」

整備班の生徒達は、明らかに迷っていた。

せめてそれがあやふやな説明であったならば彼らは苦もなく拒否できたのだが、なまじ実現性を検討できるだけにたちが悪い。

彼らの中でこれまでに培った常識が盛大に違和感を訴えかけ、それでも提示された技術がもたらすものを考えて理性が賛成を勧める。

思考の板ばさみ状態に陥り、言葉に詰まる彼らの背中を押すべく、更にエルが話を続ける。

「幻晶騎士とは、人の姿を模してはいれど、つまるところ道具であり、機械です。」

ただ闇雲に人の姿に拘泥する必要はありません……。

求める機能があるなら、それを実現するに相応しき姿をとっても、良いと思いませんか？」



御伽噺に出てくる悪魔が現実に存在すれば、きっとこんな感じに  
違いない。

見目麗しき姿で、魅力的な誘惑を囁き、知らず知らず、この世の  
理から外れてゆくのだ。

期せずして全員の思考が揃って斜めにずれたところで、親方  
が大仰に息を吐いた。

「全くおめえ、何もんだ？」

随分と幻晶騎士が好きなガキだとは思ってたが、中身は悪魔か何  
かか？」

「えええ、その言いようは酷いです。流石に僕も傷つきますよ」

よよよと泣き崩れる真似をするエルに、親方の呆れた声が続く。

それだけのことではあるが、その場に満ちた重苦しさを含む空気が  
徐々に弛緩していくのがわかった。

「言ってやがれ。」

……が、ハッ！ いいじゃねえか。機械、道具、人なんぞクソ喰  
らえってか。

そういうのは嫌いじゃねえ。悔しいが坊主の話は理に適ってる。

いいぜ、こちらら幻晶騎士を改良するのが本職の鍛冶師様だ。お  
めえの提案に乗ってやるうじゃねえか！！」

豪快な笑顔を見せる親方の言葉が、残る全員の逡巡を吹き払った。  
それをきっかけとして、彼らの中の技術者としての思考が常識の  
壁を乗り越える。

彼らは一丸となり、綱型結晶筋肉、背面武装、火器管制システム  
その技術がもたらす、幻晶騎士の新たな姿へと向かって一步を  
踏み出す。

それは小さな一歩ではあるが、確実に彼らの中の意識そのものを変化させていた。

ライヒアラ騎操士学園から生まれた波紋は、いずれ国内、そして世界へと伝播する。

異世界の理をその身に取り込んだ幻晶騎士という存在は、この時を起点として新たな進化を始めたのだった。

時刻は夕方を過ぎようとしている頃、ライヒアラ騎操士学園の学長室の扉を叩く者達がいた。

中から応じる声がかかり、彼らは室内へと入ってゆく。

室内には学園長であるラウリ・エチエバルリアがおり、来客彼の孫エルネステイ、そして騎操士学科・鍛冶師学部の親方ことダーヴィド・ヘプケンを迎えていた。

「ふむ……これは……」

ラウリの手元には資料が握られている。

それは綱型結晶筋肉を使用した機体の構造から背面武装、火器管制システムの内容までをまとめた仕様書だ。

「学園長、仕様書にあるとおりだ。

我々騎操士学科整備班はエルネステイが発案した機能を搭載した幻晶騎士の製作を提案する」

ラウリは最初、二人が学長室を訪れた時はその珍しい組み合わせに目を丸くしていたが、仕様書を読み進めるに従い表情が険しくなり、そして最終的に突き抜けた。

仕様書を机に置いた彼は知らず遠い目で彼方を眺めている。

「やれやれ……予想外と言うか何と言うか、とんでもないことをやらかし始めたの」

「やらかしてるのは学長の孫だ<sup>あんた</sup>」

「だから予想外と……いや予想以上かの？ まあしかし、随分と突飛な話じゃが実現できるのか、エルや」

エルはやはり笑顔を浮かべている……が、家族であるラウリにはわかる。

エルの瞳は常に無い熱意と自信に溢れんばかりであり、今なら多少の常識くらい軽く曲げてしまいそうな勢いであることを。

「はい、時間さえいただければ、必ず」

そしてその返答も予想に違わぬものだった。

「（拝啓陛下、うちの孫は予想以上に暴走しとります。わしこれ御するの無理じゃね？）」

「……お祖父様？ それで、如何でしょうか？」

より遠く、具体的には王都<sup>カンカネン</sup>に向けて念を飛ばしていたラウリはその言葉に我に返る。

「学園長、機体の構築、改造については生徒の自由裁量に任せられているはずだ。

ただ、こいつは今までの改造とはモノが違う。製作のリスクを考えると一応アンタの許可が欲しい」

「いいじゃろう。ちょうどほとんどの機体が組みなおしという状況じゃ、多少の失敗は恐れずともよい。

しかしじゃとすると、しばしは騎操士達が窮屈になるの」

「まあ、修理が遅れるのは仕方ねえところだ。新型を組むのに人を使っちゃうしな」

「そうじゃのう……彼らには基礎練習を中心にやってもらうしかないの」

「それでしたら」

二人の会話にこそぞとばかりにエルが割り込む。

「幻晶騎士の操縦訓練用に考えていた方法がありますので、そちらにもご協力いただけますか？」

エルの笑顔が、ついに悪魔の微笑にしか見えなくなってきた二人だった。

とつぷりと日が暮れたライヒアラ学園街を3つの影が並んで歩いている。

真ん中を歩く小柄な人物　エルは今にも鼻歌を歌いだしそうであり、その様子は上機嫌の一言に尽きた。

浮かれに浮かれた彼だが、その外見も合わさってそれでも傍から見れば微笑ましく見えるのは、幸か不幸か。

エルとは対照的に、その横を歩くキッドとアディの表情は晴れなものだった。

「なあ、エル」

「はい？」

「今日の説明、正直全部わかったわけじゃないんだけどよ。

あれをやったら、幻晶騎士は強くなるんだろ？」

「はい勿論！」

キッドはそれに言葉を返そうとし、しかし一瞬言いよどむ。

「……その、だったらよ。エルって、あれで……幻晶騎士を強化して、また魔獣と戦いに行くん、だよな？」

ほんの瞬くほどの間、エルの表情が笑顔のまま引き攣った。

「（やべ、戦闘とか以前に改造することしか考えてなかった！！）」

心中で咳払いしながら焦りを振り払い、エルは笑顔のまま答える。

「そうですね。僕の場合は単純に動かしたいというのも強いですけど、幻晶騎士を動かす理由の大半は、それでしょう？」

それに騎士、騎操士になれば否応なく魔獣との戦闘は避け得ませんし」

「そうだよな、エルはやっぱ戦うよな。……もう、戦えるんだな」

キッドの様子を訝しむ間もなく、エルは横から腕を伸ばしてきたアディに捕まった。

「エルー君！ 約束、忘れてないわよね！！」

「え？ えー……あ、二人にも、教えるんですけどよね？ 幻晶騎士の動かし方とかを」

「そうよ、私達だってやれば出来るの！

もう駄目、エル君一人で戦うのなんてもう絶対許さないからね」

エルは苦笑を禁じえない。

「覚えていますよ。ちゃんと、方法も考えていますから。」

そうですね……まずは魔導演算機の制御術式を学ぶところから始めて、いずれは直接制御まで辿り着けるようにしましょうか」

「望むところよ！」

「おう、そうだな、そうだよやっぱそうこなくっちゃな！」

アデイもやる気まんまんだしよ、任せとけ相棒、すぐに追いついてやっからよ」

「（その言葉も久しぶりに聞いたなあ……んじゃまあさて、我が愛弟子達のために一肌脱ごうかね）」

## 後日

「なっ……何？ これ、何！？」

「ええ、ちょ、エル？ なんだこれ、何をするつもりだ！？」

双子の前には、これまでに見知った並の教科書など遙かに凌駕する、重質量鈍器と化した紙の束が置かれていた。

その厚さたるや地球で言うところの広辞苑をも上回り、読むのも一苦労する代物だ。

「何って……折角やる気を出した大事な大事な幼馴染のために、僕が身を粉にして書いた手製の幻晶騎士制御用の魔法術式教科書ですよ。」

それはもう、僕は二人のやる気を最大限尊重していますから」

双子の顔色は真っ青になっている。

これまでもエルから魔法を習ってきた二人ではあるが、それは理論実践相半ばのものであり、極端な座学オンリーではない。

しかし今回は見るからに座学だけで別の世界に到達できる勢いだ。  
教科書の厚みを見ただけで魂の抜けかけていた双子を、エルは手  
拍子一拍で呼び戻す。

「さあ、みつしりと、お勉強を、始めましょう」

双子は後に述懐する。

あの時初めて、笑顔とは実は恐ろしいものである、と知ったのだ  
と……。

## #28 開発は山あり谷あり

ライヒアラ騎操士学園に、授業の終わりを告げる鐘の音が響く。

授業中は静まり返っていた教室に、途端にざわめきが満ちる。授業の続行が不可能であることを悟った教師は小さく嘆息すると挨拶を残し、教室から出て行った。

授業から開放された生徒達は思い思いに放課後の時間を過ごし始める。

街から出れば魔獣の脅威に晒されかねない、そんなシビアな世界であっても、学生と言うものはそうは変わらないものであるらしい。それは学生の一人であるエルネステイ・エチエバルリアにとっても例外ではない。

彼は傍らに置いた鞆の中身を確認すると席を立ち、幼馴染である双子の元へと向かっていった。

「キッド、アデイ」

「あー、おう、エル。あれか、今日もあれの勉強か」

「あれね、きつとあれね。今日もあれなのね」

心なしかキッドとアデイの顔に元気がない。

周囲のクラスメイト達は開放感に溢れた様子だと言うのに、彼らはまるで試験期間中の学生のように余裕を失っていた。

「それについてですけど、今日僕は工房のほうでやっておきたいことがあるので、勉強会は中止にしようかと。」

それでその間に二人にはあの本を読んでもらおうかと思いまして」

「そ、そう!? そうよね! エル君にもやらなきゃいけない事はあるしね!



とりあえず続きは読んでおくわね」

「はい、こちらの作業の進み具合によっては近々実演に入れるかと思えますので……。」

その前に、500ページほど読み進めておいてくださいな」

「「えっ」「

愕然とした表情の二人を残し、ぱたぱたと足音をたててエルは工房へと向かう。

取り残された二人は周囲のざわめきも気にせず、ゆっくりと崩れ落ちていった。

工房の内部は相も変わらず喧騒と騒音に満ちている。

慌しく行き交う生徒達の間から目当ての人物を見つけ、エルは人ごみをすり抜けるようにすすとすすと進んで行く。

「親方、少しお願いしたいことがあるのですが……」

……えーと、親方？ 何故皆様こんなにぐったりしてるのですか？」

「おう坊主……いや、ストランド・クリスタルティシュー網型結晶筋肉を作ってたんだがよ」

「はい」

「……まさか俺らも、騎操士学科に来て糸巻き機を回す事になるかと思わなかったぜ……」

「ああ……あの、お疲れ様です」

「だがまあ、その甲斐あつたつてとこだ。ほれ、こいつをしてみる」

親方が投げて寄越した資料には、様々な数字が並んでいた。

それは結晶筋肉を普通に使用した場合と、クリスタルティシュー網型にして使用した場合

合に発揮する出力のデータをまとめたものだ。

そしてその後には同じ綱型でも、編み方を変えた場合の出力の比較が続いている。

「服飾学科の生徒に、結晶筋肉で色々な編み方を見せてくれた言った時には危うく医者と呼ばれかけたぜ」

「無茶しますね」

達成感とも何ともつかないものを含む、親方の眼差しは遠い。

しかし彼らの尊い犠牲を乗り越えて集められたデータはまさに値千金、万金の価値があった。

最も効果的な編み方をした場合の最大出力は従来の1.5倍に達している。

そして強固に縊り合わせ編まれた綱は、伸縮の繰り返しに対しても従来の10倍近い耐久性を示していた。

「予想以上ですね。僕の予想だとしても出力2割り増しの、倍の寿命程度と思っていたのですけど……」

「は、言い出したのは確かにおめえだが、俺らも何もしねえたあ思ってもらっちゃ困るってもんだ。」

まあ実際効果があったもんだから段々悪ノリじみたのは否定しねえがよ。

それとやってみて思ったんだが、使い方一つで相当効率に差が出るもんだな。

こりゃあこれまで漫然と使ってた部分も、見直しゃまだまだ改善できんじゃないかねえかと思えてきたぜ」

そう言って笑う親方はまるで子供のようにニカツと笑っている。

静かに笑みを浮かべるエルと並ぶとどちらが子供かわからない雰囲気である。

そうして二人が結果について話し合っていると、整備場のざわめきが一層大きくなった。

その中から、油に塗れた生徒が大声で親方を呼ぶ。

「親方あ！ 腕の張替え、終わりやしたぜ！」

「おう！ 今いく！ …… よし坊主、ちょうど綱型の試作を動かすところだ、一緒に見てけ」

「勿論拝見させていただきますとも」

そこに在るのは、右腕だけ外装を外され、結晶筋肉を剥き出しにした巨大な人体だった。

右腕に張られた筋肉は繊維の太さが太く、綱型を使用した部位であることがわかる。

これがもし生物の肉と同色であったならばさぞかし精神衛生上良くない光景だったのであるが、結晶筋肉はくすんだ白色をしており、その巨大さと相まって一種の彫像のようにも見えていた。

「よおし！ おめえら離れる！ これから動作試験を始めるぞ！」

周囲で作業していた生徒達が蜘蛛の子を散らすように離れてゆく。整備用の椅子に座った状態の機体にナイトランナー騎操士が乗り込み、圧縮空気の音を残して前面装甲が閉じてゆく。

綱型を使用した側である右手には、巨大な金属の塊が握られていた。

これまでに綱型結晶筋肉単体での出力データは取られているものの、実機に装着しての動作実験はこれが初めての事だ。

周囲の生徒たちも期待に目を輝かせ、固唾を飲んでその腕を見守っている。

合図に合わせ、幻晶騎士が腕を持ち上げる。

二の腕の結晶筋肉が収縮し、盛り上がるのが薄い一次装甲の隙間から見えていた。

「ほお……こいつあすげえな」

その機体が持ち上げている金属の塊は、普通の幻晶騎士では両腕で持ち上げるので精一杯という代物だ。

それを軽々と片腕で持ち上げる、綱型を使用した筋肉の出力は流石と言っべきものだった。

ギイイイイ……キイ

「出力の向上、耐久性の向上。上手くいきそうですね」

「おう、坊主が動かしても早々は死なねえ機体になりそうだな」

ギイイイイイ……ギギ……ギイイイイイ

「ところで親方、何か聞こえませんか？ こつ……何が軋むような音が」

「おめえにも聞こえるのか、ならこいつは空耳じゃねえってことだな」

「……」

二人が顔を見合わせ、機体のほうへと振り返った瞬間、乾いた炸裂音と共に機体の右腕が文字通り炸裂した。

結晶筋肉が広がり、金属の塊が地面に落ちるが、そんなことを気にするものはその場にはいなかった。

何故なら右腕に装着されていた一次装甲がまるで散弾のごとく周囲へと飛び散っていたからだ。

幻晶騎士を覆う巨大な装甲による散弾。そんなものに当たれば当

然、ただでは済まない。

一瞬で整備場は阿鼻叫喚の地獄と化していた。

「……!? ……!!」

そして、ちょうど親方の真正面にも装甲の部品が飛来し

「冗談じゃない!!」

直前に割り込んだエルが、抜き放ったウィンチェスターで装甲の破片を迎撃する。

低い姿勢で下から多量の圧縮空気弾を撃ち放ち、飛来した装甲の軌道を変える。

甲高い爆裂音を残し、装甲は上に大きく弧を描くとそのまま後ろの壁へと突き刺さった。

騎操士学科に所属すれど親方の本職は鍛冶師である。その上元々ドワーフ族自体が素早さに欠ける事もあり、とっさの反応は望むべくもない。

彼は暫くの間身を庇うようなポーズのまま彫像のように固まっていたが、ややあって引き攣った表情で後ろの壁に刺さった破片を見上げた。

壁にめり込んだ破片の様子にさすがの親方も俄かには声が出なかった。しばらくはそのまま呆然としていたが、やがて我に返ると今しがた炸裂した機体の検分を始める。

そこにある機体は、右腕が無残にもぼろぼろになっている。

結晶筋肉が外れ四方八方に散らばり、中の金属内格インナースケルトンが剥き出しになっっている状態だ。

熱心に右腕の状態を確認する親方に、エルがおずおずと声をかけ

た。

「……親方、ご見解を、どうぞ」

「あー、こりゃあれだな。結晶筋肉自体は無事だが根元の固定が吹っ飛んでやがる。」

筋肉の出力だけ上げすぎて、他のところが耐えられなかったつてえ事だな。

なるほど、いやあこいつあ参った参った」

はっはっは、と乾いた笑い声を上げる親方もすぐに黙り、再びエールを顔を見合わせると二人して深い溜息を吐いた。

「一筋縄じゃいかねえ、つつつかこりゃ最低でも全身見直しだな」

周囲の機材への被害は出てしまったものの、作業前に全員がある程度離れていたこともあり奇跡的にその事故での人的被害はなかった。

恐る恐る這い出してきた生徒たちも、呆然と右腕の壊れた機体を見上げては溜め息を吐いている。

綱型結晶筋肉の実用化までは、まだまだ越えねばならない障害は多そうなのであった。

綱型結晶筋肉自体は十分なものが出来上がっている以上、まずは固定方法を含む構造の見直しが行われることとなった。

当然ながら、根元からの見直しには時間がかかる。

設計に関わる人間は暫くてんてこ舞いであろう。しかしそれ以外の、主に実際に組み上げを担当する者などは少し手が空く形になった。

「そこでもう一つ、別の作業をお手伝いいただけないかと思いましたが」

ここは工房内の一角、会議室。

やはり黒板を前に解説モードに入っているエルの目の前には、親方と他数名の鍛冶師がいた。

つい先ほどまで工房内に飛び散った装甲の破片の撤去にかかっており、今は漸くひと段落着いたところである。

「まあ、実際少し手隙が出てるからいいけどよ、何を作らせようってんだ？」

例の背面武装バックウエポンとやらとはまた別のものか？」

「はい。こないだ言いましたよね？ 幻晶騎士以外に騎操士の訓練に使えるようなものを用意すると」

「ああ、あのことが……。何を作るのか知らねえが、あんまり手間がかかる代物は厳しいがよ」

親方の言葉を背にエルは黒板へと紙の束を広げ、貼り付けてゆく。そこには様々な部品と、それを組み合わせた何物かが書かれている。

そこはやはり技術者の性で、親方達の視線は吸い寄せられるように図面へと向かう。

「（幻晶騎士の図面？ いや、そいつにしちゃあ随分と……小せえ。しかも心臓部がねえのか？）」

最後に貼られた図面には、それまでに書かれた部品を組み上げたものであるう、全身鎧の形をした機体が書かれている。

しかしそこに添えられたサイズは全高約2.5mと言つところ。

一般的な幻晶騎士の1/4程度である。

かと言って普通の人間が着る鎧としては随分と巨大だ。彼らは今  
—そのの正体を掴みかねていた。

「随分と大柄な奴の鎧を作るんだな……？ いや、おいおい坊主な  
んだそりゃ、結晶筋肉を使ってるだあ！？」

凶面を張り終えたエルが振り返る。

彼の顔に浮かんでいる笑みに、条件反射的に親方達の表情が引き  
攣るがそれは余談である。

「ふふ、そうですよ。とても簡単に言いますと、これは小型の幻晶  
騎士です。」

人間が直接着込んで動かす、極小サイズの幻晶騎士」

その場にいる全員の沈黙は、長かった。

微かに緊張感すら孕む沈黙のなか、暫く髭を撫でながら凶面を睨  
んでいた親方が漸く口を開く。

「……………おお、うん。あれだ、形の次は大きさを変えてきや  
がったな」

固唾を飲んでその言葉を聴いていた周りの生徒が盛大に息を漏ら  
す。

「って親方あ、そんな一言で片付けるにはこいつはとんでもなさず  
きるんじゃない？」

「鍛冶師の沽券つてもんに賭けて、そう何度も坊主の台詞に驚いて  
られるか！

……………で？ ふむ、構造は確かに幻晶騎士のそれを応用してるのか。



そいつは後でじっくり見せてもらうが……こいつで騎操士の訓練するってのか？

ああいや待って待って、そうだ、こいつは心臓部を積んでねえ、動くのか？」

幻晶騎士の心臓部

エリテルリアクタ 魔力転換炉とマギウスエンジン 魔導演算機、マナ 魔力の源と制御

部分をあわせてそう呼ぶ。

そこに書かれているのは確かに小型の幻晶騎士のようなものだが、簡潔に言えばやや大きめの鎧を外装として、アウタースキン その中に結晶筋肉を張り巡らせた構造をしている。

人間が着込む、という言葉からもわかるように内部はがらんどろになっていた。

「はい。幻晶騎士に魔力転換炉や魔導演算機が必要なのはあくまでもあの巨体を動かすのに必要な魔力、そして魔法術式を人間一人の能力で支えられないためです。

ならば……乱暴な言い方になりますが、機体自体を小さくすれば負担もはるかに小さくなります……計算上は、人間一人の能力でも動かさしめる程度まで」

熱心に説明を聞く鍛冶師達の顔に、以前のような拒絶の表情は見られない。

既に新しい技術と共に一步を踏み出している彼らは、新しい概念に驚愕こそすれ、次には貪欲にその内容を吟味し始める。

「確かに理論上はそうだ。が、なあ……魔法術式の負担は具体的にどれくらいだ？」

フィジカルブースト 「身体強化が使えるならば十分なくらいかと」

「おいおい、かなり厳しいんじゃないかねえかそいつぁ……。しかもだ、魔導演算機を用いた幻晶騎士と動かし方が違ってやし

ねえか？ そいつぁ。

これを動かせること自体は良いけどよ、肝心の練習にやならねえんじゃ仕方ねえぜ？」

問いかけてつも親方の表情はニヤリ、と音がしそうなものだ。

からかっているのか試しているのか。果たしてエルは笑顔を崩すことはなく、すらすらと答えを返す。

「操縦方法は実はさほど変わりません。

元々、幻晶騎士の操縦も四肢の動きを起点にして、魔法術式の併用によるものです。

こちらはより直接的に自分の動きに追従して機体を動かし、魔法術式自体も自分で演算するだけです。

正確には術式の演算による負担は大きくなっているんですけど…その辺は訓練ということで」

ふむう、と親方が一言唸り、他の鍛冶師達も後ろで意見を交換しあう。

「何よりです。小型ということは必要な資材が少なく済む上に、幻晶騎士の中でも高額貴重な部品である心臓部がないことにより更にお安く！」

今なら1機作ることにもう1機つけちゃいますよ」

「何をだよ？ ……ともあれ背面武装の時よりや、言いてえこともわかりやすいな。

まあ簡単に作れるってのは確かだ。ここは一つ実際に作ってみるつてのも良いだろうさ。

そこで思ったように動かねえってのなら考え直すなり何なり、他に手もあるだろう」

親方の脳内では、この小型幻晶騎士による効果はじき出されていた。

幻晶騎士の構造を簡単にしたそれは、サイズも相まって製造の間は非常に小さい。恐らくは幻晶騎士に対して1割どころか、5分にも満たない程度だろう。

それで簡易的とは言え幻晶騎士の操縦訓練が出来るならば、異常なまでにコストパフォーマンスに優れていることになる。

それこそ騎操士学科の生徒の人数分用意しても良いレベルだ。何より……

「おい坊主、確かにこいつぁ騎操士の訓練用なのかもしれないけどよ。」

それ以外に用途がねえってわけでもないんだろ？

何せ……鎧はともかく、生身に結晶筋肉が加わってるんだ。こいつは結構な代物になるんじゃないか？」

はっとした表情の親方に、エルは頷きながら返答する。

「それは勿論。魔力の利用法として、身体強化よりも結晶筋肉による力の増幅のほうが高効率です。」

それが綱型を使用したものなら、尚一層のことでしょう」

わしわしと頭をかけた親方がついに耐え切れなくなり、ガツハツハと高笑いを始めた。

「ここ最近には本当にまったく、面白すぎていけねえな。」

おいおめえら、どうやら油を売ってる場合じゃなさそうだぞ」

「まったくで。いやぁ、鍛冶師としては腕が鳴って仕方ないところだ」

鍛冶師達が一斉に頷きを返す。  
その誰もがやる気に満ち溢れた表情をしている。

「全員やる気みてえだな。よし、いっちょこいつもやってやるっじやあねえか！」

工房での打ち合わせを終えたエルが自宅へと帰りついたのは完全に日が落ちた後だった。

ギリギリ滑り込むように夕食の時間に間に合い、軽くティナに怒られながら食事を済ませて自室へと向かう。

ある意味勉強熱心な少年であるエルの自室は壁際に並んだ本棚、後は机とベッドという構成になっている。

エルが部屋に入ると机にはキッドが、ベッドにはアデイが倒れ伏していた。

「二人ともこちらに居たのですね。どうですか？ 参考書は読み進んでいますか？」

この二人が勝手に入り込んでいることなどすでに日常茶飯事であり、エルも特に気にした様子はない。

部屋の主が帰って来た事に気付き、うなだれていた二人がゆっくりと再起動する。

「……たぜ」

「？」

「勿論、500ページキツチリ読み進めてやったぜ」

珍しいことに、驚きに束の間エルの動きが止まった。

彼の予想では提示した量の半分を越したぐらいだろうと思っただところだったのだ。

それが既に全てを終えていると言う。決して内容が簡単なものではないだけに、エルの驚きは大きなものになった。

それを見て取ったキッドがニヤリと笑い、椅子を回して正面から向かい合う。

彼らの師匠であるエルの予想を上回れたことは、彼にとっても少しばかり痛快なことだった。そのために払った犠牲が結構なものだったとしても、だ。

「(キッドの性格からして誤魔化すような真似はせんやろし、これは本気が。」

予想以上に頑張ってくるな)」

エルは驚くと同時に、幼馴染で弟子でもあるキッドの頑張りを嬉しく感じる。

自然、彼の表情にはじんわりと笑みが浮かんでゆく。

「どうやったのです？ 斜め読みなどはしていないのでしょうか？」

正直なところ、内容を把握するのもそんなに簡単などころではなかったはずなのですけど」

「ん？ へへっ、そりゃな、読んでるうちにちよつとした事に気付いたのさ」

「ちよつとした事？」

「おう、魔法術式が大量にあってそりゃあ把握が大変だったけどよ、あれって法則性があるだろ？」

「……法則性」

「前にエルから習った身体強化や制御術式、あと拡大術式とか、結

エンチャント

構知ってる魔法術式と似たのが多いし、大半はその組み合わせで出てくる……違うか？

それに気付いてよ、後は注意していけばかなり捗った……

……っておいエル、なんだその顔は」

得意げになっているのはキッドのはずが、話を聞くうちにエルがどンドンと笑顔になってゆくのを見て言葉を切る。

「んー、いえいえ。キッド？」

「なんだよ」

「ふふ、すごいです、偉いです。それって自分で気付いたのですよね。」

本当にすごい、大正解です。もうそこまでわかるようになっていたのですね」

エルがそれに気付いたのはあくまでも前世の記憶に根ざした、プログラムという経験を駆使してのものである。

彼が教えた知識の素養があったとは言え、キッドはこの世界で初めて、自力でその領域に追いついてきたのだ。

これを言はずにいられようか。

エルは自身の頬が自然と緩んで行くのを止める事など、できそうもなかった。

「(うーん、なんか最近本当に嬉しい事と楽しい事が多すぎるなあ)」「

その時、それまでベッドに倒れ付したままだったアディが凄まじい勢いで起き上がった。

「エル君！ 私も！ 私も一緒に頑張ったんだから、キッドばかり誉めるとかずるいわよ！」

突然拳手を始めたアデイにキッドとエルがそろってずっこけかける。

「えー……いやおい、だったら何故ずっと突っ伏してんだよ」

「それは……だって、エル君のベッドだし……つい」

「アーディーイーー。ちょっとここに来て座りなさい」

おっかなびつくり、それでもアデイは言われたとおりエルの前まで来て座る。

腰に手を当ててそれを待つエルは溜め息を一つ吐き、そしてアデイの頭を撫で始める。

「うん、アデイも偉い。良くここまで来てくれました。」

本当に二人とも凄いですよね。これなら後は実践あるのみです」

不敵に笑うキッドと、何やら縁側の猫みたいな表情になっているアデイを見回し、エルもその頑張りに応えるべく次の行動を決める。

「丁度、親方達とも話がついたところです。」

これから幻晶騎士の操縦訓練用の強化甲冑を……シルエットギア幻晶甲冑を、開発します。

キッドとアデイには、僕と一緒に試験操縦者として、手伝ってもらいますよ」

双子が揃って腕を振り上げたのは、言うまでも無い。

## #29 次なる雛形・前

ライヒアラ騎操士学科の工房で、ストランド・クリスタルティシユール綱型結晶筋肉の暴発事故が発生してから1月後。

設計担当の生徒達の不断の努力と、整備班総員の力を結集し、1機シルエットナイトの幻晶騎士が組みあがっていた。

整備場より、台車に乗せられた機体が運び出されてゆく。

その外見は幻晶騎士としては一種異様だ。

全身のほとんどの箇所が“1次装甲”と呼ばれる、あくまでも内部の保護のための最低限の装甲のみになっており、場所によっては結晶筋肉が露出している箇所もある。

胸部や手足の一部にわずかばかりのアウトースキン外装が装着されたその姿は、見るものに未完成と言ふ言葉を思い起こさせるものだった。

「やれやれ、やっとここまで漕ぎ着けたか……」

声に隠せぬ疲労を滲ませながら、親方がぼやく。

周囲に居る他の生徒達もある者は目の下に隈を作り、ある者は肩を叩いてほぐしているなど、その雰囲気の色濃い疲労を漂わせていた。

彼らが疲労困憊の様子であるのも無理は無い、この1カ月はまさに修羅場であった。

設計班が様々な構造を書き上げ、製造班がそれを実際に作成して試す。

最終的な構造に辿り着くまで、更に数回の失敗と事故を乗り越えながら、漸く形になったと言つところなのである。



未だ学生身分とは言え少なくない回数幻晶騎士の組み上げを行い、既に最前線でも活躍しうるだけの能力を備えた彼らをして、この機体を作り上げる事は困難を極めた。

死者が出なかったことが色々な意味で不思議なまでの過酷な戦いであったが、それでもここまで士気を落とさずに進むことが出来たのは、やはり彼らが技術者として新しい技術が形になることに至上の喜びを感じていたからに他ならない。

その証拠に、彼らの瞳には疲労では塗りつぶしきれないほど力強い光が宿っていた。

まるで円形闘技場のような幻晶騎士の訓練場へと“試作機”が運び込まれてゆく。

仰向けに寝た体勢で台車に乗せられた試作機の胸の装甲を開き、操縦席へとナイトランナー騎操士が入ってゆく。

試作機は訓練場の中央に配置され、円形闘技場の観客席の部分に相当する場所からそれを見守る整備班の面々の前には、人の全身を隠して余りある巨大な盾が並んでいた。

数回の事故を経て、彼らも学んだのである。

部分ごとの動作試験は何度も重ねて来たものの、全身を組み上げでの動作試験は今回が初めてになる。彼らの警戒も当然だった。

そして試作機が外装をつけていないのはそのためだ。

まずは、幻晶騎士の部品の中でも重量的に嵩張る外装を除いた状態で動かそうとしているのである。

「ようしヘルヴィ、準備はいいか！？ ……………おう、いくぜ、まずは立ち上がれ！」

拡声器を片手に親方が声を張り上げ、それを合図に試作機が身を起こし始める。

整備班の面々も盾の影から覗き込むようにしながら、食い入るようにその動作を見ていた。

力を込められた筋肉が膨張するのが遠目にも見て取れる。軋むような音を上げながら、試作機が立ち上がった。

その動きは通常の機体に比べると幾分ぎこちなく、そして極めてゆっくりとしたものだった。

「立った……！！」

誰かから押し殺したような声が漏れる。

立ち上がる。これだけのためにつき込まれた労力と、乗り越えてきた苦難と、払われた犠牲を思い、その声はやや震えていた。

脚の筋力を十分に必要とするその動作に耐え切ったことで、今回の構造は綱型結晶筋肉の出力に最低限、耐え切るだけの耐久性があったことが証明されたのだ。

「まだだ、油断するな……そこ！ 身を乗り出すな！ 危ねえぞ！！  
ようし、落ち着いてだ……ヘルヴィ、そのまままずは歩いてくれ。  
ゆっくりと、ゆっくりとだ！」

試作機の首が了承を表し、ゆっくりと上下に動いた。

そこからしばしの溜めを作り、やがて意を決したように歩き始める。

石畳の広がる訓練場の中だと言うのに、その歩みはまるで今にも壊れそうな吊り橋の上を歩くがごとく慎重極まりなかった。

歩き方を確認するかのよう動きはぎこちなく、歩む速度は牛歩のごとくだ。

幻晶騎士としては信じられないほどの時間をかけ、重い足音と軋

むよつな筋肉の駆動音を響かせながら試作機は訓練場を半周する。  
動きのぎこちなさは取れてはいないが、最終的に歩く速度は上がりそれなりのものまで上がっていた。

「固定も吹っ飛ばねえ、これなら何とかかなりそうだな」

外装をつけていないため油断は出来ないが、少なくとも今すぐに壊れそうな様子は無い。

試作機はそのまま整備班の生徒達がいる場所の前まで歩いてくると、これまたゆっくりとした動きで片膝をついた。

駐機姿勢と呼ばれる幻晶騎士を止めておくための姿勢をとり、動きが完全に停止したところで漸く整備班の生徒全員が大きく息をついた。

次いで、彼らは互いに抱き合はんばかりの勢いで声を上げる。歩行試験が成功し、これまでの試行錯誤が報われた瞬間だった。

胸部装甲が開いて中から騎操士が現れ、開かれた装甲の上に立つ。

「おう、どんなもんだよ、ヘルヴィ」

試験の成功に喜色を滲ませた親方の問いかけに、しかしヘルヴィと呼ばれた女性騎操士は渋い表情を返した。

「文字通りのじゃじゃ馬ね。力を余しすぎて、歩かせるだけで跳ね回りそうよ」

「そんなにか？」

「ええ、今までの機体と比べて使い勝手が全然違う。」

「これだけ感覚が変わると、正直全員訓練をやり直しになるわよ？」

「そいつあなあ……歩けるようになったのは大した成果だが、操縦系統まではまだまだ手が回りそうにない。」

その辺の調整は後回しだな。

……さて、跳ね回れたあ言わねえが、歩くのは大丈夫つてのなら  
残る項目を進めるぞ」

ヘルヴィが頷き、再度操縦席へと戻ってゆく。

盾を構えていた整備班の面々も、安全が確認されたことで次の行動に移った。

改造されていない学生機体が訓練場へと大型の標的を持ち込み、設置してゆく。

自身も訓練場の石畳へと降りながら、親方は周囲の生徒へと指示を飛ばしていた。

「よし、シルエットアームズ魔導兵装持って来い。訓練用のだぞ！

標的は端っこに設置だ！

それとだ、誰かエルネステイ銀色坊主を呼んで来い！

今は工房のほうでシルエットギア幻晶甲冑の試験やってるはずだ」

「……なんだこれ」

親方の指示に従い、1人の生徒が工房へと戻っていた。

大半の生徒が試作機の歩行試験のため出払っているため、今この場所には殆ど人がいない。

扱うものが扱うものだけに、やけに広大な空間は普段の様子を思えば不気味なほどに静まり返っていた。

そしてエルネステイを呼びにきたはずの生徒は、工房内へと入った直後に視界に飛び込んで来た光景に、思わず言葉を漏らさずには居られなかった。

「（最近寝不足だったからな……疲れてるのかな、俺）」

彼が見たままを端的に表現するならばそう、全身鎧を着た騎士が二人、腕を組んでダンスを踊っている。

そして行動もさることながら、その全身鎧の騎士は異様な風体をしていた。

まずその身長が一般的な成人男性よりも遥かに高く、凡そ2.5mに達する。近くに居る対比物が小柄なエルである事がその姿を実際よりもさらに巨大に見せていた。

次に異様な点が、体のバランスの歪さである。

頭や胴体は比較的普通の人間と同じ大きさであるにも拘らず、手足が奇妙に長い。さらに付け加えるならば腕が4本ある。

内側に小さな　　と言つても通常の人間サイズの　　腕があり、その腕が外側の巨大な腕についた取っ手を握って動かしている。

そう、そこに居るのは幻晶シルエットギア甲冑　　小型幻晶騎士とも言うべき、魔導仕掛けの機械鎧である。

新技術の結晶が軽やかに踊っている、目前の光景の意味不明さに軽く頭痛を感じながらも、その生徒は手前にいるエルネスティへと声をかけた。

「おいおいお前ら、動作試験やってたんじゃないのかよ。なぜダンスしてるんだ」

「あら先輩、お疲れ様です。勿論動作試験を進めていますよ。」

今は“ダンスを踊れるくらいの自由度があるか”の試験中です」

「……ああそうかい。そりゃ試験は成功っばいな」

「成功は、成功なのですけどね」

彼らが話している間に、踊りをやめた2機の幻晶甲冑が近づいてくる。

2機はそのまま立ち止まるとその場で膝立ちのような姿勢をとる。鋭い圧縮空気の噴出音と共に幻晶甲冑の上半身の装甲が跳ね上がる。腹から腰周りの装甲は下を向いて展開し、同時に太股の装甲が大きく左右に開く。

そして跳ね上げた装甲をくぐるようにして操縦者が降りてきた。

「おっし、良い感じで動くぜ、エル」

「そうそう、次はエル君も踊ろうよ!」

幻晶甲冑を動かしていたキッドとアディは試験の成功もあり上機嫌だ。

「アディ、遊んではかりでは駄目ですよ……。まあ、概ね僕らならば動かすのに問題は無いようですね」

「おお、動く動く。まあちょっと負担はあるけどよ、これくらいなら問題はねえな」

「そうですね。僕も二人の心配はしていないのですけど……」

エルが視線を二人からそらしたところで、彼らの後ろからさらにもう1機、幻晶甲冑が歩いてきた。

「それっ、ふう。随分とっ!!　っそい、楽しそうな!　っ話をしてるじゃないか!

……はあ、俺も混ぜてもらおうかな」

乗っているのはエドガーである。

ただし、軽やかにダンスを踊っていた双子の時とは比べ物にならないほどその動きは遅く、そしてぎこちなかった。

小さな掛け声と共に脚を振り上げ、大きく踏み出して進む。それの繰り返しで漸くここまで来たのだ。

まるで出来の悪い人形劇を見ているようだが、動かしている当人は必死である。

「ふう、やっとここまで来れたか……」

「お疲れ様ですエドガー先輩。どうですか？ 使い心地は」

「見ればわかるだろう」

「楽しそうですね」

「……」

皮肉ではなく、エルは本当に羨ましそうな視線をエドガーと彼が乗る幻晶甲冑に注いでいる。

エドガーが四苦八苦しているのとは全く別の観点から、その状態が羨ましくて仕方ないらしい。

ちなみに何故エルが動かしていないのかと言うと、彼では大抵のものはすんなり動かしてしまうため、試験にならないからだった。

エドガーは何かを抑えるように頭に手を当て首を振っていたが、すぐに振り切る。

「なあ、エルネステイ。前から思っていたんだがな」

「はい」

「この幻晶甲冑……決して悪いわけじゃない、これ自体はすごい代物だと思っただがな」

「はい」

「動かしづら過ぎる……！」

幻晶甲冑の筐体は、エルの作成した図面を基にすぐさま組み上げられた。

途中で多少改良したことを鑑みても完成まで1週間程度である。

製作した鍛冶師達の技術力の面目躍如と言ったところであろう。

しかし順調なのはそこまでで、いざ動かし易い代物ではなかった問題に突き当たった。

幻晶甲冑は当初予想していたほど動かし易い代物ではなかったのである。

それは偏に高難易度の上級魔法であるフィジカルファースト身体強化を基本とし、しかもそのアレンジ版を使用しなければならぬことに起因する。

要求される魔法能力の負荷が大きく、現在の操縦方法は一般の生徒にとつては荷が重すぎるものだったのだ。

テストパイロットには双子の他にエルと付き合いのあり、事情もわかっているエドガーとディートリヒが借り出されたものの、二人ともまず動かすだけで3週間の時間が必要だった。

埒が明かないので途中でエルによる“幻晶甲冑操縦のための集中講座”を開いてそれである。

それを尻目にキッドとアデイの二人は1週間程度の訓練でダンスを踊るくらい自由自在に動かして見せたのだが、逆にそれは二人がエルと同じ括りの側であることを確認しただけだった。

一般的な騎操士では、動かし方の違いに慣れないなどと言う問題ではなく動かすことすら俣ならない……正直に言つて失敗作である。ちなみにディートリヒは今現在エドガーよりも更に後ろで唸っている。

「率直に言つてこいつに必要な制御は複雑すぎる。身体強化に近い魔法術式など、普通はおいそれとは使えないはずだ。

とてもじゃないが幻晶騎士の操縦訓練に使える代物じゃないぞ」

「そうなのですよね……そのあたりは見積りが甘かったですね」

「うーん、それは努力でカバーとか！ ね、先輩？」



エドガーは順にエル、キッド、アディを眺めた後小さく溜め息を吐いた。

「無茶を言うな。一朝一夕でどうにかなるもんじゃあるまい。まったく……。」

とりあえずお前達がおかしいのは十分に確認させてもらった。今更そこはどうかと言わんが、せめてそれを普通の人間に求めるな」

「んーむむむ……それでは残念なことに、これは使えない事になってしまいます」

「このままでは、な。幻晶騎士の小型版なのだろう？ だったら魔導演算機を積み。」

アレがあれば、制御の負担は軽減できるはずだ」

「仕方ないところですね。製作費用が上がってしまいますが、背に腹は代えられません」

エドガーの台詞も尤もである。このままではエルと双子にしか使えない欠陥機が出来上がるばかりだ。

さすがにそれでは当初の目的に対して不十分に過ぎた。

「（魔導演算機の仕組みも調べんとあ。

実際サイズも違うから幻晶騎士用ほど処理能力も必要ないし、大体そのままの大きさだと積みめんし。」

小型の魔導演算機とか用意できんのかな？ 後で親方に相談だな」

エルが解決策を黙考している横で、彼らの話に聞き入っていた、エルを呼びに来た生徒がはたと我に帰った。

「ああ、そつだエルネステイ。つい話に聞き入っていたが、親方が

呼んでるぞ。

そろそろ背面武装バックウエポンの動作試験を始めるらしい」

「ということは歩行試験は成功だったのですね。わかりました、すぐに向かいます」

エドガーは幻晶甲冑を降り、反対にキッドとアディは再度搭乗する。

エルはキッド機の肩にひょいと飛び乗ったところで、その場に居るもう一人の存在をふと思い出して振り向いた。

「あ、ディー先輩は……」

振り向いた先では、少し離れたところにいるディートリヒが幻晶甲冑の操縦に悪戦苦闘している。

「はあ、はあ、上手く動かん……何とか、エドガーのいるところまでは……！」

そして全員が移動しようとしているのを見、気合を入れなおしたディートリヒ機が大きく一步を踏み出し……そして彼を悲劇が襲う。

「あ、あれ？　なんだこれ、やばい、やばいぞ止まらなアーツ！？」

制御を間違ったらしいディートリヒの上半身が突如としてゴリッ、と言う重い音と共に向いてはならない方向を向く。

そして彼のほうを向いていたエルが決定的瞬間を目撃した。

「ディー先輩……？　うわ、これはまずいかも、先輩を医務室へ……」

エルが禁句に触れた瞬間、凄まじい勢いでディートリヒが再起動した。

のみならずそのままギョルツ、と音がしそうな勢いで華麗にターンを決めるとビシツとポーズを決め、言い放つ。

「それには全くこれっぽっちも及ばないとも!!」

幻晶甲冑を装着したまま器用にポーズを取りつつも彼の額を流れる汗が物凄いことになっているが、果たしてそれは肉体的なダメージによるものか、それとも精神的なものなのか。

周囲の人間は啞然としたままそれを見ていたが、本人の様子から大丈夫だろうと判断する。

「えーと、大丈夫そうで、すね？ まあ無理はしないで下さいね。

僕らは先に訓練場に行っていますから」

「ああ、わかった」

エルを肩に乗せたキッド機とアデイ機が軽快に訓練場へと走り出していった。

「……で、ディー？ いつまでそのポーズを取っているんだ？」

「ははは、何故このポーズを取れたのか自分でも解らなくて……ここから動けなくて、ポーズを変えれないのさ！」

「威張るな。俺たちも移動するぞ」

### #30 次なる雛形・後

騒々しい足音をたてながら2機の幻晶甲冑シルエットギアが走ってゆく。

それを操っているのはキッドとアデイの双子である。

それなりの魔力を消費するものの、フルコントロール直接制御に準じた制御方法で動作するこの幻晶甲冑は、やろうと思えば生身よりも遙かに速度が出せる。

前を行くキッド機の肩に乗っているエルの紫がかった銀色の髪が、前方からの風にもてあそばされるままに暴れている。

全高2.5mもの騎士が子供を肩に乗せ爆走するという光景に、幻晶甲冑の事など知らない一般の生徒達が目を剥いているのを気にせず、2機は軽快に訓練場へと駆け抜けていた。

訓練場に近づくほどに、整備班に所属していると思しき生徒が増えていく。

その横では、未改造の幻晶騎士シルエットナイトが補修部品や機材の運搬を行っていた。

「（実は幻晶甲冑急がなくても、ナイトランナー騎操士もやる事いっぱいだったりせん？）」「

今までのような小規模の改造ではなく1から新たな機体を作るという作業は、結果的に整備班、騎操士の別なく作業に借り出される状態を生んでいた。

それは試作機の構成が予想以上に従来のものからかけ離れてきたため、既存の機体を基にした訓練を進めるより新たな機体を完成させることを急いだためである。

現在、騎操士学科はその全力を挙げて試作機を稼働させるために

活動している状態だ。

ちようど（？）幻晶甲冑の開発に躓いているエルは一先ずそれ以上は考えないことにした。

エル達が訓練場へと辿り着くと、石畳の敷地の中央に、アウトタースキン外装を装備していない幻晶騎士の姿が見えてきた。

歩行試験までを終えた試作機である。

「歩いただけで爆発、なんてことにならなくてよかったですね」

「心配するところ根本的すぎんだろそれ……本当に大丈夫なんだろうな？」

「やばくなったら逃げれるようにこいつに乗ったままにしておくか」

幻晶甲冑の騒々しい足音と共に聞こえてきた、鈴を鳴らすような声に親方が振り向いた。

「おう坊主、来たか。んじゃおっぱじめるとするか」

「よろしく願います」

先ほどまではストランド・クリスタルティシュー綱型結晶筋肉を使用した歩行試験が行われていた。

この部分は親方を筆頭に鍛冶師達が試行錯誤し、組み上げた部分である。

そしてこの後行われるバックウエポン背面武装の動作試験に関しては、基礎理論だけでなく設計までエルが担当した部分になる。

そのため、ここからはエルに確認を頼みながら作業を行う事になっていた。

「見た感じ問題なさそうだが……こいつの完成度はどれくらいだ？」  
「組み上げ前の時点では、連動、照準共に思い通り動作しましたよ。」

後は照準精度の問題と配置による最適化でしょうか」

「照準……精度つてなあ、なんだ？」

「ああ、えっと。……照準機能を用いて、どれくらい正確に的を狙えるか……かな？」

「ほおう、そいつあ大事だな。とにかくにもまずは動かしてからの話だよ」

幻晶甲冑から降りたエルが少し焦ったように答えながら親方の横へ並ぶ。

双子は結局幻晶甲冑に乗ったまま見学しているが、さりげなくその巨大さが後ろの邪魔になっていたりする。

「おうし！ それじゃあ魔導兵装シルエットアームズの取り付けから始めんぞ！！」

親方の合図を受け、魔導兵装を持った学生機が試作機に近づく。試作機の背中には、それまでの幻晶騎士には見られなかった機構が増設されている。

無骨な、鉄骨と橋げたを組み合わせたかのような機構が、人間ならば肩甲骨に相当する部分に左右2つ。

どうも二つ折りにしてあるらしいその先端部には、まるでペンチのような形状をした簡易的な手がついている。

全く洗練されていないものの、それは地球における産業用ロボットアームを想像させ、そして機能的にもそれに近い存在である

背面武装の主たる機構、補助腕。

動作試験は魔導兵装の取り付けから始まっていた。

魔導兵装自体は、既存のものをそのまま使用している。

補助腕側に様々な魔導兵装を扱うための“手”が用意されているため、どのような魔導兵装でも使えると言つのが本機能の売り（？）の一つである。

試作機の後ろに立った学生機が、その手に持った魔導兵装を補助腕に持たせている。

補助腕の手は形状こそ簡易であるが、複雑な取り回しは求められていないが故に魔導兵装の保持だけならばそれで十分な効果を持っている。

左右2本、手によって保持された魔導兵装が真上を向いて固定された。

「うん、補助腕の動作は問題なさそうですね」

今のところ魔導兵装を持ち変えるためには他の機体の協力が必要になるが、補助腕側の機能に問題は見られなかった。

背面より伝わってくる軽い振動を感じ、ヘルヴィは幻像投影機ホロモニターの表示を確認していた。

「ん、魔導兵装設置完了。続いて展開機能の試験、いくわよ」

彼女は試作機の騎操士ナイトランナーを担当しているが、それ以前に開発中の背面武装の動作確認にも参加していた。

操作方法や機能については、以前よりレクチャーを受け十分に理解している。

「魔導兵装を展開、レティクル照準器表示」

彼女は操縦桿横に増設されたレバーを引く。

命令を受けた魔導演算機マキウスエンジンが補助腕に内蔵された筋肉へと指令を送る。

軽い振動と共に背中の補助腕が展開し、魔導兵装を持ち上げていった。

砲身が90度回転して水平に移行し、試作機の両肩の上に浮いた状態で正面を向いて固定される。

「おお……………」

予想以上に滑らかな動きを見せる補助腕の様子に、整備班の生徒達の間から低いどよめきが漏れた。

この機構自体は組み上げ前にも何回か動かしてみたことはあるが、実際に機体上で動いているのを見ると、感慨もひとしおである。

操縦席ではホロモニターの表示に変化が起きていた。

それまでは外部の光景を映すだけだったその上に今は照準用のマーカーが表示されている。

目盛と円形を組み合わせた極めて簡単な表示だが、それまでは何もなかったことを思えば格段の進歩だと言える。

「照準あわせ……………発射」

ヘルヴィは照準器内に標的を捉える。外から試作機を良く観察すれば、その頭部の動きと砲身の方向が連動していることに気付けたであろう。

彼女は照準内に標的が入っていることを確認し、操縦桿のトリガーを押し込んだ。

指令を受けた魔導兵装から法弾が発射される。今搭載されているのは標準的な炎弾を飛ばすタイプだ。

赤く輝く魔法の弾丸が砲身から飛翔し、そのまま吸い込まれるように標的に命中した。



演習用の武装のため威力は低く、標的はその形を残しているものの、着弾による焦げ跡があるのが見て取れる。

全てに完璧を期した上での試験では無かったにもかかわらず、命中まで至った望外の成果に歓声があがっていた。

「あらら、当たってしまいましたね」

「いーことなんじゃないの？ それって」

「勿論問題になるわけではありませんけど、もっと調整が必要かな、と思っていましたので」

彼らの前ではなおも数発、法弾が発射されていたが、最終的には命中率は6割程度だった。

撃ち終えた後、そのまま試作機は魔導兵装を収納する。

展開の手順と逆に補助腕が折りたたまれ、魔導兵装が垂直の向きに背中へと仕舞われていった。

今回の試験の主眼は展開、収納機能の確認であり、後はとりあえず撃てれば良い程度だったため、結果として十分以上の成果と言える。

「ほおう……こいつが、背面武装か……。これは予想以上にすげえ代物かもな」

目の前の結果に、親方すら髭を撫でつつ唸っていた。

動作試験としてはほぼ完璧な結果を残した試作機に、それを見守る生徒達は感極まったように喜び合う。

網型結晶筋肉、背面武装、火器管制システム……新たに開発された機能のほぼ全てに対し、完成が見えてきたのだ。

目指したものが形になる、技術者として最も喜びを感じる瞬間であった。

「……………どうして皆こんなに感動してるのよ？」

生粋の騎操士ではなく、そして鍛冶師でもない双子には周囲の感動の意味が今一理解できていなかった。

盛り上がる生徒達の間で微妙に浮いてしまっている。

頭上から聞こえてきたアディの疑問に、苦笑しながらエルが答えていた。

「幻晶騎士の形が変わり、機能が変わり……………その第一歩目を踏み出したからですよ。」

これから、新しい道を切り開くことが出来る。それを自らの手で、実現できたのですから……………」

幻晶甲冑の大きな腕を器用に組み合わせ、腕組みのポーズをとったアディは暫く悩んだ後、納得したように顔を上げる。

「うーん、良くわかんないけど成功したからおめでとつって事ね！」

「間違いではありませんけど、アディ……………」

整備科の生徒達が努力と苦勞が報われた喜びに包まれている頃。それとは別種の視点から、試作機を見つめる人物がいた。

「……………あの機能、どう思う？ ディー」

エドガーとディートリヒ……………他にも、騎操士達は様々な感想を抱きながらその結果を眺めていた。

「ふん、そうだな……まずは遠距離では苦戦しそうだな。こちらはどうしても片手を魔導兵装の操作に割く必要があるが、あちらは盾にでも身を隠しながら撃てる。」

何より、そこで両手持ちの大盾あたりを構えてね」

「ああ、しかも危険を冒さず2本を同時に使える。今までは、持ち替える隙をカバーするために片手1本が常識だったからな。」

単純に火力は倍だ。撃ち合いなど考えたくはないな」

「いいね、安全に相手を撃ち倒せる。素晴らしい機能じゃないか」

「お前な……確かに魔獣を相手にするなら心強いが、俺たち自身があれを相手にすることもあるかも知れないんだぞ」

少し呆れたようなエドガーの言葉に、デイトリヒが反論しようとしたところで、横から別の声が割り込んできた。

「そうよ。まずはあたしがあんたらを熨してあげようか？」

二人が振り向くと、そこにはいつの間にか試作機の騎操士であるヘルヴィが立っていた。

彼らが話し込んでいる間に試験は終了していたようだ。

「あり得ないとは言わないが、あの機体はまだ未完成だろう」

「今はね。でも今日の試験で大体の部分は確認できたから、後は完成までは早いらしいわ」

既に筐体の基本は完成しているため、実際に完成は目前である。

「だったら、まずはやるべき事があると思わない？」

「何をだ？」

強気な笑みを浮かべるヘルヴィが、その眼差しを細くする。

「陸皇龜ベヘモスとの戦いすら無事に乗り切った、学科最強の騎士とどこまで戦えるか、試すのよ」

エドガーが僅かに目を見張る。ここにいる彼も、彼女も、ある意味ディートリヒもベヘモス戦の生き残りである。

「まあ、確かにどこかで模擬戦の必要は出てくるだろうが……俺か？ それとヘルヴィ……お前もあの戦いを生き残ったじゃないか」

「何とか、ね。でもあたしが生き残ったのは偶然。あの子が偶然間に合ったから、なのよ」

「だから、悔いているのか？」

「何をよ？ それについては感謝してもし足りないわ。」

むしろそれで……あの子の作った、この機体に興味を湧いたの

彼らの視線が、運び出されてゆく試作機へと向けられる。

「出来上がる前から関わってるから、よくわかるわ。」

この子の性能があれば、あたしでもあんたを倒せる」

「……それは恐ろしいな」

少しも恐ろしそうではなく、むしろ困ったかのような態度のエドガーにヘルヴィは小さく息をついた。

「だから、これが完成したら……あたしでもあのデカブツと、最後まで戦えるかもしれないわ」

「……それが理由なのか？」

「ま、単純に幻晶騎士が強いのは、良い事よね」

一瞬でにやりとした表情に戻ったヘルヴィに、エドガーが肩透かしを食らったようにずっこける。

「首を洗って待ってなさい。まずはあんたからコテンパンにしたげるわ」

ひらひらと手を振りながら歩き去るヘルヴィを、エドガーが小さく溜息をつきながら見送っていた。

実用上最も困難だった網型結晶筋肉を使用しての動作と、背面武装が完成したことにより、その後の作業は極めて順調に進んだ。

外装を装着しての動作実験、背面武装も動きながらの射撃をこなすなどその完成度を高めてゆく。

そして歩行試験より2週間ほど後、ついに試作機は正式な名称を付与された。

技術試験用試作機体第一号機“テレスターレ”　それが、かつて試作機と呼ばれた次なる世代の雛形の名である。

工房内部の暗がりから、ゆっくりとテレスターレがその姿を現す。外見はそれまでの学生機と大差ない。以降も様々な調整を行い改装を施すことを前提としているが故に、それはむしろ他に比べ地味であると言えた。

唯一その背中に装着された2本の魔導兵装が、既存の機体との差異を声高に主張している。

テレスターレはそのまま訓練場へと歩を進める。

それに乗る騎操士は、それまでの試験騎操士であったヘルヴィが

そのまま担当している。

現時点では新型の操縦に最も習熟しているのは間違いなく彼女である。

操縦方法の改善、筋肉配置の見直し、そして彼女自身の慣れを合わせ、テレスタールの動きは最初のそれとは比べ物にならないほど滑らかなものになっていた。

だがそれでもまだ調整が足りない部分があり、幾分微妙な動きが混じっている。

テレスタールが訓練場の門をくぐるとそこには1機の幻晶騎士が待ち構えていた。

アールカンバー　テレスタールより更に飾り気に乏しい外見、オーソドックスな剣と盾の装備。しかし現在の騎操士学科最強と目される、エドガー・C・ブランシュが操る機体。

「ようし、ヘルヴィも準備できたようだな。

ではこれより、新型の動作試験の仕上げとして、アールカンバーとの模擬戦を行う！」

審判役の生徒の口上に合わせ、詰め掛けた騎操士学科の生徒達が歓声を上げる。

革新的な機構を搭載した新型機と、既存機体の最強格との模擬戦  
否が応にも観客の期待も高まるうと言つものだ。

ホロモニター  
幻像投影機に映るアールカンバーの姿を睨みながら、ヘルヴィの口元には自然と笑みが浮かんできた。

訓練場での宣戦布告どおりに彼女はテレスタールを駆り、アールカンバーに相對する。

技量では確実にエドガーに劣る彼女が、どこまで戦えるかを確認するのだ。

彼女の見たところ、まだ試作の域を出ないとは言え、様々な面で既存機を遥かに上回るテレスターレの性能を以ってすれば十分に勝機はある。

「この子はまだまだ未完成だけど……舐めない方がいいわ」

「勿論手を抜く気など毛頭ないさ。むしろ期待している……新型の実力をこの手で確認できるのだからな！」

双方が剣を抜き、構える。

「ようし、準備はいいな？ それではこれより戦闘を開始する！！  
模擬戦闘の規定に則り、双方、礼！ 構え！」

「……始めえっ！！」

審判の合図を皮切りに、2体の鋼の巨人が雄叫びと共に走り出した。

### # 31 模擬戦をしよう

石畳の広がる訓練場にて、巨人が剣を構え相對する。

全身を包む鉄の鎧が鈍く光を反射し、結晶質の筋肉が奏でる軋みが場内を満たす。

これから行われるのは模擬戦闘であり、つまりは訓練や試験の環である。

しかし向かい合う当人達にとっては紛れもない戦闘であり、彼らが使用するのは人が持ち得る最強の兵器である幻晶騎士だ。シルエットナイト

漂う空気は気楽なものではありえず、幻晶騎士を操る騎操士達ナイトランナーも高まる緊張感のなかで静かに闘志を燃やしていた。

そして双方の準備を確認した審判が、声を張り上げ戦闘の開始を告げる。

幻晶騎士同士の戦いにおいては、距離が離れている場合は魔導兵シルエット装を使った法撃を行い、距離が近づくと近接武装に持ち替えて戦う、それが基本的な戦法である。

魔導兵装は紋章術式エンブレム・グラフを使用しているという構造上、耐久性はさほど高くない。近距離で使用することは破損の危険性が高く、攻撃の選択肢を失う破目になりやすいからだ。

エドガーもテレスタールバックウエポンに装備された背面武装の存在と機能は把握している。

魔導兵装を2本同時に使用しての遠距離攻撃能力は脅威である。それ故にエドガーは不利な遠距離での応戦を度外視し、試合開始直後に速攻で近距離戦に持ち込もうとした。

しかし彼の予想を外れ、テレスタールも試合開始直後に前進し間



合いを詰めて来る。

「（どういっつもりだ？ 折角の遠距離での有利を生かす気はないのか？

だが、それならそれで好都合だ！）」

初撃は勢いを乗せて斬撃を見舞おうとオールカンバーが踏み込みを強くする。

そして剣を振り上げた直後、エドガーは背面武装の機能を読み違っていたことを知る。

双方が今正に激突に移らんとする直前、突如テレスタールの両肩へと魔導兵装が展開された。

操縦席では幻像投影機ホロモニターに映る照準機レイトックルを睨み、ヘルヴィがにやりと笑みを浮かべている。

「まずは挨拶代わりね。至近距離での法撃、これが背面武装の真価よ！」

テレスタールに装備された魔導兵装が2本同時に火を噴く。

まさに剣を組み合わせんとする直前に法撃を放たれてはさすがのオールカンバーも回避できず、法弾のうち1発は盾で防いだものの1発が盾を構えていない右肩へと突き刺さった。

演習用の魔導兵装である以上一撃で右腕が吹き飛ぶような威力は持っていないが、それでもオールカンバーは体勢を崩し、同時に接近してきた勢いを失う。

「まだまだあ！」

魔導兵装を背面へ収納しながらテレスタールが剣を振り上げる。

工夫などとは無縁の勢い任せの一撃。しかし自身の速度を乗せ、相手の体勢を崩して放たれたその一撃は生半可な工夫を凝らした一撃より遙かに恐ろしいものとなる。

それを受けるエドガーは敢えて体勢が崩れるのに逆らわなかった。右半身を後ろに流し、同時に左に構えた盾を押し出してテレスタールの一撃を受ける。

辛うじて攻撃は防いだもののアールカンバーはほとんど吹き飛ばされるように後ろへと下がった。

体勢が崩れ、踏ん張りが利かなかったこともある。しかしそれ以上相手の剣戟の威力はエドガーの予想を超えて強力だった。

「……ッ！！　なんて威力ッ！　これが綱ストランド・タイプ型の力かつ！？」

ステップをするように下がり、距離を取りながらエドガーが呻く。背面武装によるこれまでの常識を外れた魔導兵装の使用タイミング、綱ストランド・クリスタルティシュー型結晶筋肉による圧倒的なパワー。

エドガーは体勢を立て直しながら、何よりも脳裏からこれまでの戦闘のセオリーを追い払っていた。

「ああ全く、嫌なことに最近常識を投げ捨てるのに慣れてしまった！」

ホロモニター  
映像投影機に映るテレスタールはアールカンバーを追撃すべく再び前進を始めている。

もはや奇襲じみた真似はやめたのだろう、その肩の上には既に魔導兵装が展開されていた。

「だが、私にも意地があるからな！！」

直線的に攻めては再び法撃の的になるだけだ。

アールカンバーは盾を構えつつ、テレスターレの射線から逃れるべく移動を開始した。

初手より予想外の白熱を見せる2機の戦いに訓練場に詰め掛けた観客達は大いに沸いていた。

鋼鉄の巨人が剣を打ち合うたびに歓声上がる。

そんな熱狂に包まれる観客席とは別に、整備班用のスペースの一角で静かに戦いを分析する者達がいた。

「さすがはエドガーだな。並の乗り手だと一発目で勝負がついてるぜ」

「ヘルヴィ先輩も中々上手く機体を乗りこなしていますね」

「そりゃあ伊達に試験騎操士やっちゃいねえだろ」

エルと親方<sup>ダイヴィド</sup>である。

二人にとっては実戦に近い状態で動くテレスターレの姿はまさに動く金塊の如し。

その一挙手一投足を注意深く観察し、分析していた。

二人の視線の先では再び2機が正面からぶつかっている。

剣同士を組みあい鏢迫り合いにいくかと思われたが、テレスターレがパワーに物を言わせてアールカンバーの剣を押し込む。

アールカンバーもさるもの、パワー負けは予想通りとばかりに間合いを取り、追撃を許してはいなかった。

「ヘルヴィは随分と力押しに見えるが」

「出力の差は歴然としていますからね。有利を最大に生かす方法かと。」

それに、正直まだ操縦系統の調整が全然追いついていませんから。細かな技術で戦つと負けますよ」

「なるほど、違いねえ」

エルの言葉通り、操縦系統に粗を残すテレスタールは有り余るパワーにより瞬発力には優れるものの、細かな動きは苦手としておりどうしても大雑把な攻撃が多くなる。

相対するは仮にも学科最上位の騎操士であるエドガーである。そう易々と剣の直撃を許してはくれない。

それでもテレスタールは背面武装とのコンビネーションにより開始直後より優勢を保ち続けている。

対してアールカンバーは苦境に立っていた。

エドガーはテレスタールの動作の粗さには気付いているが、それを生かすことが出来ないでいる。

これまでの幻晶騎士が相手であれば、相手の攻撃を誘発した後反撃する事も、エドガーの技量を以ってすれば十分に可能だ。

しかしテレスタールを相手にした場合は背面武装の存在がその隙を埋めて余りあった。

両腕による近接武装の攻撃をかいくぐったとて、今までに存在しないタイミングで追撃や牽制が飛んでくるのだ。

だからと言って下手に組み合つてはパワー負けが確定している。

多少の技量差など関係ないほど機体に性能差が出てしまっているのだ。

2機の戦いを観戦する生徒達にも、アールカンバーが悪手を打っているわけでも、ましてや手を抜いているわけでもないことはわかる。

それ故に粗削りな動きながら学科最強の一角を圧倒する新型機に、彼らは沸きに沸いていた。

「厄介すぎる！ 魔導兵装を抑えないと厳しい！！」

エドガーは焦りの中にも冷静に状況を分析していた。

テレスターレはまだ試作の域を出ないだけあって粗も多いが、ヘルヴィはよくそれを把握し、不利を補い有利を生かした動きをしている。

そしてそれを支える最大の要因が、背面武装による手数之差であることにエドガーも気付いていた。

多少以上の無茶をしても背面武装を黙らせなければ、このままでは彼に勝機はないだろう。

「あまり賭け事は好きじゃないんだが……このまま追い込まれるのも芸がないな」

ホロモニターに映るアールカンバーが動きを止めたのを見て、ヘルヴィは小さく呟いていた。

「……そろそろ痺れを切らしたのかしら。博打に出る気みたいね、エドガー」

彼女は自分がエドガーよりも技量に劣ることを把握している。

それ故にこれまでは機体の有利を前面に押し出した戦いをしてきた。

ならば、エドガーの狙いも自然と推測できる。

「綱型による出力差はひっくり返せない。だったら……狙うのは恐

らく背面武装」

背面武装が機能しなくなれば、いくら綱型によるパワー差がある  
うと精度が甘い点を突かれ技術でひっくり返され得る。

2人の騎操士は互いに敵を知り、己を知るが故にその認識は一致  
していた。攻防の焦点は自然と収束してゆく。

剣先を向け合ったまま2機とも動きを止めている。

激しい戦闘の後に訪れた静寂に、まるで弦を引き絞るかのように  
互いの間の緊張感が高まってゆく。

場の空気を見て取った観客達もいつしか静まり返り、近づきつつ  
ある決着の予感に固唾を飲んでいた。

不意に場内に響く、一際甲高い吸気音。干テリリアクタ魔力転換炉の全力稼動を  
示す駆動音を響かせたのはアールカンバーだ。

それは機械であるはずの幻晶騎士が上げた雄叫びの様にも聞こえ  
る。

それを合図として引き絞られた弓から矢を放つようにアールカン  
バーが走り出した。

様々な選択肢の中でエドガーが取った行動は真正面からの突撃。  
石畳を踏み砕かんばかりの重量音を響かせながら鋼の騎士が疾駆す  
る。

「こういう時に真正面なのがあんたらしいね！　いいわ、テレスタ  
ーレの全力で相手してあげる！！」

幾らパワーに差があろうとも勢いに差があつては攻撃を受けきれ  
ない。ヘルヴィもテレスターレへ前進を命じる。

開幕直後の一幕を髣髴とさせる、双方走り寄つての激突。

当然テレスタールは先んじて自身の有利を使用する。両肩の上の魔導兵装が火を噴き、2発の法弾がアールカンバーを襲う。

アールカンバーは片方を盾で防ぎ、そして片方を剣で切り捨てた。法弾を剣で切り払う技量は賞賛されるべきだが、激突を目前に剣を振ってしまったのは誰の目にも失策である。

何故ならアールカンバーの目前にはテレスタールが迫り、そしてそのパワーを存分に生かすべく剣を構えているのである。

突撃をかけておきながら一方的に斬られるだけでは余りにお粗末ではないか。誰もが　そう、ヘルヴィすらそう思った。

そしてエドガーは当然、ただのへまでそのような行動を取ったわけではない。

剣は最初から防御用と割り切っている。彼は本命である構えた盾を握りなおし、腕を肩につけ完全に固定する。

アールカンバーはそのまま姿勢を低くし、左半身を捻じ込むように前進した。

「……違っつ！？　シールドバツシュツ！！　さらに力押しでくるなんてっ！？」

直前でアールカンバーの動きに気付いたヘルヴィは慌てて剣を引く。

盾を押し出したアールカンバーに対して剣で攻撃しては、剣による一撃が届いてもこちらのほうの被害が大きくなる。

エドガーが取った手段はシンプルなものである。

攻撃手段、そして純粹なパワー。そのどちらで負けたとしても、アールカンバーがテレスタールに劣らないものがある。

それは質量だ。

パワーの差は勢いでカバーし、アールカンバー自身を弾丸とした渾身の一撃をテレスターレへと叩き込んでいた。

技量を抜いた単純な押し合いでは、出力に勝るテレスターレが絶対有利である。その事実を確信していたが故に、ヘルヴィは正面から攻撃を受ける選択肢を選んでしまった。

エドガーの狙いに気付いたときには既に回避できる間合いではなく、そして自身も勢いをつけたが故に同様の行動を取らざるを得ない。

テレスターレも盾を構え、そして2機の幻晶騎士が激突した。

瞬間、まるで衝撃そのものであるかのような硬質の音が響き渡る。

2機の衝突の勢いをともに受けた盾が歪み、互いの左腕から衝撃で砕けた結晶筋肉クリスタルティッシュの欠片が飛び散る。

そして次の行動に移るまでのほんの僅かな間、ここで攻撃を仕掛けた側と、受けた側での明暗が分かれた。

予想外の攻撃を受け怯んだヘルヴィと、最初から意図してぶつかったエドガー。

エドガーの狙いは最初からこの零距离の間合いへと近寄ることである。そのために全身でぶつかっていったのだ。

多大なる左腕の犠牲を支払ってつかんだ僅かな好機。

アールカンバーは無事に動く右腕を振るい、テレスターレの肩越しに魔導兵装へと鋭く、渾身の突きを繰り出した。

「やってくれたわね!! でもこれ以上はっ!!」

アールカンバーの左腕は深刻なダメージを受け、ろくに動かない状態だ。だがテレスターレの左腕は驚異的なことにこの衝撃を受けずにもなお稼動した。

さすがに全く無事とは行かないものの、それでも生き残った綱型



結晶筋肉がそのパワーを発揮し、激突の衝撃でひしゃげた互いの盾を持ち上げるようにしてアールカンバーを押し返す。

「なんという!? 出力だけでなく耐久性までもかつ! だがこの機会を……ッ!」

「気合入れなつ! テレスターレ!」

一瞬早く、アールカンバーの突きが左肩越しに魔導兵装を折り砕く。

しかし乾坤一擲の反撃もそれまでだった。

テレスターレの余りある出力がアールカンバーを押し返し、攻撃後で体勢を崩し気味だったアールカンバーはその勢いで完全によりめいてしまう。

「くつ、無理をしすぎたか!」

「もらったよ! エドガー!」

テレスターレが裂帛の気合と共にアールカンバーへと斬りかかる。完全に体勢を崩したアールカンバーにその攻撃を避ける術はなく、左腕の損傷により盾による防御もままならない。

万策尽きたアールカンバーへ、振り上げられた剣が襲い掛からんとし

その剣は振り下ろされることなく、その場でテレスターレが膝をつき、倒れていった。

その時に訓練場内に流れた空気を、正確に表現することは難しい。啞然、や呆然、と表現するのが一番近いだろうか。何故、止めを刺さんとした側であるテレスターレが膝をついているのか？

これが奇跡的なタイミングで放たれたアールカンバーの反撃によるものでないことは、同じく呆然としたその様子を見ればわかる。戦いが最高潮に達し、そして決着せんとした瞬間に訪れた、誰もが全く予想だにしない結末。

目前の状況にどう反応すればよいかわからず、異様な沈黙が訓練場を支配する。そして

「……ああ！ 魔力切れ！」

唐突に何かに気付いたような、素っ頓狂なエルの声だけが静まり返った訓練場に響き渡った。

393

「さて、これより第一回整備班大々反省会を開催したいと思います」

神妙な様子のエルが、厳かに開会を告げる。

工房内にはエル、親方と愉快的な仲間達が勢ぞろいし、そして誰もが気まずげな表情を浮かべていた。

いつもはマイペースを崩さないエルも、今は少し目が泳ぎがちであり 僅かな逡巡の後、気まずさの原因をちらりと見やった。

視線の先では、ヘルヴィが工房の隅で三角座りをしながら長大な溜息を吐いている。

彼女からは気まずい、と文字が見えそうなほど濃密な瘴気が吐き

出されていた。

全てが彼女のせいではないとは言え、大見得を切った末の魔力切れという呆気ない結末である。

まだしも戦って負けたほうが気も楽だっただろう、彼女が落ち込むのも無理なからぬことであつた。

試作機であるテレスターレに欠陥があること自体は十分に予想の範疇だったが、何もあのタイミングで発覚しなくとも……周囲の人間の心境を正直に語るならば、そんなところだろうか。

いや、決着を目前に双方が死力を振り絞ったが故に表面化してきた欠陥であるとも言えるのだが、そんな事実は何の慰めにもならない。

「え、エドガー先輩。ヘルヴィ先輩のフォローをお願いしたく……」  
「よりによつて俺か!? ……う、ぬうう、善処しよう……」

さすがに堪りかねたエルがエドガーを彼女のほうへと押しやる。ほとんど決死の表情で歩みだすエドガーを見送った後、エルは爽やかに振り返つた。

「さてこちらでは新たな問題への対処を考えましようか」  
「生きる、エドガー。」

……さてまあ起こつてみると簡単な事なんだけどよ。出力が上がつた分、燃費が悪くなつた。  
実に当然だな」

整備台に設置されたテレスターレの前に、全員が頭を抱えていた。網型結晶筋肉を使用し、出力が上がつたゆえの必要魔力<sup>コスト</sup>の増大。それによる魔力貯蓄量の消費速度の増大。

その上魔導兵装が使いやすくなつたことにより、そちらに取られ

る魔力も予想以上に増大していた。

それに比べて綱型を使用しても、結晶筋肉の純粹な物量はほとんど増えておらず、全体的な魔力貯蓄量は微増に留まってしまった。

結果としてテレスターレは稼働時間の大幅な短縮という欠陥を抱えてしまっていたのだ。

模擬戦の結果は発覚したタイミングが最悪であった以外は、冷静に考えてみれば順当なものであった。

「色々な要因を鑑みて、ざっと稼働時間は半分程度でしょうか。えっと……まずい、ですよね？」

「まず過ぎる。正直致命的じゃねえかとすら思うんだが……」

今回の改造は出力の強化や魔導兵装の発射タイミング追加など、とにかく外部へと放つものばかり増やしている。

現実的な問題として、改造点のバランスの悪さが浮き彫りになった状態だ。

「（今思えば幻晶騎士ははなっから容量ギリギリキャパの設計しとってんな。

この余力のなさはむしろ芸術的なもんすら感じる。

これで出すものばかり増やしたらそらガス欠にもなるよなあ）」

とは言え嘆いても何も始まらず、ヘルヴィの尊い犠牲を無駄にしないためにも発覚した欠陥には対策を考えねばいけなかった。

「何よりも消費に対し、魔力の供給が足りませんが……供給元である魔力エーテルリアクタ転換炉の改造は難しい、と言うより不可能です」

さすがのエルにも、動作原理不明の動力炉をどうにかする術はな

い。  
その台詞にこっそりと周囲の生徒達は安堵の息を吐いていた。これを軽く改造されたらさすがの彼らもすぐには立ち直れなさそうである。

「なら消費を抑えるか？　しかしなあ、抑えようにも仕組み自体が大喰らいじゃ意味がねえ。

動きを抑えたんじゃ本末転倒もいいところだ」

「後は魔力貯蓄量の増量ですか……。魔力貯蓄量は、どうやって増やしているのですか？」

「そりやおめえ、ずばり結晶筋肉の量を増やすしかねえな」

「それで容量を増やすのは駄目でしょうか」

「結晶筋肉を増やしたんじゃ、結局消費もでかくなっちゃまうじゃねえか」

「網型にも落とし穴がありましたね。  
筋肉の量自体はほとんど増えていないから、出力と容量の釣り合いが悪くなってしまっています」

発覚した問題点の深刻さに、全員が完全に頭を抱える。

さすがにすぐに解決案はないかと思われたが、光明は意外なところから投げ込まれた。

「そこでほら、お得意のアレじゃないの？」

全員が悩み、静まり返った場面で言葉を発したのは、それまで黙って話を聞いていたアディである。

開発の場面では珍しい人物の発言に、エルは思わず鸚鵡返しに聞き返してしまっていた。

「……お得意のアレ？」

「そう、人の形してなくていいってやつよ！」

「人の、形を……しなくとも、いい」

「えーとだから、筋肉は増やすけど、人の形はしなくていいんでしょ？」

彼女にしてみれば、その言葉はそのままエルの受け売りだ。

しかしそれを言われた当人は目を丸くして驚いた後、じよじよに目を細めていった。

「うう、その通りなんですけど。なんだかアディに教えられると……

…凄く悔しい」

「ひどいっ！？ どうしてよー！？」

暴れ始めたアディと逃げるエルを横目に、彼女の言葉をきっかけにして親方も同じ発想へと辿り着いていた。人の形を外れる、それは別に人とは違う形状をとることのみを意味しない。

「……そうだ、そうだったな。結晶筋肉を増やしても別にそれを動かすこたあねえのか。

つまりは結晶筋肉の量だけ増やしゃあいい。

銀線神経シルバナーヴで繋いで、どこか空いた空間に結晶筋肉を張りゃあいいのか！」

「ほっ、ですから悪かったですってっはっ……ごめんなさい、謝りますから……ね？」

……それなら親方、あとはひたすらに空間の密度を高めるべきでしょう。

だから繊維ではなく塊、できれば板状かな？ で用意したほうが良いかと」

エルの提案を聞いた親方ががばつと顔を上げる。

「ようしそれだ！　そうと決まりゃあ俺あちよつと錬金学科に行つてくる」

「お供します」

「おう、善は急げだ、走つて……つて坊主はつや！　おいまで、どこに行くか解つてんのか！？」

おい坊主！！」

親方がドスドスと足音を響かせながら既に豆粒と化したエルを追いかけていった。

余談だが、落ち着きはしたがむくれるアディを宥めるのにキッドが四苦八苦したとかしないとか。

騎操士学科より程近い場所に、錬金術師学科の校舎はある。

整備班として常に作業に勤しむ鍛冶師や訓練主体の騎操士とは違い、研究職を志すものも多い錬金術師学科の校舎は独特の静けさに満ちていた。

錬金術師学科に所属するラッセ・カイヴァントもどちらかと言うと研究職を目指す者の一人である。

彼はその日もいつものように研究室に籠り、触媒結晶を変質させる様々な薬液の研究を行っていた。

試薬を熱する静かな音だけが聞こえる部屋に、突如として外からの無粋極まりない雑音が響いてくる。重量のある物体が連続で叩き付けられるような音……もしくは体重のある人間が全力疾走しているような足音、である。

研究を妨げられた不快感に彼は僅かに眉を上げ、しかし関係ない

とばかりに手元へと視線を戻　　そうとしたところで突如部屋の扉が乱暴に開け放たれた。

「おうラッセ！　いるか！　生きてるか！？　ちよっと頼みがある」

部屋の広さを全く気にしない大音量の誰何にラッセの鼓膜が痺れる。

扉を開け放つ音源　　ダーガイド　親方に向けて、今や不機嫌そのものの表情となったラッセが応えていた。

「ダーガイド……いつも言っているだろう、そんなに大声を上げずとも聞こえる、ちよっと静かにしてくれたまえむしろとつと居なくなれ」

「すまねえ、つい癖だな。まあそんなことよりちよっとお前に頼みたいことがあってよ」

「全く何の用だ、結晶筋肉の追加分ならこないだ馬鹿筋肉のお前が潰れるほど渡しただろう」

「今日はちつとばかり違う用だ。どちらかってーとお前に新しく作ってもらいてえもんがある」

どうやらラッセのもの言いにも慣れたものらしく、親方は顔色一つ変えずに用件を切り出した。

その台詞に不機嫌一色だったラッセの表情が変わる。研究者としての性格の濃いラッセにとって“新しい”と言う言葉はその機嫌を直して余りある魅力を持った言葉だった。

「ほう、新しい、ね……。特別に聞いてやるうじやないか。

どうでも良い内容だったら薬でお前の髭を固めてやる」

「なっ！　てめえ、ドワーフ族の髭は神聖なんだぞ！？　ケツまあ



いい、聞いて損はさせねえよ……」

一通り親方の説明を聞いたラッセの表情は、傍目には曰く言いがたいものになっていた。

興味と悦びと思考と疑問を混ぜて炒めればこんな感じになるだろうか。

「というわけで結晶筋肉を塊で用意してもらいたい。できれば板状にしてもらえりゃありがてえな」

「ふむ、確かに面白い。」

お前の鉄製の脳味噌で良くそんなことを思いついたものだと言いたいところだが……」

ラッセの視線がついと逸れ、それまでは親方の横で静かにしていた人物<sup>エル</sup>へと移って行く。

「……お前か？ 元凶は」

「少し助力はしましたが、これは親方の案が基礎になっていますよ」

「ほおう……ダーヴィドの鉄塊も、ずいぶん進化したじゃないか」

「てめえはいつか全力で殴る。で、どうなんだ？ 用意できそうか？」

「待て。これまでの生産設備が使えん以上すぐさま作れるものじゃない。」

研究室でいくらか作ってみるからまずは時間を超越せ」

言いつつ、すでにラッセは作業に取り掛からんとしている。すでに彼から余計な興味は消え、目の前の作業へと沈みつつあった。

こうなると長いことをわかっている親方はエルを促し戻ろうとするが、エルにはまだ確認すべきことが残っている。

「最後にもう一つお聞きしますが。  
魔力貯蓄量に特化した性質を持つ結晶筋肉……か、それに類する  
ものはないのでしょうか？」

どっぴりと作業に沈むラッセにも、興味ある言葉は届くらしい。

「……無いな。これまで結晶筋肉は収縮による出力の増大を主眼に  
研究されてきた。」

魔力貯蓄量はあくまでも副次的な要素だ」

「では、つくれませんか？」

「何とも言えんな……これまでロクに研究されていないと言う事は  
逆に研究の余地が多いともいえる。」

が、面白い。実に面白い……」

ぶつぶつと咳きながらも作業を進めるラッセは、それっきり研究  
の海から還って来る事はなかった。

「しかし他にも落とし穴ねえだろうな、新型？」

「保証はしかねますね。もう少し新型を増やしてじっくり動かした  
ほうが良いかもですね」

「腕が鳴るってえか、肩が凝るな、まったく」

### #32 小さな前進と大きな到達

軋むような駆動音と、甲高い吸気機構の音を響かせながら鋼鉄の巨人がその身を起こす。

巨人の全高は10mに及び、周囲にいる人間の5倍以上の巨軀を誇っている。

金属地そのままの色をした無骨な鎧が陽光を反射して鈍く煌めく。動くたびに鎧同士がぶつかる硬い音が鳴り、騒々しさが更に増してゆく。

立ち上がった巨人は軽く身を動かして調子を確認すると、足元の人間に対して頷きを返した。

周囲から人が離れたのを確認すると、巨人は一拍の間気合を入れてから与えられた試験項目に従い動作を開始する。

巨人の両腕に張り巡らされた結晶質の筋肉が魔力<sup>マナ</sup>と反応し、収縮を開始する。

そのまま全身を緊張させると、両腕を力強く上げ、肘を突き出すように曲げる。腕、その付け根、胸を張り背に力をいれ、両脚は力強く大地を踏みしめるポーズ。ダブルバイセップス・フロント。

そこから軽く足を前に出し、腕を下げ腹の前で拳を合わせる。やや前かがみ気味の姿勢で全力を込めて腕の筋肉、そして胸の筋肉を振り絞る、最も力強さを表すポーズ。モスト・マスキュラー。

鋼鉄の巨人は力強くも流れるように、見事にポーズを決めていた。

「……………あれは一体全体、何をトチ狂って……………いや、何の試験なんだ？」

「ん？ 説明によると、普段使いづらい部位の結晶筋肉を動かす試験らしいよ」  
クリスタルティシュー

「誰だよそんな項目作ったのは」

某銀髪の少年が設定した試験に従いひたすらにポーズを決めまくる幻晶騎士シルエットナイトを見ながら、呆れたようにぼやいているのはエドガーであり、それに答えているのはヘルヴィだ。

「ああいや、真面目な試験項目ならいいんだが……いいの？ いいか……」

「そう？ それより、2号機の試験は順調なの？」

「ああ、さつき交替してきたが順調に消化している」

エドガーの視線の先では2号機と呼ばれた、先ほどの機体と同型の機体が、また別な試験を行っている。

彼は2号機担当の騎操士ナイトランナーの一人であり、つい先ほど交代したところだった。

ここ数日は天候のいい日が続いているため気温も上がる一方であり、長時間稼働した幻晶騎士の操縦席は蒸し風呂状態になってしま

う。  
一応吸気機構と連動した空調設備はあるのだが、周囲の気温も高くてはまるで焼け石に水だった。

そのためある程度で休憩を挟まないと、動かす人間がもたない。二人とも汗を拭いながら、水分を摂って休息しているところである。

訓練場にはその2機だけではなく、見渡せば様々な動作をしている機体があった。

そのどれもが設定された動作を行い機体の確認をしているのである。つまりは動作試験の最中である。

この状況は、過日のテレスターレとアールカンバーの模擬戦に端を発する。

試作機テレスターレの稼働時間の激減と言う欠陥により幕を閉じた、かの模擬戦。

欠陥があること自体は問題ではない　見つければ、修正すればいい　が、あまりに劇的に発覚したことにより、他にも致命的欠陥の存在を危惧され始めたのである。

その結果、微に入り細を穿つ恐ろしく膨大な数に及ぶ動作試験が予定された。

動作試験の追加には誰もが賛成したが、さすがにその莫大な項目をテレスタレー機でこなせるはずもなく、急遽同一仕様機を増産して対応することになった。

おかげで整備班は模擬戦後も全力稼働を続けており、そろそろ一部生徒に過労死の危険が心配されている。

新型機は都合5機生産され、機体の完成後は騎操士達による地道な試験の消化が続けられており、今もその真つ最中と言っわけである。

今のところ新たな大きな欠陥は見つかっていないが、地道に改良を続けられた新型機は着実にその完成度を高めていた。

訓練場を吹き抜ける、熱気をはらんだ風にうんざりしながらエドガーとヘルヴィは雑談に興じていた。

最近の二人の会話はどうしても新型機についての内容に偏りがちだ。

彼らは休息をとりつつ、操縦感覚の調整についてとりとめもない議論を交わしていたが、途中エドガーがふとしたことに気付いた。

「そういえば、最近エルネステイを見ないな」

「あ、そういえば。あの子なら張り付いて試験の様子を見てそうなのに、どうしたのかしら？」

「……またるくでもない事をしでかし始めたんじゃないだろうな」

「そんなことないですよ？ 僕もこれで中々に忙しいのです」  
「ほう。そう言う割には最近はうちに入り浸りじゃないか」

エルネステイの台詞にバトソンが呆れたように応じる。

彼らがいるのはテンドー二家所有の個人工房だ。幻晶騎士用ではないそれは、騎操士学科の工房に比べると遥かに狭く、雑然として  
いる。

「それはそれ、これはこれです。どんなに忙しくとも、友人と遊ぶ  
時間があつてもいいでしょう？」

「前から疑問に思ってたんだが、遊ぶと言うより作業してるよな？  
俺ら」

「それもそれ、これもこれです」

彼らの目の前には1体の幻晶甲冑シルエットギアが鎮座している。

今は両膝について装甲の前面部分を四方に展開した状態で静止し  
ている。周囲には何かしらの作業に使ったと思しき工具や材料が散  
乱していた。

その幻晶甲冑は最初に親方達が作った時よりも、幾分姿が変わっ  
ている。

何よりも目立つ差異は、鈍い金属色そのままであつたはずが今は  
全身が蒼く塗装されていることだ。

そして乗り込む部分が身長が小さい人間に合わせて調整されてい  
る。有り体に言つてエル用に調整された機体である。

「いやしかし、遊び半分とは言え随分いじつちまつたな」

会話しつつも作業を続けるバトソンの手際は明らかに手馴れた職

人のそれだ。これだけでもこの二人がどれだけ幻晶甲冑を弄り回してきたか、わかると言うものである。

「もう既に、先輩達よりもバトさんのほうが詳しくそうですね」  
「それもぞつとしないな」

ずっと作業を続けるバトソンに対して、それを眺めるエルは投げ出した手足をぶらぶらと振り見事に退屈を表現していた。

場合によってはエルも作業に参加するが、今はバトソンが仕上げに入っているためエルにはやる事が無い。

「……そんなに暇なら、そっちに新作があるから、見とけ」  
「新しいのを作ったんですね。是非拝見させていただきます！」

視界の端にちらつくエルの動きにややうんざりしてきたのか、バトソンは追い払うように工房の一角を指差す。

彼が指した先にあるのは“1/60スケール幻晶騎士の銅像”である。

フレメヴィーラ王国の制式採用幻晶騎士であるカルダトアの形状を緻密に模したそれが、量産されて工房の端に並べられていた。ずらりと並んだその光景は、まるで本当に騎士団がそこに在るかのようにだ。

「うーん、やはり素晴らしいですね！ 良い、凄く良いです！」

エルは全高16cm程度の銅像の周囲をぐるぐると回り眺め回している。

撫でたり、這い蹲って見上げたり、手に持って回して眺めたりと中々忙しい様子だ。

「さすがはドワーフ、匠の技。あの大きさでこの精度は素晴らしいの一言に尽きます」

「それはなあ……親父が異様に乗り気になってな。ツテを辿って、実際にカルダトアを模写しながら作ったらしい」

バトソンはテンションの高めなエルに嘆息を挟みながらも、やや機嫌を上向きに応える。やはり彼の父親の仕事に対する賛辞は嬉しいようだった。

その銅像は大きさ以外は本物と寸分違わぬレベルの出来だ。どこの世界にも凝り性と言うものはいるらしい。

「まあ、お陰様で銅像はなかなかの売れ行きだ」

「そのお礼として、こうしてタダで改造してもらってるのですから、いい事です」

エルがついに模型を拝み始めた頃に、バトソンの作業が終了する。彼は手ぬぐいで額の汗を拭くと、一つ満足感に満ちた頷きを残してエルを呼んだ。

「とりあえず幻晶甲冑への取り付け、終わったぞ」

「幻晶甲冑。そのままですといま一つ風情がありませんね。そろそろちゃんとした銘をつけますか。」

……そう、“ジュゲムジュゲムゴゴウノスリキレカイジャリスイギヨノスイギヨウマツ”とか

「長いわ！ もっとわかりやすいのにしろ」

「では略して“モートルビート”と」

「おい、略する前と一文字もあってないぞ！！」

じゃれる様に雑談を続けながらもエルは機体の周囲を回り、取り付けの様子を軽く確認してゆく。



一通り見て回ると手慣れた様子で幻晶甲冑に乗り込んだ。金属が噛み合う音と空気が抜ける音が続き、開いていた装甲が閉じられ固定される。

エルはゆっくりと目を閉じる。

彼はこの世界の生物に独特の器官、マギウス・サーキット魔術演算領域にて、望む現象を発現すべくスクリプト魔法術式の構築を始める。

構築するのは身体強化に似た高度な強化魔法、発現対象は彼の身を纏う蒼い鎧だ。

彼は己の体が広がったようなイメージを思い起こし、そしてそれに魔法を適用する。

流れる魔力と魔法術式に従い、各部に仕込まれたストランド・クリスタルティシユール綱型結晶筋肉が収縮を始める。

膝立ちの格好で停止していた蒼い幻晶甲冑が一瞬ぶるりと震え、一拍の間をおいて立ち上がった。

動くための魔力、そして動かすための制御。

そのどちらも操縦者であるエル本人により賄われるそれは、つまりは魔法能力を直接物理的な力へと変換する機械だ。

彼は幻晶甲冑の巨大な拳を開閉させて軽く動きの調子を確認していた。

その動きは滑らかで、まるで中に生身の腕が入っているかのようだが、幻晶甲冑の腕は背骨であるメインフレームへと接続されており、そもそも内部に生身の腕は収納されていない。

金属と結晶の塊でしかない幻晶甲冑が滑らかに動き出す。すでに見慣れているはずの光景だが、それでもバトソンは感心した様子を笑っていた。

「何度見ても面白いな……で、モートルビートでいいのか？ そう

か。

幻晶甲冑、便利そうに思うんだがもつと作らないのか？ できれば俺も使えるようなやつを」

モートルビートは幻晶甲冑の例に漏れず、全高は2.5m近い。ドワーフ族であるバトソンはその半分を越す程度の身長であり、最初は上を向いて話そうとしていたものの、すぐに諦めていた。工房から移動しながらエルは説明を始める。

「ご存知の通り、製造自体はそう難しくはないのですけどね。動作系統をちゃんと仕上げないと僕達以外の人には使えない物なので、増やす意味がないですよね」

幻晶甲冑は最終的に5機製造されたが、この人力制御の“初期型”はそのあまりの扱いにくさから現在はお蔵入り状態になっている。改良しようにも、親方を始め整備班の鍛冶師達は新型機の製造、改良に総力を注いでおり、とても幻晶甲冑にまで手が回らない状態だった。

そのため彼らが手一杯になっている間、エルはこうしてバトソンと共に幻晶甲冑をいじり倒しているのだった。

「マキウスエンジン魔導演算機を小さくする、なあ。まったくさっぱりだな」

二人とも最大の問題点である、操縦の難易度をさげるための魔導演算機に関する知識を持たない。

彼らが行った改造は主に幻晶甲冑の筐体の調整、改造に終始しており、やはり量産化の目処はついていなかった。

「まあそれはおいおい。まずは新装備の完成披露と参りましょう」

エルはモートルビートに乗ったまま工房から出ると、射撃用的として用意された丸太ではなく、工房の外壁のところへと来ていた。周囲の住宅よりも一段と高くそびえる外壁を前に、彼はモートルビートの腕を天に向けて差し伸ばす。

「ワイヤーアンカー、射出！」

掛け声と共に、伸ばした腕の手首の装甲内から軽い噴射音を伴って鍍状の物体が飛び出した。

鍍の後端にはワイヤーがつけられており、勢いよく飛翔する先端部に引つ張られてしゅるしゅると腕から引き出されている。

重力に逆らっているにも関わらず、鍍は勢いを弱めずにそのまま工房の屋根の上まで飛翔すると、突如鋭く方向を変えた。

そのまま屋根に突き刺さったところで鍍の内部に仕込まれた機構が作動し、鍍はまるで錨いかりのような形状へと展開する。

鍍が突き刺さったことを確認したエルはワイヤーを引つ張り、先端が十分に固定されていることを手ごたえから確認する。

「よつと」

続いてモートルビートの腕の内部で何かが回転し、噛み合う歯車の音が響き始める。

ワイヤーの基部には巻き上げ機構が仕掛けられており、発動したそれが長く伸びたワイヤーを腕の中へと収納してゆく。

先端部を固定した状態でワイヤーを収納すればどうなるか。当然、モートルビートはワイヤーに引つ張られることになる。

そのまま工房の壁へと走り寄ったモートルビートは直前で飛び上

がり、ワイヤーに引かれるままに上昇し始める。

何度か壁を蹴って飛び上がる間に見る見るうちに屋根へと上り詰め、そのまま最後を一気に踏み切ると空中で身を捻って回転。

着地の瞬間に大気衝撃吸収エアサスペンションの魔法を発動、足元に圧縮空気の塊を作り出し、それをクッションとして屋根へと軟着陸する。

足元を確認しながらモータービートがゆっくりと身を起こす。

彼は会心の笑顔を浮かべると周りを見渡す。周囲の建物より頭一つ高い工房の屋根の上からの景色は中々のものだった。

エルは刺さったままの鏃へ向けて、魔法術式と魔力を送る。

鏃へとつながるワイヤーの中には銀線神経シルバーナウが寄り合わせられており、それによって鏃の内部に仕込まれた結晶筋肉へと術式が伝達される仕組みになっている。

展開していた錨を収納し、元の鏃の形となったところで屋根から引き抜かれて、腕の中へ収納されていった。

この鏃を飛ばす推進力も内蔵された結晶筋肉を触媒として、断続的に圧縮大気推進エアロクレストの魔法を使用する事で得ている。噴射方向を制御することで、ある程度は飛翔方向を変えることも可能だ。

この機構　ワイヤーアンカーは以前模型と共にバトソンへ製作を依頼していたものである。

元々は某怪盗の真似がしたくて考えたお遊び装備であり、当然個人での使用を想定していたのだが、後に幻晶甲冑の製作に伴いそちらに装備すべく仕様を変更したものだっただ。

工房の庭では全高2.5mもの巨大な鎧の騎士が高速で屋根の上へ移動する、その一部始終を見届けたバトソンが唸っていた。

鎧を着て建物の屋根に上るなど、例えば身体強化を使用出来たとしてもかなりの無茶だ。それをこなす巨大な鎧の存在に、彼は苦笑いが止まらなかった。

「（もしこれが量産できたならえらいことになりそうだな。エルネステイはその辺考えてるのかね）」

呆れ半分、心配半分に見上げれば、当の本人は屋根の上でがしやがしやと腕を降っている。

それに応えながら、バトソンは先ほどの心配を少し脇においておくのだった。

ライヒアラ騎操士学園の周囲には学生向に日用品を売る店や、軽食を提供する店などが存在する。

経済的に余裕があるとは言いがたい学生達であるが、それでも人数が多いため、学園の付近には彼らの生活にあわせた店が多くなる。そして学園が放課後を迎える頃になると、周りの通りにはいくらかの出店がたつ。大抵は菓子や軽食を提供する店だ。

この時間帯はあちこちで、勉強から開放された学生達が蜜に吸い寄せられる蝶のように出店に寄り、軽食をつまむ光景が見られる。

そんな出店の一つに、パンケーキにジャムを挟んだ菓子を売る店がある。

店主はその日もいつものようにパンケーキを焼いており、そこに女子生徒と思しき注文の声が入った。

「おっちゃん、パンケーキ二つ、ジャムはマンダリーナのお願いな  
！」

「あいよー。ちょいと待ちな、もうすぐ焼きあが……………」

愛想よく振り向きながら答えた店主の声が、尻切れトンボに小さ

くなくなってゆく。

何故なら、店の前にいたのは学生と言つかむしる巨大な全身鎧の騎士だったからだ。

当然幻晶騎士ほどは大きくないが、それでも天幕を越える大きさのその騎士は、屈むようにして店先を覗き込んでいる。

呆気にとられる店主と目線を交わしながら騎士が首を捻る。しばらく何とも言えない空気が流れていたが、その後ろから同じような体躯の騎士がもう一人現れ、先にいた騎士を窺<sup>たしな</sup>めた。

「おいおいアデイ、乗り込んだまま声かける奴があるかよ」

「ん？ あ、そっか！ ごめんなさい、びっくりさせっちゃったのね」

重装の騎士から年若いと思しき女子生徒の声が聞こえてくるといふ怪奇現象に、未だ店主は動揺から帰って来れていなかったが、突如鎧が開き中から本当に女子生徒が出てくるのを見て完全にぶつとんだ。

「な、な、なんじゃそりゃあー！」

「あ、おっちゃん、ケーキ焦げてるわよ！」

「え？ あ？ なああー！？」

我に返った店主は慌ててパンケーキを引き上げてゆくが、何枚かは既に残念なことになってしまっている。

「あー、ごめんなさい、驚かしちゃったからねー。私達のは、その焦げたのでいいから」

「え？ いやまあ、驚いたつつつても焦がしたのは俺のミスだ。客がそんなの気にするない」

無事なパンケーキに注文にあったジャムを挟み、渡しながら銅貨を受け取る。

女子生徒はお礼を言うと再び鎧に乗り込み、もう一人の騎士とパンケーキを食べながら歩き去っていった。

「……最近の学園じゃあ、えらい鎧使ってたなあー……」

後には銅貨をしまいもせず握り締めた店主が、驚愕覚めやらぬ様子でその後姿を見送っていた。

「うーん、おいしー。やっぱりマンダリーナのジャムがいいわよねー」  
「俺はプミラのジャムのほうが好きだけどな」

パンケーキを食べ終えたところでアーキッド、アデルトルートの二人は本格的に幻晶甲冑を走らせていた。

大通りを馬車並みの速度で爆走する巨大な鎧に周囲の住民達は一瞬驚くが、すぐに気にしなくなった。

この二人が幻晶甲冑で走るのも最近よく見る光景であり、彼らもすでに慣れっこになりつつある。

実は単純に街中の目的地に移動するだけならば、わざわざ幻晶甲冑を持ち出す必要はない。

彼らの能力を以ってすれば、馬よりも高速で移動するくらいわけではないし、大げさな装置を使うよりもむしろ気楽であろう。

ご存知の通り幻晶甲冑を動かすと言うことは、高難易度の魔法術式を使用し続け、相当量の魔力を消耗すると言うことである。

魔法に関する能力は基本的に使って伸ばすしかない。そしてより効率的な上昇を望むのであれば、相応の高い負荷をかけることが望

ましい。

つまり幻晶甲冑を使うのは訓練的な意味合いが大きい。

彼らはかつて身体強化の魔法を使いながらジヨギングをした時のように、日々の生活の中で徐々にその能力に磨きをかけていた。

その調子で大通りをひた走ると、彼らの進む先に他の建物よりもやや大きい建物　テンドー二家所有の工房が見えてくる。

同時に何故かその屋根の上には蒼い鎧が立って居るのが見えるが、鎧の主のことを考えればまた何か面白いことを始めたのだろうと予想はつく。

キッドはにやりとした笑みを浮かべると、直接工房の裏手の庭へと向かった。

「おーっすバトソン、今日は何やってんだ？」

「エルくん、どうやってそこまで上ったのー？」

二人は既に勝手知ったるとばかりに遠慮なくがしゃがしゃと庭へと入ってゆく。

場所の主たるバトソンも特に気にした様子もなく、むしろ二人のタイミングの良い登場に指を打ち鳴らした。

「おう、ちょうどいいところに来たな。重い荷物がある、運ぶの手伝え」

「うわいきなり？　人使い荒いわねー」

バトソンの指示に従い、二人は荷物を取るべく工房へと向かう。

その間にエルは屋根から飛び降りていた。さすがにこの高さからそのまま飛び降りてはモートルビートが無事では済まない。

途中に圧縮大気推進を逆噴射させることで勢いを減衰させ、さら



に大気衝撃吸収の魔法を使用したの着地だ。

盛大な土ぼこりを巻き上げながらモートルビートが着地したあたりで、キッドとアデイが工房から荷物を引っ張りながら出てきた。

二人はそれぞれに違うものを持っており、キッドが持つのは細長い四角柱の形をした道具だった。

本体の大部分は木製で、ところどころに金属を使って補強が施されている。先端部には弓のように左右に突き出た部分があり、その根元には歯車を有するいくつかの機構が設置されていた。

キッドは自分が持ってきたそれを眺める。形状から見るに、その正体は一目瞭然だ。

「クロスボウ弩か……？ つつーか、でかいな。攻城兵器じゃねえのか、これ？」

「ええ、概ね間違いではありません。」

攻城用大型弩砲を多少小型化したと表すべきものですからね」パリスタ

エルが説明した通り、その弩は幻晶甲冑に持たせても尚わかるほど巨大だ。

当然重量的にもかなりのもので、幻晶甲冑がなければ据え置き式で使うことになるだろう。

「あー、なるほど。幻晶甲冑を台座の代わりにする気なのか」

「それもありますが……アデイ？ マガジン弾倉は持ってきていますね？  
ではそれを取り付けてください」

アデイが持ってきた荷台には箱型の弾倉が何個も用意されていた。横幅は人が両腕で抱える程度であり、そこそこ大きい。幻晶甲冑の手で持つてもはみ出している。

「簡単に説明しますと、これは弓の弦の部分と、その巻上げ機構に網型結晶筋肉を使用した携行用大型弩砲です。」

結晶筋肉の収縮を操作するだけで自動的に矢を撃つところまで動作するようにしてあります」

「なるほどねえ。それで、この弾倉ってのは？」

「中には矢が並べてあって、弓の巻上げに連動して一発ずつ矢を装填する仕組みになっています。」

これ以上は、口で説明するより実際に動かしたほうが早いでしょうね」

エルの説明に従い、キッドは弩砲の中ほどよりやや前にある部分へ弾倉をはめ込む。

それに連動して固定レバーが跳ね上がり、内部の機構が噛み合う音がした。

弾倉が設置されたことを確認して、キッドは弩砲へと魔法術式と魔力を送り始める。網型結晶筋肉が限界まで伸縮し、弓のしなる音と筋肉を引き絞る、独特の音が聞こえてきた。

同時にクランク機構により連動して動く歯車の駆動音が聞こえて来る。本体を覆う機構の外装に邪魔されて外からは見えづらいが、弾倉から取り出された矢が本体に刻まれたレールへと設置される。

発射方法は少し独特だ。

結晶筋肉それ自体を弦としているため、通常のクロスボウにあるトリガーに該当する機構が存在しない。

代わりに弦と、巻き上げ機構にある結晶筋肉の伸縮を操作することで矢を発射するのだ。

キッドは力を蓄え限界まで撓んだ結晶筋肉に、その開放を命じた。豪快な飛翔音と曳きながら高速で矢が飛び出す。比較的近い距離で撃った事もあり、それは狙い違わず標的である丸太へと突き刺さ

った。

一般にクロスボウで使用される矢は弓のそれに比べ短く、太い形状をした物が多い。それが小なりとは言えバリスタともなれば、矢というよりもはや矢羽を付けた短い槍に近い代物になる。

綱型結晶筋肉の力を限界まで引き絞り、更に弓のしなり、筋肉自体の収縮までを加えて撃ち放たれた矢は本物の攻城兵器バリスタには及ばないものの、それでも十分な威力を發揮した。

つまり結果として、矢は標的である丸太を半ば破碎しながら貫通した。

「……………」

「もう少し頑丈な標的を用意すべきでしたか」

「……いや、つうか、これ街中でぶっ放していいもんじゃねえだろ」

「試射用に後ろに分厚い土壁用意してるから、大丈夫だ。それこそオールド・スベル戦術級魔法でも撃ち込まない限り」

矢を撃ったポーズのまま固まるキッドを他所にエルとバトソンがのんびりと話し合っていた。

弾倉を抱えたアディは興味深々な様子で丸太を貫く矢を眺め回していた。

「ああ、それと先ほど言った通り結晶筋肉を使って素早く巻き上げができますので、ある程度は連射が効きますよ」

「ぶっ！ 本気かよー！」

「多少慣れにもよりますが、最高で5秒に一発と言ったところですか。」

弾倉には一つにつき10発矢が入っていますので、大体1分で撃ちきる計算ですね」

キッドは恐る恐ると言った雰囲気で弩を構えなおすと、息を吐い

て気を静めてから連射を行った。

駆動音と矢が風を切る音がリズムカルに続き、次々に標的に矢が突き立つ。

それは5発を数えたところでついに丸太が折れ砕け、残りの矢は直接土壁に突き立っていた。

「連射できる手持ち攻城兵器かぁ、凶悪だねー」

「ですがあくまで持ち運べると言うだけで重量もあるし、取り回しは悪いですしね。」

かなり無理矢理な代物なので精度も低い。連射はむしろ数で精度を補っている部分もあります」

今後の課題ですね、と丸太を見ながらエルが呟く。彼らも当分は暇をせずにすむようだ。

ラッセ・カイヴァントが騎操士学科の工房を訪れたのは、新型機の動作試験が一通り完了を迎えようとしていたころだった。

彼は工房の門をくぐるなり親方ダイウイドへと詰め寄り、完成した板状結晶筋肉の出来栄えについて暴風のような勢いで語り始めたところで拳で鎮圧されていた。

のびたラッセを放置して工房には板状の結晶筋肉が運び込まれてゆく。

膨大な動作試験による確認の結果、幸いにも新型機には稼働時間以外の大きな欠陥は見つからなかった。

板状結晶筋肉は、新型機の欠陥を埋める最後のピースということになる。ついに目前まで迫った完成へと至るべく、鍛冶師達は幻晶

騎士の魔力貯蓄量の増加改造を開始したのだった。

当初彼らが想定していた方法は板状結晶筋肉を装甲の裏側の空いた空間に設置する、と言うものだった。

しかし実際に検討を始めたところで、思ったよりも余裕が少ないことが判明する。当然のことながら、装甲内部の余裕とは駆動用の結晶筋肉の干渉を避けるために在り、簡単に埋めてよいものではなかった。

そこで彼らは一旦全ての外装を外し、板状結晶筋肉による層をつくった上で更にその全体を外装で覆う、複層式の外装を構築する方法を取った。

駆動用の筋肉に干渉しないように板状結晶筋肉を配置するためだ。全体的にポリウムアップした筐体は十分な魔力貯蓄量の増大を示し、稼働時間の延長という観点ではかなりの成果があった。

しかし現実は甘くなかった。

結晶筋肉の層が追加され、全体的に一回り大きくなったテレスタ―レを前に彼らは唸る。

「着膨れて、格好悪い……ッ!!」

彼らの美的感覚は少し横においても、全体を複層式とする方法は問題点も多かった。

まず全体的な重量の増加が激しすぎるため、網型結晶筋肉による出力の増大を踏まえても機動性に相当な悪影響が出ていた。

更に厚みの増した装甲は動きを阻害し、肝心の格闘戦能力の低下も無視できない範囲になる。

結晶筋肉の層を一応装甲として考えて防御力が上昇したことを鑑みても、デメリットが多すぎると判断されこの方法は却下される。

ここでの問題点は主に激しい重量の増加である。

彼らは次に、複層式とする部分を限定すればそれを抑えられると考えた。格闘戦能力への影響も考慮して、関節部に干渉しない装甲を限定的に複層式にする方法が取られた。

この方法により重量の増加は問題ない範囲に抑えられたものの、肝心の魔力貯蓄量の増加という点に対しては十分とは言えなかった。ただしこの複層式の装甲を使用する方法自体は継続して採用されることになり、後日“蓄魔力式装甲”キャパシティプレートムと名付けられる事になる。

「内側に結晶筋肉を増やすのはこれが限界だな……」

「これ以上は重くなる上に、鎧が干渉しちまいやすからねえ」

残る方法は、板状結晶筋肉を外付けにする方法である。

どこまでもつきまとう重量的な問題を少しでも回避するため、外付け部分については装甲すらつけられず、鋼線でまとめられた上に布製の覆いがつけられるという構成になった。もはやかうじて剥き出しではないというレベルだ。

設置場所は実際に人間が荷物として持てる場所を参考として背中、もしくは腰周りが選ばれた。

そのうち最も荷物を設置するのに適した場所は背中であろう。彼らもそう考え、十分な量の板状結晶筋肉をテレスターレに背負わせた。

しかしこの方法も別種の問題を生じる結果となる。

バックウエポン背面武装を撤去してまで板状結晶筋肉を設置したが、背中に大重量が集中した結果、どうしても重心が背中側に偏ってしまうため格闘性能に無視できない悪影響が発生したのだ。

背面武装の装備により遠距離攻撃能力も増したとは言え、幻晶騎士の本分は格闘戦である。騎操士達に扱いつらさを訴えられては仕

方が無い。

もしこの上背面武装を併用するとなれば、今以上に重心が偏ることとは必至である。彼らは渋々別の方法を模索していった。

「どうにも上手くねえな」

「情けない、情けないなダーヴィド。私がわざわざ板状結晶筋肉を用意してやったと言うのに、このザマか」

親方は、殴られないようにわざわざ離れたところから睨し立てるラッセを一睨みしたが、すぐにそれが何の解決にもならないと気付いて溜め息に切り替えた。

最終的に背中に設置するのは背面武装と干渉せず、重量的にも負担にならないサイズまで抑えられた。

その分腰周りにもポーチのように小さくまとめられた結晶筋肉が配置された。腰に剣を挿す場合には適宜配置は調整される。

蓄魔力式装甲と小分けにされた板状結晶筋肉を外付けする方法を併用し、ある程度は魔力貯蓄量が増加し欠点の改善が見られたが、未だに稼働時間に若干の問題が残る状態である。

結局、鍛冶師達はついに現時点での完全な解決を諦めることになる。

根本的なところで、現行の結晶筋肉では十分な魔力貯蓄量を確保するために必要な量が莫大なものになってしまい、それを保持しきれないのだ。

この解決方法は錬金術師達が魔力貯蓄量に特化した新たな結晶筋肉を完成させるのを待つしかない、という意見で一致を見ることにならなかった。

工房の前では、改装を終えたテレスタール・シリーズが駐機姿勢をとり、ずらりと並んでいる。

試験用に製造したものも含め、その数5機。その全てが蓄魔力式装甲の採用により初期よりもがっしりとした姿をしている。

背中と腰周りにまるで荷物にしか見えない追加の結晶筋肉をつけ、たその姿は、機械的な方向での改装が行われたというのに、むしろより一層人間くささが増したような印象を漂わせていた。

どうにも急造感が拭えないその姿だが、鍛冶師達はそこで思考を切り替えた。

テレスタール・シリーズは問題点はあれど、それでも大きすぎる欠点をカバーする程度には改善されており、現時点で望める最大の完成度には達している。

ここにある5機は、漸く到達した新型機の完成形とも言うべきものだ。

現時点で既に従来の幻晶騎士を上回る能力を秘めたそれは、まさに幻晶騎士の新たな世代の雛形である。

通過点ではあるが、一つの到達点に着いたという実感が徐々に湧いてきた親方の顔に、じわりと笑みが浮かんでゆく。

それは周囲の整備班、騎操士の生徒達も同様だ。テレスタール・シリーズを見る彼らの様子は様々だった。

達成感に浸る者、ようやく作業から開放されることに安堵する者、早くも改良案を思考し始める者。

ただ誰もが等しく、その表情は一つの難関を乗り越えた、自負と誇りに輝いていた。

親方は似たような表情を浮かべる生徒達を振り返り、にやり、と更に笑みを深くする。



「ようし野郎ども、良く頑張った！　むしろ鍛冶師は頑張りすぎたつてもんよ！！」

まだまだ問題は残っちゃいるが、まずはこいつの完成を祝してやるうじやあねえか！！」

さあて、こんだけでかい仕事が終わったんだ、後はやるこたあ決まってるだろ、なあ！？」

その場にいる全員が腕を振り上げ、氣勢を上げて親方の言葉に応じる。

号令一下、その日は騎操士学科の総力を上げて、工房を舞台に夜を徹しての宴会が開催されることになる。

とつぷりと日が暮れ、色濃い闇に包まれる頃には宴会は魔境を迎えていた、とだけ述べておく。

ちなみにフレメヴィーラ王国では飲酒が可能なのは成人（15歳）してからである。当然エル達は参加しておらず、この宴会は騎操士学科一同によるものだ。

物理的な意味で何人か空を飛ぶ、お祭り騒ぎの只中より離れる人影があつた。

喧騒に紛れて目立たぬように移動を始めた彼は、そのまま宴会場という名の魔界と化した工房を出て寮にある自室へと戻る。

日が沈み、静まり返った寮の一室にランプの明かりが灯る。

自室に戻った彼は飲酒により多少浮つき気味の頭を振り、水を飲んで酔いを薄める。

彼と同室の生徒は、今も工房で飲んだくれていることだろう。彼は安心して机の中から紙の束を取り出した。

そこには幻晶騎士に関する技術　それも網型結晶筋肉の使用以降の、新型機に関する事柄がまとめられている。

彼はそこに蓄魔力式装甲、そして完成したテレスターに関する内容を追加する。

それは詳細と言えるほどの内容ではなかったが、それでも新型機に関するあらましを知ることが出来る程度には情報が記載されている。

彼は酔いが遠ざかるのを感じながら、書き込んだ内容に満足すると再び机の中へと紙の束を仕舞った。

#32 小さな前進と大きな到達（後書き）

11/06/13 本文改訂

### #33 迫り来る嵐の予感

ふと日差しを遮る影が手元にかかったことに気付いて、エルネステイ・エチエバルリアは窓から空を見上げた。

そこでは、ここしばらくは気持ち良いを通り越して恨めしいくらいに青色しかなかった空を、白から灰へとグラデーションを描く雲が徐々に侵食している。

薄い雲に遮られ、直射日光による突き刺すような暑さが和らいだことに、彼は少し感謝していた。

それだけで気温がいきなり下がるわけではないが、それでも日光がないだけで大分とました。

彼は手元のノートを見やり、肩の凝りと共に酷使され疲労した思考をほぐしていた。

「（ここ最近暑かったしなあ。このまま考え続けるとまず脳味噌が物理的に煮えそうだ。少し休もか……）」

空の果てまで視線を向ければ、そこには上空に見えるそれよりも黒く、暗く分厚い雲が見える。

紗を引いたような薄い雲から、あの暗幕のように重い雲に変わるまでそう時間は必要ないだろう。

暑さがやわらくことには賛成するが、あまり雨が激しく降るのも厄介だなあ、とエルはぼんやりと考えていた。

「エルネステイ君」

気が抜けていたからか、茫漠たる思考に陥りつつあったエルを横から呼びかける声が引き戻す。

彼が慌てて振り向くと、そこには少し硬い表情の教師が立っ

た。

「授業中に余所見をするのは、感心しないね」

「すいません」

誤魔化すように愛想笑いを浮かべながら、エルはしっかりと黒板へと向き直る。

教室では教師による授業が再開され、チョークで文字を書く軽快な音と、フレメヴィーラの歴史の説明が彼の耳に届きはじめた。

周囲のクラスメイト達は珍しそうに一瞬だけエルに視線を送ったものの、すぐに板書に追いつくべく手元へと顔の向きを変える。

教室の雰囲気はすぐにいつものそれに戻っていた。

「（危ない危ない、疲れたからと言って気を抜いたらあかんね。それとも暑さのせいか）」

エルも手元のノートへと視線を戻す。他の生徒達が至極真面目に授業を受ける中、だが極めて残念なことにエルのノートには黒板に書かれていない別の内容 具体的には奇妙な形状をした幻晶騎士<sup>シルエットナイト</sup>の姿が書かれ、それに数々の説明や走り書きが添えられていた。

「（さてテレスタールも完成見えてきたし、漸く土台が固まったってトコか。」

国王陛下の度肝をブチ抜くためにも最低でも後一つ、このビックリでドツキリなギミックを組み込んでおきたいところやけど。

……問題は阿呆ほどお金かかるんやなあこれ。その上作るにしても親方達は疲労困憊やし。

急いても仕方ない、準備はしておくにせよしばらくは暇潰しにモートルビートのほうを……）」

明らかに授業とは関係ないことを考えつつ、しかし念の入ったことに時折黒板へと視線を向けペンを動かすエルは、周囲からは普通に授業を受けているように見える。

そもそも普通10歳の子供はそんな熟練の擬装を施しはしないだろう。それは嫌な意味で彼の中に蓄積された経験の賜物であった。

当然その授業態度に不審を覚える者はおらず、授業は静かに進むばかりだ。いや、正確にはそれを悟りうる者も居るには居たが。

「(うーん、幻晶甲冑の動かし方にも大分と慣れてきたしな。次は俺の機体にもワイヤーアンカーつけてもらうか。」

アレ面白そうだよなあー。動かすの結構面倒だったけど)」「(今日はエル君も連れて食べ歩きしようしよう! あんまり根を詰めても逆効果だしね!)」

その二人とも別の方向に授業態度を間違っているのですさして問題にはならなかった。

余談ではあるがこの有様でも全員、魔法や体術以外の授業についてもちゃんとした成績を上げていることを、ここで補足しておく。

ここ最近の暑さにより、鍛冶場を擁する工房の内部はさながらサウナのようになっていた。

生徒たちも空気を循環させたり、風を送り込んだりと様々な対策を講じてはいるが焼け石に水なのが現状だ。

そういつた訳でいっそ中にいるよりましとばかりに、親方は工房ダーヴァイトの軒先の日陰で休憩していた。

吹きつける風すら生ぬるいうんざりするような状況を、同じく生ぬるい茶を啜り誤魔化す。

元々ドワーフ族は北方の出身である上、彼のその生まれに恥じない濃い髭は見るからに暑苦しい以外の表現が浮かばない有様であり、本人の負担はいかほどのものか。

強い日差しにより明確なコントラストがついた地面は、明るい部分に出たら焼け死んでしまいそんな錯覚を与えていた。

その灼けつくような大地に徐々に薄い影が滲みだしてきたのを見て取って、親方が思わず万歳しそうになったのもむべなるかな。

「おう、雲が出てきやがった。漸くこのクソみてえな暑さと少しでもおさらばできる」

「テレスターレの試験中にも、もう少し曇ってほしかったがね」

その時を思い出したのだろう、隣でテーブルを囲んでいるエドガ―はうんざりとした表情を隠しもししていない。

共に席に着くディートリヒは聞きたくないとばかりに首を振り、ヘルヴィは苦笑を返す。

照りつける日差しに炙られながら幻晶騎士で試験を行った記憶は、ナイトランナー彼ら騎操士にとって少なからず嫌な記憶として残っていた。

「あれはねえ……おかげで変な意味での耐久試験にもなったけどさ。あ、セット。次で上がりね」

言いつつ、ヘルヴィがディートリヒから受け取ったカードと、手に持つカードから絵柄の合ったものを開いて場に出した。彼女の手の中に残るカードは1枚である。

カードゲームに参加する残る2人のプレイヤーが、それまでとは別の意味で顔を顰しかめていた。

いくら工房内部がサウナ状態とは言え、つい先日までの嵐のような日々を思うと、何故彼らがこつちも暢気にカードゲームに興じてい

られるのかと疑問を抱いてしまうところだが、これには理由がある。この環境下で新型の完成から打ち上げまで辿り着いた鍛冶師達だが、その後反動でぶっ倒れてしまい、大半が休みを取っているのだ。組みあがったばかりの新型機を整備担当の人間がいない状態で動かすわけにも行かず、騎操士達もこうして無聊を慰めている。

鍛冶師の中でも親方　　というか鋼の肉体を持つドワーフ族は暑さにだれつつもまだ元気だったが、さすがに1人でできることには限りがあり、中途半端にそれに付き合っているのだった。

「この調子だと、残る機体の修復と既存機の改修はいつ終わることやら」

「あん？　まあ、そのうち進めらあ。今は俺達あ休暇中よ」

エドガーの言葉に、親方はどこか投げやりな調子で答える。その間にもヘルヴィが1抜けを決め、エドガーとディートリヒが決戦に挑んでいた。

「そういえば我がグウエールは未だに屑鉄の範囲すら脱していないのだが？」

「おおう、そうだったな。まあ営業再開したら来てくれや」

「いつからうちの整備班は独立したんだい……？」

「たったいまからだ」

「……………」

これ以上親方にばやいたところで仕方がない、そんな感想を抱きつつもエドガーとの決戦に敗北したディートリヒが机に突っ伏した。

「一先ずディーは勝者のために食べ物を買ってきてもらおうか」

「そうねえ、まあ安いパイでいいよ」

「俺は肉がつまみてえな、肉入りのやつにしる」



「くう……仕方ない、待っている　　って親方はカードに参加してないだろう！」

「ケチケチすんな。日頃お世話になってる代つてえもんよ」

ディートリヒの表情がめまぐるしく3回転ほどしたが、とうとう諦めたのか彼はそのままとぼとぼと食堂へと向かった。

勝者の余裕でそれを見送る3人。哀愁漂う彼の姿が視界から消えた辺りで、親方が何かに思い至る。

「この程度で言うのもなんだが、アイツも丸くなったもんだな。前は負けたらガタガタぬかすから、そもカードになんざ呼べなかつただろう」

相変わらず髭に埋もれてわかり難いが、親方は苦笑を浮かべている。

整備班、騎操士を問わずディートリヒの神経質さ、気難しさは有名だった。

実力こそあれ付き合いやすいタイプではなかったはずだが、ここ最近はその薄れだしていることに、共に行動する機会の多い彼らは気付いている。

「陸皇亀事件ベヘモスの後から、ディーは変わった。概ね、良い方向にな」「ふーん。そういえば、実は新型の試験で一番熱心だったのって、あいつじゃない？」

ヘルヴィには思い至る節がある。操縦経験の長さならば試験騎操士から担当していた彼女が一番であろうが、ディートリヒがそれに次ぐ勢いで新型機を動かしていた事を。

彼女の言葉にエドガーは神妙な表情で頷いた。

「ああ、恐らくは、あれを見たからだろうな」

「？ 何を？」

「……エルネステイ、だ。ディーは、あの時唯一その操縦を、直接見ている」

エドガーの視線が細められる。そこには確かに、彼の騎操士としての矜持と熱意が垣間見える。

偶然とは言え、師団級魔獣を相手取れるだけの技量を真後ろから見た、友人への僅かな嫉妬。その友人がそれ以来明らかに実力を伸ばしていることに対する、素直な賞賛。

エドガーの気質は良くも悪くもまっすぐだ。

間近でそんな努力を見せられれば彼自身も負けじと奮起するであろうことを、それなりに付き合いの長いヘルヴィは知悉ちしつしていた。

「ふーん、あの子のねえ。小さい上にすばしっこいから、頑張らないとすぐに背中を見失っちゃうわよ」

やや癖つ気の強い短めの髪の下から、愉快そうに細められた瞳がエドガーをからかう。

エドガーは一瞬キョトン、とした表情を見せるが、それはすぐに不敵な笑顔へと戻った。

「そう易々と見失う気はないさ」

「おう、それで思い出したぜ。そっぴや銀色坊主エルネステイにや相談してえ事があつたんだ」

唐突に親方が手を打った。

「どうしたんだ？」

「いや、新型作ったのはいいんだけどよ、これからどうすんだよと

思ってたな」

「？ 学園の機体の改修を進めるんじゃないのか？」

「そいつはまあ学園長の許可があるからかまわねえけど。……まさかここだけの代物にやあ、すまいよ」

「あっ」

ぼやけ始めた地面のコントラストの境界を目で追いながら呟く親方に対し、エドガーとヘルヴィが声を上げて顔を見合わせていた。

日が傾き始める頃、ライヒアラ騎操士学園の周囲には今日も今日とて露店が立つ。

そして授業の終わりと共に生徒達が歩く姿がちらほらと見られるようになる。

「おう嬢ちゃん、今日はでっかい鎧はもってこねえのかい？」

「うん、今日は食べ歩きよ！ というわけでケーキ三つ！」

「あいよっ。何を挟むね？」

「えーっとな……」

大分と雲の面積が増えた空模様により、日光に炙られる事はないが、それとは別に徐々に蒸し暑さを感じ始めている。

テンションは最高潮と言った感じで露店の主人に注文するアディはともかく、エルとキッドは全身からだるさを放っていた。

「良く冷えたお菓子が、欲しいですね……」

「無茶言つなよ……そんなのあつたら皆群がるぜ。絶対」

「むしろ果物を直接食べるだけでも、ちょっとは涼しくなるような」  
「諦める、もうパンに挟まってる」

弾けるような笑みと共に振り返った彼女の手には、焼き立てでほっこりと湯気を立てるパンケーキが乗っている。

時間的にもおやつとしては丁度いいだろう。しかしまだまだ気温の高い昼下がりで、できれば熱くない食べ物がいいなあと思いつつも嬉しそうな彼女の姿の前に諦めるエルであった。

その後あちこちの露店を巡り、いい加減満腹かという所で彼らは工房へと立ち寄っていた。

特に理由があつての行動ではなかったが、彼らは偶然にもそこで珍しい光景と出会う。

「……何をやっているのですか？」

「んむ？ 見ての通りクツケレンじゃ。いやダーヴィド君はこれでも中々、手ごわいの」

工房の軒先では、ライヒアラ騎操士学園の学園長であるラウリと親方が、地球で言うチェスに似たボードゲームで勝負していた。

盤面は恐ろしいほどにラウリの優勢、親方の駒は何かのいじめかと言つほど追い込まれている。

「俺はむしろここからどう盛り返せばいいか、思いつきすらしねえんだがよ……」。

もう少し手加減してもいいんじゃないか？」

「ほっほっほ、仮にも教育者として、先達が手を抜くのはいかんのう」

「遊戯だぞこれ……」

莞爾と笑つラウリと対照的に、親方は頬杖がなければ今にも崩れ

落ちそうだ。

彼は悔しさと呆れを半ばに混ぜたような空気を滲ませながら、余った駒をつまんでコツコツとテーブルを叩いている。

「はあ、いえ、ゲームはいいんですけど、なぜお祖父様がこちらにいらっしやるのかと……」

「んむ？ ああ、少しエルとダーヴィド君と相談したいことがあったのう。」

呼び出してもよかったんじゃないが、どうせこちらに集まるかと思っ  
ての

意外と適当な祖父の考えに、エルが軽くずっこける。

そして暇つぶしの相手として熨された親方が深い溜息をついていたが、そんなものは些細な問題として流された。

「さて話というのは他でもない。ダーヴィド君も悩んでおるようじ  
やったが……新型機の今後についてじゃ」

一通り親方の陣地を蹂躪し、王手に至ったラウリがご満悦の様子  
で話を始めた。

エル達も適当に近く椅子を用意するが、出し抜けに飛び出した言  
葉に首をかしげる。

「テレスターレの今後について、ですか」

「うむ、正直わしはもう少し、こつ……じゃな、大幅でも改良の範  
疇に留まると思っておった。

それにしても時間がかかっとなるなんぞ思っておったが……蓋を開  
ければ別物になっておるのでのう」

「紛うことなく新型機ですから」

上機嫌に応じるエルの言葉に、ラウリは困ったように眉尻を下げる。

「全く以って、初手から新型機の完成に至るとは予想外じゃよ。ここまで作り上げたからには、これは陛下にお見せするつもりなのかの？」

ラウリの言葉は問いかけと言うよりも確認の響きを帯びている。なぜなら、ラウリにとって既存機を凌駕する性能を持つ新型機は、国王との約束にある“最高の機体”の条件を満たして余りあるからだ。

ならば新型機を国王へ報告し、然るべき報酬を受け取ろうと考えるのは自然な流れだった。

しかし彼の予想に反し、エルは少しも悩むことなく首を横に振る。

「ほう？ そのために頑張っていたのかと思っておったが……違ったかの？」

目を丸くしたラウリが、工房の暗がりの奥にあるテレスターレへチラリと振り返る。

「陛下にお見せするものは、また別に……あのお願いに意味があると、認めてもらえるようなものを考えています。」

それに陛下は“最高”を所望されたのです、お受けしたからにはこちらも人事を尽くさないと」

「おめえの人事はまだ尽くされてなかったのかよっ!？」

言い切ったエルの言葉に、親方が椅子ごと倒れそうになりながら慌てて突っ込みを入れる。

これまでの常識を見事に突き抜けておきながら、それが序の口に

過ぎないなどと果たして誰が想像しようか。  
少なくともそれはラウリと親方の予想の範囲は超えていた。

「ええ、テレスタールは言わば土台……しっかりと踏み固めたので  
すから、上には立派な城を作らないと。」

それでこそ陛下の度肝を抜けるというものです」

「その前にわしらの度肝が潰れそうじゃよ」

「大体、坊主は本気のことしか言わねえから怖ええな……」

驚愕と感心を呆れが塗りつぶしはじめたラウリだが、それは別に  
彼だけではなく、その場にいたほぼ全員の偽らざる心境だ。

ラウリは一つ息をついて考えを切り替えると、ふむ、と唸って腕  
を組んだ。

「エルがそう言うなら、そこはまあ、よい。」

ともあれ、新たな機体まで完成させたのじゃからのう、何かしら  
国への報告は必要じゃろう」

「それは勿論ですね。では、これも陛下にご報告を？」

エルの問いに、今度はラウリが首を横に振る。

「陛下もお忙しい身じゃからのう。エルとの約束であれば陛下にし  
か判断できぬことであるうが、これだけならばそうではなかるうよ。」

これまで通りの手順でもって連絡することになるうて」

「これまでどおりと言うと、<sup>ラボ</sup>国機研か……」

“国立機操開発研究工房” 通称“<sup>ラボ</sup>国機研”はその名の通り、  
国の下で幻晶騎士の技術を管理するための組織である。

新型機の開発と言った大きな案件の他にも、新たに編み出した技  
術改良などは規模を問わずここに集められ、まとめられた後全国へ

と伝わるようになっていた。

これまでも学園から技術改良を伝えた事もあり、鍛冶師にとっては馴染みの存在だった。

「うむ……それにしても、新たな機体を丸々持ち込むとなれば、ちと問題なんじゃがな」

「ん？ ラウリじいちゃん、何がそんなに問題なんだ？ 確かにこいつは強いんだろ？」

これからテレスタールをいっぱい作れば、騎士だって楽になるし、街も安全になるんだろ。

「そこまで出来上がってるんだ、国の人の喜ぶんじゃないの？」

横から疑問を挟んだキッドが首をかしげる。

彼の意見は間違っではない。強力な幻晶騎士の普及は国内の安全確保に対し有効な手段である。

今この間にも、国内のどこかで決闘級以上の大型魔獣による被害がおき、それに幻晶騎士が投入されている。

幻晶騎士が強くなると言うことは、これを解決するための期間を短縮し、ひいては被害を抑えることにつながる事である。

魔獣の領域に対する最前線たるフレメヴィーラ王国では、それは何よりも重要視されて然るべきものだ。

つまりテレスタールが作られたこと自体は喜ばしいことと言えるのでは？ そんな素朴な疑問に、ラウリは口元に苦味を残した笑みを浮かべながら答える。

「まずいわけではないのじゃがな……新たな幻晶騎士を作るには、まず小さな改良を積み上げ、それを元に幾人もの技術者が大きな形へとまとめる事が必要じゃった。」

それを繰り返して、幻晶騎士は強化されてきたのじゃ」



その新しい幻晶騎士を構築するのは国機研の役目であり、そして規模から言っても国機研でしか無理なことだ。

その事を思い浮かべながら、ラウリは言葉を続ける。

「新たな幻晶騎士の開発とは、本来は国家事業じゃ。

まさか学園の設備で完全な新型が作られようなどと、わしも予想外だにせんかったよ。

そもそも普通は機体を一新するほどの技術を、まとめて思いついたりせんのかな……」

ラウリの意味ありげな視線から逃れるように、エルと親方が二人そろって明後日の方向を向く。

二人とも新しい機体を完成させることに夢中で、かなり暴走した記憶があるからだ。

「まあそれでじゃ、問題は小幅の改良を申し出ることにはあっても丸々新しい機体を持ち込むことなど、未曾有の出来事と言うことじゃ。このままいきなり新たな機体を持つていったところで、どういう扱いになるのかさっぱりでな」

明後日の方向から戻り満面の笑みで迎撃を始めたエルを相手に、ラウリが小さく溜息をついていた。

「やってしまったものは嘆いても仕方ありません。

ここは皆で幸せになれる、未来への一步を模索するときです」

「全くだな。技術を形にしないなんざ技術者の名折れ。その後の事はその時に考えりゃあいいことだ！」

「開き直りおつたよこいつら……」

不自然な笑顔を浮かべながらがっしりと腕を組み合わせるエルと

親方に、ラウリはついに悟りの地平への扉に手をかけ始めた。

とは言え傍目には戯けてはいるものの、彼らとて真面目に考えていないわけではない。

まあそれに、と前置いて親方は姿勢を改めた。

「鍛冶師としちゃあ、新しい技を伝え、民のためになるってなあ名譽な事よ。ついでに褒賞も出るわけだし、懐にもありがてえしな。

って訳だから本来ならテレスタール乗って国んトコまですっ飛んでくのが一番なんだろうけどよ、まあ残念な事にもう一つ問題がありやがる」

どこかおどける様な口調に大仰な振り付けを加えて、親方は語り続ける。

「テレスタールを完成させるのには、大勢の人間が関わってる。そりゃあもう騎操士学科の大半よ。

新型機一つ分の褒賞ともなりやあ、盛大なもんだだろうけどよ。そいつを開発に関わった人間で分けるとなりやあ、これはちよいとばかり揉めるんじゃないかねえか？」

親方の指摘も至極当然のものである。

国機研に新たな技術を持ち込んだ場合は、対価として然るべき褒賞が支払われることになっている。当然、それは開発に協力した人間の間で分配されるものであるう。

親方の言葉通り、テレスタールの完成にはかなりの人数が関わっている。それこそ発案者たるエルを筆頭に、作り上げた鍛冶師達や試験を行った騎操士、果ては素材の作成に錬金術師の一部まで。

それらの功績を今から正確に把握するのは、実際の問題として不可能に近い。

単にテレスタールの持ち込み方に留まらない、あまりに山積する

問題の数々に、全員が思わず両手を挙げかねない気分だった。

「あー、いいか？　ちよつと思いついた事があるんだが」

混沌とした様相を呈し始めた場の空気を断ち切るように、エドガーが小さく手を上げる。

勇者の登場を讃えるように拍手の真似事をする約二名を黙殺し、遠くへ旅立ちかけていたラウリが学園長モードで再起動した。

「うむ、意見があるならどのようなものでも構わん、言ってくれたまえ」

「では失礼して。ひとまずの扱いはさて置き、テレスタールはまだ未完成な部分もありますが、その性能は従来のものよりも高い。

これに用いた技術を普及させれば、国内の安全に対する恩恵は大きいでしょう。つまり最終的に国に伝えるのは決まっている……と考えるもいいですね？」

「うむ、それは当然じゃな」

それには全員が同意を見せる。新型機を学園だけの特産品にする気は、この場の誰も持つてはいない。

それを確認したエドガーは、少し言葉をまとめるように目を伏せる。

「……ならば……報酬も確かに問題ですが、テレスタールを渡す時の事も考えたほうが良いですね。

いえ、方法と言う意味ではなくて、渡してそれで終わりとは思えません」

「何か、まずいのか？」

「エルネステイが元々の案を言い出したときを思い出してくれ、親

方。

今でこそ俺達も馴染んでいるが、テレスターレを形作る技術はそもそも相当に異様だ」

その言葉に、長く関わる間に馴染み忘れかけていた事実を思い出し、彼らははっと黙り込んだ。

彼ら自身、直接エルに説明されなければ、受け入れられたかも怪しい技術ではなかったか。性能と機能の前に忘れがちではあるがテレスターレは未だこの世界では異形の存在なのである。

それを思い出した親方が乾いた音を立てて手を打ち合わせた。

「おうそうだ、そう言やあ全員一回は坊主の正気を疑ったな」

「(そんなことしとったんかい……)」

全員の理解が追いつくのを待ってエドガーは再び話の続きに入る。

「つまりテレスターレだけ渡しても、意味がないんじゃないか？

形だけはそのものを真似れば良いかも知れないが、それではこれを形作る根本の発想という部分がちゃんと伝わるかは疑問だ」

期せずして全員の視線がエルへと向けられる。流石の彼もその圧力に少しのけぞった。

「……言われてみりやあな。いや国機研の連中に“悪魔の囁き”を聞かせてやるのも良いかも知れねえぜ」

「皆様は僕のことを何だと思ってるんですか……？」

「さしずめ、悪魔の使いつてところか？」

「……………泣きますよ？」

「(あ、不機嫌なエル君ちょっと可愛い)」

エルは半目になって親方を睨むが、残念ながら全く迫力が無く、精々が拗ねた子供にしか見えていなかった。内面はともかく、年齢的にはその通りなのだが。

親方がそれを軽く流している間に、ラウリがエドガーへと振り向く。

エドガーはまだ軽く言葉をまとめるように、少し視線を宙に向けている。恐らくは問題に対する何かの結論か提案があるのだろう、それを見て取ったラウリが話の続きを促した。

「解決案……というか、騎操士学科の鍛冶師達が、国機研へと説明する必要があると思います。」

ならば新型機の開発者として、彼らをそのまま雇ってもらうのは選択肢としてありえるのでは？」

ラウリは思わず目を見張った。エドガーの提案とはつまり、配分に問題のある金銭的な褒賞に代わる形で、彼らの雇用を提案すると言っていることである。

いずれ鍛冶師達は学園を卒業し、各地で鎚を振るうようになることを思えば、それは決して悪い選択肢ではない。

「そうきおったか……それはまた剛毅な提案じゃのう」

「彼らには新型機を完成させたと言っ実績があります。さらには既存の技術に対する知識も、言うまでもないでしょう。」

今後新型機の開発を進めるならば理想的な人材と言えるのではないでしょうが

この提案はラウリを悩ませた。

正確な技術の伝達、そして生徒達の利益と言っ意味では共に実のある結果だが、比率的に学園側にとつての利益が大きい。

つまり国機研へとそれを交渉する必要が発生すると言っことであ

り、かつそれは相応に難易度が高いと言うことである。

そして当然の事として交渉を担当するのはやはりラウリや、幾人かの教師で行う事になるだろう。詰まるところ彼らはいくまでか教師であり、交渉のプロではないのだ。道のりにはかなりの困難が予想される。

「魅力的な案ではあるがのう、さてそう上手くいくか。わしらも精一杯は頑張ってみるが……結局は国機研の判断次第じゃからのう」

決定権自体が完全に国側にある以上、これ以上はラウリにも確約はしかねるものだ。

ここは方向性が決まっただけでも良しとすべきか、彼は先に待ち受ける厳しい交渉の予感と、生徒達のために骨を折る教育者としての熱意を同時に感じ、小さく苦笑を浮かべるのだった。

場の話がようやく何かしらの方向を見出そうとしているとき、話し込む彼らの間で難しい顔で悩む者達がいた。

キッドとアディだ。彼らは話の内容自体は把握しているものの、付いて行くのに精一杯と言う状態だった。

エルのように見た目と精神の年齢が一致しないわけではなく、正しく10歳の子供である彼らにそれに加われと言うのも些か酷な話ではあるが。

「うーん、なんか私たちも力になれないのかな？」

「聞いている限り難しそうじゃねーか。しゃあねえ、大人しくしてよっぜ」

不自然な子供であるエルと行動を共にすることが多い彼らは、勢

いこういった会話に参加する機会も多い。

そして彼らは彼らなりに、周囲の助力になれないか、ずっと考え  
ているのだ。

「あれだよ、親方とか皆で頑張ってテレスターレを作ったから、  
これからも皆で作るってことだよね」

アデイの中で、何か引つかる言葉がある。 新しい、幻晶騎  
士、作る、結果。

漠然とした言葉をきっかけとして思考が記憶の中の通路を駆け巡  
り……それは数ヶ月前に、彼女が告げられた言葉へとつながる。

彼女はもどかさの中辿り着いた閃きに、勢い良く顔を上げた。

「……ねえ、国って、偉い人をお願いするって事よね？」

「んー？ そういえば、そういうことになるな」

「だったら、あの約束、使えるんじゃない？」

あの約束。アデイの言葉のニュアンスにしばらく悩んだキッドだ  
ったが、彼も正解を記憶の中から掘り上げることに成功する。

「あ！ ……って、アデイ」

「これも、エル君の功績に含まれるよね？」

それは以前、彼らの父親と会話したときの記憶。

彼らの父親であるヨアキム・セラージェイ侯爵は、“エルが何かを  
為したのなら、それを伝えるように”と彼らに頼んでいた。

彼らにとつては、それは今この状況の協力者として頼むには、十  
分な理由に思われた。

「ラウリじいちゃん、俺達に良い提案があるんだけどよ」

「ほ、キッド？ なんじゃろうか」

質問をしてくることはあっても、よもや彼らから提案が出てくると思っていなかったラウリが軽い驚きをあらわにした。

キッドはその事に嬉しさよりも、悪巧みを考えているかのような表情を浮かべて自分達の提案を話す。

「じいちゃん達がコウシヨウするのって、やっぱり難しいんだよな？  
だったらさ、他にコウシヨウできる味方をつけるってのはどうだ  
？」

「ほう？ 味方……とは誰か当てがあるのかの？」

「セラーティ侯爵」

さらりと言い切ったキッドの言葉に、エルとラウリは更なる驚きを表し、騎操士学科の学生達は疑問を感じていた。

いくらかの事件により双子の素性を知る者はいるが、それは有名な話ではない。彼らはここで有力な貴族の名前があがる事に首を捻っていた。

「……………！ そうか、そうじゃのう……………そういえばセラーティ侯爵といえ、確かあの場にもおった。

ならば状況の説明も他の人間よりはやり易かるうし、とりなしを頼むのもありうるの。」

「じゃが……………良いのかの？」

言外に、ラウリは双子の家の事情を問う。

彼らの立場はあくまで庶子であり、かつ実家との連絡は最低限であつたはずだ。

ここで父親を頼るような行動を取れるのか、目線だけで問われたそれを、双子は正確に理解した。



「前にエル君、直接会ったのよね？ その時に何かあったら教えて欲しいって、言われてたの」

「（なるほどのう、あの話を受けてか。ならばまず相談をするのは相応しかろう）」

「そうですか……侯爵が。二人が良いと言つのなら、僕も異存などありません。……皆様は？」

残る学生達はやや意外そうな表情をしていたが、話を振られたところで互いに顔を見合わせた。

視線だけで軽く確認し、大きく頷く。

「俺達も異存はねえな」

セラーティ侯爵と言えば、国内でも有数の貴族であり、かつ侯爵領はポキューズ大森海と領地を接しているため、幻晶騎士の性能向上に対する理解も大きい。

ここで名前が上がった経緯はさて置き、その助力が得られるのなら今回の話にも大きな力になる事は間違いないと彼らは考えていた。

「では、直接テレスタールを持ち込むのもまずいでしょうし、資料という形で連絡を取るといのは？」

「そうじゃのう、その方法でよからう。ではダーヴィド君には資料の作成を頼めるかの？」

キッド君、アデイ君、その後は君達の出番じゃ」

「任せてちょうだい！ ばっちり渡してくるから！！」

二人は仁王立ちで胸を叩いてそれを請け負う。

問題が解決した安心感もあってか、その様子につられるように全

員の間に笑い声上がる。

そんな彼らの様子を、工場の奥に安置されたテレスタールが静かに見守っていた。

時刻が夕刻を過ぎ日が落ち始めると、街のあちこちでは営業を終えた店が徐々に閉まってゆく。

逆に酒場はこれからがかき入れ時だ。一日の労働を終えた住人たちが食事と共に英気を養うべく繰り出してくる。

ライヒアラ学園街に在るとある酒場でも、いつものように店内に客があふれる時間となった。

客の大半はそれなりの歳をした男性だが、やや隅のほうの席に周囲とはやや毛色の違う人物が居る。

その客は見るからに歳若く、恐らくは20歳は越えていないであろう、学生らしき青年であった。さすがに成人（15歳）はしているであろうが、それでも年齢的には珍しい。

しかし彼はこのような場所も慣れている様子で、その雰囲気は違和感を生むことなく場に馴染んでいる。

彼は隅の方にあるテーブルで、ちびちびとエールを飲み進めていた。

彼が一杯目のグラスを空にしようかと言う頃、彼の向かいに腰掛ける人物が現れた。

ほどほどに混み始めた店内で今まで席を開けていたという事は、明らかに待ち合わせをしていたのだろう。

事実、後から来た男　肉体労働者と思しき、がっしりとした体格の男性だ　は、席に着くと自分もエールを注文してから、学生にニカッと笑いかけた。

「お前から酒に誘うなんて珍しいじゃないか。どうした、学園の勉強が大変なのか？」

届いたエールを一口含み、男はふう、と大げさに息をつく。

既に酒を含む学生は酔いが回っているようで、はしゃぐように応えた。

「あー、そうなんだよ、最近忙しくてさあ」

「はっはっはっ、勉強でなあそういうもんだ。そいつを越えてお前もいつぱしの大人になるんじゃないか！」

「それでもよう、ここしばらくは特にやべーんよ」

互いに酒を含み、陽気に愚痴をこぼす。

騒々しさにつつまれる酒屋の中で、彼らの会話は完全に雑音の一つにまぎれていた。

「ようやく一段落かと思つたら、ちよつと問題がおきてさあ」

「ほはあ、学生も大変だな！」

客が声高に語り合つても誰もそれを気に止めない。ここはそういう場所であり、酔っ払いの騒ぎにいちいち注意しては限がないからだ。

そもそも周りも大いに盛り上がっている　見回しても、酔っ払いばかりなのだ。今更うるさい人間が一人増えたところで何が変わるのか。

彼らもそんな酔っ払いの仲間になるかと思われたが、しかし周囲の様子を確認し、自分達が全く注目されていない事を確認すると、突如として声を潜め始めた。

「そうなんだよ！ 本当に！ …………… 例のものがある程度完成まで辿り着いたぜ」

「ほう、思いのほか学生も優秀じゃないか」

ざわめきに満ちた店内では、抑えた言葉は周囲まで届かない。

学生の顔は今も酔いにより紅潮し、エールを片手に持った姿はただの酔っ払いに見える。

しかし、彼らの口は明確で冷静な言葉を紡いでいた。

「熱意つてヤツは、侮れないねえ。」

見たところ、この技術自体が元々完成を見越して組み上げられる節もあるけど」

「詳細は？ まさか俺に口頭で伝える気ではないだろうな」

学生はまさかとはかりに首を振ると、何の気負いも無く鞆から紙の束を取り出す。

綴じられた表紙からでは窺い知れないが、そこに書かれているのはテレスタールについての情報だ。

男は隠し立てすることも無くそれを受け取ると、中身も確認せず無造作に懐に仕舞った。

「つんだっかつら！ たまには酒でも飲んでねーと！」

「そりゃあ仕方ねえな！ ようし、今日はお疲れ学生さんに、一つ奢ってやろう！」

「そうこなくちゃあなあ！」

先ほどまでの雰囲気は既に無く、二人は再びただの客に戻り、酒を酌み交わす。

その場にいる誰もがそんな二人が居ることなど気にも止めず、時間と共に酒場はさらなる喧騒につつまれてゆく。

密かに交わされた言葉の意味を、知ることはなく。

叩きつける様な勢いで落ちてくる雨粒が、王都カンカネンに張り巡らされた石畳の道の上で踊っている。

未明に降り出した雨は、見る間に豪雨となって街を覆いつくしていた。

予想以上の勢いで降り注ぐ雨に、いつもは活発な街の住人達も中々外に出る気にもなれず、街の空気からは活気が抜け落ちてしまったかのようだ。

空を埋め尽くす雲が滑らかに石造りの堅牢な街につながり、両者は一体となってモノクロの景色の中に沈んでいた。

ヨアキム・セラージェイ侯爵は、貴族街にあるセラージェイ侯爵家の屋敷で外から響く雨音に囲まれ、とある書類に目を通していた。

そこに書かれているのは、これからの世界を塗り替える、異質な騎士の姿。

異世界の尖兵とも言つべきその本質とは別に、彼はその存在に否応無く重大な予感を抱かされる。

恐らくそれは“嵐”の予兆だ。これから街を、国を飲み込まんとする巨きな嵐の到来を予感させる、そんなざわめく様な空気だ。

内心を反映してか、彼は机の隅に置かれた小さなベルを乱暴に鳴らす。

常に冷静な彼にしては珍しい行動だが、長年彼に仕える老練な執事は日頃の落ち着いた様子を崩さず、しかしいつもより迅速に執務室へと現れた。

「お呼びでございましたようか、旦那様」

「至急、この書類をデイクスゴート公の邸宅へ。確実に公本人にお渡しするように」

「畏まりました。手配いたします」

ヨアキムは書類を執事へ渡し、彼が下がると共にポツリと呟いた。

「デイクスゴード公、これは思ったよりも厄介な事になるかも知れませんが」

その呟きは執務室の重厚な扉に遮られ、激しさを更に増す雨音の中に掻き消されていった。

#33 迫り来る嵐の予感（後書き）

11・07・07 内容を改訂

### #34 雨の降る日

「ごうごうと、唸るような音を立てながら風が吹き荒れる。

横殴りの暴風に煽られ、叩きつける様に降り注ぐ激しい雨の中、何台もの馬車が西フレメヴィーラ街道の上をひた走っていた。

晴れていれば周囲に響くであろう、馬蹄が石畳を打つ硬い音も今は嵐の中にかき消されている。

月の初めより崩れ始めた空模様は見る間に大荒れとなり、ここしばらくの間はまるで地面を削ろうとしているかのような勢いで雨が降り続いていた。

いかに石畳で舗装された西フレメヴィーラ街道とは言え、既に排水能力の限界を越えており、あちこちにできた広い水溜りが道行くものの障害と化していた。

決して屋外を行動するのに向かない天候と悪路の中、馬車は一心不乱に前へと進む。

その進路上には国内最大の学園施設、ライヒアラ騎操士学園を有するライヒアラ学園街の姿がおぼろげに見え始めていた。

「まったく、よく降ることじゃのう」

ライヒアラ騎操士学園の学園長であるラウリ・エチェバルリアは窓の外を見ながら、途絶える気配のない雨に眉根を寄せ髭をなでさすっていた。

最近では珍しく長引く雨により一部の授業にも不都合が出始めている。晴天が続きすぎるのも問題だが、こうやって雨が続くのもそれはそれで問題になるものだ。



そうして物思いに沈んでいたラウリの意識を、唐突に聞こえて来たノックの音が拾い上げた。

「ふむ、どなたかの」

彼はぽつりと呟くと、学園長用の古めかしい作りの机へと戻り、椅子に腰掛けながら返答する。

扉の外からは学園の用務員を務める者がおずおずと来客の存在を告げた。

かすかに眉を寄せ、ラウリは来客の予定を思い出してみるが、本日何かしらの予定が入っていた記憶はない。

彼は学園の長ではあるが、それはつまり教育者のまとめ役に過ぎず、特段強大な権力を持つていないわけではない。

それでも学園長まで直接案内する必要がある来客というのは珍しいものだった。

そういった客が突然やってくる事もないわけではないが、大抵そういう相手は地位のある人物であり多忙である。その場合は時間の無駄を省くため事前に予定を調整してから会うものだ。

とは言え、と思い直してラウリは窓の外へ視線を向ける。そこでは降り止む気配もない雨が窓を叩き、時折強風が窓枠をガタガタと揺らしている。

この悪天候では多少連絡に不手際があっても仕方ない、むしろこの状況で出向いてくるほどの火急の用件があるのだろうと考えて、ラウリは来客を学園長室まで通すよう返事をした。

来客はすぐ近くに待機していたと見え、返答からまもなく部屋の扉が開かれる。

がしやがしやと騒々しい音を立てて入ってきた来客の姿を見て、

ラウリは目を細め顔の皺を深くした。

「その紋章……デイクスゴード公爵配下の騎士殿とお見受けしますが、斯様な悪天候の中、当学園にいかなる御用ですか」

ラウリの前に案内されてきたのは3人の騎士だった。

しっかりと鎧に身を包み、その上からマントを羽織り兜を小脇に抱えたその格好は、他の何にも見間違いようがない。

ラウリは彼らのマントに織り込まれた紋章からその所属を見て取ったが、しかし彼らがここを訪れた理由に見当をつけるには至らずに皺を深くする結果に終わる。

部屋に入ってきた騎士達は、その風体から独特の威圧感と真面目さを放ちながら、まずはラウリに対して綺麗に礼の姿勢をとった。

「はい、我らはデイクスゴード公爵閣下配下、朱兎騎士団に所属しております」

3名の中央に立った騎士が名乗りを上げる。

彼はこの中でも指揮官格にいるようで、話すのは主に彼だった。

「本日は公爵閣下の命によりここを訪れました。まずは閣下より文を預かっております、お改めください」

差し出された油紙の包みを受け取り、中より封書と思しきものを取り出す。

それにつけられたデイクスゴード公爵家の紋章を象った封蝋がランプの灯りの中にはつきりと確認できた。

言うまでもなくこの紋章を使用することが出来るのは、デイクスゴード公爵家の人間において他には居ない。

これが公爵家からの正式な文書であることを再確認したラウリの緊張が高まる。

ラウリは一言断ってから手紙の内容を確認する。そこに書かれた内容を読むにつれ、ラウリの目が驚愕に見開かれていった。

手紙を読み終えたラウリが何かを言おうと口を開きかけたその時、突如窓から飛び込んできた雷光が部屋を白く染めた。

しばし遅れて大音量の雷鳴が轟き、その場にいる全員の鼓膜を激しく震わせる。

それに続いた様々な感情を含んだ沈黙を、降り続く雨の音が飲み込んでいった。

教室の中には押し殺すような沈黙と、漏れ出した微かな呟きが漂っている。

先ほど轟いた雷鳴はここしばらくの中でも特に大きなものだった。悪天候のため昼だというのに薄暗く、ランプの灯りに照らされた室内では生徒達が自らの驚愕を隣の席と囁きあっている。

壇上に立つ教師も少し窓の外を伺うそぶりを見せたが、驚いたなとぼつりと感想を漏らすと再び授業へと向き直った。

間もなく教室は雨の音に満たされる。

雨音にかき消されまいと教師がいつもより大きな声で授業を続けるが、飽くことない自然の力の前にいくらかの非力さは否めなかった。

そんな落ち着かない空気のせい、それとも先ほどの雷鳴のせい、か。

いまひとつ集中力に欠ける様子の生徒達がそれでもしつかりと板書だけはとっている。

むしろ説明が聞きづらい分、板書が授業の命綱になっている。彼らも必死である。

微妙なバランスをたもつたまま午前の授業が終わり、騒々しい昼食の時間が訪れる。

基本的に寮生活であるライヒアラの生徒達は昼食になると学園付属の食堂を利用する。天候が落ちていけば周囲の店や自宅を利用するものもあるだろうが、この悪天候では何をかいわんや。

エルネステイ達3人もその例外ではなく、席を立ち食堂へと向かうとしたが、その時意外な人物が慌しい様子で教室を訪れた。

訪れた人物　マティアス・エチエバルリア戦闘技能教官は黒板の片づけを行っていた教師に何かを耳打ちする。彼らの間で何かしらの了解が交わされた後、マティアスはそのままエルの前までやってきた。

「とう……エチエバルリア教官、どうされたのですか？」

エルは小首を傾げながら、近寄ってくる自分の父親であるマティアスへと問いかける。

マティアスは主に高等部、騎操士学科にて指導をしている。初等部であるこの場に用事があるとすれば、それはエルに対するものだと考えたほうがいいだろう。

「理由は後で説明する、いますぐに一緒に来てくれ」

頷きながらも少し急かすような雰囲気のマティアスの常ならぬ様子に、エルは首の傾斜を深くしかけたが、すぐに思い直すと小さく後ろを振り返った。

「二人は？」

「ああ、すまないなキッド君、アディ君。しばらくエルは借りてゆくよ」

状況がよくわからずにとりあえず頷く双子に小さな会釈を残して、エチエバルリア親子は連れ立って教室より出て行く。

「マティアスのおっちゃんどうしたんだ？ 珍しいよな……」  
「なんだか、嫌な予感がするわね」

キッドとアディはしばらくの間彼らが出て行った扉をぼんやりと眺めていたが、ふと昼食時の食堂の混雑を思い出して慌てて移動を始めた。

何があつたのか後で聞けば良い、そう思っていた二人だが、彼らがそれを確認するのはずっと後の事になる。

午後の授業が始まって、教室にエルの姿はなかった。

エルネスティとマティアスが二人並んで、静かに廊下を歩いてゆく。

片や短めの金髪をなでつけ隆々たる体躯をもつ戦闘技能教官、片やセミロングの銀髪を流した小柄な体躯の少年。

年齢が違うことを考慮に入れても、二人の見た目は対照的とも言つていいほどに違う。

エルは全面的に母親似なので仕方のないことではあるが。

そうして何もかもが違うようでいて、しかし彼らが纏う雰囲気には驚くほど似た部分があり、やはり親子である事をどこかしらで感じさせていた。

彼らは昼休みの慌しい人の流れに逆らうように移動していた。

食堂とは逆の方向、学舎からも離れ、その足は実習向けの施設がある区域へと差しかかる。

歩きながらエルは目的地を推測し、この急な呼び出しの内容にもある程度の見当をつけていた。

「（こつちにあるんはアレか……と言つ事はあの人から連絡がきたんかな？）」

エルは目的地についてから説明があるものと思い、特に質問をすることもなく静かに歩いていたが、マティアスには少し別の思惑がある。

周囲を憚ってか、教室のある学舎から離れて人気のない区域に差し掛かったところで、彼は歩みを緩めて口を開いた。

「先ほど、義父さんのところへディクスゴード公爵から遣いの者が来た」

エルがそれに反応を返すまで一拍の間があった。

「……セラーティ侯爵から、ではなくてですか？」

過日、エル達はキッドとアデイの案を受け、セラーティ侯爵へと新型機の扱いについて協力を要請する連絡を入れていた。

そのため誰かが来るとすればまずセラーティ侯爵の関係者だと考えていただけに、エルにとってマティアスの言葉は予想外のものだった。

エルは些か腑に落ちない部分を感じていたが、ひとまず自身の疑問を脇において状況の確認を優先する。

「その遣いの方はどのような用件で来られたのでしょうか？」

「エル達が作った新型の幻晶騎士シルエットナイトについてだそうだ。詳しくはまだ私も聞いていない。まずは関係者を工房に集めて説明をするらしい」

その内容自体は予想が出来るものだったが、それゆえにエルは疑問に首を捻る。

「（セラーティ侯爵が連絡を入れたのは間違いないにせよ、なんでまた公爵にまで話が？

“侯爵位”では解決できんほどの難問があるのかな？）」

こちらからの要求が何かしらの困難を伴うのか、それとも新型機の扱いが難しいのか？

エルは思考の海に沈みかけたところで、今それを考えるのは無駄であることに気付いて小さく首を振った。

エルが顔を上げたところで、視線を下げたマティアスと目が合う。常は鋭さを放つ彼の目つきは今は優しさを湛え、下げられた眉がその印象を更に強めている。

「エルは本当に昔から幻晶騎士が大好きだな」

やや脈絡にかけた台詞を言いつつ、マティアスは自分の胸より下にある息子の頭をゆっくりと撫でる。

父親の態度に奇妙なものを感じたエルは少し首を傾げる。

「そうですね。父様もご存知のように僕はそのためにここにいるよ  
うなものですし。」

「こんなにも早く実物に触れる機会があるとは思いませんでしたけど」

「そうだな。そのためにエルが色々なことを学んでいるのも、ずっ

と頑張ってきたのも良く知っている」

だが、と言葉を続けながらマティアスは表情を引き締める。

その様子から、エルはこちらこそが父親の話したかったことだと気付いた。

「エルの作った新たな幻晶騎士は、これから大きな波紋を呼ぶことになるだろう」

それは予想の形を取ってはいるが、半ば以上の確信を持って語られた。

実際に、公爵位にある人物から遣いが来ていると言うこの状況だけでもそれを肯定するには十分だ。

「それは良いことばかりではなく、おそらくは困難も伴うことになる」

「……父様」

マティアスの危惧に察しがついたエルは、その愛らしい顔に少しの苦味を混ぜた。

エルは自分自身にその困難が降りかかる事は覚悟している。降りかかる先が騎操士学科の学生たちであっても、彼らは共に戦ってくれるだろう。

しかしそれが家族にも影響があるかもしれないことに、エルは一種の申し訳なさのような気持ちを持っていた。

エルの行動、ひいてはこの状況は純粹に彼自身のわがままに端を発している。

普通の子供のわがままであれば大したことは起こらない、精々が悪戯の範囲を出ることはないだろう。



しかしすでに事態はそれで済ませられる範囲を遙かに逸脱し始めている。

「エルなら、もしかしたらどんな困難も一人で解決してしまうかもしれない」

エルが内心大きく反省をしている間に、マティアスは前を向き再び歩き出していた。

眩きのような彼の言葉は、窓の外から響く雨音にも負けずにしっかりとエルの耳へと届く。

エルは小走りにその後を追いつながらマティアスを見上げた。角度的にマティアスがどのような表情を浮かべているのかはわからなかったが、彼は力強い声で断言する。

「だができるかも知れないと言って、何もかも自分ひとりで全てをこなす必要はない」

振り向いたマティアスとエルの視線がぶつかる。

マティアスは、彼には珍しいことにやりと、まるで悪戯をしかける子供のような笑みを浮かべた。

「とことんまで思うとおりをやってみなさい、エル。私もティナも、エルを信じているし応援している。」

「勿論、義父さんだって応援してくれるさ」  
「……はい、父様。もしかしたらお力を借りるかもしれませんが、そのときはお願いしますね」

彼らの前に工房の入り口が見えてくる。

いつもは嬉しさや楽しさと共にそれをくぐるエルにも、今日ばかりはその扉がまるで戦場への入り口のように見えていた。

工房へと辿り着いた彼らが目にしたのは、いつものように壁沿いに並んだ整備台に乗せられた幻晶騎士であり、そしていつもとは違い作業の手を止めた鍛冶師達だった。

普段であれば慌しく行き来し、整備台に設置された幻晶騎士を整備すべく様々な作業を行っている彼らだが、今は突然の知らせに浮き足立った様子で何事かを話し合っている。

良く見れば鍛冶師だけではなく騎操士ナイトランナーもあり、本当に関係者の大半がこの場に集められていることが見て取れた。

未だ内容が説明されていないことによる、期待と不安の入り混じった空気が工房の中を漂う。

エルネステイは例外中の例外であり、大半の生徒は公爵位にある人物との接点などもたない。

以前、陸皇ベヘモス討伐に貢献した一部の生徒が王都カンカネンで行われた叙勲式へと出席したが、それが精々と言ったところだ。

つまり伝えられたデイクスゴード公爵の名は、彼らにとっては雲上人からの呼びかけに等しく、それが大きなプレッシャーとなっている。

様々な不安や期待を抱くのも無理なからぬことだった。

エルは小柄な体格を生かして生徒の間をすり抜け、見知った人物の元へと向かう。

「親方」

エルが声をかけると、エドガーと話し込んでいた親方が髭を揺らして振り向いた。

「おう、<sup>エルネステイ</sup>銀色坊主か。聞いてるか？ 早速連絡が来たようだぜ。  
なにやら記憶よりも相手が大物になってる気がするが」  
「それだけ評価されたと考えるべきじゃないか？」

横殴りに襲い掛かる暴風雨を避けるため、締め切られた工房の中は想像以上に蒸し暑い。

手に持つ杖からゆるい風を起こしながら<sup>ダーウッド</sup>親方は器用に肩をすくめて見せ、エドガーは皮製防具の固定を緩めていた。

「思いのほか急展開でしたな」

「この雨ん中ご苦労さんとしか言いようがねえがな」

「間違ってもそれを直接言わないでくれよ、親方」

三人がやる気のないやり取りを交わしている間に、周囲から抑えたざわめきが上がる。

何事かと振り返れば、今しも工房へと見慣れぬ集団が入ってくる  
ところだった。

その集団が身につけているのは、明らかに作業をするのには向かない、全身をきっちりと覆う鎧に紋章の織り込まれたマント。

学生の騎操士は動き易さを重視して主に皮の鎧を身につけ、一部のみを金属鎧にしている者が多い。これほどの装備を身に纏うのは間違いなく正騎士の身分にあるものだ。

集団の人数は20名に上り、その全員が同様の装備を身につけている。小規模ではあるがそれは騎士団そのものだった。

一歩ごとに鎧を鳴らし、雨音に負けない騒々しさを立てながら入ってきた騎士団がその歩みを止める。

その威圧感に生徒達が思わず軽く後ずさった。

それに合わせたわけではないだろうが、騎士団の中から一人の騎

士が前へと進み出る。

彼は騎士団を代表する人物のようだった。

「学園より連絡のあった新型幻晶騎士製作に関係する生徒は、これで全てか？」

騎士の質問に、その場にいる生徒達の視線が戸惑いと共に交錯する。相手は騎士団の代表らしき人物、では学生のうち果たして誰が応じるのか。

あちこちで玉突き衝突を起こした視線は、ほどなく彼らの一角へと向けて収束していった。

背中に突き刺さるような多数の視線を受けた親方とエドガーが、嘆息を滲ませつつも風を受けた帆船のごとく前へと進み出る。

それに巻き込まれるようにして、彼らと会話していたエルも共に前へ出た。

「全員じゃねえな。正確にいやあ、あと錬金術師も何人が関わってる。」

直接作った鍛冶師と動かした騎操士、そして発案者ならここにそろってるがな」

後ろへと顎をしゃくりながらの親方の返答に、エドガーが思わず頭を抱え、エルがずっこけかける。

正騎士に対してすら持ち前のぶっきらぼうな態度を崩さない親方はある意味大物だった。

確認の言葉を聞いた騎士は一瞬表情の中に渋いものを含めたが、相手は基本的に大雑把な性格をしたドワーフであり何を言っても無駄だと判断して、そのまま話を進め始めた。

「よろしい、そこは十分だが……」。

君たちは騎操士学科の生徒だとわかるが、この子供はなんだ？」

やはりというべきか、エルが存在を見咎めた騎士が不審げな視線を向ける。

親方とエドガーがエルの事を紹介しようとして、しかしその困難さに開けかけた口を途中で閉じた。

思わず横を見た二人へとエルが笑顔で応じる。

騎操士学科の生徒にとっては、もはやエルがここに居るのも見慣れた光景であるが、冷静に思い出すと彼は初等部の生徒である。

今更ながら、ごく普通に彼がこの場に居ることの違和感を思い出し、親方の顔が引きつった。

説明しあぐねて停止した二人を見やり、なんとなく彼らの困惑が予想できたエルは普通に自己紹介を始めていた。

「僕は新型幻晶騎士に使われている技術の発案者兼、初期設計を担当した者です」

「……………子供の冗談にしては随分だな」

「んお、いや、事実だな。何ならここに居るやつらにでも、学園長にでも聞いてみたらいい。」

全員そろっておんなじ事をいうだろうな」

再起動した親方の肯定を聞いても尚、騎士の疑惑は晴れない。

周囲にいる生徒たちも心なしか同情めいた視線を騎士へと送っていた。

我がことながら無理もない、とエルすら騎士の困惑に同情に近いものを覚えるが、さりとてこのままでは埒が明かない。

「僕のことは後にでも確認していただければ。ひとまず、関係者に違いはありませんから」

「……まあいい。さて学生諸君、私は朱兔騎士団所属の騎士だ。デイクスゴード公爵閣下より命を受けこの場に居る」

学生の間にも再びざわめきが走る。国王に次ぐ、国内でも最上位の爵位を持つ人物からの遣い。

事前に話は聞いていたが、それでも改めて直接名乗られると、その衝撃は軽いものではなかった。

「閣下は新型の幻晶騎士について興味を持っておられ、実際に動いているところを見たいとの仰せだ。

そこで君たちには速やかに新型機をカザドシュ皆まで輸送してもらいたい。」

機体の整備のために必要十分な人数を同行して、だ」

その騎士の言葉に対する返答は沈黙。さきほどまでの興奮は一気に引つ込み、学生達を困惑に近い空気がつつんでゆく。

そんな気まずい空気を拭えないでいる生徒の中から、おずおずと親方が拳手をした。

「あー。ひとつ質問、いいか？」

説明を行った騎士が目配せで許可を示すと、彼はそれに応じて豊かな顎鬚あごひげを撫でながら疑問を呈する。

「なるべく急いで新型機が見てえ、って考えにや異存はねえが何せこの天気だ。

どう見たって幻晶騎士を動かすのには向いちゃいねえが、それでモカ？」

「当然だ、これは公爵閣下より直々に下された命令である。

君らも騎操士課程まで上り詰めたものならば雨天行軍の修練も積

んでいるだろう。

そんなことは手を止める理由にはならない、ただちに準備にかかって欲しい」

騎士の表情が徐々に険しさを帯びてゆく。

彼らがどのような意図を含んでいるのかはわからないが、彼の背後に従う騎士団はかなりの威圧感を伴っている。

そこにはまるで室内の空気が一気に粘り気を帯びたような、圧迫された雰囲気が始めていた。

しかし親方は大仰に首と腕を振り、実に気軽に言葉を続ける。

「いや、勘違いしないで欲しいが。まあ天候がキツイってのも否定はしねえが、それよりも機体への負担が怖い。

いくら訓練してるからつても、雨天行軍は困難だ。ましてやこの嵐だ。

新型はまあ、そんなにヤワじゃあねえが、だからと言って無茶をするにはまだまだ粗削りよ。

こちらとしても見せるのならできる限り良好な状態で持って行きてえ。

それにそのほうがお互いにとって有益だと、思っただがよ？」

我が儘で嫌がっているわけではないと言う親方の言葉に、騎士隊長は小さく頷いたものの、あくまでも硬い態度を崩さずにいた。

「それも一理はあるな。だが閣下は可及的速やかにそれを持ってくるようにと仰せた。

強行軍になるだろうし、問題が発生するかもしれないが、機体であれば持つて行く先で修理すればいいだけの話。

君達にも一緒に来てもらうのはそのためだ」

そこまで言われれば、学生も否とは言えなかった。明確に不可能な命令ならばともかく、この場合問題は困難であると言ふ事のみ。

もとより公爵位の人物からの言葉に学生の身分で抗うことは不可能だ。となれば後は全力を尽くすのみである。

了承するしかないものの、それを実行するための労力を思い、親方は髭を揺らすほどの重い溜息をつく。

「わかった、とつとと準備をしよう」

今度こそ深く頷く騎士に踵を返し、親方は後ろでうんざりとした表情を隠そうとして失敗気味の整備班へと指示を始めた。

人間と同じく二本の脚で歩行する幻晶騎士は当然ながら地面の状態から強く影響を受ける。

長雨が続き、地盤が緩んでいるこの状況で動かすためには騎操士の操縦技術以外にも相応の準備が必要だ。

足回りにいくらかの装備をつけ、水の浸入を抑えるべく関節部へ覆いが追加される。

さすがに、これまでも十分な訓練を受けた整備班だけあり、この作業そのものはさほど時間もかからないだろう。

整備班が作業にかかる間に、マティアスが騎士へと話しかける。

「同行する学生は整備班と騎操士だけか？ 動かすのならばそれで十分だと思うが」

マティアスは傍らのエルを気にしながら問い掛ける。

その意図に気づいた騎士の返答は明確だった。

「いいや、発案者にも来てもらおう。これほど小さな子供とは驚いた



が……事実なのだな？

……そうか、本当か。

ならば閣下が話を聞きたいといっているゆえ、必ず連れて来るようにと厳命されている。

たとえ初等部の生徒だとしても例外はない。一緒に来てもらおう」

発案者というからには新型機開発の中心人物のようなものだろうと予想していた騎士は、目前の少年を見て未だに半信半疑の心持ちで居る。

こんなことで学生や教師が嘘をつく理由は無いだろうが、こんな子供が、というのが彼の正直な感想だ。

エルは何の気負いもなさそうな様子で笑みを浮かべ、騎士の疑惑の視線を受け流す。

思ったよりもややこしいことになりつつある事態に、彼はすつきりとしなない気分だったが、小さく首を振ると気合を入れなおす。

「さて、公爵閣下はどんな話を始めるんやらな……」

誰にとっても幸いなことに、準備の間に雨脚が弱まり、出発するころには暴風雨はいくらかその勢いを減じていた。

相変わらず空は厚い雲につつまれ、勢いを弱めたとは言え雨は降り続けているが、それでも嵐の最中に行くことを思えば随分とましだろう。

ライヒアラ学園街から馬車の群れが出発した。

朱兎騎士団が乗ってきた馬車を先頭にして、学生たちを乗せた馬車がそれに続く。

彼らの馬車を挟むようにしてテレスタール・シリーズが横を歩い

てゆく。

全高10mにもなる金属の塊である幻晶騎士を輸送する手段は、それほど多くはない。

負傷機体を輸送するための特殊な馬車はあるが、それも機体を分解することで重量を分散して載せる形式のものだ。

自力歩行の可能な幻晶騎士は基本的に自走して移動する。いかに新型機が今回の目玉であるとはいえ、この場合も例外ではなかった。テレスタールの前方、そして集団の最後尾には朱兎騎士団所属のカルダトアの姿がある。

この道中においても魔獣に襲撃される危険はある。いざという場合に目的の新型機を戦わせるわけにもいかないため、これらは護衛戦力として随行している。

目的地であるカザドシユ砦はデイクスゴード公爵領に存在する。そこまでの道のりは、途中までは西フレメヴィーラ街道を行き、そこからデイクスゴード公爵領へと向けて分岐した経路を進んでいく。

その大半が石畳により舗装された道のりであり、悪天候を考慮してもかなり移動しやすいものだった。

特に自重があり二足歩行で移動する幻晶騎士にとって、雨によりぬかるんだ地面での行動はかなりの困難を伴う。

勿論、騎操士の誰もが雨天下の行動訓練を積んではいるが、だからと言ってその状況を歓迎する者は皆無であろう。

馬車と併走する幻晶騎士へと降りかかった雨が、機体の運動により発生する熱により蒸発してゆく。

その全身のあちこちから薄く蒸気をたなびかせながら、鋼鉄の騎士は黙々と歩行を続けていた。

順調に思えた道のりに変化があったのは街道から外れ、皆へと向かう道へと入ってからしばらく後だった。

森の中を切り開かれた道を行く彼らの耳に、明らかに馬車や幻晶騎士が立てるそれとは違う異音が届く。

「この音は……ちっ、こんなところで魔獣か。総員、周囲を警戒！  
防御陣形を組むぞ！」

断続的に響く地鳴りのような低く、重い音。

フレメヴィーラ国内においてこのような音を立てる存在は2種類しかない。幻晶騎士か、さもなければ魔獣だ。

幻晶騎士であれば吸気機構の駆動音が聞こえてくるはずである。そうでなくともこんな場所で突然現れるのはたいてい魔獣であると相場が決まっているが。

異音の発生源は明らかに彼らに向けて近づいている。

その規模から言って最低でも決闘級（幻晶騎士が必要な規模）と予想され、さらにそれが複数存在するかもしれない。

戦闘訓練をつんだ騎士はともかく、馬車を牽く馬はただの馬であり、明らかな異常の接近にパニックを起こしかけていた。

無秩序に暴走しないように御者が必死に手綱を取るが、馬の足並みは乱れ、それが結果として行軍速度の低下を招く。

速度を落とした馬車の列を囲むように防御陣形を組む幻晶騎士が走りながらも周囲の森を警戒する。

これだけの音を立てる規模の魔獣であれば近寄れば必ず森に異常があるはずだ、そう予想しての行動だったが、異音がどんどん接近してくるにも関わらず、森には目立った異常は見られない。

「……違う、これは周りじゃない……下からっ!? クソッ、まさか!？」

騎士の一人が地響きの響いてくる方向に気付いたのと、それが現れるのはほとんど同時だった。

幻晶騎士による防御陣形の内側で、突如として吹き上がるように地面が弾け、そこから細長い何物かが出現する。

それは飛び出した勢いのままに空中で放物線を描き、地面へと接触すると石畳を粉碎しながら再び地中へ消えた。

石畳を含む硬い地面に対しても全く抵抗を感じさせないその動きは、まるで水面から飛び出る魚を連想させるものだが、一瞬見えた姿は紐のように細長いものだった。

ただし直径は1mはあり全長は数十mほどの、という注釈が付くが。

1匹目を皮切りに次々と地面から魔獣が出現し、群れと化し地面を砕きながら馬車と併走を始める。

その数凡そ10匹。魔獣が移動した後には、石畳で舗装されていたはずの道が見るも無残に砕けていった。

「まずい、固まっていると下からやられるぞ!」

「幻晶騎士! 防御陣形を変更して……………」

予想外の方向からの襲撃に騎士団の対応が後手に回っている間に、魔獣が先手を取った。

馬車の左右に分かれるように現れた魔獣は、数が揃うと同時に馬車へと襲い掛かってくる。

現れたときと同じように、魔獣が放物線を描いて馬車へと踊りかかってゆく。

固い岩盤をも砕きながら進むことを可能とするその先端部は、馬

車を作る木材や騎士の着る鎧など全く問題とせず一緒に一緒に粉砕する。

魔獣の何匹かは馬車のご真ん中を貫き、何匹かは直接馬を襲い、一瞬でその姿を挽肉へと変えて地面へと消えた。

牽き手を失った馬車が蛇行し、壊れた馬車が倒れこみ、障害物となつて後続の移動を阻む。

俄かに混乱の只中に放り込まれた隊列は、完全にその動きを止めていた。

「固まっていると一網打尽にされるぞ！ 一旦馬車から出て………」

混乱の中でも騎士団は対策をとろうとしていた。

だがそんな努力をあざ笑うように、更なる異変が訪れる。

カルダトアのうち1機が剣を引き抜きながら援護に駆け寄ろうとし、突如として足元で発生した異常により中断を余儀なくされる。

それまでとは比較にならない勢いでカルダトアの足元が盛り上がり、そしてその中から先ほどの魔獣よりはるかに巨大な何かが現れた。

「な、なんだ……あれっ………！」

その光景を見た者は自らも危険の只中に居ると言うのに、一瞬の自失を避け得なかった。

カルダトアの足元から魔獣とおぼしき何者かが現れた途端、周囲には硬質な物体同士が擦れあい、岩を粉碎する耳障りな音が撒き散らされる。

形状こそこれまでの魔獣と同じく細長い紐状だが、新たに出現した魔獣の直径たるやおよそ6m 幻晶騎士の全高の半分を超して

いる。

その先端はびっしりと並んだ大量の甲殻によって覆われており、幾重にも重なって配置されたそれが、高速で互い違いに回転し続けている。

まるで地球におけるシールドマシンのように、回転し続ける甲殻が魔獣の進路上にあるものを粉碎し、挽き潰してその体内へと取り込んでいた。

それは地面であろうと、石畳であろうと、幻晶騎士であろうと一切例外ではなく。

現れた魔獣に“喰らい付かれた”カルダトアの脚部が、まるで濁流に飲まれたかのように一瞬にして粉碎される。

脚部を完全に失ったところで、残ったカルダトアの腰から上が宙を舞い、地面を盛大にバウンドして転がった。

その間にも巨大な魔獣は他の小さな魔獣と同じように、自身の勢いのまま放物線を描いて着地すると、泥を盛大に吹き上げ再び地中へと姿を消していた。

騎士も学生も、幻晶騎士の一体が大破したことに大きな衝撃を受けていたが、しかし彼らに悠長に固まっていられるほどの余裕は存在しない。

「馬車は放棄する！ 動けえ！ 立ち止まっていると足元から食われるぞ！」

壊れた馬車から這い出し、負傷者を移送しようとする彼らの足元から、無情にも地響きが近づいてくる。

相手が地中においては、いかに訓練をつんだ騎士であろうと有効な手段をとることができない。

彼らは思わず歯噛みするが、それは焦りを募らせるばかりで何の

解決にもなっていないかった。

「畜生！ このくそ魔獣め！ やってくれやがったな！！」

当然、被害にあつたのは騎士だけではない。学生が乗った馬車も襲われ、何名もの学生が巻き込まれている。

激昂する親方を引きずるようにして回りの生徒が馬車からはなれてゆく。

混乱の極みにある彼らをさらに追い込むように、魔獣による包囲網は刻一刻と狭まっていた。

### #35 反撃に出よう

魔獣が岩石を咀嚼する、甲高い異音が地中から響いてくる。

それは周囲の雨音を押し、騎士団と学生を包囲していた。

完全に足止めを喰らった格好の彼らは、動きの取れなくなった馬車から脱出し、足元の様子に注意しながらも攻撃陣形を取っている。魔獣が地中にいる間は攻撃することが出来ないため、襲い掛かってきたところで反撃するつもりだった。

緊張に喉を鳴らす彼らの中に、一際小柄で、両手に奇妙な武器を構える学生の姿がある。

エルだ。

「シェイカーワーム地砕蚯蚓……また厄介な魔獣が現れましたね」

シェイカーワーム地砕蚯蚓

簡単に言うと巨大な蚯蚓のみずの魔獣である。

その先端部は大量の小さな甲殻にびっしりと覆われており、一面に並んだそれを互い違いに回転させることにより、地面を破碎して体内に取り込んでいる。

その姿はさながら生体掘削機と言ふべきものだ。

取り込んだ土中の生物を、体内を貫通する長い腸で消化して養分をとっており、またそれを排出する際に推進力として利用することで、地中をかなりの速度で移動することが可能である。

そして何よりも、防ぎづらい地中から襲撃してくるため、魔獣の中でも極めて厄介な部類として認識されているのだ。

魔獣の情報を簡単に思い出しながら、エルは疑問に首を捻った。

「しかし、シェイカーワームは最大でも直径2mもいかなかったは



ず……。

あの巨大なのはなんなのでしょね？ 又シ？」

「知るか！ つつか何故おめえはそんなに落ち着いてるんだよ！」

「まあまあ、そう怒鳴らないでください、親方。やつらは地中にいることが厄介な魔獣。」

しかしその移動にはかなりの騒音を伴うので、音を調べればある程度の位置がわかります」

ギリ、と音がしそうなほど歯を食いしばり、親方がその口を閉じる。ダーガイテ

その表情は怒気に染まり、今にもその手に持ったハンマーを振り回して暴れだしそうな雰囲気だ。

最初の襲撃で学園の生徒達が何名か負傷している。できることならば彼は、自らの手で魔獣の頭を潰して回りたい気分だった。

「そう、ですから親方、少し下がっててください。ここへと、来ます」

目を伏せるエルの呟きを聞いた親方は、返事すら返さずに、彼に可能な最大の素早さで走った。

その間にも地中の振動は急速に接近し、今やエルの足元では溜まった水溜りが盛大に跳ねあがっている。

走りながら振り返った親方が何かを言うより早く、エルの足元から土砂を噴き上げながら魔獣が出現した。

さすがの親方もその光景に肝を冷やす。

シエイカーワームの接近を把握していたエルが、まさかそのまま喰われはしないだろうと思っではいるが、それでも心臓に悪い光景だった。

親方の心配を拭うように、シエイカーワームが飛び出して来る瞬間

間、エルはエアロスラスト圧縮大気推進の魔法を炸裂させ、吹き飛ばすように宙へと舞い上がった。

エルを追うような形でシェイカーワームの細長い身体が伸び、空中へと躍り出る。

その勢いはかなりのものだったが、空中で加速できるエルには届いていなかった。

エルはシェイカーワームのほうを向いた姿勢のまま、両手に構えた銃杖・ウインチェスターをまつすぐに構える。  
ガンフイクロッド

「いらつしゃいませ」

シェイカーワームは地中ならば自由に掘り進むことが出来るとは言え、空中に飛び出した後では向きを変えることができない。

まるでおろし金のように、甲殻がびつしりと並んで回転する魔獣の先端部へ向けて、エルは猛烈な勢いで魔法を連射する。

二挺のウインチェスターから火線が延び、次々にシェイカーワームへと突き刺さった。

撃ち放たれた徹甲炎槍ヒアシングランスの魔法が、着弾と共に炸裂する。

シェイカーワームの甲殻がいかに岩石すら砕く威力を持つとはいえ、連続して飛来する魔法攻撃の前に耐えることはできなかった。

指向性を持つ爆炎の魔法が、びつしりと並ぶ甲殻を吹き飛ばし、穴を穿つ。

数発の徹甲炎槍があげた穴へと、後続の魔法が続々と飛び込んでゆく。

それは柔軟性の高い魔獣の体内で炸裂し、爆発による激しい圧力で周囲の組織を吹き飛ばした。

細長いシェイカーワームの身体が先端から2割ほど短くなり、千切れとんだ先端部の後を追って地面へぶつかり、しばらく滑ってそ

の全ての活動を停止した。

シェイカーワームの先端部が吹き飛ぶのを確認したエルは、そのまま身を翻して地面へと着地する。

エアサスペンション  
大気衝撃吸収の魔法が泥と水たまりを吹き飛ばしつつ、エルの着地の衝撃を吸収する。

彼はそのまま、他のシェイカーワームに襲われる学生達を援護すべく、駆け出していった。

地中から襲い来る魔獣を相手にするため、騎士団も学生も密集隊形を取らずに、ある程度ばらけて構えていた。

シェイカーワームの攻撃で何より恐ろしいのは直接下から襲われることだ。彼らは予兆の知覚に全力を注いでいた。

「地響きに気をつける！ 近いと思ったら立ち止まらずに走れ！！」  
「来たぞ、右手だ！ 注意しろ！」

飛び退った彼らを掠めるように、次々にシェイカーワームが地上へと飛び出してくる。

地中でこそ凶悪なシェイカーワームだが、地上の生物を襲うためには土から出なくてはならない。

その時に自身の移動速度が仇となり、一瞬空中で無防備になる瞬間がある。そこに攻撃の機会がある。

「ミミズ野郎があ！ 調子に乗るなあ！！」

奇襲を受けてこそ怯んだ騎士と学生達だったが、一度体勢を立て直した後は、彼らは猛然と反撃に出ていた。

彼らが杖を振るたびに爆炎球ファイヤボールの魔法が飛び、雨中に紅蓮の花を咲

かせる。

爆発の衝撃で空中で姿勢を崩したシェイカーワームが地面に激突し、中には多数の魔法に直撃し空中で爆散するものもいる。

騎士と学生達は、シェイカーワームが地中に逃げないうちに素早く止めを刺していった。

シェイカーワームの皮膚は、地中の摩擦に耐えるためにある程度強靱ではあるが、先端部の甲殻と比べると耐久性は落ちる。

親方は爆炎球の衝撃で地面へ衝突したシェイカーワームのうち1匹に駆け寄り、両腕に渾身の力をこめて手に持つ槌を振り下ろした。

「よくもうちのモンにかましてくれやがったなあ!!」

ドワーフ族の強力な筋力をいかに発揮した槌の一撃が、甲殻に覆われていない部分へと打ち込まれる。

金属製の槌は、それが持つ破壊的な運動エネルギーを存分に魔獣へと振舞った。

耐え切れなかった魔獣の皮膚が即座に潰れ、その内部へと槌の先端が埋まってゆく。

浸透し、拡散する衝撃が内部組織をずたずたに潰し、槌を打った部分で魔獣の身体を分断した。

発声器官をもたないシェイカーワームが、しかしまるで断末魔の叫びを上げるように一際大きく痙攣し、力を失いその身を横たえる。

親方は魔獣の身体に埋まり、体液にまみれた槌を力づくで引っこ抜くと、それを軽く振り回してから構えなおした。

「おうらあ！ 次だ！ じゃんじゃん持ってこい！」

その気迫溢れる姿に、魔獣よりもむしろ学生達が恐れをなしてい

たのは余談である。

小型のシェイカーワームは騎士と学生の反撃により討ち取られつつある。

彼らが落ち着いて小型魔獣に対処することが出来たのは、シルエットナ幻晶騎士イトの奮戦によるところが大きかった。

彼らが居る所から少し離れた場所では、エルに“又シ”と称された巨大なシェイカーワームが大暴れしていた。

幻晶騎士部隊は、又シが小さな人間よりも、巨大な幻晶騎士を目標にしていることを悟ると、即座に人のいるところから引き離しにかかった。

シェイカーワームにはろくな知能がない。又シはまんまと誘導に引っかけり、森の中へと誘い出されていた。

幻晶騎士の半分以上の直径を持つ、又シの巨大な口吻が地面も、森も関係なく破砕しながら突き進む。

木々が移動の邪魔になり、幻晶騎士にとっては必ずしも有利な場所ではなかったが、又シは生身の人間では間違っても相手に出来る存在ではない。

不利は承知でも、彼らから離れた場所で戦う必要があった。

「こんのおおおお!!!」

雄叫びを上げながらヘルヴィの駆るテレスタールが突進する。

両肩の上に展開された背面武装バックウエポンが唸りを上げ、矢継ぎ早に発射された法弾が宙に光芒の尾を残す。

法弾は狙い過たず又シの胴体に直撃してゆくが、巨軀を誇るだけ

あつて又シの耐久性は通常のその比ではなく、十分な効果があつたようには見えなかつた。

「なんなのこれ！ ちょっと反則じゃない!？」

「多少当てたところで、びくともしないな」

又シの全長は100mを越そうかというものだ。

長大な体軀をうねらせながら泳ぐ又シ相手には、攻撃を集中させることが出来ず、散発的なものに留まっている。

これほどの質量を持つていては、小型シェイカーワームに使つたような方法は使えないだろう。

魔導兵装シルエットアームズによる法撃の効果が薄いなら、とカルダトアが剣で斬りつけるが、幻晶騎士の剣をしてすら又シには十分なダメージとはいへなかつた。

幻晶騎士に比べて、又シからの攻撃はその大半が致命的な威力を持つている。

又シの突撃に捕まりかけたカルダトアが、とつさに盾でそれを防いだ。

金切り声のような音が響き渡り、接触面から盛大に火花が舞い散る。

盾の表面を、高速で回転する甲殻が鑢やすりのように削り取り、紙を干切るより容易くそれを破砕した。

カルダトアにとって幸運だったのは、又シの突撃に吹き飛ばされ、盾と左腕を粉碎された代わりに胴体は無事だった事だ。

「無事か!？」

「ぐぬうつ、盾と左腕を失つたが、まだ動ける、剣は振れるぞ!」

ふらつきながらも腕を失ったカルダトアが立ち上がる。  
それに乗る騎操士ナイトランナーの表情には、衝撃と状況による苦しさが入り込んでいた。

「テレスターレ、全員俺のところに集まってくれ！」

又シが全てを粉砕する凄まじい轟音が響く中、機体に設置された拡声器を使ってエドガーが叫ぶ。

「うねり暴れる又シの身体をかくぐるようにして、4機がエドガー機の元に集まった。」

「おい、何をするつもりだよ」

「ばらばらに攻撃しても効果は薄い。法弾を集中するんだ。」

全員で4連装形態を取って、やつを正面から叩く。動きを止めない」と

火力を集中させるためとは言え、真正面からの攻撃を提案するエドガーの言葉。

カルダトアに乗る騎操士達ならば、その言葉に正気を疑うか、そもそも提案されることすらなかったであろう。

だがテレスターレにはそれを為しうる能力があることを学生達は知っている。

操縦席でぎらつくような笑みを浮かべた彼らは、力強い頷きと共に了解の返事を返していた。

「ようし、いっちょうやつちまうかね」

「テレスターレの全力、とくにご覧あれってね」

テレスターレ全機が構えていた近接武器を収納し、盾を投げ捨て

た。

そして腰に挿した魔導兵装を両手それぞれに持ち、さらに背面武装を展開する。

計4門の魔導兵装を構えるこの状態は、文字通りに4連装形態と呼ばれ、魔導兵装を同時に多数運用可能なテレスターレの真骨頂ともいえる構えだ。

幻晶騎士が一箇所に集まったことにより、又シは惹かれるようにそこを狙ってきた。

のたうつ巨躯の進路上にテレスターレが集合しているのを見たクルダトアが、慌てて警告する。

「何をやる気だ！ 危険だぞ、散開しろ！」

「魔導兵装を集中させて撃ちます！ ヤツが怯んだら、追撃をお願いします！」

又シを迎えるように横並びに展開したテレスターレ部隊が、魔導兵装の照準を近づいて来る又シの口吻、そのど真ん中に合わせる。

「撃てえー！ー！ー！ー！！！」

テレスターレ5機で計20門、通常の幻晶騎士にして10機分以上に相当する魔導兵装が、一斉に火を噴いた。

キャパシティフルム蓄魔力式装甲に板状結晶筋肉を追加搭載したことによる、莫大なマナ・プール魔力貯蓄量に支えられた凄まじい密度の弹幕が、降りしきる雨を灼いて撃ち放たれる。

煌く尾を曳いて飛翔する法弾が、又シへと殺到した。

十分に照準を合わせて放たれた法弾は、狙い通りに又シの口吻へと直撃する。いかに悪食極まりない又シとは言え、オバード・スヘル戦術級魔法によ



る法弾を食べることは出来なかった。

一拍の後、又シの先端部が咲き乱れる爆発の花に包まれる。

テレスターレの全力を懸けた絶え間ない法弾の嵐が、凄まじい勢いで前進していた又シの速度すら減殺し、そしてずらりと並んだ甲殻のいくらかを吹き飛ばす。

さしもの又シも、苦痛から逃れるように身を捻った。

爆発の衝撃にあわせて、先端部を地面へと向けると地中へと逃れようと掘削を開始する。

しかし地面を破砕するはずの先端部は、先の法撃によりかなりの損傷を負っていた。

一部が欠損したことにより思うように地面を掘れず、その巨体が大地に突き刺さったような格好でうねる。

「今だ！ 逃すなあああ！！！」

それほどの大きな隙を見逃す者は、その場にはいなかった。カルダトアが剣を振り上げ、槍を構えて突撃する。

テレスターレ部隊も相当量の魔力を消耗していたが、ここが正念場であるとばかりに、残る力を振り絞り、近接武器を構えて走る。

法撃により負った傷へと何度も剣が突きたてられ、構えられた槍が突き刺さってゆく。

地中へと逃れようと目もかく又シが見る間にぼろぼろになっていた。

テレスターレが、その両手に持つ斧ハルバードを振るう。

その身体に張り巡らされた網型結晶筋肉が、弦楽器の如き調べを奏でながら、強力無比の力を發揮する。

激しい勢いと遠心力を与えられたハルバードの先端が、唸りを上げて魔獣の身体へと叩き込まれる。

それはついに、限界近くに達していた又シの身体を裂き、致命傷となって刻まれた。

活力を失った巨躯が大地に倒れ、魔獣から流れ出した体液が雨土と混じって撒き散らされる。

強大な魔獣を退けた騎操士達が機体の腕を振り上げて雄叫びを上げた。

彼らが勝利の喜びに浸るのも束の間、すぐさま騎士や学生の援護に戻るべく、最初の襲撃地点へと向かう。

森から出る頃には、すでに大半のシェイカーワームは騎士と学生の怒涛の反撃の前に駆逐されており、ほどなくして街道は元の静寂を取り戻すのだった。

「やれやれ、クソミミズめ、厄介なことしてくれやがって」

大小ミミズの襲撃を退け、一息ついたところで親方はしかめっ面でばやいていた。

彼の目の前には残骸と化した馬車があり、ごっそりと身体の一部を食われた馬の死骸がある。

「全員が移動するだけの馬車は確保できそうか？」

「無理だな、とても応急修理で直る状態じゃねえ。頑張っても半分が動けば恩の字よ。」

「そもそも俺達は鍛冶師で、木工は専門外だしな」

質問した騎士にも、ある程度予想が出来ていた答えに悩ましげに腕を組んだ。

魔獣との戦いで移動手段である馬車をいくらか潰されたのは、彼らにとって一番の痛手といってもよい。

「負傷者の搬送を優先するぞ。動ける馬車は怪我人を乗せて先に力ザドシユ砦へ向かってくれ。」

車体は無事だが馬がない？ 幻晶騎士で牽け。

ここから少し街道を進んでそれたところに村がある。我々は一旦そこへ向かうぞ。

代わりの脚が調達できればいいんだがな……」

その騎士の指示に従って、全員が行動を開始した。

親方が忌々しげにシェイカーワームの死骸を蹴り飛ばすが、それで何かが好転するわけでもなく。

唯一、雨が随分と小降りになってきたことだけが、これから徒歩で移動する彼らにとっての救いだった。

結局、近隣の村では移動手段を確保できず、カザドシユ砦から迎えの馬車を出すことで事態を解決した。

あの後も何度か魔獣との遭遇があったが、さすがにヌシほどの大物が早々現れるはずもなく、問題なく幻晶騎士の戦闘力の前に蹴散らされてゆく。

予定から遅れること数日、ようやく学生とテレスターレがカザドシユ砦に集結していた。

「おうし、テレスターレの点検をはじめんぞ！ 特に背面武装周りは念入りに見とけ！」

砦内に設置された工房へとテレスターレを運び込んだ親方達は、

早速機体の点検を始めている。

予定外の大物との戦闘を行ったテレスタールは、それだけ十分な整備が必要だった。何しろ、この場所を訪れた本来の目的はテレスタールのお披露目である。

学生たちは、あくまでも整備班である自らの作業に手を抜くことはしない。念入りに機体の整備を行っていた。

その様子を、皆付きの鍛冶師や騎士達が興味深げに見ている。

彼らも簡単な事情は把握している。テレスタールを実際に見るまでは、学生が開発した新型機体ということで期待半分、疑念半分といったところだったが、ここに来てその評価は大きく変化を見せていた。

特に実際にその戦いを目にした護衛の騎士の間では、テレスタールが制式量産機として普及することを望む者が、少なからず現れ始めていた。

少なくとも同様の機能を組み込まれた機体が普及することになるだろう、彼らはいずれ来るその時へ期待し、今は目の前の作業を守る。

さすがに皆と称されるだけあり、工房の広さは学園のそれよりもはるかに広い。

朱兎騎士団所属のカルダトアが並ぶ中、さらにその横にテレスタールがあり、壮観な眺めを作っていた。

林立する機体の間を、銀色の残像を残して何かが駆け抜けてゆく。今にも踊りだしそうな様子で、エルネステイは小粋なステップを刻んでいる。

エルネステイは鍛冶師ではないため、整備中はやることなく、周辺を探索して無聊を慰めていた。

学園よりもはるかに規模の大きな工房、そしてずらりと並ぶ幻晶騎士の姿に、彼の顔にはいつもより十割り増しの笑顔が浮かぶ。

「（やっぱり格納庫ってなあええなあ。出撃シーンからみてなんぼやねー）」

妙な方向でこの世の春を謳歌するエル元へ、騎士がやってくる。傍目からは幻晶騎士をみて喜ぶ子供そのままの姿に、彼は微笑ましいものを見たという笑顔を浮かべながら告げた。

「公爵閣下が君のことを呼んでいるよ。一緒に来てもらえるかな」

振り向いたエルは、例えるならば部長に報告に行く開発主任のような、自信と不安と熱意と面倒さを混ぜ合わせた表情をしていたという。

時は学生がライヒアラ学園街を出発したしばし後にさかのぼる。ライヒアラ学園街は、ライヒアラ騎操士学園を中心として街を形成している。

そこには住宅があり、商店がある。

そんな比較的整然と立ち並ぶ町並みの中を、足早に進む一人の男性がいた。

天候はやや落ち着き始めているものの、未だその雨脚は強く、男は難儀しながらとある建物へとたどり着く。

街の一角にある、ごく普通の建物。商店というわけではなさそうなので、住宅なのだろう。

男は手馴れた様子で鍵を開けると、家の中へと駆け込み、そこで

ようやくと言った雰囲気で一息ついた。

彼は雨具を脇に置くと、雨に濡れた服もそのままに家の奥へと進む。

奥の部屋では、数名の男女が何事かを話し合っていた。

彼らは突如として入ってきた男に対し、特別驚いた様子は見せなかったが、それでもその常でない慌てた様子に訝しげな視線を返す。

「どうしたんだい、こんな雨の中急いでさ」

部屋の一番奥にいた女性が、不審げな様子で男へと問いかけた。

男はそれに対する返答として、前置きもなく本題を切り出す。

「伏せ鼠から緊急の報告が上がっています」

女性の、元からきつめだった切れ長の目つきがさらに引き絞られ、その雰囲気はまるで鋭利な刃物を連想させるものとなる。

思わず相對する男も、周囲にいる彼女の部下たちも急に息苦しくなったような錯覚を受けていた。

「どうした？ 学生が革命でも起こしたかい？」

「デイクスゴード公爵が、例のものに目をつけたようです。」

学園から大急ぎで引き上げ、手元に呼び寄せたとの報告が入っています」

一瞬、その表情に苦々しいものがよぎる。

彼女はそれ以上感情をあらわにすることはなかったが、椅子に深く腰掛けると腕を組み、考え込むしぐさを見せた。

「……先手を打たれたようだねえ。」

未完成の部分があるって話だから悠長に静観してたツケが回ってきたってことかい」

「アレはすでに一部の学生と共に公爵領へ出発したとのこと。やられましたね」

幾分、皺しわの目立ち始めた彼女の表情に、さらに深い皺しわが追加される。

彼女は些か忌々しげな様子で机の上の書類の束を手にとると、横にいた部下へと乱暴にそれを投げつけた。

「フン、そんなことをばやいても始まらないさ。」

この報告は急いで本部の連中に回しな。あと連絡だ、最優先で陛下に報告を上げるように、とね」

いつものことなのだろう、部下は手馴れた様子で飛んできた書類の束を掴むと、了解を返してすぐさま部屋から飛び出していった。

「……さて、あんまり悠長には構えてられないね。」

陛下のご判断次第では、私らが動かないといけないかも知れないよ」

「我々が、直接、ですか……陛下も、そこまで……」  
「覚悟はしておきな。あと、準備が必要だ、全員呼び戻しとして」

強い視線と共に返された言葉に、男は無言で頷くと、踵を返して部屋から出てゆく。

ほどなく部屋に残っているのは彼女一人になった。

腕を組み思考に沈む彼女はいかなる予定を見ているのか。

目を閉じ、厳しい表情を浮かべたその様子からは、恐らくは愉快な想像ではないのだろうと予想がつく。

「さあて、忙しくなりそうだねえ」

言葉の内容とは裏腹に、意外なことにその響きは多分に愉快そうなものを帯びていた。



### # 36 彼らはその頃

雨の舞い散るライヒアラ学園街にある大通りを、雨具に身を包んだ少女少女が歩いてゆく。

時刻は朝、授業の開始までにはやや早い、街に住む学生達がそろそろと登校してくる時間帯だ。

そんな登校途中の学生の中に、アーキッドとアデルルトの双子の姿があった。

互いに挨拶を交わしたり、雑談しながら和やかに歩く学生達の間にあつて、不機嫌な空気を撒き散らしている双子は周囲からやや浮いている。

「しっかしエルも薄情だよなあ。まーた置いていきやがった」

「先に説明くらいしてくれてもいいーじゃない。ねー？」

彼らはずい先ほど、いつものようにエチエバルリア家へと向かい、エルネステイに登校の誘いをかけようとしたところで、セレスティナからエルが騎操士学科の生徒達と共にディクスゴード公爵領へ向けて出発したことを知らされたのだ。

昨日エルは教室へと戻ってこなかったが、さすがにそのままどこかへ行くとは思っていなかった双子は突然の旅立ちに驚き、さりとてティナに当たるわけにもいかず、なんともいえない気分で歩いていた。

ベヘモス  
陸皇亀事件に続き、彼らがエルに置いてきぼりを食らったのはこれで二度目になる。

今は彼らも、以前のように戦う力がないわけではない。

シルエットキア  
幻晶甲冑の動作にも十分に慣れ、最近ではエルと共にシルエットナイト幻晶騎士の作

業にまで参加しており、共に過ごしていた。

それがまさか再び置いていかれるとは思っていなかったため、彼らは憤懣やるかたないと言った様子だった。

今回は突然の話であり、エルを責めても仕方のないところはあるのだが、彼らもそこまでは知らない。

「つつつても昨日の内に出たんじゃ、今更どうしようもねえなー」

無然とした様子でキッドが腕を組む。

キッドの横で膨れに膨れていたアデイが、不意に握りこぶしを固めて振り返った。

「諦めるなんて駄目よ！ 私たちもこれまでとは違う、幻晶甲冑があるんだから！

探し出して、追うのよー！！」

「……で、行き先は、どこだよ？」

「え？ えーと、デイクスゴード公爵領だって、ティナおばさんが……」

「公爵領の、どこだよ？ しかも行き方わかんねえんだよなあ」

ぐう、とよくわからない唸り声だけを残し、勢い込んで拳を突き出したポーズのまま、アデイが言葉に詰まる。

幻晶甲冑を使えば、並の馬を凌ぐ速度で移動できるとはいえ、行き先がわからないのでは意味がない。

ティナもそこまで詳しくは教えてくれなかった。

「俺も納得いかねーけど、一週間もすれば戻ってくるって話だし、待っておいこうぜ」

むすつとした響きを残したキッドの言葉に、膨れたままアデイが

口を閉じる。

「……エル君、戻ってきたらしばらくの間、抱き枕の刑ね」

ぼそりと呟かれたアデイの言葉に、キッドは直前まで抱いていた怒りも忘れ、彼の妹を宥めるエルが払うであろう苦勞を想い、天を仰いだ。

このとき馬車で移動中のエルが悪寒に襲われたかどうかは、脇に置く。

カザドシユ砦に向かった学生達は雨雲を連れて行ったのだろうか、彼らが発した後、ライヒアラ学園街を覆う雲は序々に穏やかさを取り戻していった。

空に流れる厚く黒い雲はその面積を減らし、所々から明るい部分が顔を覗かせている。

雨ももはや小雨と言ってよく、街のあちこちで住人達が嵐に荒らされた箇所を片付ける光景が見られた。

ライヒアラ騎操士学園でも、校舎のいたるところに嵐の爪あとが残っている。

嵐の本番を抜けた現在、授業を進める前に、生徒と教師が総出で校舎の修理を行っていた。

と言っても、彼らに本格的な修理が出来るわけではない。

後々本職の人間を呼ぶことにはなるだろうが、その前に応急の処置を施しているのだ。

学園の敷地は規模相応に広いため、簡易な作業であっても大勢の人数が必要になり、数日の間はこれに忙殺されることになった。

大気を切り裂く鋭い飛翔音を残し、鏝<sup>やじり</sup>型の物体が校舎の屋根の上へと飛びあがった。

鏝は屋根の上へと落ちると、がしやりと音を立てて錨<sup>いかり</sup>型へとその形を変えた。そのまま先端部は屋根の上の突起に引っかかり、固定される。

間もなく、屋根の下から幾つもの歯車が噛み合う、騒々しい音が響いてくる。

巻き上げ機構により、鏝に結び付けられたワイヤーを収納しながら壁を蹴り走った幻晶甲冑が屋根へと上ってきた。

危なげなく屋根へと上った幻晶甲冑が背負っていた資材を降ろすと、屋根の上で待っていた学生達がわらわらと集まってきてそれを受け取る。

彼らはそのまま屋根のあちこちで補修作業を開始した。

幻晶甲冑に乗ったキットも、中でも大きな資材を手にとると、一緒に作業に加わっている。

「しかしこれはすごいな。幻晶騎士とはまた別の、小回りの効く故の便利さと言うか……」

作業に勤しむ幻晶甲冑を見上げていた生徒が、腕を組みながら呟く。

五指を備え人と同様の器用さを持ちながら、人を遙かに上回る力をも持つ幻晶甲冑は、こうした作業において極めて大きな戦力となっていた。

幻晶甲冑は小型の幻晶騎士と言った趣の、鎧を模した外見から戦闘用途を想定しがちだが、小回りが効く分それ以外の用途にも高い適性を持つ。

「まあ数少ないんで、あちこちに呼ばれていつそがしいけどな」

力仕事は言うに及ばず、修理での工作作業、果てはワイヤーアンカーを用いて高所での作業すらこなすその万能性は、周囲の人間を驚愕せしめると共に、それを扱うことの余りの困難さに怨嗟の声をあげさせたと言う。

それは、建設重機など概念すら存在しないこの世界において、初めて誕生した万能の建機といえた。

「是非使えるようにして、うちの建築学科において欲しいな」

「おいおい、それなら鍛冶師学科にもだろう、打つの楽になるぜ」

「いや、服飾学科にだね」

「何を織る気だよそれ……」

一度雑談に入ると止まらない学生達に、キッドは面倒くさそうな様子を隠しもせずと言う。

「あー、とりあえず目の前の分、片してしまおうぜ」

そういった光景は、キッドの行く先々で見られるのだった。

屋根の応急処置を終えたキッドは、断りを入れてから休憩を取っていた。

幻晶甲冑の前面装甲を開くと、内部に溜まった蒸し暑い空気が一気に入れ替わる。

「あつちー。蒸すなんてもんじゃねえぜ、これは」

流れ込んだ外気が彼の身体を撫でてゆき、身をつつんでいた熱気

が冷まされる感覚に、彼は大きく息をついた。

余裕のほとんどない、身体に密着するような状態で装着する幻晶甲冑を動かしていれば、どうしても内部には熱がこもってしまう。

雨の続く日々は大気に飽和寸前の湿度を与えていたが、それでも彼には外の空気に当たったほうが、幻晶甲冑を着込んだままでのり遙かにましに思えた。

流れ込む空気で少しでも涼を得るべく、手を団扇代わりに扇いでいたキッドの下へと、もう1機の幻晶甲冑　アデイ機がやってくる。

「キッドー、そっち終わったー？」

キッドは風を起こしていた手をひらひらと横に振った。

「おう、とりあえず一旦休憩だ。これ着て動くの、暑すぎだ」  
「確かにねー」

圧縮空気が噴出する音と共に、横に並んで座るアデイ機の装甲が開く。

アデイは機体から降りると、タオルで汗を拭いながら機体の脚を椅子代わりに座り込んだ。

「うーん、役に立つのはいいけど、ちょーっと私たち大変すぎない？」

「こいつを動かせるのが俺達しかいねーっつーのがまず間違ってるな」

「なんだっけー？　どうにかしたら、皆でも使えるようになるんだよね？」

「そのへんはエルがいねーとどうにもならねえよ」

その時、彼らを探していたのだろう、彼らの担任である教師がやってきた。

「おーい、二人とも……」

「まーたお呼びかよ」

「いそがしー！ あとでなんか奢ってもらおうよ」

「本当だ、しばらくは奢ってくれてもいいくれーだな」

二人は幻晶甲冑を起動させると、再び作業へと向かう。

彼らの活躍もあり、作業自体はほぼ終わりに近づいている。

もうひと頑張り、と彼らは気合を入れなおすのだった。

「むー」

「よかった、熱は下がったみたいね」

無事に補修作業を終わった後、数日間の頑張りが祟ってか、アデイは風邪を引き寝込んでいた。

最初こそ熱が出ていたが、それはもう治まっている。

すると、普段無駄なほどの元気が目立つ彼女だけに、大人しく寝ていることが出来ずに落ち着かない様子だった。

「お母さん、もう大丈夫よ！ 熱も下がったし、だるさもなくなっ

……もがっ

「駄目よ、風邪は治りかけが肝心なのよ。もっとちゃんと寝ていなさい」

ベッドから抜け出そうとするアデイを、彼女の母イルマタルが押し戻す。

無理矢理布団をかぶせられたアディは、そろっと頭だけを外に出すと、上目遣いに懇願するような目線を母親へ向けていた。

「明日にはもう大丈夫でしょうから、今日は大人しくしなさい」

苦笑を浮かべてアディの髪を撫でながら、普段は子供達に甘いイルマもこのときばかりは鉄の意志を貫く。

「じゃあ、ちゃんと治るようにお薬を置いておくわね。寝る前に飲んでおくのよ」

そういつて、イルマはベッドの傍らに、水と薬の載った盆を置く。それを見たアディの表情がしつかりと引き攣った。

イルマが持ってきた薬は、風邪に対するものとしては一般的な薬草を用いたものだが、その効き目と比例するかのように猛烈に苦い。一昨日あたりの、熱があったときならば我慢してそれを服用していたアディも、峠を過ぎ去った今、再びそれを用いる勇氣はなかった。

むしろ彼女には、服用したほうが体調が悪くなるのではないかとすら思える。

「だ、だ、大丈夫よお母さん！寝る、ゆっくりと寝て治すから、お薬はいらないわ！ー！」

「ええ、お薬を飲んでからね。アディ、このお薬は苦手？ならお母さんが飲ませてあげるわ」

薬を用意する、イルマの様子はどこことなく嬉しそうだ。

彼女の子供達は普段は驚くほど手がかからない。年頃の子供が持つはずの無尽蔵のやんちゃ心とスタミナは、大事件を連続させるエルネステイとの行動に費やされ、かつ周囲へのフォローも彼が勝手に



に終わらせている。問題の大半が親の元まで届くことがない。それだけに、こうして子供の世話を焼くことが、彼女は楽しかった。

それが病気の看病であることに、彼女はほんの少しの申し訳なさを感じるが、この機会に彼女はアデイを十分に甘やかすつもりである。

しかしそれと薬の件は全く別の話であり、つまりイルマは容赦なくアデイに薬を飲ませ。

アデイの悲痛な叫び声が、家から通りに響き渡った。

あけて翌日には、学園初等部の教室では久しぶりに双子の姿が揃っていた。

苦味に満ちた薬から開放されたアデイが、奇妙なハイテンションを示していたが、そこには概ねいつもどおりの日常が戻っていた。

授業を受け、休み時間にクラスメイトと他愛のない談笑に興じ、放課後には通りをひやかしながら菓子を買う。

いつもどおりのはずの、日常。

しかしそこには大きな欠落が存在した。

「まだ、帰ってこないのかな……」

思わず、と言った風に漏れ出た言葉を聞きとがめ、横に座るアデイの顔を見やったキッドは、そのまま視線を通りへと移した。

様々な人が行き交う大通りでは、露店の店主が客を呼び込み、道行く人がそれをひやかしている。

手に持つ菓子の甘さを味わいながら、キッドも首をかしげた。

「うーん、確かに遅いな。聞いた話だと、もうとっくに帰ってきてもいい頃なんだが」

エルネスティと騎操士学科の生徒がカザドシュ砦へと出発してから、はや一週間以上が経過している。

最初に聞いた話では、往復に一週間程度と言う事だったのだが、彼らの姿は影も見えない。

それは、エル達が道中に地碎蚯蚓シェイカーワームと遭遇したことにより、予定が大幅に狂ったことが主な原因のだが、そこまでは彼らのあずかり知らぬことである。

連絡手段も持たない彼らは、ただ待つことしか出来なかった。

彼らはいま一つ晴れない気持ちを抱え、しかしできる事もなく時間過ぎる。

更に数日が過ぎた後、ようやく学生達がライヒアラへと戻ってきた。

馬車の群れが、ライヒアラ学園街の門をくぐる。

その護衛についていたのであろう、幻晶騎士・カルダトアが馬車と別れ、城門付近の工房へ入っていった。

馬車はそのまま大通りを進み、ライヒアラ騎操士学園へと入ってゆく。

「おう、懐かしき我らが古巣よ」

「一週間ちよつとしか経ってねーっすよ、親方」

「気分だ、馬鹿野郎」

長距離の移動で凝り固まった手足をほぐしながら、親方を始めと

した騎操士学科の面々がばらばらと馬車より降りてくる。

人がおらず、静かだった工房が俄かにいつもの活気を取り戻していった。

だが、そこには出発時に存在したものが、ない。

彼らと共にカザドシュ皆へ向かったはずのテレスターレの姿が、1機も見当たらなかった。

護衛として付いていたのは全て朱兎騎士団所属のカルダトアのみ。それも全て待ちの入り口で分かれている。

現在、彼らは全くの“手ぶら”で戻ってきたのである。

それだけではない。

ここに居るのは騎操士学科の学生ばかり。

出発時には彼らと共にいた、一際小柄な少年の姿を見つけることは、できなかった。

学園の授業が終わり、放課後を過ぎ、傾いた日がオービニエの山に沈んでゆく頃。

中等部の生徒達が暮らす学生寮にある自室で、ステファニア・セライティ（ティファ）はその日の課題をこなしていた。

彼女は時折顔にかかる見事な金髪を邪魔そうに後ろに戻しながら、黙々とペンを進める。

しばらくして課題の大半が終了し、彼女が一息ついたところで来客が現れた。

ルームメイトが戻ってきたのかと思っただが、慌しく扉がノックされるのを聞きつけ、その可能性を否定する。

扉へ向かいながら、彼女は少しの戸惑いを見せる。

今日は生徒会に関係する作業はなかったはず、何かしら緊急の案件ができたのか　そう首を傾げながら、彼女は来客を迎えるべく扉を開いた。

「姉さん……！」

そこに居た、必死の形相を見せる自分の弟妹の姿を見て、彼女は珍しく、目を丸くして固まった。

ティファは突然自分の下を訪れてきた腹違いの弟妹を、邪険にする事もなく部屋へと招き入れていた。

珍しい事もあるものだ、と彼女は笑顔の裏で思う。

最近は以前のようなわだかまりがなくなり、ずいぶんと仲がよくなってきたとは言え、双子が彼女の自室までやってきたのはこれが初めてである。

とは言え、遊びに来たようには見えない。

常と変わらぬ、どこか面倒くさそうな態度を見せる弟と違い、考えていることが表に出やすい妹をみれば、何かしらの、それも火急の頼みをもってここを訪れたことは明白だ。

彼らが話しやすいように、ティファは飲み物を用意しようとしたが、それよりも先にアデイが勢い込んで身を乗り出した。

「姉さん、力を貸して欲しいの……！」

「ええ、話はちゃんと聞くから、まずは少し落ち着きなさい。

飲み物を用意するわ、少し待ってね」

どうどう、とキッドがアデイを宥めている間にティファは紅茶を淹れて戻ってくる。

二人はそれを飲み、少し落ち着いてから、それでも早口に用件を

切り出す。

「……それで、親方達は皆から戻ってきたのに、そこにエル君が……エル君だけが居ないの」

途中まではにこやかな表情で話を聞いていたティファも、話が進むと共にどんどんと真剣な表情へと変わっていった。

テレスタールの完成から、父親であるヨアキム・セラール侯爵への連絡、そしてデイクスゴード公爵からの召喚、学生達の帰還という説明が終わる頃には、ティファは目を伏せて考えこんでいた。

「そうなの……。お父様から少しは話を聞いていたけど、そんなこと……」

彼らの父親が何を考えているのかはわからないが、エルが何らかのトラブルに巻き込まれているのは間違いないと思える。

以前、彼女達中等部の生徒は、エルの活躍により窮地を救われたことがある。

次はこちらが彼のために動く番だ、ティファは強い決意を胸に抱き、決然とした表情で顔を上げる。

「行きましょう」

「姉さん？」

「父様の元に、行きましょう。今ならカンカネンの別邸にいらっしやるはずよ。」

「……せめて理由だけでも聞かないといけないわ」

キッドとアディも、力強い頷きを返していた。

結論を下した後のティファの行動は実に迅速だった。

翌日、即座に行動を開始した彼女は、生徒会長という権限を最大限悪……駆使し、かつ実家の都合があると押し通して、教師や生徒会役員の嘆息と涙を踏み越えて、そのままキッドとアディを連れてカンカネンへと急行したのだ。

「……あの時はちょっと、姉さんは敵に回さないほうが良いと、思ってたわ」

とは彼女の妹の談である。

その日、カンカネンにあるセラージェイ侯爵家の別邸は、過ぎ去ったはずの嵐の再来に混乱に陥っていた。

まさに威風堂々の文字を体現しながら突き進む公爵令嬢を止めること叶わず、慌てた使用人が右往左往しつつも、どうにか館の主へと取り次ぎを行う。

幸か不幸か、ヨアキムは別邸内におり、間もなく彼の書齋にて会うことが叶った。

「突然何事だ？ ティファ。今日は授業のある日だろう、何故ここに居る」

凡そ記憶にある中でも最大風速をたたき出す娘の暴走に、ヨアキム・セラージェイ侯爵は顔を合わせるなり不機嫌な様子で言葉を投げつける。

そしてティファの後ろから更にキッドとアディが現れるのを見、思わず眉間に深い皺を刻んだ。

「お前たち……」

「お父様、この二人を見れば私たちがいかなる用事でここに来たか、お分かりでしょう」

父親の不機嫌にも全く怯まず、優雅なしぐさで挨拶を述べ、そして微笑むティファは静かな、しかし厳しい迫力を満たした態度で挑む。

彼女は伊達や酔狂でライヒアラ騎操士学園の生徒会長などやっているわけではない。

その上かの師団級魔獣との邂逅を体験している彼女は、歴代の生徒会長の中でも出色の精神力の持ち主と言えよう。

だからと言ってヨアキムもそれで萎縮するような事はないが、一方的な命令で引き返させることはその時点で諦めざるを得なかった。彼は喉まで出かけた嘆息をギリギリで飲み込むと、手に持つ書類を片付けて椅子に深く腰掛け、子供たちと向かい合う。

「……新型機についての件か？」

「それだけではありません。新型機開発の中心人物であり、この子達の友人でもあるエルネステイ・エチエバルリアについて」

何かを言おうとしたヨアキムの機先を制し、ティファは更に言い募る。

「過日のべヘモス事件において、私たち学生の大半は彼の活躍により窮地を救われています。」

……その彼が、ただ一人公爵領より帰ってきていません。

お父様達は何をお考えなのか、私にはその全ては量りかねますが、恩義ある彼を害するような真似は、私は許すことができません」

キッドとアディを左右に従え、彼女らは父親と向かい合う。

「お父様、納得の行く説明を聞かせていただきますわ」

嘘偽りも、逃げることも許さない。

まるで決闘に挑むかのような意気を以って、彼女達は進軍を開始した。



### #37 話し合いの結果

「……………以上が、部下より聞き取った内容の全てになります」

カザドシユ砦を拠点とする、朱兔騎士団の団長、モルテン・フレドホルムが直立不動の姿勢で報告を読み上げた。

彼がいる場所は、カザドシユ砦内にある上級作戦会議室 普段は使用されないが、貴族などが訪れた場合等に使用される、応接室兼用の会議室 である。

部屋の中央には机があり、それを囲むように椅子が並べられている。

今その椅子のひとつにはカザドシユ砦、及びデイクスゴード公爵領の主であるクヌート・デイクスゴード公爵が座っていた。

モルテンの報告を聞いたクヌートは、少しの間瞑目していたが、ややあつて肺腑へ溜め込んだ重い空気を吐き出す。

「なるほど、新型機の性能のほどはわかった。それで、騎士たちからの評判は、どうだ」

モルテンが報告した内容は、地碎蚯蚓シェイカーワームに襲われた際の、新型機・テレスタールの戦闘能力について聞き取り調査を行った結果だ。

「正直なところ、極めて高いものであると言わざるを得ませんな。同数のカルダトアを使用しても、あれだけの戦果を上げるのは容易なことではありません。」

共に戦った騎士は、ほぼ全員が新型の導入を希望しています」「ふつむ」

眉間に微かなしわを寄せ、クヌートは背もたれへと身を沈める。

丁寧に撫でつけた髪型の下にとがった鷲鼻が特徴的な、鋭い印象を受ける彼の顔つきは思索に研がれ、更に鋭利な雰囲気へと向かっていた。

「……新型機は、我が国にとって益あるもの。これを捨て置くことは、できぬ、な」

クヌートの小さな呟きに、モルテンが頷きを返す。

「モルテン、新型機を作った学生達は、国機研<sup>ラボ</sup>への技術開発の手続きをとろうとしている。

その際予想される諸々の困難の仲裁を、我々に頼み込んでおつた」

クヌートの手元には先ほどの報告とは別の資料があった。

ライヒアラよりセラーティ侯爵を經由して彼に届けられた、報告書と要望書だ。

「それと、だ。彼らは自らを国機研へと売り込むつもりようだ」

「ほう？ 技術だけ、ではなくてですか」

「新型機を形作る技を一番良く理解しているのは我々であり、今後これを開発する際にそれに加わることが出来れば、より深い貢献をお約束します……と」

要望書の一文を読み上げるクヌートに、モルテンは顎を覆う見事に切りそろえられ、整った髭を一撫でし、豪快な笑いを返した。

「はっはっは、最近の学生は貪欲ですなあ。

彼らなりに、新型機を開発した自負があるということですか。なに、よろしいではありませんか。ライヒアラ卒の者であれば、

その能力に不足はないでしょう。  
さらにはこれは新型の開発者達。有能な若者は大歓迎ですな」

「モルテンも勿論適当に返しているわけではない。  
新型機の開発、導入が始まれば当然多くの人員をそこに裂く必要  
が出てくる。彼はそれを見越していた。

来るべき大きな流れに対し、やる気と熱意、そして十分な能力を  
持って挑む人材は、いくら居ても困ることは無い。

求められるものと本人の意思が一致しているのならば、それは幸  
せなことだろう。」

「さて、どこまでが彼らの力かな」

しかしクヌートの考えは少し違っていた。

彼の視線の先には、報告書のとある一文がある 発案者、エル  
ネステイ・エチェバルリア、と。

彼の脳裏を、銀の輝きを持つ少年の姿がよぎった。

「モルテンは引き続き学生達の相手をしてくれ。余裕があれば、新  
型機についての更なる調査を行え」

「はっ！ して、閣下はいかがされますか？」

「私は……直接会わねばならぬ者が居る」

その言葉は、国家の重鎮たる彼には珍しいことに、苦々しげな空  
気を孕んでいた。

そうして、エルへと呼び出しの伝令が向かうことになる。

モルテンが出て行った後、クヌートはゆっくりと息を吐き出す。

事前にセラージェイ侯爵から受け取った報告書を見ている彼は、今回の新型機開発が学生のみでの力によるものではないことを知っている。

「（……悔るべきではなかった？　しかし……）」

クヌートはやもすると首をもたげる後悔を脳裏から追い出す。

その後悔は、偏にかつての彼自身の油断に起因していた。

国王とエルが魔力転換炉キテルリアクタの製法を知る条件として“幻晶騎士シルエットナイトを作る”事を約束した、あの時。

その時点では、クヌートにとっての問題の中心は、国王の道楽ぶりにあった。

約束を交わした相手であるエルは、注意こそ必要だったが、さほど重要ではなかったのだ。

それほどまでに、国王とエルが交わした幻晶騎士を設計するという条件は達成困難なものだった。

エルはその年齢をすれば才気煥発な子供だったが、いかに才能があるうとも個人でできることには限度がある。

国王も条件は提示すれども直接的な支援は約束しておらず、そもそも幻晶騎士の設計というものは個人で行うものではない。

現在のフレメヴィーラ王国の制式幻晶騎士であるカルダトアが設計されたのがおよそ100年前。長年に渡る技術の蓄積の上に、当時最高の鍛冶師たちが総力を挙げてようやく成しえたことなのだ。

それでさえカルダトアの前身であるサロドレアの開発から200年近く経ってからのことと言えば、いかに困難なことが想像がつくだろう。

クヌート“自身の経験”を鑑みても、交わされた約束が実現される可能性は、およそ考慮に値するものではなかった。

……はず、だったのだ。

そこから1年すら経たずして、彼の元に耳を疑う報告が舞い込む。“学生達によって新型の幻晶騎士が作り上げられた”

それ自体がただ一言、前代未聞である。

さらにはその報告書に書かれた新型機の発案者の名前を見て、クヌートは危うく卒倒するところだった。

“エルネステイ・エチエバルリア” 記憶にある、国王との約束が俄かに現実味を帯びるにあたって、クヌートは己の常識が音を立てて崩れてゆくを感じていた。

かつてクヌートは若かりし頃に“カルダトアの改良”に着手した経験がある。

幻晶騎士の戦闘能力は、そのまま国内の安定に、国の力へと直結する。

王家の傍流であり、国内最高位の貴族であるディスクゴード公爵家の頭首として、彼がさらなる国の発展を願い、そのための力を幻晶騎士に求めるのは当然の流れでもあった。

国王の許しを得、国立機操研究所と連携して行われた一大計画は、しかし十分な結果を残せぬままに終わる。

100の年月を越える間に蓄積された技術的改良は小幅なものに留まり、中心となる大きな改良点がなかったためだ。

ある程度の改良は施せたものの、それはクヌートが求めるほどのものではなかった。

クヌートにとっては、苦々しい記憶だ。

彼は自身の経験として幻晶騎士の新型を作ると言うことが、どれほど困難か十分に知っている。

長きに渡る技術の蓄積もなく、潤沢な人材も、ましてや資金すらなく、ただ学生を集めて新型の幻晶騎士を作り上げるなど、本来は夢物語でしかない。

ならば、とクヌートは思考を切り替える。

エルネステイという少年は、“何か”を持っているはずなのだ。

これまでとはまったく別の条理から、新型機の開発という夢物語を現実にする“何か”を。

それはクヌートに、そしてフレメヴィーラ王国に多大な恩恵をもたらすものとなるだろう。

クヌートは、己の判断がいかに危ういものだったかを思い、背筋の寒くなる感覚を覚える。

より以前からエルについて多くの情報を持ち、実際に行動を起こしたセラーティ侯爵がいなければ、クヌートはただ後になって結末を伝え聞くだけの位置に居たかもしれない。

彼は情報を伝えてくれたセラーティ侯に感謝しつつ、それを知り得た好機を生かすべく行動を起こした。

それはいくらか予想外の事件を挟んだものの、果たして新型機は高い戦闘能力を示して見せ、騎士からも良い評価を受けている。

いずれこれを導入し、国内に普及させることは必要なことだと、クヌートは考えている。

しかしそれには唯一つ大きな不安要素がある。それが発案者であるエルネステイの存在だ。

クヌートにとってエルは、いまだに正体のわからない黒く蠢く影のようなものだ。

その全貌は杳として知れず、彼が何を考えているのか、何を求めているのかも確かにつかむことは出来なかった。

是が非でも、彼が求めるところを知り、考えるところを知り、そ

してそれを生かす必要がある。

いつの間にか目を閉じていたクヌートの耳に、控えめなノックの音が聞こえてくる。

彼は一瞬だけ深く息をついて自身を落ち着かせると、許可を告げ、客人を部屋へと招き入れた。

石造りのカザドシユ砦の長大な廊下を、数名の人影が歩いてゆく。先を案内するのは鎧を着た騎士、それに続くのは小柄な、まだ幼子といっても良い子供だった。

先導する騎士のもつ揺らめく灯りが、静まり返った廊下に僅かな動きをもたらし、擦れあう鎧の音と足音が微かな旋律を刻む。

やがて廊下は終わりを告げ、小さな灯りの中に重厚な造りの扉が浮かび上がってきた。

細かな装飾が施されたその扉は、いかにも周囲とは違った雰囲気をつけており、“上級作戦会議室”と書かれたその部屋が特別なものであることを示している。

案内の兵士が扉をノックする。彼は軋む音ひとつ立てずに扉を開いて少年　エルネステイを中へと導いた。

エルが扉をくぐると、そこには砦の無骨な雰囲気とは一線を画する、立派な部屋が広がっていた。

兵士が歩くには全く適さない、柔らかな絨毯の感触を確かめるように、彼はゆっくりと部屋の中央へと進む。

部屋の中央にはテーブルが用意され、その向こう側には壮年の男性が待ち構えていた。

その人物は他でもない、この砦の主であるクヌート・ディクスゴ

ード公爵である。

クヌートは鷹揚な態度でエルに席を勧め、簡単な挨拶とともに一礼したエルが椅子にちょこんと腰掛けた。

同時にやってきた給仕が、飲み物を注いでから下がってゆく。

オービニエ山地の西側諸国から輸入されてきた、高級茶の馨しい香りが二人の鼻腔をくすぐる。

そうして紅茶を片手に、和やかな雰囲気の中で彼らの会話の幕が切つて落とされた。

クヌートにとっては、そこで行われる会話はいわば真剣勝負。

エルの人となりを、欲するところを暴き出し、そして如何にして相手に対し主導権を取るか。

まるで剣術の試合で間合いを計るかのようになり、静かに熱を帯びたものとなるはずだった。

だが彼は今、困惑でいっぱいだった。

「……このように、新型機の全身には騎操士学科の鍛冶師達により新開発いたしました綱型結晶筋肉ストランド・クリスタルティシユールを用い、従来に比べ1.5倍近くの出力を得……」

テーブルを挟んだ彼の向かい側にはエルが座り、立て板に水を流すように新型機の説明を行っている。

それはクヌートがまず様子見とばかりに新型機についての質問を行ったときから絶え間なく続いており、もはや会話の場はエルの独壇場となっていた。

「お手元の資料をご覧ください。前述の通り、新型機は従来型に



比べ高い筋力、豊富な装備運用能力を誇りますが、反面持久力にやや問題が残っており……」

なまじ内容がクヌートが聞きたい事でもあるから始末に悪い。

会話の主導権を握ろうにも、彼の耳はエルの言葉を拾い、目は資料を読み、そして思考は新型機の情報を整理することに費やされてしまっている。

頭の片隅で警鐘が鳴らされるが、しかし彼は求める情報を貪欲に摂取することを、止める事ができなかった。

「費用に関しては今のところ、明確に申し上げることが出来ません。今後最適化を進め、生産性を上げることにより変動するでしょう。ただし、現状でも高額な部品である幻晶騎士の心臓部は既存のままであり、比較的安価な部分を中心に変更していることから、極端な高額化はしないと想定され……」

淀みなく、エルのプレゼンテーションは続く。

カザドシユ砦へと呼び出されたときから内容を練りこんでいたこのプレゼンテーションは、こと説明という点では完璧な内容であったといってよい。

結局、エルの話が終わったのは話し始めてから2時間後のことだった。

いかにエルに前世の経験があるとは言え、それだけの時間を走りきらせたのは偏にロボットへの愛と言う他ない。

実に満足げに冷めてしまった紅茶を啜るエルに対し、クヌートは頭の中で内容を整理し、その量産のための計画を検討し、質問をしようとして 唐突に己の当初の目的を思い出した。

これまでの公爵としての仕事上、鍛え上げられた交渉における能

力を全く発揮できていないことに、クヌートは愕然とした気分を味わう。

新型機への強い興味を持っているという点を、鮮やかに突かれてしまった。

これが計画的なものであれば、彼は完敗したと言ってもいい。

しかしその強力な手札も、説明が終わったことで一時的にその効果を失っている。

反撃に移るならば今しかない　クヌートは、自身にも不可解な焦りを感じて、己の切り札を場へと送り出した。

「なるほど、新型機については、いくらか質問があるが……その前にエルネステイよ、その扱いについてだがな」

さすがに彼も伊達にその任を勤め上げて来たわけではない。

彼の雰囲気、急速に切り替わる。鉄面皮の鞘から、まるで刀剣を擬人化したかのような鋭利な印象が抜き放たれようとしていた。

「陛下より許しを得」、此度の新型機の評定、そして今後の運用について、その全権を私が任される事となった」

爵位としては最上位にあたる公爵位の人間が、国王より全権を任されると言う事は、事実上、国王と限りなく近い力を持つことになる。

少なくともこの案件に関する限り、彼の言葉は国王のそれと解釈して相違ない。

「新型機に関するその全てを一時的に私が管理する。それは情報についても然りだ。」

これらは、私から陛下へとお伝えすることになる」

クヌートにとって、それは正に切り札であり、最終手段だった。

相手に対する全権の掌握。

完全に上を抑えるそれは、効果は絶大な反面、相手の反感を買いやすいと言う避け得ない欠点を持つ。

エルを敵に回すわけには行かないクヌートにとっては、あまり良い選択肢とはいえないが、このままエルのペースで話が進むことに彼は危機感を感じていた。

そもそも彼はまだ新型機の説明しか聞いていないのだ。

これだけの札を出せば、エルも大きな反応を返さざるを得なくなる。それはクヌートにとって大きな手がかりとなる。

反動も大きなものとなるだろうが、その後の話の流れをまとめる所こそ、彼の腕の見せどころだ。

渦巻く思いを押し殺し、微かに目を細めたクヌートへと返された言葉は、たやすく彼の想像の遙かに斜め上を行った。

「よかった、では今後陛下に同じ説明をする必要はないのですね。後はよろしく願いたしますね」

エルは頷くと、ぴよこりと小さく一礼した。

クヌートが喉の奥底から湧き上がる唸り声を抑えることが出来たのは、何かの奇跡だろう。

誰を相手にしても、最大の威力を発揮するであろう切り札は何の効果ももたらさず、華麗に空を切った。

さしもの彼も、ただ手間が省けたとばかりに扱われるなどと予想できようはずもない。

言葉に詰まったクヌートが固まっている間に、当然の結果として

話の主導権は再びエルへと戻っていた。

「閣下が全権をお持ちと言うのなら、一つ確認したいことがあります」

「……………う、うむ、なんだ」

「新型機のご報告を入れた際に、騎操士学科の生徒について、一緒に申し入れたと思うのですが……………」

それを受けて、軽い咳払いを残してクヌートが再起動を果たした。

「聞いている。彼らを、新型機開発の人員として雇用できないかと。それについては断言は出来ぬが、開発が本格化すれば恐らく人はいくら居ても足りぬ事となるう。」

むしろ、断つても彼らにはその位置についてもらうこととなるだろうな」

エルが、笑みと共に小さく安堵の吐息を漏らす。

大半の要望を達成したのだから、それは当然のことに思える。

しかしクヌートは、ある疑問を強く感じていた。それは、

「お前の話が意図するものは、一体なんだ？」

と言うものだ。

「新型機の説明と、要望として出していました、先輩達の採用についての確認に来ました」

エルの答えも極めてシンプルなものだったが、それはクヌートの違和感を決定的なものとする。

彼はしばしの間悩み、その違和感の原因に辿り着いた。

「……お前は、どうするのだ？」

「僕ですか？」

「そうだ。新型機を売り込み、学生達を売り込み、それはいい。しかし肝心のお前がどうするかを聞いていない。にも拘らず、お前は満足しているように見える。」

お前が新型機の発案者なのだろう？ その功績をもって、何か言うべき事があるはずだ」

結局のところ、クヌートはエルについて何も知らないままだ。

その上、エルからは彼自身に関する要望の一つすら聞こえてこない。

疲れたのであろうか、もはやクヌートの言葉は駆け引きを全く考慮しない、酷くストレートなものになっていた。

「どうするも何も僕は初等部の生徒ですから。卒業までそのまま通いますけれど」

ああそうか、そういえば10歳の子供だったな、とクヌートは素直に納得しそうになり、危ういところで問題はそこではないことに気付いた。

「な、これだけのことをしでかしておいて、今更それか！？」

クヌートがエルの年齢を完全に失念していたのを、責めるわけにもゆくまい。

それを別にしても、ここで奇妙に常識的な答えが返ってくるとはどういうことか、彼は混乱のただ中に叩き込まれていた。

「今更とおっしゃいますが……仮に僕まで国機研までいくことにな

りますと、僕は初等部中退という経歴になってしまいました。  
それでは、両親を悲しませてしまいそうですし」

妙なところで、前世の考え方の抜けないエルだった。

むしろここに来て緩い雰囲気を放つその物言いに、ついにクヌー  
トが“切れた”。

「……お前は自分が何を為したか、わかっているのか？」

「新型の幻晶騎士を、提案しただけですよ？」

「簡単に言ってくれる。余りにも当たり前で、説明するのも空しい  
が敢えて言ってみよう。」

よいか？ この国が出来て以来、いや人の歴史を歩み始めて以来、  
“新しい幻晶騎士を提案した個人”などと言う者は一人として存在  
しないのだ！！」

何故こんな常識をわざわざ説明しているのだろう、とクヌートは  
彼の人生でも間違いなく最上位に位置する空しさを噛み締めていた。  
貴族としての長きに渡る実務経験がなければ、泣きが入っていた  
かもしれない。

「言うまでもないが、幻晶騎士の開発は数多の人間が関わる、一大  
事業だ！」

新たな機体を提案する集団はいても個人で成し遂げられること  
は、決してない！！」

徐々に熱の入るクヌートの言葉に、さすがのエルも引き気味であ  
る。

「陛下が魔力転換炉と引き換えに出した条件……あれは、不可能と

言い換えても間違いではない。

それをしれっと持ち込んで来るような非常識の極みをやってのけながら、この期に及んで何を普通の子供みたいなことを言っておるか！！」

エルは外面的には実際に子供なのだから、クヌートの怒りは見当違いではあるのだが、この場にそれを突っ込む者は存在しなかった。逆に、齢10歳をして国家を揺るがすほどのことを“しでかす”ような相手だと考えては、クヌートはもたなかったのかもしれない。敢えてそのことを考えないようにする、それは一種の自己防衛処置とも言えた。

しかしエルは容赦なく、クヌートの炎に正面から油を注ぐ。

「いえ、テレスタールを持ち込む気はなくて、陛下へお見せするものは、別にあります」

「……まだか、まだ何かやる気が、貴様」

すでに鉄面皮は跡形もなく、クヌートのこめかみには青筋が浮き上がっている有様である。

「はい、もちろん。幻晶騎士を作ることが、僕の趣味ですから」

それまでの燃え盛りようが嘘のように、クヌートが不気味に沈黙する。

彼の脳裏ではかつて見覚えのある場面が再生されていた。

『趣味に御座います』

そう、エルが国王に語った言葉は掛け値なしの本音であったのだと、クヌートはその時、心底から理解した。

そして彼は悟った。

今相對しているのは間違いなく歴史に残る才を持つ者だ。それは特定分野に関しては他の追隨を決して許さない。

同時に、周囲の迷惑を微塵も考慮せず、己の道をどこまでも突き進む災害か何かの親戚のような存在だ。

これは陛下と意気投合するわけだ　クヌートの思考のうち、冷静な部分が恐るべき予感を確信する。

クヌートは若かりし頃、天才的な手腕で馬鹿を為す、アンブロシウスの様々な計略じみた道楽につき合わされて散々な目に遭っていた。

アンブロシウスは今でこそ“名君”といっても良い国王だがいや、今ですら道楽の気を抑えられない御仁なのだが　　当時は正に天災とも言うべき存在だった。

そんなクヌートは、王宮ではこっそりと“猛獣使い”と呼ばれていることを知らない。

目の前にいる少年はそんな国王と同種の人間だ、と。

図らずも、クヌートの“エルの考え方を知る”という目的はここで達成されていた。

すとな、と重力にしたがってクヌートが席に戻る。

「……そうか」

実に重々しい言葉を最後に、彼らの会話はその幕を閉じた。

長い話し合いだったが、クヌートの疲労は明らかにそれ以上のものに見受けられたと、後にモルテンは語る。



エルとクヌートが会話の空中戦をやったのけてからおよそ一週間の後。

場所は王都カンカネンにあるセラージェイ侯爵家の別邸へと移る。

ヨアキム・セラージェイ侯爵は、すでに何度も読み直した手元の資料を今一度読み上げる。

エルとクヌートの話の内容を要約したそれは、直後にヨアキムの元へと届けられていた。

「……という話が、なされたと聞いている」

「……………」

表情を変えることもなく説明を終えたヨアキムに対し、彼の子どもたちは一様に返す言葉を思いつけないでいた。

勢い込んで振り上げた拳は落としてどこかを失い、代わりにやってきた非情な気まずさが彼らの口を縫う。

彼らの心情を表現するなら、このような感じになるのだろう。“ああしまった、エルってそんなやつだった”、と。

それでも鍛えられた精神力を振り絞り、なんとかティファが立ち直る。

「……………そう、なのね。ひとまず彼が……………楽しそうで何よりね」

彼女の言葉が少し恨みがましい口調になってしまっていたのも、むべなるかな。

ふと、グロッキー状態だったキッドが顔を上げる。

ヨアキムの説明で、エルが何をしでかしたのかは概ねわかったが、一つ謎が残っている。

「だったら、エルが帰ってきてきてないのは、何故なんだ？」

「そこまでは私も知らん。カザドシユより戻ってきた者が居るのだから。彼らに聞かなかったのか？」

「……あつ」

余りに勢い込んでいたために、重要な情報源であるはずの親方達への聞き込みを失念していた3人は、酷く落ち込んだ。

「……聞く前に、ここへ……」

「やれやれ。それほど焦るとは、エルネステイという少年は、お前達にとって相当に重要なものらしいな」

部屋に入ってきたときの勢いを完全に失った3人は小さくしぼんでいた。

ヨアキムは彼らを責めるでもなく、ふと真剣な表情で双子へと声をかけた。

「アーキッド、アデルトルート」

「はっ、はい！」

「ならば、これからエルネステイと共に居よ」

「え？」

自分達の無茶を怒られるとばかり思っていた二人は、その言葉に驚いた様子を見せる。

「デイクスゴード公は、彼をひとまず野望なしと踏んだ。私も同意見だ。」

彼は今後、この国に……いや、もしかしたらそれ以外にも大きな影響を与えるだろう。

それは多くの味方を作り、同様に多くの敵を作る。

どれほど有能であろうとも、一人で乗り切れることは難しだろう。

お前達は彼と近しく、そしてその教えを受けたのだろうか？ ならば彼の力となれ」

キッドとアディはぐっと拳を握りなおし、力強く彼らの父親へと言い放つ。

「言われるまでもねえよ」

「そうよ！ 言われなくても、私はエル君と一緒に居るんだから！」

決意も新たに双子が頷き、ティファが彼らを後ろから抱きしめた。その様子を見ながら、ヨアキムは資料のうち、子供達へ告げない部分へと目を走らせる。

「（公は、あれは子供の気質と年長者の思考を併せ持つとおっしゃった。

ならば、昔馴染みをそばに置いておくことは、無駄ではあるまい。願わくば、彼にはその力に溺れることなく、この国の力となって欲しいものだ）」

子供達を見つめるヨアキムの視線は、意外なほど柔らかなものだったが、抱きしめあう彼の子供達はそれに気付いては居ないようだった。

「……それはそれとしてだ」

堅い調子を取り戻したヨアキムの言葉に、3人の動きがぴたりと

止まる。

「学園を無理やり抜け出してきたようだな？ 今少し、話し合いが必要なようだな」

3人の表情が笑顔から泣き笑いのそれへと、徐々に変わってゆく。嵐の最後に落ちた雷は、特大のものであったとだけ、ここに記しておく。

クヌート・ディクスゴード公爵は、頭を抱えていた。

その原因は彼の目の前で、数多の資料と共に笑みを浮かべている。

「貴様、本当に、これを……作るつもりなのか」

「はい、これでこそ魔力転換炉の製法を教えていただくに値すると、自負しております」

搾り出すようなクヌートの声に、エルの弾けるような答えがかぶさる。

クヌートは、やはり国王に伝える前に自分が挟まったことは正解であったと、心底己を誉めたい気分だった。

エルの提示した資料には、国王へと見せる予定の幻晶騎士、その基礎設計が書かれている。

常識を世界の果てまで吹っ飛ばした“それ”を、とてもではないが国王へとそのまま伝えるわけには行かない。

クヌートは深い溜め息と共に悟る。

どうやら彼は、エルネステイと言う常識外の存在の手綱を、上手く取って行かねばならないようだ。

「お話中、失礼いたします!!」

彼の悩みは、突如として飛び込んできた第三者の声にさえぎられた。

返答も待たずに、朱兎騎士団長であるモルテンが扉を殴りつけるような勢いで部屋へと入って来る。

いかな騎士団長とは言え、公爵位の人物が客と話している場所にいきなり入るのは非礼の謗りを免れない。

しかしクヌートは、無礼をとがめる前にモルテンの様子から、相場の緊急事態が起こったことを読み取っていた。

「どうした、何があった?」

「ダリエ村の方角より、魔獣襲来の狼煙が確認されました。

……上がった狼煙は、赤。決闘級以上の群れと推測されます」

決闘級以上の魔獣、それも群れとの遭遇。それは高い防衛力を持たない村落にとっては、滅亡を意味する。

クヌートの判断は迅速だった。

「モルテン、即応可能な騎操士ナイトランナーはすでに召集してあるな?

編成は最低でも一個中隊、全速を以ってダリエ村付近まで進出し、これを守護せよ!!」

「はっ、すでに準備は進めております。編成が終了次第、我が朱兎騎士団は直ちに出击いたします」

モルテンは敬礼を返すと、来たときと同じ勢いで部屋を飛び出し

てゆく。

「話をしている場合ではなさそうだな。私は皆の指揮につく。貴様は……捨て置くのもなんだな。共に来い」

エルは頷くと、部屋を出るクヌートの後ろに従った。

### #38 蠢くものたち

穏やかに澄み渡る晴天の下、ここライヒアラ騎操士学園の一角を、ふらふらとした足取りで進む人影があった。

キッドとアデイの双子である。

カンカネンで父親であるヨアキム・セラージェイ侯爵に姉と共にたつぷりと絞られた二人は、学園に戻ってからは教師に注意を受け、いまや満身創痍と化していた。

やたらと広大な面積を誇る学園の廊下を、げっそりとした様子で歩む。

気晴らしにでかけるなり、いつそ不貞寝でもしたい気分だったが、確かめねばならぬ事柄の存在が彼らの歩みを何とか前に進めていた。

気力を振り絞って騎操士学科の工房へと辿り着いた双子は、勢い込んで中に居た顔馴染みのドワーフ族の青年へと突撃する。

「おう、エルネステイ銀色坊主か？ あいつあ向こうで公爵様へ教育……うおっ

ほん、解説をしているはずだぜ」

「……………えええええるうううううう……………」

精根尽き果てがっくりと膝をつく双子へと、ダーヴィド親方が哀れみとも同情ともつかない、微妙な視線を送っていた。

最初から親方に確認に来れば、騒ぐ必要などなかったのだと思うと、二人は口から乾いた笑いが漏れでるのを止めることが出来なかった。

「と言うわけでな、坊主はしばらく戻ってこねえ。

いやしかし見ものだったなアレは。公爵様、最後は軽く泣きが入っててよう……………」

髭を撫でつつ語る親方の台詞に、双子が座り込みながら投げやりな返事を返す。

親方は特に気にした様子もなく、ふむ、と頷くとそのままカザドシユで決まったことを説明しだした。

親方は、彼らも新型機開発に関わる一員だと考えており、それを伝える必要があると思ったのだ。

「おう、そのまま良いから聞け。それで、テレスタールは当面の間は公爵様が管理することになってよ。」

新型機開発計画は、公爵様の主導で進むってことになったわけだ。それで俺達、鍛冶師は向こうの準備によっちゃ途中卒業して、そのまま機研<sup>ラボ</sup>か、どこか新型開発のところへ配属される、ってえ方向で話が進んでる」

その言葉に、へたり込んでいたキッドが顔を上げる。

「んじゃ、親方達って、もうすぐいなくなっちゃうのか？」

彼の声に少しの寂しさが滲んでしまうのは、避けられなかった。キッドとアデイにとっては、クラスメイトや昔馴染みとは別に、騎操士学科の先輩達も共に過ごした仲間であり、良い兄貴分だった。彼らが居なくなることは、二人にとって少なからずショックな出来事だ。

「元々俺も、来年にやあ卒業だ。そんな顔すんじゃねえよ」

思わずしんみりとした周りの空気を払おうと、親方がキッドの頭を小突く。

しかしドワーフ族の拳は予想以上の威力を持ち、キッドはそのまま



まもんどりうつはめになっていた。

アデイがじりじりと親方から間合いを取る中、咳払いを一つ残して彼は話を戻す。

「あー、それで、言っておかねえとならねえんだけどよ。

恐らく今、向こうでは坊主の扱いに揉めてんだろうな」

「エルのか？」

「おう、あいつ、卒業までは学園に通うとか言ったらしいけどよ、正直それが許される状況じゃねえ。

俺らも作るんならいくらでも来いつてもんだけどよ、正直、坊主は“モノ”が違う。

このままつてこたあまず無い」

親方の言葉の意味が、二人の頭に染み込むまでに多少の時間を要した。

つい先ほどの、親方達がいなくなるという言葉以上に、今告げられた言葉の重さは双子の顔色を真っ青に変じさせていた。

「えっ……な、なあ、親方、それって、エルも国機研ラボに行っちゃまうつてことなのか!？」

「エル君が……居なくなっちゃうの!？」

それは、彼らにとって考えた事も無い未来だった。

新型機が存在により騎士になるかどうかは揺らいでいるが、それでも学園を卒業するまでエルと共に居るのは当然だと、彼らは考えていた。

本来ならばそれは根拠の無い思い込みではない。何しろ同じ道を志す同級生なのだから。

しかし激変する状況が、当たり前前の未来へ進むことすら困難にしていた。

余りにも衝撃的な内容に、言葉をなくし俯く双子に親方が声をかけようとした、その時。

決然とした雰囲気纏い、猛然とキッドが顔を上げる。

「いますぐに、俺達はエルのところへ行く」

静かに呟かれた言葉に、親方も、そしてアデイも驚愕を顔に寄せたままキッドへと振り向いた。

「馬鹿野郎。どれだけ手間だと思ってやがる、簡単に行けるわけねえだろ。」

それに、そのうち坊主は戻ってくる、何も今……」

「そんなのは関係ない！ いますぐに、アイツのところへ行く！！行って話しをする！！ このままなんて許せねえ！！」

普段はだるそうな空気を放ち、やる気のない態度を隠さないキッドの突然の剣幕に、周囲は彼の決意の固さを知る。

「落ち着け、あんな遠いところへどうやって行くってんだ」

「シルエットキア幻晶甲冑があるわ！ あれなら馬よりも早く走れるんだから！！」

同様に拳を振り上げたアデイに、親方は額を抑えて天を仰いだ。エルの直弟子である彼らなら、本当にやってのけかねないと思っただからだ。

とは言え、カザドシュ砦への道のりは、口で言うほど簡単なものではない。

そもそもフレメヴィーラにおける都市間の移動というものは、魔獣の存在によりそう気楽なものではないのだ。

経験に長け、入念に準備を整えたものだけがそれを可能とする。いかに双子であれ無謀としか言いようのない行為に、親方は何とか彼らの説得を試みた。

そうして興奮する双子を押しとどめたのは、後ろから聞こえてきた落ち着いた声だった。

「駄目に決まっているだろう」

エドガーはそのまま二人の腕をガシツと掴み、無理矢理動きを止める。

「エドガーさん！？ 放してくれ！」

「駄目だ、よく聞け二人とも。カザドシユまでの道のりは険しい！いくら幻晶甲冑があり、お前達が尋常ならざる使い手だからとて許せるわけ無いだろう。」

「気持ちは……わかるが、今は待て」

流石に二人とも、杖を抜かずに置くだけの冷静さは残っていた。

エドガーは二人の腕を掴んで放さず、強化魔法も使わない子供の力では、それを振りほどくことは出来ない。

彼らの後ろからやってきたヘルヴィとディートリヒの二人が、困った表情を隠せないままにその様子を見ていた。

「……そついやあ、ディー。アイツの修理が、途中だったな」

声を荒げて押し問答を繰り返す彼らにより、気まずい空気が漂いだした工房に、いきなり場違いに気楽な様子の親方の台詞が響いた。

全員の視線を集めながら、彼はどこか悪戯を思いついた子供のよ  
うな笑みを浮かべながら、自分の後ろを顎で指している。

急な話の転換にいぶかしげな顔を見せながらも、その場にいる人  
間は親方が指し示すほうへと顔を向けた。

示された場所、工場の最も奥に据えられた幻晶騎士シルエットナイトの整備台には、  
組み上げ途中の機体が座っている。

ストランド・クリスタルティシュー  
網型結晶筋肉を使用した構造、一次装甲だけを配した機体の周囲  
には、取り付け途中の外装アフタースキンが置かれている。

“真紅”に塗り上げられたその装甲に、彼らのうち一人が強い反  
応を示した。

「グウエールか！ 確か組み上げ途中でカザドシュへ向かったんだ  
つたね。」

「いやあ、完成も目前……って親方、新型の製造は公爵閣下の管理  
に入るから、当面は中止なんじゃなかったのかい？」

「どうするつもりだい？」

ナイトランナー  
その騎操士であるディートリヒが、喜色から困惑まで百面相を見  
せている。

「おう、まあ新しくは作らねえって事なんだが。」

「ここまで直して、途中で放っておくのも気持ちわりいしよ、こい  
つは完成させるしかねえだろう」

何度も頷きながら話す親方に、ディートリヒが機嫌よく同調した。  
和やかな空気を漂わせる二人を尻目に、残る者たちの困惑が深く  
なっくてゆく。

「するつてえとまあ、新型は公爵様管理だからよ、ライヒアラに置

いとくわけにもいかねえ。

まさかその程度のことと公爵様のお手を煩わせるわけにもいかねえしな、そうすつと俺達が向こうへ持つてかねえといけねえなあ？」

デイトリヒの表情が笑顔のまま凍りついた。

徐々に親方が言いたいことを理解し始めたエドガーとヘルヴィが、非常に曰く言いがたい表情になってゆく。

「まさかグウエール一機で歩いてくのも無用心だしよ、エドガーもアールカンバーで付き合え。」

ついでに俺らも馬車ですか。途中で修理が必要かもしれないな。

それにひよつとしたら、余計な客も乗り込んでくるかもしれないねえがな」

その言わんとするところを理解したキッドとアデイが、目を見開いて親方を見る。

髭に埋もれた彼の顔は、器用に笑みの形を取っていた。

「おいおい親方、いくらこの二人のためでも、こんなわがままに付き合うことはないぞ？」

「おう？ 別にこいつらのためってんじゃないあねえよ。」

“丁度向こうに行く用事”があるからよ、ひよつとしたら何か手違いがあるかもしれないねえって話をしてるだけでな」

それを聞いたエドガーは、呆れたとばかりに肩をすくめた。

親方の言葉は完全に屁理屈だ。

それでは双子のわがままを聞いただけと何が違うのかと思ったが、彼は苦笑の下でなんとかそれを飲み込む。

「ふーん、意外と子供には親切なのね、親方？」

「ふん、共に槌を振ったヤツあ俺の同胞よ。ドワーフの民は同胞の苦境を見過ごしはしねえ。」

……坊主は、こいつらの友達なんだろ。今話をしねえで、どうするんだよ」

悪びれることもなく胸を張る親方に、彼らは苦笑じみた返事を返していた。

エドガーも強く双子を制止していたものの、いきなり友人との別れを聞かされた彼らの気持ちは理解しているし、どうにかしたいと言っ気持ちもある。

非常に“わざとらしい”行動だが、時に建前は重要なのだと自分に言い聞かせ、双子の手を離した。

親方のごつい拳に小さな拳を打ち当てて喜ぶ二人の子供の姿に、騒ぎを聞いていた整備班の者たちは少し心込み、そして袖をまくると猛然と動き出した。

「外装はどれくらい仕上がってる!？」

「8割、細かいところは予備から流用できそうだ」

「クレーンこっちに回せ、取り付け急ぐぞ!」

直前のゆるやかな空気などどこへやら、俄かに鉄と炎の活気に溢れた工房が、常以上の勢いで稼働を始める。

滑車が立てる騒音を背景に、槌が金属を叩く澄んだ音が重なる。

ここしばらくの様々な活動により鍛え上げられた整備班の手によって、紅い幻晶騎士は見る間に完全な姿へと近づいていった。

「……うう、グウェールは本当に持っていつてしまうのかい? 折

角直るといふのに……。

私もそのままカザドシュで雇ってもらうべきだろうか」

「デュー、その、あれよ。……元気だしなって」

熱気に包まれる工房の中、ただ一人デイトリヒだけが複雑な心境を持って、紅い機体が着々と組みあがる様を見守るのだった。

魔獣襲来の狼煙のしを受けた朱兎騎士団は、その狼煙が上がった方角にあるダリエ村へと急行していた。

構成はカルダトア一個中隊（9機）に指揮官であるカルディアリア1機の10機編成だ。

比較的近い場所というのもあり、彼らは幻晶騎士を通常以上の速度で走らせていた。

フレメヴィーラ王国の大抵の村では、魔獣に対する備えとして、頑強な防壁を構築している。

しかし一般的な農村に、村の周囲全てを囲むだけの防壁を作ることは、様々な理由から不可能だ。

そのため大抵の村では、村の中心となる部分のみを囲う特に強固な防壁と、そこに食糧などを備蓄したごく小規模な砦を作っている。人間には倒せない、強大な魔獣に襲われた場合は、そこに避難すると共に狼煙を上げ、近隣に駐在する騎士団の助けが来るのを待つのである。

小規模ながら、村人が生きるための最終防衛線とも言うべきその砦は、かなり堅牢に作られている。

ただし今回上がった狼煙は赤　決闘級魔獣（最低でも幻晶騎士が必要な魔獣）の襲来を告げるものだ。

人が持つ最強の兵器である幻晶騎士と拮抗しうるその力の前では、いかな堅固な砦とて長期間耐えられるものではない。

騎士団は焦る気持ちを抑え、ダリエ村への道のりを急いだ。

決闘級魔獣というものは、それなりに国内に存在し、被害も絶えることがない。

だからそれに襲われたこと自体は、不思議なことではない。

しかし朱兎騎士団の騎士がダリエ村に到着したとき、そこにいた魔獣は1匹や2匹などという数ではなかった。

村の周辺には少なくとも十匹を越す決闘級魔獣が存在している。

更には中型以下の魔獣も相当数集まっており、いきなり魔獣の楽園が出現したかのような光景が広がっていた。

偵察のために先行した騎馬隊は、その光景に戦慄を覚えると共に首を捻る。

彼らが見たのは鎧熊、鈍竜、炎舞虎……様々な種類の魔獣だった。

どれも近辺に生息しているものの、それぞれ個別の縄張りを持ち、共に行動する魔獣ではないはずだ。

それがこうして集まっているなど、不可解な状況である。

しかもどの魔獣も興奮した様子を見せ、中には互いに争っている個体すら見られた。

注意深く進出していた偵察部隊は、その中であってはならないものを発見する。

彼らの視界に飛びこんで来たもの。

それは住人を守るべき強固な防壁が無残にも破壊され、1匹の鎧熊が、砦の内部へと頭を突っ込み“何か”を貪っている光景だった。



そう、偵察兵から報告を受けた瞬間、カルディアリアに乗る中隊長は躊躇いなく指示を下した。

「全速で村の中央部まで進出する。楔形陣形を取れ、邪魔な魔獣は全て撃ち倒し前進しろ。」

到着後、我々は全力で砦を防護する！！」

魔獣に囲まれた只中へと突撃するなど、もはや自殺行為とも言えるものだったが、騎操士の間からは異論は聞こえず、むしろ力強い承諾の声が返る。

彼らは恐るべき素早さで陣形を組むと、盾を仕舞い、シルエットアームズ魔導兵装と剣を構える。

それは防御よりも最大の攻撃力をもって突破力を頼みとする構えだ。

中隊長の号令一下、中隊が突撃を開始した。

巨人が走る、雷鳴のような音が周囲へ轟く。

それに気づいた魔獣が駆け寄ってくるが、カルダトアの持つ魔導兵装・カルバリンからオバードスヘル戦術級魔法の光が煌き、仮借ない法撃により出会う端から吹き飛ばされてゆく。

彼らは自ら放った法弾を追いかけられるようにして突撃し、中央への最短距離を強引にこじ開けた。

その場にいる数だけならば魔獣のほうが多いが、それらは一箇所に集まっているわけではない。

密集した一個中隊の幻晶騎士は、その密度で魔獣を圧倒し、一気に砦まで駆け抜けた。

周囲で轟く爆発音に、砦に頭を突っ込んでいた鎧熊は警戒心を覚え、のっそりとした動作で首を上げた。

“食事中”に邪魔が入った彼は、不機嫌な唸りを上げながら振り返る。

食事に気をとられ、注意が疎かになっていたその行動は、完全に遅きに失したものだっただ。

振り向いた彼のもとへと、雷鳴の如き轟音を打ち鳴らし、炎の槍を撃ち放ち、疾風の速度で突撃する巨人の一団が殺到する。

「失せろ！ 畜生めが！！」

楔形陣形の先陣を切るカルディアリアが、ここまで走ってきた勢いを殺さず槍を構える。

カルダトアより高い筋力を持つカルディアリアから、突撃の勢いに裂帛の気合を乗せて、槍の一突きが繰り出される。

鎧熊は甲殻じみた硬化した皮膚を持つているが、圧倒的な勢いを持つカルディアリアの攻撃は、それを物ともしなかった。

槍の穂先が綺麗に鎧熊の頭部を捉える。

皮膚を突き抜け肉を割り、勢いのまま骨を砕いて突き刺さった槍が、一撃で鎧熊の命を絶つ。

突撃の勢いを全く殺さなかったカルディアリアは、そのままつれ合うように鎧熊の死骸に衝突した。

憎き魔獣を見事に屠った中隊長を守るように、残るカルダトアは素早く陣形を変更した。

彼らは防壁にあいた穴を守る半円陣形を取る。

背後には何人たりとも通さないとする意志に満ちた、鉄壁の守護の構え。

吹き飛んだ魔獣の血の臭いに酔い、さらに凶暴性を増した残りの魔獣が押し寄せてくる。

カルダトア部隊が、迫り来る暴虐の津波を正面から迎え撃った。

突撃によりうまく魔獣を減らすことができ、中隊は数の上では魔獣とほぼ同数となっていた。

しかし無理矢理に、しかも最も危険な魔獣達のただなかに踊りこんだ彼らは、実際には極めて危うい状況にいた。

先刻の無理な突撃により魔力貯蓄量は激しく消費されており、彼らから積極的な攻撃という選択肢を奪っている。

機体の魔力転換炉は悲鳴のような吸気音を撒き散らしながら魔力を生成しているが、魔獣からの熾烈な攻撃にさらされる、機体の動作に供給が追いついていない。

炎舞虎の吐く炎を盾で遮り、鋭利な棘に身を包まれた鈍竜の痛烈な尻尾の一撃を凌ぎ、鎧熊の体当りを受け止める。

彼らは魔獣にはない、連携という人の知恵と技を駆使してそれらを凌いでいるが、綱渡りのような危うい状況が続いていた。

「これで止めだ！」

状況を打ち破ったのは、中隊長が操るカルディアリアだった。

指揮官用の高性能機であるそれは、鎧熊との衝突により多少ガタが来ていたものの、相対した魔獣を打ち倒すことに成功する。

中隊長はそのまま、機体の魔力貯蓄量が限界を迎える前に反撃に打って出た。

一度状況が動き出すと、決着までの時間は短かった。

数で有利になった騎士団が、そのまま一気に魔獣を押し込み、辛くも勝利をもぎとる。

最後の鈍竜を倒したとき、中隊に無事な機体はなく最低でも小破うち3機が中破で2機が大破し戦闘不能という有様だった。

決闘級を倒した後は、残る中型の魔獣が速やかに駆逐されてゆく。長い戦いが終わり、彼らが周辺の十分な安全を確保した頃には、すでにとつぷりと日が暮れていた。

戦闘が終わると共に、交戦区域の外に待機していた随伴部隊が村へと進出する。

彼らによって、生き残った村人の救助が始まった。

砦の周囲には幾多の篝火かがりびが焚かれ、簡易の天幕を張り、傷を負ったものが収容されていく。

砦の中は、凄惨な有様だった。

壁を破り侵入した鎧熊により、ダリ工村に暮らす人の約半数が死傷している。

生き残った村人達は、あわや全滅を目前としたところで騎士団が間に合ったことに、多大な感謝を送っていた。

その裏には、失った同胞を悼む気持ちも、騎士団がもう少し早く到着すれば、という気持ちもあるだろう。

しかし彼らは何よりも、今生き残れたことを喜び合う。

それは“魔獣”という強大な脅威と隣り合わせのまま暮らさざるを得ない、この国の民に独特の考え方だ。

ある種ドライとも取れる極端な前向きさが、過酷な状況における彼らの生活を支える原動力の一つとなっていた。

人的被害もさることながら、建物や田畑の被害も相当なものに上る。

騎士団の任務は、多くは魔獣を駆逐するだけでは終わらない。

中でも今回のように極めて被害の大きな魔獣災害が発生した場合は、しばらくの間そのまま駐留し、安全を確保すると共に復興に協力することになる。

普通は採算が合わないので行われませんが、幻晶騎士は極めて巨大なパワーを持つ工作機械としても使用可能だ。

こういった緊急時に限り、その用途へと転用される。

当分の間この村では、全高10mに達する巨人が建物を直す光景が見られることだろう。

本格的な村の復興に取り掛かる前に、中隊のうち自力歩行の可能な2機のカルダトアが、カザドシユ砦へと伝令に向かった。

主に当面の安全確保と、復興活動の開始を報告するためだ。

また、大破した機体を回収するための部隊を寄越してもらった必要があり、その要請も兼ねていた。

応急処置を受けただけの機体を操る騎操士は、時折怪しげな動きを見せる相棒をなだめすかしながら、カザドシユ砦への道のりを急ぐ。

道中は順調で、程なく彼らはカザドシユ砦の周囲の深い森へと差し掛かった。ここを抜ければ砦へ到着する。

勝利の報告をした彼らは、浮かれた雑談をかわしつつ森へと続く街道を進んだ。

朱兎騎士団の中隊がダリ工村を襲った魔獣を駆逐している間、随伴部隊とは別に、森の中よりその様子をうかがう影があった。

森に溶け込むような色合いをした布に全身を包んだその姿は、極めて視認が難しく正に影と化している。

影は、決闘級魔獣の大半が倒れたあたりでその場を離れ、近くにっないでいた馬に飛び乗った。

そのまま抑え目の速度で静かに森を進む。しばらくして森の中に

小屋が見えてきた。

その小屋は元々は森で狩をする猟師が非常時に使用する建物だ。やはり魔獣に追われた時のことを考えてか、丸太を強固に組み合わせ、小さいながらも耐久性を持たせた造りになっている。

馬から下りた影が一定のリズムをつけて扉をノックすると、少しして鍵を開ける音がして扉が開かれた。

内部には、小屋の大きさからは意外なほどの人数がいる。

それぞれに暗い色の皮の鎧を着た彼らは、中央に机を囲み、何かを話し合っていた。

机の上には、周辺の地形を書き出した地図が置かれ、あちこちに矢印と注釈が書き込まれている。

それはまるで“作戦行動前の部隊”のような雰囲気を漂わせていた。

小屋へ入ってきた影はおもむろに全身を包む布を脱ぐ。その下にあったのは、かつてライヒアラ学園街で学生から新型機の資料を受け取った、あの男だった。

「隊長、朱兎騎士団は予想通り魔獣を倒したようですね」

「そうだろうね、あいつらはそのために居るんだからさ。で、出てきた規模は？」

「一個中隊つてとこですね」

男に隊長と呼ばれた女性は、彼の報告を聞いて腕を組む。

彼女が入手した情報では、皆に配備されている戦力は三個中隊規模。  
模。

ならばそこには、残り二個中隊と新型機があるはずだ。

「偵察に出ているやつも呼び戻しな、手はずどおりに進めるよ。」

これが最初で最後の、あたしらだけの戦だ。上手くやろうじゃないか」

そういつて女性が窓から外を見る。

小屋の外には、布に蔓と木々を組み合わせた、森と同化する色合いの覆いをかぶせられた巨大な人型があった。

それが3つ。小屋の周囲のやや開けた空間を占拠している。

覆いの下で沈黙するそれは、目前に迫った始動の時を、今や遅しと待ち構えているのだった。

### #39 訪れる戦いするとき

商人達の威勢のいい掛け声が、通りのあちこちを飛び交っている。行き交う人々が通りに並んだ店を覗きこみ、商品を買ひ、あるいは丁々発止と値段交渉を行っている。

がやがやと喧騒と活気に満ちたその場所は、ライヒアラ学園街に存在する市場通りだ。

ライヒアラ学園街を貫く中央通りを途中で曲がったところにある、広場から始まるこの通りは、主に食料品を扱う店が集中する場所である。

それは店舗であり出店であり、様々な形態を取りながら雑然とした様相を呈していた。

学生のみならず多種多様な人間が暮らすライヒアラ学園街は、相応に多くの人口を抱え、それを支える市場もかなりの規模がある。

太陽も折り返し地点を越えた昼下がりに、夕食のための食材を買いに回る街の住人達で市場はごったがえしていた。

通りに溢れる人ごみを縫うようにして、一人の女性が歩いている。ゆったりとした生地ワンピースを腰のところ帯布で締め上着を羽織る、ごく一般的な服装。しゃきつと背筋を伸ばして歩くたびに、背中を纏められた赤みの強い髪が小さくはねる。

薄く皺の目立ち始めた目元を細め、鋭い視線で店の商品を品定めする様子は、主婦と言うよりは何かしらの職についていることを思わせる。

女性としては長身の部類に入るだろうか、ややきつめの顔立ちと相まっていかにも気の強そうな印象を受ける人物だった。



通りを端まで流す頃には、彼女が片手に抱える籠には十分な量の食材が入っていた。

お眼鏡に適う品物を買えたのだらう、彼女は満足げに頷くと上機嫌でその場を後にする。

街の一角にある住宅街、そこにある家へと辿り着くまでは、彼女はそんな、ごく普通の空気を纏っていた。

しかし中へ入ろうと扉に手をかけた途端、その雰囲気が一変する。どこにでもいる街の住人そのものと言ったものから、研ぎ澄まされた刃のように鋭いものへ。

顔からは表情が抜け落ち、その拳動も隙のない、最小限のものとなつてゆく。

素早く周囲に人影がないことを確認した後、彼女は慎重に鍵と扉を開けるが、どのようにしたものかそれは全く音を立てなかった。少し空けた扉の隙間から滑るように中へと入ってゆく。

無人であるはずの家の中は、当然のように沈黙に満ちている。

しかし彼女の鋭敏な感覚は、家の中にいる異物の存在を嗅ぎ分けていた。

足音を殺し、気配も断ち切ったまま彼女は家の奥へと進む。

奥の部屋へと進んだ彼女が見たのは、入り口に背を向け、窓に向かって立つ大柄な男性の背中だった。

秋へと差し掛かったくらいのこの季節に大仰な外套を羽織ったその姿は、190cmを数える身長とあわせて不自然な存在感を周囲にばら撒き続けている。

「これはこれは“監察官”様かい。ずいぶんと突然のお出ましね、びっくりするじゃないのさ」

大男をみた途端、女性の雰囲気か緩み、顔に表情が戻ってくる。皺を深くしながら口元を皮肉げな笑みの形にゆがめ、それでも威嚇するように目を細めたものへ。

買ひ物かごを机に投げ出した彼女は、どっかと椅子に腰掛けた。

「ケルヒルト・ヒエタカンナス」……貴女と貴女の“銅牙騎士団”に、陛下より命が下りました」

「おやまあ陛下はお優しいことだねえ、私らのことをまだ“騎士団”なんて呼んでくださるだなんてねえ」

大男はケルヒルトの言葉に頓着せず、振り返りながら一方的に用件を切り出していった。

彼は単に身長が高いだけではない。鍛え上げられた筋肉が内側から外套を張り裂かんばかりに押し上げており、その身体は巖のごとき迫力をかもし出している。

その風体にあわせたかのように、唸りの如き低い声で彼は巖かに続きを告げる。

「貴方がたが寄越した“玩具”の情報に、陛下は殊のほか興味をお持ちです。

是が非でも実物を手に入れるとの仰せを賜りました。

アレは“魔獣番”風情には過ぎた代物、“我が国”のために使つてこそ価値があるというものでしょう。

手段は問いません、必ずアレを入手し、陛下の元へとお届けするのです」

なかば予想通りの監査官の言葉に、ケルヒルトはやれやれと言っていたように肩をすくめた。

「地味な任務ばかりで飽いてたところだよ、歓迎する……と言いた  
いところだけだね。」

その“玩具”は仮にも砦と呼ばれるところにあるんだよ。しかも  
巨大だ、ちよつと行って盗んでこれるようなものでもないさね。わ  
かるだろう？」

「存じておりますが、手段は問わないと申し上げたはず。」

陛下もご承知の上です……“ありとあらゆる”ものを使用して構  
わない、と」

ケルヒルトの顔に初めて本当に面白そうな笑みが浮かぶ。

ただし、それは獲物を前にした肉食獣のような、という形容詞が  
つくものだったが。

「へえ……なんでも、ねえ。虎の子の“ヴェンドバダーラ”でもか  
い？」

「勿論、“カーストヘイター呪餌”でも、です」

予想を上回る返答に、一瞬呆けたように目を見開いたケルヒルト  
は、次の瞬間にはたまらないとばかりにケラケラと笑い始めた。

「はは！ そいつは傑作じゃないかい！」

これはこれは、ケチな陛下にしては随分な大盤振る舞い、随分と  
入れ込んでるようだねえ」

監察官は糸のように細めた目の奥から粘つくような視線を送って  
いるが、ケルヒルトがそれに頓着した様子はない。

彼との付き合いの長い彼女は、彼の心情をほぼ正確に推測してい  
たが、さりとて気を使つと言った行動とは無縁だった。

「まあ勅命とあらば是非もないさ……すでに、人は集めてるよ。」

敬愛なる”陛下に、御所望のものは必ず届けると、伝えておきな”  
「……いいでしょう。今ならば魔獣番どもも浮かれ、油断しているはず。速やかな行動をお願いしますよ」

監察官は満足したかのように頷くと、そのまま踵を返す。

「ああ、そうだ」

何かを思いついたように、ケルヒルトは机の上に投げ出しっぱなしだった籠を指差した。

「これから夕食を作るけど、監察官様もどうだい？ 腕によりをかけて準備しようじゃないか」

「遠慮しましょう。“何が入っているか”わかりませんからね」  
「つれないねえ……まあいいさ」

やはり予想通りの言葉で応える監察官に、ケルヒルトは再び肩をすくめると、台所へと向かう。

それは、ダリ工村で魔獣襲来の狼煙が上がる、およそ一週間前の出来事だった。

ライヒアラ騎操士学園の敷地内にある騎操士学科の工房では、今日も今日とて鍛冶師達が槌を振るっている。

忙しなく行き交う彼らの頭上では滑車がたてる騒音が響き、ガリガリと大きな音を立てるそれに負けないよう、生徒が怒鳴り声で最終確認の完了を告げた。

工房内に設置された、巨大な椅子のような形状の幻晶騎士用の整

シルエットナイト

備台に今、1機の機体が座っている。

その胸の装甲は上下に開き、機体の操縦席へと自由に乗り降りが可能になった状態になっていた。

直前までその機体を整備していた鍛冶師達がばらばらと離れる中、その流れに逆らうように一人の生徒が機体へと向かう。

ナイトランナー  
騎操士 幻晶騎士を操縦する技能を持つ、騎士の一人であり騎操士学科の生徒である。

彼は機体に入り込み、シートに腰掛けると足元のレバーのロックを外して勢いよく引き上げる。

歯車が噛み合う騒々しい音と空気の圧縮される間の抜けた音が重なり、機体の胸の装甲が閉じられていった。

「ううむ、久しぶりの感触だ。テレスタールも悪くないが、やはりこちらのほうが落ち着くね」

ディートリヒ・クーニッツはようやく修理の終わった愛機である“グウエール”の操縦席で、シートに深く腰掛けてその感触を確かめていた。

機体の9割の部位が破壊されると言う前代未聞の全壊ぶりを誇ったグウエールは、鍛冶師達の奮闘により完全を越え新たな姿を得るに至った。

操縦席内部もほぼ新調されており、真新しいシートから立ち上る、革の香りがディートリヒの鼻腔をくすぐる。

「……折角お前が新たな姿になったというのに、いきなり渡すことになるとは。うぬう……」

“黙っていればそれなりに見目良い”顔に渋い表情を乗せながらも、彼は操縦桿を軽く動かしてその具合を確認していた。

新しいづくめの操縦席の中、操縦桿だけは昔のそれを流用してい

る。

動かした分だけ少し磨り減った、手に馴染んだ感触にディートリヒは小さな迷いを感じる。

ダイワイド 親方や双子の思惑を別にしても、完成した新型機は公爵の管理下に置かれる、そういう決まりだ。

彼は苦笑を浮かべながら首を振って迷いを追い払うと、拡声器のスイッチを入れた。

「グウエール、立つぞ。周りから離れてくれ」

ディートリヒが操縦桿とめがみ 鏝を押し込み、新たな筐体を得たグウエールが以前と同じように主の指示に忠実に従う。

エーテルリアクタ 休眠状態だった魔力転換炉が目を覚まし、ゆるやかだった吸気音が急速に甲高いものになってゆく。

炉は取り込まれたエーテルから魔力を生成し、全身へと供給を始める。

マキウスエンジン 流れる魔力には魔導演算機によって魔法術式が乗せられ、クリスタルティ 結晶筋肉へと蓄えられてゆく。

魔法術式により目覚めを命じられた結晶筋肉がわずかに伸縮し、金属の鎧に覆われたグウエールの全身がぶるりと小さく震えた。

特殊な魔法現象により収縮する結晶筋肉は、張り詰めた音を立てて鋼の鎧に身を包む巨人の騎士を動かす。

数ヶ月ぶりに“紅の騎士”グウエールは、重々しい足音と共に大地に立ち上がった。

工房の奥から、テレスタールと同様の新型機として新生したグウエールが歩みでる。

かつてばらばらに吹き飛んだ装甲は今は歪み一つなく揃えられ、

太陽の光の下に眩い紅の輝きを反射していた。

内面的には別物と言っていていいほどに変わっているが、外見上はさほどの変化はない。

ただ、その背中にはシルエットアームズ魔導兵装・風カマサの刃が背面武装としてバックウエポン装備され、以前の反省から腰には予備を含め4本の剣が挿された重装備になっていた。

グウエールはその構成上、最初から盾を持たない。本来は常に二刀流を基本とし、攻めに重きを置いた機体なのだ。

その代わりに、肩から腕にかけての装甲が幅が広くやや厚めに作られており、防御的な用法にも使えるようになっていた。

そのためシンプルなアールカンバーの横に並ぶと、その姿はややいかつい印象を受ける。

「さて、準備はできたかい？」

問いかけるディートリヒに、工房の前にいたアールカンバーが片手を上げて応える。

そこにはアールカンバーのほかに、2台の馬車とお馴染みの面子が揃っていた。

「ダーヴィド君、この幻晶騎士はあくまで学園の備品なんじゃがの？ あんまり勝手に渡されても困るんじゃが」

「ちよつとくらいいいじゃねえか。」

どうせ向こうに渡した分は、公爵様から同じだけのカルダトアもらうって話なんだからよ。学園の機体が減ることはないぜ」

「そういう問題でもないが……まあいいわい。今年の騎操士学科は異例尽くめだし、今更かのう……」

最近すっかり諦めるのが早くなった学園長ラウリ・エチエバルリ

アが適当に手を振る横で、キッドとアデイが馬車のうち一つ、荷馬車の中を見て唸っている。

「うーん、ちょっと乱暴だったか？ でもこうしないと入らねえしなあ」

荷馬車の上には、キッドとアデイが使う機体の他に、モートルビートも含めた3機の幻晶シルエットギア甲冑がずらりと並べられ、ロープで荷台に固定されている。

幻晶騎士にくらべれば小なりとは言え、それなりに嵩張る鎧を詰め込んだ荷馬車にはもはや余分な空間などないに等しく、それだけで丸々占拠している状況だった。

「モートルビートも持ってくるの？」

「エルのことだから、俺らのだけ持って行ったら拗ねそうな気がする……」

キッドとアデイが大きく頷きあつ間にもう一台の馬車へと荷物を積み終えた親方が、二人を呼んだ。

「よし、それじゃあいっちょカザドシュまで出発だ！」

親方と数名の整備班、そして双子が乗る馬車が先行し、それに紅と白の幻晶騎士が随伴する。

後に残ったラウリは彼らを見送ると、さっくりと気分を切り替えて振り返った。

「さて、それじゃカルダトア受け入れ後の改修作業について打ち合わせを始めるぞ。」

場合によってはお前らの後輩に受け渡すことになるから、それも



踏まえて進めるように」

まばらな返答を返し、残った鍛冶師達が踵を返す。大きく形を変えつつあるが、彼らはいつもとどおりの日常へと戻っていくのだった。

デイクスゴード公爵領の南部はアキュアールの森と呼ばれる森林地帯が広がっている。

西フレメヴィーラ街道から分岐した街道がそれを北へと貫いており、領内の街道沿いにカザドシユ砦とダリエ村が存在している。

鬱蒼と木々の並ぶアキュアールの森の中は、まだ日の高い時間だというのに薄暗く、静かで重い空気が漂っている。

森のなかで唯一開けた場所である、街道から差し込んだ光が周囲にいくらかの明るさを与える中、光の範囲から外れた暗く淀んだ茂みに蠢く者がいた。

それらは茂みの中、さらに目立たない暗い色合いの鎧を身に付け、じっと身を伏せ時を待っている。

周囲には時折野鳥のさえずりが聞こえてくる以外、動くものすらない。

どれほど時が経っただろうか、茂みの中をひとつの影がするりと這い回る。

それは伏せる兵士と同じく、暗い色合いの鎧を身に付けていた。

「隊長、“廻り鹿”が報告を入れてきやした。“狩人は獲物を置いた”と」

押し殺した声で告げる部下に対し、銅牙騎士団の団長であるケル

ヒルト・ヒエタカンナスは同じく小声で指示を返す。

「野郎ども、準備はできてるね？ “ヴェンドバダーラ” を起動させな」

彼女の部下はそれに頷くと、そのままほとんど音を立てずに茂みの奥に消えていった。

彼女達は銅牙騎士団という名前で呼ばれる存在だが、普通の“騎士”にそのような芸当は不可能だ。

気配を殺し、暗闇に潜み、計略を持って事に当る。

“騎士団”とはどのような皮肉だろうか、彼女達は本来は“間者”と呼ばれる存在なのだ。

その彼らがこうして総力をもってことに当たるからには、その目的は生半なものではないことがわかる。

ざわり、と木々に止まる野鳥がざわめき、慌しげな羽音を残して飛び去ってゆく。

野鳥が飛び去ったあたり、彼女達の背後では森と同化する色合いの覆いを被せられていた巨大な何か、のそりとした動きで立ち上がっていた。

平均的な人間の5倍以上の大きさを持つそれは、鉄と結晶でできた人造の巨人、幻晶騎士だ。

ケルヒルトが“ヴェンドバダーラ”と呼んだその機体は多くの奇妙な特徴を持っていた。

つるりと滑らかな外装、装甲はまばらでしがなく、ところどころ魔獣の革を使った覆いが露出している。

丸い卵形をした頭部には、視界を確保するためと思しき穴だけが開いており、眼球水晶のうつろな視線が奥で揺らめく。

それは過剰なまでに外見上の特徴を削られており、むしろ一周して不気味な存在感を備えるに至っていた。

また不思議なことに、ヴェンドバダーラからは幻晶騎士に特有の騒々しい駆動音がしない。吸気機構が立てていると思しき音はくぐもり低く抑えられ、森のざわめきの中にまぎれている。

弦楽器の調べのような、甲高い音を立てるはずの結晶筋肉もどのようにしてかほとんど音を出さず、鈍く重い歩行音すら、他の機体に比べれば無いに等しいものだった。

気配すら希薄な無貌の巨人　それは薄暗い森の中であって、まるで亡霊のように存在が不確かだ。

ケルヒルトは、暗闇の中に霞むヴェンドバダーラを見上げると、  
「たたり、と笑みを深くする。」

「苦勞して運び込んだ虎の子だ、今回はうんと働いてもらうよ。」

さて、ここからは私らの戦争だ。機会は一度きり、成功以外の結果はあっちゃならないよ。お前ら、気合いれな」

大きく手を振った彼女の指示に従い、3機のヴェンドバダーラがそろり、そろりと前進する。

蠢く亡霊の群れは、森に開けた街道を歩く傷ついた2機のカルダトアをその視界に捕らえていた。

暗闇からにじみ出るように、亡霊は騎士の背後に忍び寄る。

カルダトアの騎操士は決して油断していたわけではない。

彼らは気楽な調子で歩いているように見えて、途中で魔獣に襲われることを警戒して周囲の様子に注意を払っている。

しかし、彼らが最も重視しているのは音だ。幻晶騎士にとって脅威となるほどの魔獣は、どうしても動けば大きな音を発するため、彼らは不自然な音を聞き逃さないような訓練を積んでいる。

それゆえに自身の駆動音に紛れて背後から忍び寄る亡霊の存在に、

彼らは気付けなかった。

完全にカルダトアの背後に回ったヴェンドバダーラは決して大きな音をたてず、しかし素早く最後の距離をつめる。

その手には刺突剣と呼ばれる、四角錐の形をした鋭い刃が握られていた。

極端に静粛性と隠密性を追求したヴェンドバダーラは、その代償として単体の戦闘能力が低い。

出力は並以下で装甲も申し訳程度、持久力も極めて低い。正面きつての戦闘ならばカルダトアとの戦力比は1：3で辛うじて、と言ったレベルである。

格闘性能に劣るヴェンドバダーラは、斬り結ぶことなど考えない。彼らにしか出来ない方法で、一撃で急所をつくのだ。

その狙いは、機体の“脇腹”の部分である。

幻晶騎士はその構造上、可動部である腕の付け根の装甲が薄い。あつてもチェーンメイルであり、多くは魔獣の皮革を用いた覆いがあるのみだ。

そして腹部に収められた魔力転換炉の上部に位置するそこは、大抵の場合炉へと外気を取り入れる吸排気口が存在する。

さらには胸の内部には幻晶騎士で最も脆い部品　騎操士が、存在する。まさに幻晶騎士の急所中の急所なのだ。

カルダトアの背後から、ぶつかるとして抱きついたヴェンドバダーラが、その勢いそのまま脇腹へと刃を刺し込んだ。

突き刺し、貫くことに特化した刃は薄い装甲をあっさりと抜け、その内部にいる騎操士へと襲い掛かる。

カルダトアの騎操士は状況を認識できただろうか、巨人が振るう刃は人間の命などいとも容易く奪ってしまう。

何の反応も見せず、操り人形の糸が切れたかのようにカルダトアの動きが止まる。操るものが居なくなつた幻晶騎士は、生物のよう

に暴れることはない。

カルダトアが2機とも動きをとめるのを見たケルヒルトは、頭にかぶった覆いの下で低い笑いを漏らしていた。

「ようし、上手く行ったようだね。さて、次へと駒を進めようじゃないか、準備を急ぎな！」

ヴェンドバダーラがゆつくりとカルダトアの身を横たえると、森の中にいた兵士達がばらばらと現れる。

刺突剣による攻撃は、特定の条件化で一撃で幻晶騎士を仕留めるといふ他に、とある利点が存在する。

破壊されたのは僅かな装甲と吸排気口、そして騎操士のみであり、幻晶騎士の動作機構への影響が少ない。つまり、操る人間さえいれば、カルダトアはまだ自力行動が可能なのだ。

彼らはカルダトアの騎操士を手早く“片付ける”と、破壊の跡も生々しい操縦席へと躊躇なく乗り込んだ。

本物の亡霊となったカルダトアが、ゆつくりと立ち上がる。

操縦の簡易さを追及したカルダトアは、皮肉にも襲撃者にもその恩恵を与えていた。奪われたカルダトアは、何も問題なかったかのようにしっかりとした足取りで歩みを再開し、ヴェンドバダーラは再び森の中の暗がりへと姿を消す。

亡霊たちは一步、また一步と確実にカザドシュ砦へと、その歩みを進めてゆくのだった。

うつらかな陽気を与えていた太陽がオービニエの山間に沈み、景色が闇に包まれると共に、秋の気配が涼しさとなって訪れる。

カザドシュ砦の城門を守る騎士団員は、忍び寄る夜の気配と吹く

風にひとつ大きく身震いする。

城門の上に設置された見張り部屋に、同僚の騎士団員が帰ってくる。彼は日が落ちる前に灯りとなる篝火をつけて回っていた。

「やれやれ、これからの季節、門番がどんどん辛くなるなあ」

「まっただな、さつさとあがって休みたいぜ……」

そうやって軽口を交わしていた彼らだが、遠くから足音らしき重い音が接近するのを聞きつけて、さつと緊張の色が走る。

彼らは城門の上から街道の様子をうかがう。完全に夜の闇に沈む前の僅かな明かりの中に、鉄色の鎧をまとう巨大な騎士の姿が視認できた。

「お、カルダトアか。ダリエに向かった中隊か？」

「待て、今確認する……ああ、あの紋章はうちだな。と言う事はダリエは助かったのか？」

近づいて来るカルダトアの肩には、確かに朱兎騎士団の紋章が見える。

それと共に彼らの耳に、普段は聞こえない騒々しい音が伝わってきた。損傷により部品が引っかかっているのであるう、カルダトアが動かたびに全身からぎりぎり耳障りな駆動音を立てている。

かなりのダメージを負っていると思いきその姿に、門番達は一度敬礼し、問いかけた。

「ご苦労さん、ダリエのほうは無事だったのか？」

「ああ、被害は酷いもんだが、魔獣は片付けたよ」

ついでカルダトアに乗る騎操士は、ダリエ村でへと派遣された中隊のうち損傷の大きい本機を戻すと共に戦闘の勝利を伝えるにきた、

と言った。

なるほど、と状況を飲み込んだ門番達は、門を開くべく報告を告げに走った。

重い木々がこすれる低い音を伴ってカザドシユ砦の門が開く。

門を守る戦力を兼ねるカルダトアが、城門の開閉機構を操作する。帰ってきた2機のカルダトアと、それに続く馬車がゆっくりと城門をくぐった。

傷ついたカルダトアへと、城門の守備隊から労いと賞賛が浴びせられる。

勝利を持ち帰れば、機体の損傷も勲章の一種となる。彼らが浮かれるのも仕方のないことだった。

「まったく手酷くやられてるな、報告を上げる前に、先に工房へ機体だけ置いていけよ」

「ああ……そのつもりさ」

門を開けたカルダトアにぎこちない敬礼を返し、壊れた2機のカルダトアがゆっくりと工房へと向かう。

その後ろには馬車が続いていたが、物資の補給にでも来たのだから、城門の守備隊の誰もが気にも止めなかった。

工房へと入ってきた傷ついたカルダトアを見て、砦に残った機体を整備していた鍛冶師達は、慌しく活動を始めた。

出撃したのは一個中隊のみとは言え、状況によっては増援が必要かもしれないし、別の場所で何かが発生するかもしれない。

そのため残る機体もいつでも動かせるよう、入念に整備がされていたのである。

騎士団にも待機命令が下っており、工房に併設された詰め所では朱兎騎士団の騎操士達が待機している。

鍛冶師の班長は、異音をたて、歪な動きを見せるカルダトアの様子を見て、即座に周囲へ指示を飛ばした。

整備班が慌しく部品を運んでくる。2機のカルダトアはゆっくりとした動きで、他にも機体が並ぶ整備台へと向かった。

それだけなら、その鍛冶師も疑問に思うことはなかっただろう。

しかしカルダトアの後ろから馬車が入ってくるのを見た彼は、束の間疑問に首を捻った。

騎操士ならば詰め所にいるし、中隊に随伴した鍛冶師だろうか？しかし彼らは現地の部隊の支援についていたのである、簡単に人数を減らす真似をするとは思えない。

そう思い、鍛冶師が馬車に向かって誰何しようとした瞬間、馬車から何かが飛び出した。

抑えられた風切り音を残して飛翔した数本の“ホルト矢”が、狙い過たず鍛冶師の胸に突き立つ。

鍛冶師が血を吐いて倒れるのと、馬車から武装した集団が飛び出てくるのは、ほぼ同時だった。

さらに時を同じくして、整備台へと向かっていたカルダトアもその本性を露にする。

それまでの歪な動きが嘘のように素早く剣を抜いたカルダトアが、工房へと続く入り口へと剣を振り下ろす。

巨人の一撃を受けた通路が破壊され、瓦礫に埋まり通行が困難になる。

そうやって増援を絶った侵入者達は、クロスボウを撃ち剣を振り、工房に残った鍛冶師達を排除していた。



「あんたらは正面を守りな！ 鍛冶師ごときにいつまで手間取ってるんだい！ さっさと目的のものをいただくよ！」

瞬く間に工房を占拠した侵入者たちは彼らのカルダトアに幻晶騎士用の出入り口を守らせながら、工房内部を探して回る。

やがて侵入者の一人が声を張り上げ、ケルヒルトは数名を引き連れてそちらへと向かった。

そこにはカルダトアとは別の、無骨な色合いをした機体がある。いかにも試作であると主張する、垢抜けない機体を前にしてケルヒルトは作戦の大半が成ったことを確信した。

「ほう、こいつだね……聞いたとおりだ。さてお前達、仕上げに取り掛かるよ……！」

彼ら銅牙騎士団は、元をたどれば間者であり、個人の戦闘技能はともかく騎操士としての技術に優れるものは多くない。

今カルダトアに乗るもの、そしてケルヒルトが連れた数名は数少ないその例外だ。

ケルヒルトが目的のものを動かす傍ら、結果として彼らはいくらかのカルダトアを起動することに成功するが、残る大半は動かさせたものではなかった。

「余った”分は破壊しな。さて、そろそろ守備隊が立て直す頃だね、一気に突破するよ！」

彼女が告げると、奪われたカルダトアが整備台に座ったままの機体を片端から斬り倒し始める。

騎操士の乗っていない機体はいとも呆気なく破壊され、次々に残骸と成り果てていった。

それだけの異常事態に、皆に残る朱兎騎士団も何もしいままではない。

城門や砦内部の警備のために起動していた朱兎騎士団のカルダトアが騒ぎを聞きつけ工房へと集まってくる。

彼らは工房の入り口に立ちふさがる同型機と、戸惑いのままに交戦状態に突入していた。

「くそつ、こいつらは一体なんだ！？ 何故カルダトアをツー！」

朱兎騎士団のカルダトアには、状況が全く把握できていない。

ただ、彼らの使うカルダトアの一部が侵入者に奪われ、工房内部は制圧されたと言う事だけが認識できるのみだ。

彼らは怒りに燃えていた。

当然だ、敵は彼らのカルダトアを奪った挙句、彼らの基地たる力ザドシュ砦で我が物顔で暴れて回っているのだ。これに怒りを覚えずしてなんとしたことが。

状況はわからずとも、それだけで朱兎騎士団は激しい攻勢に出ている。

しかし、当初は勢い込んでいた朱兎騎士団の騎士も、奪われたカルダトアの後ろで動く見慣れぬ機体の存在を確認するにあたり、動揺を隠すことができなかった。

「あ、アレは……まさか……！！」

一部の部品が剥き出しになった、いかにも急造な見た目。その背に屹立する、他の機体にはない背面武装が威圧的な雰囲気<sup>バックウエポン</sup>を放つ。

そして工房の床を踏み砕きかねないほどの力を発揮しながら、新型幻晶騎士・テレスタールが歩みを進める。

「なんだい、この出力……聞いていた以上じゃないのさ、まるで暴れ馬じゃないか！」

そのうち1機に乗ったケルヒルトは、操縦桿へと返る異様な手ごたえに、悪態をつかずにはいらなかった。

事前の情報により、彼女達はテレスターレの操縦特性についての知識も持っていたが、実際に動かしたそれは彼女達が想像していた以上に扱いづらいものだった。

それなりに幻晶騎士に乗ってきた、彼女の経験を以ってしてもクセの強さに慣れるには時間が掛かりそうだ。

「所詮は学生の作った2流品かい？ まったく、手間をかけてくれるね……おっと、背面武装ってのはこれかい？」

“事前に教わったとおり”、彼女は操縦席に設置された見慣れぬレバーを操作する。

テレスターレはただ騎操士の指示するままに忠実に動作する。その背中で補助腕が動作を始め、魔導兵装が両肩の上に展開された。

操縦席へ伝わってくる微かな振動を確認していた彼女は、展開が終わったところで操縦桿のトリガーを引き絞る。

照準機能などロクに理解しないままの一撃だったが、状況が状況だけに法弾は真正面へと撃ち放たれ、朱兎騎士団の構える只中へと突き刺さった。

オバド・スベル 戦術級魔法による爆発が、混乱に更なる拍車をかける。

それは朱兎騎士団にとっては、最悪の事態が訪れたことを告げる狼煙そのものだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3556o/>

---

Knight's & Magic

2011年10月31日23時45分発行